
ふたりぼっち～尾道、夕暮れの坂道で

平 雪緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりぼっち尾道、夕暮れの坂道で

【Nコード】

N3364D

【作者名】

平 雪緒

【あらすじ】

雨の日の夕暮れ、尾道の街で二人は出逢った。穏やかな暮らしの中で、誰にも言えない片親の寂しさを抱えた萌子は、同じような寂しさを漂わせる臨時教師・久志に惹かれてゆく。ぎこちなく、不器用に、その距離を縮める二人……。そんな二人のあいだに立ちはだかるものとは。秋から春へと、移ろいゆく尾道の風景の中で繰り広げられる、切ない恋の物語。

序章　踏切

（あ、パパ……）

赤いランプが点滅し始めた踏切で、萌子は線路を渡り終えようとする父の姿を見つけた。

まだ幼い萌子の、ちょうど目線の高さに遮断機が下りて来る。その場に立ち止まった萌子は、父の背中に向けて大きな声で呼び掛けた。

「パパ！」

夕闇が、尾道の街を静かに包み込もうとしていた。夕暮れ時の行き交う人々のざわめきの中で、それでもその声はかろうじて父の耳に届いたらしい。父の大きな背中がゆっくりと振り返った。

父のその手に大きなバッグが見えた。幼い唇から、大人びたため息が漏れる。

（パパ、お出掛けかな……）

ちよつと寂しい気分に浸りながら萌子は、

「パパ。どこに行くの！」

と大きな声で問い掛けた。

父はこちらを向いたまま、じつと萌子のことを見つめていた。いつもならゆっくりと優しく微笑むはずの父の、そのどこか寂しげで真っ直ぐな瞳は、彼女の胸に小さな影を落とす。

「萌子」

父が発したその言葉は、夕暮れの喧噪に消し飛んでしまいそうなほど小さな声だった。届くはずのないその声を、それでも萌子はしっかりとその耳で捕らえた気がした。

「パパ……」

萌子の中に、急に駆け出してしまいたいような焦燥感が迫り上がって来た。

訳も判らず泣き出してしまった、小さい頃の夜と同じように。

そんな弱虫はもう卒業したつもりだったのに、萌子は今まで感じたことのないほどの不安に怯えた。

「パパ！」

遮断機をくぐり抜けて、萌子は線路の向こうへ駆け出そうとした。その時、萌子の左手から列車が踏切に進入して来た。萌子を叱り飛ばすように、鋭く汽笛が鳴る。

萌子はびっくりしてその場に立ち尽くした。彼女の目の前をグリーンとオレンジのツートンカラーが通り過ぎて行く。萌子の心臓は、悪戯が見つかった時のように激しく波打った。

その列車は駅に停車するために、割とゆっくりとしたスピードを保っている。それでもあまりに軽い萌子の体は、その風圧に耐えかねるようにふわりと浮き上がり、後ずさった。

軽やかなリズムを刻んで走り抜けて行く列車の向こうに、父の姿が消えた。萌子は目一杯の声を張り上げて叫んだ。

「パパ！」

父が行ってしまう。どうにもならない苛立ちに、萌子はその場で飛び跳ねるように2度、3度と足踏みをした。

列車が走り去った踏切の向こうに、やっぱり父の姿はなかった。幼い彼女にそこまでの知識はなかったけれど、萌子は直感的に駅の改札に向かって走り出していた。

けれどもそこまでだった。大勢の大人が行き交う恐ろしげな銀色のゲートを遠目に見つめながら、萌子はなす術を知らずにただ立ち尽くした。

幼子の背を、夜が静かに包み始めていた。

第一章 雨上がりの街で（１）

（１）

人混みの中からそつと顔を出して、萌子は空模様を眺めた。

福山駅を出た時に降り出した雨は、一向に止む気配がなかった。

朝の天気予報にはなかった空の心変わり、傘を持たない生徒で賑わう尾道駅の待合所は、蒸し暑ささえ感じられる。

小さな体を入混みの間から覗かせるようにして、しばらく外の様子を見ていた萌子は、やがてちよつと肩をすくめる仕草を見せると、線の細い１０月の雨の中を歩き出した。

見た目にはそれと判らないほどの小さな雨粒が、萌子の頬を霧吹きで吹き掛けたみたいにしつとりと濡す。

鞆を頭の上に載せて小走りで小さなロータリーを駆け抜けると、彼女はアーケードの下へ飛び込んだ。

制服や髪に付いた滴を払いながらふと顔を上げると、土産物屋のショーウィンドウに映る自分の姿と目が合った。

（なんか『男の子』みたい）

つい最近切ったばかりの短い髪が、艶やかに黒く光っている。

その下の顔は、何もかもが小造りで丸みを帯びていた。

彼女は、自分のまん丸な頬の造りが嫌いだった。

決して大きくはない黒目勝ちな瞳が、萌子を見つめ返している。

まるで子犬みたい、今にも泣き出しそうなまなざし。

アーケードの下で一息つくと、萌子はまた鞆を頭の上に載せて商店街の奥の路地へと歩き始めた。くすんだ、心なしか寂れた感じのする人気ない路地を進むと、やがて急に視界が開けて海沿いの道に行き当たった。

彼女が目指す『ひこうき雲』は、その海沿いの道に面した一画にある。

海の見えるところまで小走りでやって来た萌子は、ふと足を止め

た。

（何してるんだろ……）

海岸沿いに建つ、大人の肩ほどの高さのある防波堤の前で、男が一人佇んでいた。

それは奇妙な光景だった。その場所は決して雨に打たれながら眺めるような景勝地ではない。そこから望めるのは、冷たい雨を吸い込んで鈍色に低くうねる尾道水道と、その向こうに広がる向島の造船所の高く伸びたクレーンぐらいである。

すらっとした背格好や服装から、若い男だということだけは察しがついた。けれども紺色の傘に隠れて、その表情は読み取れない。

どこか哀しげなその後ろ姿から、萌子は何故かしばらくのあいだ目を離すことが出来なかった。

足下から忍び込んで来る冷氣に我に返ると、萌子はその男の姿に背中を向けて『ひこうき雲』の入り口へと向かった。

店の前に立つて、もう一度制服に付いた滴を軽く払い、山小屋のような分厚いきつね色のドアを押す。千絵は自慢のスイス製のカウベルが、カランカランと小気味良い音を立てた。

「あら、いらつしやい」

店に現れた萌子を、千絵は笑顔で出迎えた。

千絵は、萌子の母の七つ下の妹だった。つまり萌子にとって『叔母』に当たる訳だが、萌子が千絵のことを『おばさん』と呼んでも彼女は決して振り向こうとしない。『千絵ちゃん』と呼んであげないと、その日一日彼女はとても不機嫌になる。

確か彼女は、今年八月に三十五歳を迎えたはずだ。

『歳より若く見える』というより、その年齢に不釣り合いな幼さを漂わせている、千絵はそういった感じの女性だった。

けれども萌子は、夕暮れの街角を駆けて行く子供のような千絵の横顔の向こうに、様々な人生の機微に触れて来た、聡明で理知的な暖かみのある素顔が隠れていることを知っていた。

「こんにちは、千絵ちゃん。今日はずいぶんと忙しそうね」

萌子はそう言って、誰もいない店内を見回した。

「相変わらず口数の減らん姪っ子やね」

「そうなのよ。あなたの可愛い姪はとってもお上品に育てられていますから。ね、おばさま」

ふん、と少女が拗ねる時に見せるような仕草をして、千絵はカウンターの中で向こうを向いた。

萌子は、こんな子供みたいな叔母が大好きだった。高校生になって、小さい頃よりもっと好きになったかもしれないと思う。

高校に入ってから、彼女は3日に一度は『ひこうき雲』に顔を出すようになっていた。たとえわずかな時間でも、千絵の顔を見てから帰るのがまるで決められた日課のようになっていた。

萌子が子供の頃、千絵は流浪の人だった。

その頃の彼女は、アルバイトでお金を貯めては日本中、いや世界中を旅するような暮らしをしていた。

萌子はそんな千絵のことを、密かに『フーテンの虎さん』みたいな人だと思っていた。

「女の子のくせに、そんなチンピラみたいな生活……」

年に数回顔を見せる娘に、祖母はいつもそんな小言を漏らした。

孫の萌子から見ても、祖母という人物は年の割にずいぶんと柔らかな脳味噌の持ち主で、二人の娘に対しても比較的放任するタイプだと思う。そんな祖母でも、千絵のフリーター生活（その頃そんな言葉はなかったが）にはさすがにいい顔をしなかった。

この前家を飛び出してから今までどんな生活をしていたのか、お世辞にもまともとは言えないその内容を自慢げに語る千絵に、彼女の母も姉も決まって顔をしかめた。

けれども萌子には、千絵が祖母や母が言うほど『悪い人』には思えなかった。

萌子が小学六年生になる頃まで、玲子は福山にある会社に事務員として日中働いていた。母子家庭の必然として、萌子は家から歩いて10分ほどの距離にある祖母の家に、学校帰りに寄ることが多く

なった。時には、夕飯に祖母の手料理を味わうことも少なくなかった。

特に夏休みは、昼間萌子を一人で家に置いておく訳にはいけないということで、彼女たち親子は1ヶ月以上祖母の家で暮らすのが、毎年の恒例になっていた。

千絵が放浪の日々から帰って来るのも夏が多かった。ほんの数日のことではあつたけれど、きらきらと目を輝かせて萌子の見知らぬ街の話をしてくれる愛らしい顔立ちをしたその女性は、子供の目にひどく魅力的に映ったものだった。

どちらかといえば引つ込み思案な萌子には、千絵の力強くしなやかな生き方がとても羨ましく思えたのだ。

「前から気になってたんだけどさ」

カウンターの下から三番目。いつもの指定席に腰を下ろして紺色の鞆を隣の席に置きながら、萌子は誰もいない店の中をざっと見回した。

5つあるカウンター席と、4人掛けのテーブルが2つあるだけの、こぢんまりとした造りの店だ。入り口の脇には大きく葉を広げる鑑賞樹。奥の壁の真ん中に設けられた造り付けの棚には、CDケースが2つ飾ってある。

「この店、儲かってるん？」

遠慮ない台詞を口にする姪っ子の言葉に、千絵は思わず吹き出した。

「……つたく、おこちゃまが何ナマぬかしてんだか」

「だつてさ……」

「今日はたまたまよ」

と言つて千絵は小さく吐息を吐いた。

「みんな、あたしが道楽でこんなことやってると思ってるんだから。ちゃんと黒字を出してるのよ、この店は。あの人もびっくりしてるんだからね」

「あらま。それはそれは失礼致しました」

萌子はそう茶化したように頭を下げた。

「もつとも」

千絵は優雅な手つきで紅茶をカップに注いだ。

「元手がゼロなんだから、楽なもんよね。エンジンの掛け方は知らなくても、ハンドルの動かし方だけ判つてりゃいいんだから」

千絵が、あんなに母や姉が忌み嫌っていた放浪生活に突然終止符を打つてこの街に戻つて来たのは、萌子が中学二年の秋のことだった。

それは『あの人』の存在が理由だった。そして彼女は尾道に戻つて来たが、自分の生まれた家に戻ることはなかった。

『喫茶店をやりたい』

戻つて来るなりそんな夢物語みたいなことを言い出した千絵を、最初周りは全く相手にしなかった。

『女手一つでそう容易く開ける商売ではない』

第一どこにそんな開店資金があるというのか。というのが、聞くなり鼻先で笑つた祖母の言い分だった。

彼女は、千絵が本気だと知ると、今度は自分の娘の今までの行状を疑い出した。

『あんたまさか、水商売かなんかして稼いで来たんじゃないんでしょうね！』

そうだつて言つたら、その場に卒倒しそうな勢いだったわよ。

ずいぶん後で、その時の祖母の様子を千絵はそう笑つて萌子に話してくれたが、彼女がその場で祖母や母に告げた台詞は、それこそ祖母を卒倒させかねない内容だった。

『お金を融資してくれるっていう人がいるの』

千絵はその場でそんな意味の言葉を口にしたという。これは明確に言えば間違いである。融資というのはお金を貸してくれるということだ。ただでくれるという意味ではない。

何にしるそんな旨い話があるはずがない。祖母と母はすぐにピンと来たという。

「雨、止まないわねえ」

萌子の肩越しに窓の外を気に掛ける素振りを見せて、千絵が小さくため息を吐いた。

つられたように萌子も振り返って窓の外を見た。

雨の滴が幾筋もガラスの上を流れる。その向こうに人通りの絶えた、冷え込んだ夕暮れの街があった。

「あの人が来る日？」

体勢を元に戻して、萌子は気遣うように千絵の顔を覗き込んだ。

千絵にこの店を持たせてくれたその人は、広島市内に幾つもの貸しビルを持つ不動産会社の社長で、彼の自宅も広島市の郊外にあるのだという。

そして、彼がこの街を訪れて千絵と一緒に時間を過ごすのは月にわずか一度か二度だということを、萌子は最近になって知った。

萌子はそれを知った時に不思議に思った。どうして千絵は広島で店を開かないのだろうか。

彼女は別に不倫をしている訳ではないし、その人の力を持つてすれば広島市内で店を出すことも不可能ではないらしい。

『そりゃ、あいつの子供と顔を会わせるのが怖いからに決まってるじゃないか』

ある時、祖母の前でふとその疑問を口にすると、祖母は吐き捨てるような口調でそう答えた。

『考えてもごらんよ。いくら奥さんと死に別れてるからといって、自分の父親が五十も過ぎて自分たちと大して歳の変わらない娘をたぶらかしてるんだからね。いや、向こうから見れば、財産目当てで年老いた父親を色仕掛けで誘惑してるって思うだろうね、きつと』

「……さっきメールが入ったんだけどね。夕方こっちに着くってカウンターに放り出してあった携帯を手に取ると、弄ぶように眺めながら千絵はそう言った。

「あら、じゃあ私はお邪魔かしら？」

そう言っただけで萌子が鞆に手を伸ばしかける。

「何言ってるのよ、あんたまだ紅茶に手もつけてないじゃないの」
慌てたように千絵はカウンターの向こうから掌を伸ばした。それから、子供が拗ねるようにぷうつと頬を膨らませる。

「萌ちゃん、あの人が来るとすぐ逃げちゃうんだから。小田さん、あなたに一度会いたがっていたわよ」

「だって二人の邪魔しちゃ悪いじゃない」

萌子はまだ『あの人』に会ったことがない。

別に会いたくない訳ではない。ただ今日みたいにタイミングが合
いそうな時に、何となく会うのを避けていたのは事実である。

そのことに然したる理由があるとは、萌子自身思っていなかった。
ただ、祖母のあの吐き捨てるような台詞を耳にした時から、彼女の中
に小さなしこりみたいなわだかまりが残っているのは確かだった。
「あゝあ。今日はもう店じまいにしちゃおうかな。お客さんもい
ないことだし、ね」

千絵は退屈そうに背伸びした。

「あら、あたしは？」

「あんたが客だって主張するなら、今まで飲んだ分の請求書を出
すわよ」

千絵がそう笑って、カウンターを回り込もうとした時だった。

分厚いきつね色のドアが開いて、千絵ご自慢のカウ・ベルがカラ
ンカランと小気味良い音を立てた。

第一章 雨上がりの街で（2）

（2）

カウ・ベルの乾いた音色。裾の滴を払う仕草。

まだその時は何も意識していなかったはずなのに、それらの記憶は不思議なくらい、ずっと後まで萌子の脳裏に焼き付いたままだった。

入って来たのは若い男だった。萌子が来た時よりも更に雨足が強くなったらしい。その男は薄い浅葱色のジャケットやスラックスに付いた滴をしきりと払った。左手に持った紺色の傘から、雨の滴が床にばたばたと落ちる。

その傘の紺色と上着の浅黄色を見て、萌子はドキツとした。

あの防波堤の前で佇んでいた男だった。手にした傘と上着の色に確かに見覚えがある。

彼のスラックスの裾は、すっかり濡れそぼっていた。

（あれから今まで、ずっと海を見てたのかしら？）

萌子が『ひこうき雲』に入ってから、もうかれこれ2、30分は経っている。不意に、萌子の脳裏にあの寂しげな後ろ姿が蘇った。

萌子のそんな不躰な視線にはちっとも気付かない様子で、彼はしばらく体中を払う仕草をしてから顔を上げると、

「すいません。ブレンド一つ下さい」

と告げて、入り口に一番近い4人掛けのテーブルに腰を下ろした。品の良い、正確な標準語だった。

「ブレンド一個、ね」

千絵が意味深げにそう復唱して、カウンターの途中でくるりと背を向ける。

萌子は盗み見るようにそっと斜め後ろを振り返った。

彼は、雨に煙る窓の外をじっと見ていた。防波堤のそばに佇む姿と同じで、萌子にはその背中が何かを拒絶しているように感じられ

た。

コトン、と乾いた音がした。

萌子は首を元に戻してきよとなった。彼女の目の前に、新しい冷やタンとおしぼりが置いてある。

「？」

「あんたもね、もし請求書を出されなくなったら少し働きなさい。ほら、お客さんの所にお冷やおしぼり持って行って」

千絵のともない言いがかりに、萌子は呆れたように目を丸くした。

「……まさか、こんな時のために餌付けされていたとは思わなかったわ」

「ほらほら、ぐずぐず言ってないで早く早く」

「ったく人使いが荒いんだから」

萌子はぶつぶつ言いながらも渋々立ち上がった。

千絵が面白半分で作っているのは判っていた。こういうところがちつとも大人になり切れていないのだ。時々、どっちが年下なのか判らなくなる。

「……今度から、来るたびに時給を請求してやる」

「何か言った？」

「いえいえ」

男の座ったテーブルの前に立つと、萌子は軽い緊張を覚えながら、「いらつしやいませ」

とわざと明るい声を出した。そうしてテーブルの上に冷やタンとおしぼりを静かに置くと、上目遣いで覗き見るように客の顔を見た。
(20歳……22ぐらいかな)

綺麗な顔をしている。そう思ってから萌子は、自分の抱いた印象に思わず赤面した。

端正な、優しい面差しだった。男にしてはいくらか色白なその横顔は、男らしさよりもどこか頼りなげな雰囲気醸し出している。不意に胸の鼓動が早くなった。それは、今まで心臓が動いてなか

ったのかと思うくらい、唐突な出来事だった。

（え？）

どくどく、と心臓が不規則に暴れている。萌子は焦りを覚えて、視線を落とした。

客の足元に荷物が二つ見えた。紺色のスポーツバッグと麻の手提げ袋。

特に、手提げ袋は萌子の目を引いた。

というのも、元は白かったと思われるその袋は、今は新品だった頃を想像することが困難なほど絵の具が何かで抽象画のように色付けされ、更に長い年月をかけて薄汚れ、ところどころ擦り切れてさえいたのである。

それを彼は、後生大事に抱えて店に入ってきた。

ずいぶんと使い込んでいるなあ、と思いながら萌子は覗き込むようにヒョイと首を伸ばした。思った通りそこには、これまた薄汚れた絵の具箱らしき白い箱や筆といった画材が、無造作に放り込んであった。

萌子には、それらが画材だと一目で見分けが付いた。

（絵を描く人なのかな）

その想像に、萌子はまた胸を不規則に揺さぶられた。戸惑いに似た動揺を覚える。

「ありがとう」

しばらくのあいだ、萌子はちょっとぼんやりとしていたらしい。

不意にそう声を掛けられて、彼女はびくつとして顔を上げた。

いつの間にか彼は、目を落としていたガイドブックから顔を上げて萌子の方を見ていた。優しく微笑む鳶色の瞳と萌子の視線が出会った。

萌子はどぎまぎして、ぴよこんと頭を下げると慌ててカウンターに戻った。

「おかえり」

きつと一部始終を見ていたに違いない。心底嬉しそうに千絵が笑

顔でそう迎えた。

「奴、何者？」

「何者って、旅行してるんでしょ」

さり気なさを気取った語尾が震える。

「あの小汚いバッグ、何入ってた？」

「何って……」

「あんた、覗き込んだじゃない」

「……ホント、目敏いんだから」

萌子はそう言つと、小さく深呼吸した。

「絵の具ケース」

「え？ 絵の具？」

「それと筆とか。絵描きさん、かもしれない」

「ふん。絵描き、ねえ」

興味津々、といった感じで千絵が萌子の背後を舐めるように軽く

眺めた。

「美男子な放浪画家、ねえ」

途端に萌子は吹き出した。

「千絵ちゃん。それはあなたの好みってだけでしょ。それに今時

『放浪画家』って……」

「あら」

いたって真面目な顔で、千絵がこう言葉を紡いだ。

「尾道は、昔から多くの文人や画家に愛された街よ。志賀直哉が過すごし林芙美子が故郷と懐かしんだ所よ。いいじゃない、現代の無名の放浪画家が尾道を訪れたって」

萌子が呆れ顔で、

「千絵ちゃん。ところで『ブレンド』は？」

そう忠告すると、千絵はポン、と手を叩いて、

「あらいけない」

とカウンターの奥へと歩いて行つた。

（放浪画家、ねえ）

萌子はもう一度そつと振り返った。

彼はガイドブックを右手で開いたまま、また窓の外の街を見つめていた。その姿は確かに、何かしらの事情を背負う『放浪画家』に見えなくもない。

（美男子な……）

千絵のもう一つの台詞を思い返して、萌子は少し頬を赤らめた。

「はい。おまたせ」

コトン、と音を立てて千絵が萌子の前に湯気の立つコーヒーカーブを置いた。

「当然、これもあたしが運ぶ訳ね」

「もちろん」

千絵がにつこりと微笑む。

（絶対時給を請求してやる）

萌子のそんな心の呟きに気付くはずもない千絵は、無邪気な顔で萌子の耳元に口を寄せてここのたまった。

「コーヒー持ってたなら、ちょっと話し掛けてみなよ」

「ええ！？ やだよ、そんなの」

何を言い出すの、といった風に萌子が千絵を軽く睨む。ところが千絵はちつとも応えていない様子で、

「いいじゃない。これが出会いのチャンスかもしれないわよ。流浪の天才画家と尾道の少女の恋、なんて素敵じゃない」

「千絵ちゃん」

幼子を叱る母親のように萌子は千絵を睨んだ。

「こんなところでナンパしてどうするのよ」

ところが千絵はどこ吹く風で、

「いつまでもそんなだから、薫ちゃんにどんどん差を広げられるのよ」

こんなところで親友の名を持ち出されるとは思わなかった。萌子は肩をすくめて、

「薫がやってるのは、ナンパじゃなくて慈善事業らしいわよ」

そう切り返すと、付き合ってられないとばかりにコーヒーソーサを持って立ち上がった。

萌子がテーブルに近付くと、『天才画家』さんはまたガイドブックに目を落としていた。

千絵のことをすっかり馬鹿にしていたのに、萌子は彼の前に来て急にうるたえた。

（これが出会いのチャンス……あかん。あたしゃ何を考えてるんだろ）

千絵が後ろから見ている。そう思って萌子は、小さく頭を振って平常心を取り戻そうとした。

「お待たせしました」

努めて元気よく、萌子はそう言ってコーヒークップをテーブルの上に差し出した。

「ありがとう」

穏やかそうな笑みで萌子を見上げて、彼はそう言った。それから少し遠慮がちな口調で、

「あの、ちよつと訊きたいことがあるんだけど、いいですか？」

と尋ねた。

「え？」

萌子は思わず声がひっくり返った。何だかんだ言っても、やっぱりどこかで彼を意識していたのだ。

「な、何ですか？」

無理矢理引きつった笑顔を浮かべた萌子を見て、彼は申し訳なさそうな口調になりながら、

「いや、ちよつと道を訊きたかったんだけど……」

「どこまでのですか？」

「うん。三田村不動産という所なんだけど」

「三田村不動産？」

訳もなく舞い上がって、まるで全校集会で壇上に上がったみたいに顔を火照らしていた萌子は、聞き慣れた名前を耳にするとホッと

して急に平静を取り戻した。

「三田村不動産なら判ります。ここから歩いて15分くらいの所ですよ」

知ってるも何も、その不動産屋は母の古い知人がやっている店なのだ。その店の店主は、萌子からしてみれば近所のおじさんのような存在だった。

「そう」

その台詞を聴いて、彼は安心したようにホッと息を吐いた。

「そしたら、そこまでの道順を教えてくださいませんか？」

「いいですよ。あ、でも……」

萌子も緊張がほぐれたように小さな笑みを浮かべながら頷きかけて、ふと思いついたように躊躇した。

「何か？」

「いえ。教えるのはいいんですけど、でも上手く教えられるかな？」

尾道は坂の街である。JR山陽本線と国道2号線に隔てられるようにして、街は海の手と山の手に分かれている。海の手は商業区域で、山の手は住宅が多い。

しかし三田村不動産が店を構えているのは、山の手の方である。

比較的区画が整理されている海の手と違って、山の手はそれこそ迷路のように道が入り組んでいる。三田村不動産もそんな入り組んだ路地の途中にあり、坂の下には小さな看板が一つあるだけだから初めて訪れる人にその所在を伝えるのは確かに困難な作業だった。

それにしても次に萌子が発した台詞は、彼女自身どこからそんな考えが飛び出して来たのか想像も付かないものであった。

「あの、じゃあそこまで一緒に行きましょうか？」

「え？」

何でこんなことを言い出したのか萌子自身びっくりしたのだが、もつとびっくりしたのは『絵描きさん』の方だった。彼は目を丸くして、

「え、いやそれはいくら何でも悪いから……」
とさすがに遠慮しかかった。

「いえ。あの、どうせ帰り道だから……」
急ぎ立てられるように口を突いたこの言い訳は、ほんの少し嘘だった。

確かに彼女の家は同じ山の手にあるが、萌子は三田村不動産の前を通らなくても家に帰ることが出来る。

それにしても何でこんなことを言い出したのか。何だかとても取り返しのつかないことをしたような気がして、萌子は急にモゾモゾするような居心地の悪さを覚えた。

ところが、『絵描きさん』は疑うということを知らない素直な性格らしく、萌子の台詞にちよつとだけ安心した様子で、

「そうですか。それじゃお言葉に甘えさせてもらおうかな」
と言つて笑顔になった。

それは爽やかな笑みだった。力強さではなく、気弱さとその裏返しの優しさを滲ませた、柔らかな微笑だった。

「よろしく願います」

そう丁寧な挨拶を返されて、萌子は慌てたように、

「あ、いえ、そんな」

と訳の分からぬ答え方をすると、またびよこんと頭を下げてぱたとカウンターに戻った。

「どうしたん？」

カウンターから一部始終を見ていた千絵が、不思議そうにそう訊いた。

「何でもあらへん」

「何でもあらへんってあんた、茹で蛸みたいに顔が真っ赤やない」
千絵はそう言つて萌子の顔を覗き込むように見た。

「だから何でもあらへんって」

「あの人と、何を喋ってたの？」

「ん？」

萌子は思わず返事をためらった。何を言っても、全部言い訳に聞こえてしまいそうな気がした。

「えつとね。あの人、三田村のおじさんのところに用事があるらしいのよ」

「へえ。じゃあここに引越して来るのかしらね」

「さあ。そこまでは訊かなかったけど……」

「で？」

「……それでね。帰りにそこまで道案内してあげることにしたの。ほら、あそこって道順が説明しづらいじゃない。だったら一緒に行つてあげた方が手っ取り早いかなくて。まあ、家に帰るのにもそんなに遠回りじゃないしさ」

普段はあまり取り乱すことなどない姪っ子の、必死になって弁解する姿を冷やかな目で見ていた千絵は、やがて笑いを堪えるようにして、

「つまり」

ぽつんと一言、こう言った。

「きつかけが出来ちゃった訳ね」

「やだなあ。そんなんじゃないわよ」

しばらくのあいだ、彼はコーヒーを口元に運びながらガイドブックや何やら書類に目を通していた。気に掛ける素振りなどこれっぽちもない、という振りをしながら、萌子は何度となく彼の方を振り返って見ていた。

やがて大きな荷物を二つ抱えと、彼が入り口のレジの方へと歩み寄った。萌子は慌てて自分の鞆を掴んだ。

「ごちそうさまでした」

『絵描きさん』はその爽やかな笑顔を千絵にも振りまいた。彼の人懐っこそうな表情に千絵も気持ちしがほぐれたらしい。お代を受け取りながら小さく笑みを浮かべて、

「こちらに引越して来るんですか？」
と尋ねた。

「ええ。それで住まいを紹介してくれることになっている不動産屋の場所を探してたんです。あ、そうだ」

と彼は萌子の方を振り返って、

「彼女が案内をしてくれるそうなんですが、お借りしてもよろしいでしょうか？」

「どうぞどうぞ。別にあたしの持ち物じゃありませんから」

そんな千絵の軽口に、彼は打ち解けたように笑って、

「申し遅れました。私、立花と申します」

「これはご丁寧にどうも。私は澤崎です。こっちは……」

普段の言動からは想像もつかない保護者ぶりを発揮して、千絵は萌子の頭を軽く押した。

「姪の萌子です」

「ど、どうも……」

萌子はどうしようもなく照れた様子で、ぺこんと頭を下げた。

「姪御さんですか。てつきり妹さんかと思った」

「まあ、ずいぶんとお上手なことを」

千絵は恥じらうように笑顔を作ったが、立花は案外お世辞で言った訳ではないらしい。真面目な顔つきでこう続けた。

「そんなことないです。お若く見えますよ」

そんな彼の一直線な瞳を、千絵は少し眩しそうに見つめてからこう尋ねた。

「そちらこそまだお若いのに、転勤なんですか？」

すると今度は彼が照れ臭そうな笑みを浮かべて、

「実は私、福山にある高校に赴任することになっているんです」

「あら、そうなんですか」

これには、そばで聴いていた萌子もびっくりした。千絵は萌子の方を見やって、

「この娘も福山の高校に通っているんですよ」

「へえ。そうなんですか」

そう言っただけで彼は萌子を直視した。萌子は何となく視線を逸らしな

がら、

（先生って感じじゃないな）

と瞬時に思っていた。

その思いは千絵も同じだったらしい。

「先生には見えませんでしたわ」

千絵がそう正直な感想を述べると、彼は困ったように苦笑して、

「美術の代打教師で、実は教壇に立つのは初めてなんです」

その瞬間、萌子はドキツとした。無意識の内に、ぴくりと体が震える。

そんな姪っ子の表情の変化には全く気付かずに、千絵は好奇心の強い声で尋ねた。

「そうでしたの。それで、何ていう高校なんですか？」

美術の代打教師、と聴いた瞬間から、萌子はどうにも胸騒ぎが止まらなくなっていた。そういえば、今度来る教師は若い男だとクラスの誰かが噂していたような気がする。

「福山女子高校、ていうんですけどね」

「あらまあ」

千絵はびつくりしたように目をまん丸にして萌子を見た。彼女の手からこぼれた小銭が、カウンターの上でちゃりんちゃりと転がった。

第一章 雨上がりの街で（3）

（3）

「あれ」

店を出たところで、萌子はふと気付いて空を見上げた。

「雨、止んでる」

いつの間にか、雨はすっかり上がっていた。時間を巻き戻したように、辺りはほんのりと明るさを取り戻している。

「あ、よかった」

萌子と並んで嬉しそうに空を見上げる『絵描きさん』を、彼女は不思議な気持ちで眺めた。

雨上がりのせいか、商店街は異様なほど閑散としていた。ひんやりとした空気の中を、二人は並んで歩き出した。

「それにしても驚いたなあ」

困ったような照れ笑いを浮かべて、彼は大げさに肩をすくめて見せた。そういう仕草が、全然板に付いていない。

「君が僕の未来の教え子だったなんてね」

「びつくりしたのは私の方ですよ」

萌子も自然と笑顔になってそう言い返した。

萌子を通う福山女子高校では、今まで美術を教えていた既婚の女教師が産休を取るようになっていた。確か明日、離任式があるはずだ。

問題はその後釜となる臨時講師だった。

それが大学を出たての若い男だと聞き込んで来たのは、確かその手の話に異常なほど執念を燃やす今野晴美だった。

「そりや確かにウチの学校には、じじいとヒステリックばあしかいないけどさ」

未確認情報のうわさ話で無邪気に盛り上がるクラスメイトを、幼馴染みの薫は半ば馬鹿にしたようにそう評した。

「だからってみんなそんなに飢えた目をする事もないじゃないの。どうせそういう期待をする時に限って、乳離れ出来ない軟弱なマザコンか、お笑い芸人みたいな顔っていう落ちが付くもんよ」

「しょうがないでしょ。みんな薰みたいに、いつでもとかえひつかえって訳にはいかないんだから」

いつになく辛辣な親友の口調を萌子が窺めると、薰はぷうと頬を膨らまして、

「あたしだって、別にいつでもとかえひつかえって訳じゃないわよ」

萌子も、他のクラスメイトみたいに興味津々というほどではなかったけれど、それでも薰みたいにあからさまに彼女たちを馬鹿にしていた訳ではなく、一応は楽しみにしていた。

なにしろ福女には、『若い』という形容詞を使用しても許される男性教師は皆無だったのだから。

「ええと。澤崎さんは二年生だったよね」

ためらいを含んだ口調で、彼は萌子にそう問い掛けた。

「ええ」

「そっか。僕は主に二年生を教えることになっているんだ。じゃあ授業でも一緒だね」

「そうなんですか」

そうなんだ。萌子は素直な気持ちでそう自分に問い返した。ふわっとした喜びが胸の中に広がる。彼女の中で、何だかとても楽しくなるような予感が芽生えた。

まだドキドキしている。まるで、その早い脈拍のままで心臓が落ち着いてしまったみたいだった。

「僕はね、教員の免許は持つてるけどちゃんと教壇に立ったことはないんだ。けど」

彼はちらりと萌子を見やって微笑むと、

「こんな所で自分の生徒と出会えるなんて思わなかった。君のいるクラスの時は、きつと心強いね。よろしく」

そう言って右手を差し出した。

それは邪心のない笑顔に思えた。気障なお世辞でも、生徒の気を引こうとするおべんちゃらでもなく、きっと本心からそう言っているのだろうと思わせる、どこか子供じみて見えるほど無邪気な笑顔だった。萌子は少しためらってから、右手を差し出して彼の手を握り返した。

（薫が見たら何て言うかなあ。成長し損なったガキ、とでも言うかしら）

クラスみんなが興味を持っていた人物に一足先に会うことが出来て、萌子は何だかとても得したような気分になっていた。

二人は人気のない商店街を素通りすると、車通りの激しい国道2号線沿いの歩道に出た。

雨上がりの道を、何かに急かされるように車が二人を追い越して行く。そのたびに、路肩に細かい水飛沫が上がった。

「僕は、尾道に来るのがとても楽しみだったんです」

騒音に負けないように『絵描きさん』は声のトーンを上げてそう言った。

「絵の題材にするんですか？」

彼が後生大事に抱える薄汚れた例のバッグに視線を送りながら、萌子はそう問い返す。その物々しい画材は、ただ美術を教えるためだけの物とはとても思えなかった。

「ああ、これですか」

萌子の視線に気付いて、『絵描きさん』は気恥ずかしそうに弱々しい笑みを浮かべた。

「こんな仰々しい道具を抱えて、さぞかしたいそうな絵を描くと思ってるでしょ」

そうやって照れている姿は、何だかやたらと初々しくてやっぱり教師には見えない。

「ホントは大学でもずっと描いて来て、卒業してから結構有名な先生に付いて勉強していたんだけど、半年経ってもちつともモノ

にならなくてね。そういつまでもぶらぶらしている訳になくなくて、それでコネで福山の高校の臨時教師を紹介してもらったという訳なんです。つまり」

話の内容の割に彼はちつとも落ち込んだ様子を見せずに、むしろ茶目つ氣たつぷりに片目をつぶって、

「画家の落ちこぼれ、と言うか成り損ない、という訳」
「でも」

後ろから追い越して行く車の巻き上げる風に、軽くスカートを押さえながら萌子は、

「絵を仕事にするって、そう簡単にいかないものでしょ？」

「？ まあそうだけど……」

萌子の訳知り顔に、『絵描きさん』はちらつと不審げな表情を浮かべる。萌子はためらいがちに、

「あ、あの、私も美術部なんです」

「へえ、そうなんだ」

彼はちよつぱり嬉しそうに、

「じゃあ、僕の後輩だ」

と、屈託のない笑顔を見せた。

「君も、将来はそっちの方へ？」

「いえ。そうじゃなくて……」

母の職業を名乗る時、萌子はいつもちよつとだけ恥ずかしいような、それでいて誇らしいような、二律背反な気持ちになる。

「うちの母も、イラストレーターをやってるから……」

「へえ」

萌子の台詞に彼は想像以上に驚いた様子で、

「凄いなあ」

「あ、でも大したことないんです」

彼のそんな反応に萌子は余計慌てた様子で、

「タウン雑誌の小さな仕事をいくつかこなしているだけですから」
本当は、彼女が母の仕事を『大したことない』などと思ったこと

は、今までただの一度もなかった。

確かに、今萌子たちが暮らしている西土堂の家は祖父から譲り受けた物だし、萌子の学費も中小企業とはいえ社長だった祖父が遺してくれたお金を充てていたから、よその母子家庭よりもずいぶんと楽な暮らしをしているのかもしれない。

それでも二人の日々の暮らしを支えているのが、玲子のイラストレーターとしての腕であることは紛れもない事実だった。

そうやってこれまで自分を育ててくれた母に萌子はとても感謝していたし、それに一人のイラストレーターとしても深く尊敬していた。

自分が将来母と同じ道を進むかどうかは、今の萌子には判らないけれども、同じ絵を志す身としてただ純粹に、母の描く優しいタッチのイラストが彼女は大好きだった。

「そんなことないよ」

萌子の台詞に少し反発するように、強く思いを込めるような口調で立花はそう首を横に振った。

「人に認められるものを創り出すことに、仕事の大小なんか関係ない。この世に立った一人でも、自分の創り出したものを認めてくれる人がいるとしたら、それだけで凄いことだと思うよ」

萌子に言い聞かせているようでいて、その視線は萌子の存在を捕らえてはいなかった。遙か遠くを見つめるように目を細めて、彼はそう言葉を繋いだ。

「僕が尾道に来てみたかったのは、昔父が少しのあいだこの街に住んでいたからなんだ」

「お父さんが、ですか？」

夕闇に沈んでいく『絵描きさん』の横顔に、一瞬物憂げな影がよぎるのを萌子は見逃さなかった。その瞬間、彼女の脳裏を夕暮れの線路の向こうに去る父の後ろ姿がかすめた。

「僕が生まれる直後のことだね。だから小学校に上がって少しするまで、僕は親父の顔を知らなかったんだ」

「そうなんですか……」

萌子は少し驚いていた。小学校に上がる前までの父の記憶しかない自分と、小学校に上がった後からの父親の記憶しかない彼。二人がこうして肩を並べて歩いていることが、萌子にはとても不思議な偶然のような気がした。

（けど、ウチみたいにお父さんがなくなっちゃった訳じゃないし……）

「単身赴任、ですか」

「まあ家族が一緒じゃないから、単身赴任みたいなもんだけど……」

彼はそう薄く笑みを浮かべた。言葉の軽々しさとは逆に、その表情はこれ以上触れられたくないという拒絶が漂っている。萌子はそれ以上詮索することをためらって、思わず口をつぐんだ。

二人の間に、しばし沈黙が訪れた。

萌子たちはやがて、線路の下をくぐるように設けられた小さなトンネルの前に立った。

人一人やつとすれ違えるような小さな坑道で、入り口の脇に『天寧寺・宝土寺』と書かれた、尾道の町中でよく見られる薄茶色の石の案内柱が立っている。

萌子は黙ってそのトンネルをくぐり抜けた。『絵描きさん』がその後に続く。

トンネルの向こうには細い石段が待っていた。辺りはもう半分闇に包まれていて、街灯の白い明かりが徐々に目立ち始める、そんな時刻になっていた。

萌子は立花を従えてその坂道を登った。闇に沈み込んでしまいそうな路地を曲がった、尾道市文学公園のほど近くに、石畳に明かりがこぼれる一画がある。

それが、三田村不動産だった。

三田村不動産は、向かい合った狭い路地に似つかわしい小さな構えの店だった。入ってすぐにあるカウンターの向こうには、いつも

三田村と事務のおばさんの姿しかない。

狭い入り口から萌子が顔を出すと、三田村は人の良さそうな笑顔を浮かべたが、後から入って来た立花の姿を見て不審そうに萌子と彼の顔を見比べた。

「おじさん。お客さん連れて来たよ」

「あの、東京の松崎の紹介で来た者なんですけど……」

「松崎さん？ ああ、じゃあ貴方が立花さんかい？ こりゃ奇遇だねえ」

萌子と立花の組み合わせに、三田村は心底驚いた様子で目を見開いた。

「ま、そつちにおかけなさい」

それから三田村は何だか嬉しそうに、二人に入り口の脇のソファに座るよう勧めた。

二人がそこで待っていると、ちょっと小太りな事務のおばさんがお茶を運んで来る。

「どうぞ」

相手を和ませる落ち着いた笑顔だった。見知らぬ場所で少し緊張気味だった『絵描きさん』の表情が、その一言で和らいだ。

「いやあ、それにしてもびっくりしたなあ」

両手に山ほど書類を抱えて、ほどなく三田村が二人の前に姿を現した。

「今日の夕方に来るって訊いてたから、準備はしてたんですけどね」

何が嬉しいのか、三田村はにこにこしながら二人を交互に見やっていた。

「萌ちゃん、どこで立花さんと会ったんだい？」

「えっとね、『ひこうき雲』で。ここまでの道を教えて欲しいって言われたから、ついでにここまで道案内して来たの」

「そう。それはご苦労だったね」

萌子のことを小さい頃から知っている三田村は、小学生のお使い

を褒めるような口調で彼女の労をねぎらった。それからとっておきの話でもするような口調で、

「萌ちゃん。この人ね、今度君の学校に赴任する先生なんだよ」

「うん、聞いた。みんな若い先生が来るって期待してたもん」

萌子のこの台詞に、立花は急に真つ赤になって慌てて湯飲みに手を伸ばした。

「萌ちゃん、先生を苛めちゃ駄目だよ。ほら、困ってるじゃないか」

立花の教師らしくない反応が可笑しかったのか、三田村は苦笑いを浮かべながら萌子をたしなめた。

「いや、そんな期待に添えるかどうか……」

立花が生真面目にそう答える。

「ハハッ。先生、最近の女子高生は手強いですからな。舐められんよう気を付けないと」

三田村はそう笑ってから急に目を細めて、

「先生にあの部屋に住んでもらうのも、何かの縁ですか」

「あの部屋って？」

萌子がそう小首を傾げると、三田村はあれっと言つような表情で、
「萌ちゃんには断つておいたはずだよ。君たちのあの部屋を貸す
って」

「ああ、そう言えばそうだったっけ」

そう言えば先月、三田村から電話でそんなことを言われたような気がする。しばらくあの部屋を使わなくなっていたから、あまり文句の言える立場ではないのだが、それでもその時はちよっぴり寂しいような理不尽さを感じたことを、萌子は思い出した。

「あの、何かあるんですか。僕が借りることに」

「あ、いやそんなことはないんです。ただ先生に住んでもらう部屋ってというのが、小さい頃にこの子がずっと遊び場に使っていたもんでね」

浄土寺の境内の脇道を上がった所に、そのアパートは崖にへばり

付くように建っている。正面の道路と繋がっているのは二階部分で、一階は崖の中腹に沿うようになっていて、坂の街らしくちよつと変わった造りのアパートだった。

大抵の住人が便利な二階部分への入居を望み、なおかつ駅からちよつと離れた立地条件もあって、そのアパートの一階の三部屋が全て埋まることは今までなかった。特に真ん中の102号室は、萌子が小さい頃からずっと空き部屋になっていた。

きっかけは、萌子がこの店に遊びに来た時にその部屋の鍵の在処を知って、それをこっそり持ち出して薫と遊んだことで、その時は二人ともこつぴどく叱られたのだが、その内にその部屋は二人の公認の遊び場になった。

まだ子供の二人のために、三田村は危険なガス栓は開けずに水道だけは通るようにした。小学校の時は放課後すぐに、中学に入ってからそれぞれ弓道部と美術部に通うようになって、お互いの部活の後で二人は毎日のようにその部屋で落ち合った。

二人の持ち込んだ遊び道具以外は何もない部屋で、二人は買い込んで来たお菓子や飲み物を囲んでいつまでもお喋りをした。毎日、尾道の街に夕日が沈むまで。

三田村がわざとその物件を客に紹介するのを手控えていたことや、玲子や薫の親たちが三田村に部屋の使用料をいくら払っていたのを知ったのは、萌子たちが中学三年になってからのことだった。

「先生から、尾道が一望出来る部屋って言われてな。すぐにあの部屋を思いついたんや。福山の高校に通うようになってから、二人ともあんまりあの部屋に寄りつかなくなったし、もうそろそろええかなって思うてな」

確かに地元の中学に通うのと福山まで通学しているのでは、ずいぶんと帰宅時間が違う。それに薫はすっかり弓道部に入れ揚げているし、萌子は萌子で『ひこうき雲』という、もう一つの隠れ家を見つけてしまっていた。

「何か悪いことをしたみたいですね」

立花がすまなそうに表情を曇らせたのを見て、萌子は慌てた。

「いえ、そんなことないですよ。もう私たちはほとんど使っていないかったんだし……」

それに……。

そう言いさして、萌子は次の台詞を飲み込んだ。

あなたのような人に入ってもらえるなら。そんなの、今日会ったばかりの人に告げる台詞ではない。

中途半端な会話で気まずい間が出来た。それを振り払うように三田村は、

「さあ、それじゃ萌ちゃんたちのとっておきの景色に、先生を案内しようじゃないか」

そう言って萌子の肩をポン、と叩いた。

「おかえり」

萌子が玄関で靴を脱いでいると、奥からエプロンを掛けた玲子が歩いて来た。

「あれ、もう『宿題』は終わったの？」

萌子がからかうようにそう訊くと、玲子は澄まし顔で、

「ええ。あなたのお仕事と違ってね」

とやり返した。

母は自分の仕事のほとんどを自宅で行っている。だから追い込みの時は、家事に手を出すことはまずない。それは全て萌子の役割となるのが暗黙の了解となっていた。

「遅かったじゃない。また千絵の所に入り浸ってたの？」

「ううん、違うの。『ひこうき雲』に来たお客さんがね、三田村のおじさんの所のお客さんだったの。だからね、三田村不動産まで道案内してあげたの」

「ふ〜ん」

「その人ね、今度福女に臨時講師で来るみたいなの」

「あら、それは奇遇ね」

玲子はそうちょっと驚いた顔をした後で、

「早く着替えてらっしゃい。もうすぐご飯出来るわよ」

そう告げて萌子に背を向けかけたが、突然思い付いたように振り向いた。

「ねえ、萌ちゃん？」

「ん？ 何？」

「あんた、今日何か良いことあったの？」

「え？」

いきなり心の中を見透かされたようで、萌子は訳もなく狼狽えた。
「何で？」

「いや、何かいつもより頬の辺りが緩んでるような気がしたから……。あなたもお肌の曲がり角かしら」

「失礼ね！ そっちこそ老眼じゃないの？」

萌子はそう笑って玲子を睨むと、玄関のすぐ脇にある階段をどたばたと登った。

そして自分の部屋に入ると、まるで体を鞆と一緒に放り出すようにベッドに寝転がった。

（立花……立花、何て言うんだろっ、あの先生）

ぼんやりと天井を見ながら、萌子はそんなこと思った。

第二章 美術部（１）

「おはようございます」

水谷家の玄関口で萌子がその声を張り上げると、じきに薫が姿を現した。パジャマ姿で、歯 ブラシを口に突っ込んだまま目を丸くしている。

「……あんた、どうしたの？」

「どうしたのって、迎えに来たんじゃない」

「そりやこのシユチエーションを見れば、あたしがあんたを迎えに来たようには見えないだろうけどさ」

去年の春、二人で福山女子高校に受かった後で、萌子が薫を迎えに行くことが決まった。

彼女は毎朝、澤崎家と水谷家の境にある階段を下って薫を迎えに行く。そしてそのまま二人は水谷家の正門を出て駅に向かうことになっていった。

小学校・中学校の頃は逆だった。薫が萌子を迎えに行き、そのまま澤崎家の門を出て登校していた。

小学校は澤崎家の目の前にあるし、中学校には自転車を通うために、玄関先がフラットになっている澤崎家の門から出発していたから、結局薫が迎えに行く形になっていた。

水谷家は澤崎家と背中合わせに建っている。それぞれの家に面した道路が一本違つために、萌子の家の目の前にある学校に来るために薫はわざわざ坂の下まで降りて遠回りをして来なければならなかった。坂の街では、これは結構由々しき問題である。

これでは不便だということで、水谷家が引越して来た１ヶ月後に、両家の間の柵に一つの小さな門と段差を埋める階段が設けられた。

それ以来、二人は毎日一緒に登校していた。尾道駅へは薫の家の方が近いということで、去年の４月から今度は萌子が薫を迎えに行

くことになったという訳だ。

もつともその一週間後には、しびれを切らした薫が澤崎家に怒鳴り込んで来たのだが。

「ちよつと待っててな。すぐに支度するから」

そう言つと薫は奥に引き返して行く。萌子は上がり框に腰を掛けた。

まあ確かに薫が驚くのも無理はなかった。何しろ高校に入ってから、三日に二日は薫の方が萌子を迎えに来ているのだ。時には、澤崎家の居間で平然とお茶をすする薫のそばで、萌子が支度に走り回っていることもある。

二人で登校するようになった時から、萌子と薫の性格の差は歴然としていた。

毎朝澤崎家の玄関に迎えにやつて来る薫を、萌子は必ず十分以上待たせた。高校に入つて今度は萌子が薫を迎えに行くと決まった時、薫は、

「萌子があたしを迎えに来るようになるとはねえ」
と皮肉っぽい視線を投げ掛けたものだ。

日に当たったことがないんじゃないかと疑いたくなるほど白い、陶磁器のような透明な素肌。見るからに柔らかそうな黒髪を胸の辺りまで伸ばした薫は、同姓から見てもはつとするくらい綺麗な、愛くるしい女の子だった。薫の素顔を知らない男子は、大抵彼女のことを清楚なお嬢様と思い込む。

けれども、幼い頃から彼女を取り囲む女友達はみんな、彼女のちよつと毒舌な、でもとても面倒見の良い姉御肌な性格に惹かれ、慕っていた。

しつかり者のその性格は、例えば約束の時間に遅れないとか、そんなちよつとした日常生活にも如実に現れていた。

薫が萌子の家の隣人として引っ越して来たのは、彼女たちが小学2年生になる春のことだったが、その頃から萌子はいつも薫の陰に隠れて過ごして来たように思う。

「萌子の場合、ドジで間抜けな性格は自分でもよく理解しているのよね」

ある日、薫は萌子のことをそう診断してくれた。

「けど呑気な性格だから、それに危機感を抱くことも出来ないのよ」

それじゃ自分があんまりにも救われないバカみたいじゃないかと、萌子はむくれて見せたが、本音を言つと薫の言うことが何となく実感出来たのも、事実だったのだ。

「でもね、あんたはそれで良いのよ」

一通り萌子のことをけなした後で、その台詞を口にした時、薫は天使のような極上の笑顔を浮かべた。

「萌子は感受性が強くて、日常生活に集中してられないほどいろんな方向にアンテナを張ってるんだから。あなたのあの美しい絵は、普通の人間がこなすべき生活のための能力を、そこに注ぎ込んだ結晶なんよ」

自分の描く絵を、きつと一番評価してくれているのは薫だと萌子はずっと思っていた。彼女に迷惑をかけていると思う分、薫に褒められるのは一番嬉しかったし、励みにもなった。

「おまたせ」

ほどなくして、薫が制服姿で現れた。萌子ならあの洗顔の段階から間違はなく15分はかかるのに、彼女は5分余りで支度を済ませて来た。

三和土の脇にある曇りガラスから朝の光が射し込んで、薫の頬に当たっていた。細やかな産毛が金色に染まるのを、萌子はしばらくぼおつと見つめていた。

本当に綺麗だと思う。同性がそう思うのだから、異性はもっとそのように思うのだろう。知り合いか否かを問わず、薫は実にさまざまな男性から声を掛けられる。

その清純な容姿と裏腹な彼女の闊達さに、たいていの男は目を白黒させる。それを楽しむかのように、彼女は『慈善事業』と称して

男の子をとつかえひつかえして連れ回していた。

「何しとんの。早よせんと、先生行っちゃうわよ」

薫にそう急かされて、萌子は慌てたように立ち上がった。そうだった。今日はそのために、歴史的な早起きをして来たのだ。

「行つてきます！」

「行つてきます」

萌子と薫は水谷家の奥へそれぞれ声を掛けると、門の外へと出た。胸のすくような秋晴れの朝だった。

水谷家の前の階段に立つと、眼下に尾道の街が広がる。その向こうにエメラルド色をした尾道水道、次に向島、そしてその向こうに雲一つない碧空が広がっていた。日立造船所の高々と伸びたクレーンが、朝日を受けて輝いている。

急な坂道を、二人は足早に降りて行つた。

「それにしてもさ」

薫はちよつと咎めるような目で、萌子を軽く睨んだ。

「昨日は萌子、あんまり乗り気じゃなかったじゃない」

「……別に乗り気じゃないって訳じゃないわよ」

視線を坂の下に向けたまま、萌子はそう答えた。

（あんまりに突拍子もないことを言い出すから、何て言つて良いか判らなかつただけじゃない）

もつとも薫のその『突拍子もない』申し出を聴いた時、萌子の表情が幾分仏頂面だったのは、あまりにびつくりして返す言葉が見つからなかつたから、とばかりは言い切れないことは、萌子自身よく判っていた。

たとえどんなに驚かされたとしても、薫のその並外れた行動力と大胆さには、萌子は子供の頃からすっかり慣れっこである。瞬間的に不機嫌になることなど、今まで一度もなかった。

なのになぜ昨日は、薫の台詞を耳にした途端に、
（なんであんなに胸がちくちくしたんだろう）

小さな路地を駆け下りると、やがて踏切に行き当たる。薫の家が

萌子の家よりも近いのは、この踏切までの距離である。

ここまで来るともう、家並みに阻まれて海は見えない。その代わりに、微かな潮の香りが漂って来る。

澄み切った穏やかな秋の空気を、萌子は胸一杯に吸い込んだ。

踏切を渡ると、すぐ目の前にアーケード街が現れる。二人はそこへは入らずに、手前の国道を右に折れて駅に向かった。

萌子の心臓が急にその存在を示し始めたのは、尾道駅の駅舎が見えて来た辺りだった。足下が浮き立つような、おぼつかない気分になる。そんな風に訳もなく動揺している自分に、萌子は余計狼狽えた。

（やだ、あたしっいたら何緊張してるのかしら）

萌子は、さつきとは別の意味の深呼吸を一つすると、

「来てるかしら」

囁くように薫に向かつてそう尋ねた。

「来とるよ、きつと」

薫が自信に満ちた笑顔で頷く。

「だって彼、氣い弱そうだもん。きつと先に来てるんじゃない？」

そう言って笑う薫の顔から、萌子はそつと視線を外した。

何だろう。昨日から薫の言い草がいちいち気に障る。

駅前に新しく立つビルとは対照的に、尾道駅の駅舎は古ぼけた平屋造りの建物だ。まだ浅い朝の光が射し込んで、駅舎の中の雑踏が斜めの影を作っている。

ざわざわと揺れる改札付近の人波を背に、彼は立っていた。戸惑いを隠せない、落ち着きのない緊張した面持ちで。

その瞬間、心臓の内側から誰かが叩いたみたいに萌子の胸が一つ高鳴った。

「ね、いたでしょ」

耳元で囁いた薫の台詞が、わずかな不快感を伴って頭の中に響く。
「せんせい！」

薫が無粋な大声で呼び掛けると、いくらか慌てたように彼がこち

らに視線を向けた。

「おはよう」

ぎこちない、強張った笑顔で立花 立花久志は二人にそう手を振った。

立花久志が福山女子高校にやって来たのは、あの雨の日の二日後のことだった。

その日は朝から、校内に落ち着かない雰囲気漂っていた。私立のこの学校に新任の教師がやって来るのは二年ぶりということだから、久志の赴任はそれだけでもう充分にニュースだったのだ。

とりあえず若い それも大学を出たばかりぐらいの年齢だということは、朝のホームルームの前には教室中に伝わっていた。せつかな誰かが職員室を覗いて来たらしい。

萌子だけがその実像を知っているというのは、優越感を覚えるようでもあり、こそばゆい居心地の悪さも感じさせた。

一時限目の授業が終わると、最初に美術の授業があった三組から早速立花情報がもたらされた。

「立花久志。年齢二十三歳。東京出身。優しそうで人当たりの良い感じ。かなりの美形、ねえ」

隣で話し込む級友たちの台詞に耳をそばだてながら、薫が小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「萌子の言ってることと違って、ずいぶんと評判がいいじゃない」
そう言われてみれば、確かにそうかもしれない。薫に久志の印象を説明する時、彼女はやれ『頼りなさそう』だの『教師らしくない』だの、散々な台詞を吐いたのである。

久志と出会ったことを、萌子は薫にその日の夜に携帯で話した。

『ふ〜ん。そりや珍しいこともあるもんねえ』

久志との出会いのいきさつをかい摘んで話すと、薫もちょっと驚いたように声を大きくした。

『それで、みんなが騒ぐほどの男だった？』

そう突っ込まれて、萌子は一瞬答えに窮した。

『うーん。まあ顔も背もそこそこだけど、なんか頼りなさそうであんまり先生って感じじゃないなあ』

とっさにその口を突いた言葉は、確かに萌子が彼に抱いた印象の一つではあったけれど、その台詞を口にしながら萌子は、久志のことを思い浮かべてどうしようもない違和感を覚えていた。

けれどもそう感じたことを薫に知られるのは、何となく嫌だった。

『ふーん、そうなんだ』

萌子の言葉を聞いた薫はちょっと拍子抜けした様子で、

『まあそんなロマンティックな出会いが転がっているほど、世の中甘くないわね』

と素っ気なく言い放ってみせたのだが……。

「萌子、イケてるだなんて一言も言わなかったじゃない」

薫がそう言って萌子を軽く睨んだ。

「悪いとも言っていないわよ。そこそこって言ったじゃない」

そう反論しながら萌子は、不意に初めて久志の顔を見た時に感じたことを思い出した。途端に、胸の奥の方がキュツと痛んだ。

「そこそこ、ねえ」

薫はなおも納得しかねる表情を浮かべていたが、やがて首を小さく左右に振ると、

「ま、あんたの男に関する美的感覚には前から疑問を抱いてたんだよ。これですよやく萌子の男の好みが判るわね」

と、のたまった。

「うちのクラスの福田やるらしいよ」

クラス委員長の丸山絵美が二人にそんなことを教えてくれたが、もともと萌子たち四組の副担任は産休に入った美術教師が努めていたから、これはある程度予想されていたことであつた。

「そういえば美術部の顧問もやるらしいよ」

絵美の台詞に呼応するように、不意に今野晴美がそう言って萌子

を振り返ったのは、四時限目の始まる前の美術室に移動する廊下でのことだった。

「え？ ああ、そうなんだ」

一瞬どんな顔をしたらいいのか判らなくて、萌子は曖昧な笑顔を浮かべた。

「せっかくだから、イイオトコだと良いよねえ」

「……そうね」

呑気な口調の晴美に無理に笑顔を合わせて頷きながら、萌子は悪戯に広がる晴れがましい気持ちを悟られないようにと、必死に平静を装っていた。何浮かれてるのかしら、と自分で自分を戒めながら、いつもの美術の授業といえば、何かモチーフを囲んで絵を描いたりすることが多いのだが、この日は久志の授業初日ということで、美術室の中は椅子だけが整然と並べられていた。

始業のチャイムすれすれに久志は教室に入ってきた。浮かべた造り笑顔に、少しだけ自信ありげな様子が窺える。

実際、この前まで三時限分の授業をこなした彼は、教育実習以来の教壇の感触をすっかり取り戻した気でいたらしい。

「起立！」

絵美の甲高い声に、全員が息を合わせたように一斉に立ち上がる。その瞬間、部屋の中に空気が奇妙に張り詰めていることに、萌子は今更ながら気付いた。

全員が着席すると、今まで見たことないような静けさが辺りを支配した。

萌子は例えようのない胸騒ぎを覚えた。彼女はすっかり忘れていたのだ。このクラスの面々が、どんなに好奇心が強くて、お茶目な連中であるかということ。

そんな萌子の心配をよそに、生徒たちの視線が自分に集中していることにまた幾ばくかの自信を深めた久志は、張りのある声で自己紹介を始めた。

「えー、産休に入られた近藤先生に代わり、今日から皆さんの美

術の授業を担当することになりました、立花久志です。よろしく」

やはり端正な標準語だった。その瞬間、感嘆とも冷やかしくも取れるどよめきが、クラス中から一斉に湧き上がった。

「……は？」

第一声がやたらと気取っていた分、次に久志が漏らした戸惑いの声は余計に間抜けに聞こえた。今度は教室中に風船を叩き割ったみたいな大爆笑が弾け飛んだ。

「な、ほんまもんの標準語やろ」

「ホントホント。美術じゃなくて国語を教えて欲しいなあ」

「あ、あの……」

「センサー、私に正しい日本語教えて下さい！」

最前列の松谷宏美がそう声を挙げた。それがまたひとしきり笑いを誘う。

隣を見ると、薫が笑いを堪えきれない様子で下を俯いていた。

「え、いや、その、僕は美大出身だから、その、国語の教員免許は持ってなくて……」

「質問、質問！」

ちようど真ん中辺りに陣取っていた晴美が、張り切った声で右手を高々と挙げた。

「いや、その、質問って……」

「先生、独身ですか？」

皆が今度は一斉に吹き出した。誰かが『当たり前じゃん』と茶々を入れる。

「いや、まだ、その、結婚には早いかと……」

「じゃあじゃあ、カノジョいますかあ？」

今度は『ヒュウヒュウ』だか『きゃあきゃあ』だか判らない歓声上がる。美術室の中は、もはや收拾がつかないほど騒然となってしまうていた。

「いや、彼女っていうのは……」

ずいぶんと律儀な性格なのか、久志はそんなくだらない質問に顔

を真つ赤にしながらバカ正直に答えようとしている。十月だというのに、こめかみの辺りから玉のような汗が次々と噴き出して来た。

「いやん、先生かわいー」

「先生！ 体が寂しくないですか？」

「センセー！ あたし、福山妻に立候補しまーす！」

こうして、久志が赴任初日途中まで順調に築き上げていたと錯覚していた自信は、脆くも崩れ去っていった。

「晴美ったら、新人教師をイジメちゃ駄目じゃないの」

昼休み。みんなでテーブルをくつつけてお弁当を広げながら、薫がさも可笑しそうに晴美を横目で見た。

「だつてえ」

晴美も思い出したようにくすくす笑いながら、

「何かあのセンセ、純情ぽくってカワイイんだもん」

「そうそう」

大きな体をゆさゆさと揺らすように笑いながら、神野恭子が相づちを打つ。

「何か母性本能をくすぐるっていうかさあ。何かこうちょっかいを出したくなっちゃうタイプよね」

「でもみんなひどいじゃない。あの先生、ホントに困ってたよ」

萌子だけが、真剣な表情でそう級友たちを責めた。

「あら萌子、何をそんなにムキになってるのよ」

怪しいわよ。冗談めかしたそんな目つきで、晴美がちらりと萌子を見やった。

「別に何でもないわよ。たださ、あんまりに可哀想じゃない」

不服そうにそう言つて、萌子は薫が作ってくれた豚肉の野菜巻きにかぶりついた。ちなみに彼女が毎日食べる弁当は、全て薫のお手製である。彼女は毎朝、萌子の分までお弁当を作るのだ。時間に間に合うように起きるのが精一杯の萌子に、お弁当を作る暇なんかあるはずがない。

「本当にね、何をムキになってるんだか」

薫がもったいぶった口調で紙パックの烏龍茶をすすりながら、

「ま、確かにあんまり苛めちゃ可哀想だわよね。何しろ最近の先生はとってもデリケートに出来てるから、登校拒否にでもなられたらかなわないし」

その日の放課後。萌子は何となく浮ついた気分で美術部の部室に向かった。

部室といっても、美術室の隣にある準備室を兼用しているだけである。普段の部活動　つまり創作作業は美術室の中で行っている。

先に準備室の方を覗くと、3年生で部長の小笠原朋美がいた。

「部長……」

「あら、萌ちゃん」

萌子の姿を見て朋美は、いつもの日溜まりのような笑顔を浮かべた。

「あの、後任の顧問決まったんですか」

久志の名前を出すのを何となくためらって、萌子はそんな遠回しな言い方で尋ねた。

「ううん。まだよ」

あつけない朋美の即答に、萌子は少し戸惑った。

「あれ、でも、今度来た臨時の先生がやるかもしれないって……」

「ああ。まあ順当に行けばそうなのかもしれないけどね。そうと決まってる訳じゃないみたいよ」

「そうなんですか……」

少し気落ちしたように、萌子は声のトーンを下げた。

「そういえばあの先生、今日から2年生の授業には出てるのよねえ」

思い付いたように朋美はそう萌子に問い掛けた。

「ええ」

福山女子高校では、1年の時は全員音楽を、2年の時には逆に美術の授業を受けることになっている。そして3年になると、今度はそのどちらかの授業を選択することになっているのである。

久志は明日から3年生の授業にも顔を出すことになっているらしい。

「その前に、明日の全校朝礼で紹介されるらしいけどね」

それまで俯いて何か書類を整理しながら話をしていた朋美は、急に顔を上げると萌子の方に身を乗り出すようにして、

「ねえ。どんな先生だった？」

「どんなって言うても……」

あまりそういうことに興味を抱くことのなさそうな朋美にまでそう尋ねられて、いささか辟易しながら萌子は言葉を探してしばらく逡巡した。

「別に普通の人だけど。まだ若いんですよ。大学出たばかりで、先生やるの初めてみたいです」

「ふん。じゃあ手に余るかもね、うちの生徒たちは」

朋美の台詞に、肩をすくめる仕草を見せて萌子はこう答えた。

「もうすでに持て余してますよ」

それから、金色の西日が校舎の奥深く入り込んで来る時刻まで、萌子はそこで後から来た部員たちととりとめのないお喋りをして過ぎた。

普段は、用事がなければそのまま帰宅してしまうこともあるのだが、今日だけは薫の部活が終わるのを待とう、という気になった。

夕暮れ間際の武道場に顔を出した萌子を、薫はちょっと意外そうな目で見た。

「あれ、まだ帰ってなかったん？」

「うん」

小さく頷いた萌子に、薫は優しく微笑んだ。

「ちよつと待っててな。今すぐ着替えて来るから」

二人が学校を出て福山駅のホームに辿り着いた頃には、西日はもう福山そごうのビルの向こうへと沈んでいた。高架式のホームから見渡せる駅南口の高層ビル群が、ほんの一瞬あかね色の輝きに満ちる。

「ホントに」

ゆつくりとしたスピードのエスカレーターからポンと飛び降りながら、薫はそう呟いた。

「え？」

「登校拒否にならなきゃ良いけどね、あの先生」

「まさかあ」

萌子は思わずそう笑った。

「でもちよつとやり過ぎたわよね。何かあの先生気が弱そうだし、明日から大丈夫かしらね」

「あら、薫も一応は心配してる訳？」

萌子は皮肉っぽく薫を軽く睨んだ。すると薫はちよつと口を尖らせる仕草をして、

「あら、やあね。あたしは一つもあの先生のこと苛めてないじゃない」

「あんなに大笑いしてたくせに」

「だってえ……」

と言いさして、薫はまた思い出したように含み笑いをする。それから何か言いたげな目つきで萌子を見て、

「ま、萌子みたいにマジではらはらしてた訳じゃないけどね」

「何よ、それ」

萌子はすつと表情を堅くした。

「萌子はね」

そんな萌子の瞳を覗き込んだ薫は、教諭のような口調で、

「目がね、嘘を付けないんだな」

「ちよ、ちよつとそれ、どついう……」

「あ！」

口許を強張らせてそう言いさした萌子の台詞を遮るように、薫が素っ頓狂な声を挙げて萌子の背後を指さした。

「あんなとこに登校拒否予備軍がおるやない」

そう言つと彼女は、萌子の脇をすり抜けるようにしていきなり走

り出した。

「ちょ、ちよつと待つてよ、薫！」

いつにも増して突拍子もない薫の行動に、萌子は蹴躓きながら慌てて彼女の後を追った。

「たちばなせんせえ！」

先頭車両が止まる位置に、久志は立つていた。蛍光灯の明かりが奇妙な存在感を増し始めたホームで、彼は薫の恥じらいもない大声に驚いたように振り返った。

薫に少し遅れて久志の前に辿り着いた萌子は、ハアハアと荒い息を吐いた。

激しく脈打つ鼓動の乱れが、走って来たせいなのかそれとも緊張しているからなのか、彼女自身よく判らなかった。

「やあ、君か」

少し驚いたように目をぱちくりさせて、目の前に走り込んで来た二人の少女を見ていた久志は、先に萌子のこと気付いて頬を緩めた。それから薫のことを見て、不思議な表情をして見せる。

「こんにちは、立花先生」

得意のゆつくりとした笑顔を浮かべながら、薫がそう小さく頭を下げる。

「覚えていませんか？ 四時間目の授業でお会いしてますよ」

「四時間目？」

久志はオウム返しにそう問い返した。それから、まるで蠅が口の中に飛び込んだみたいにも、もの凄く嫌そうな顔をした。

「そっういや、君もあのクラスだったな」

「そんな、汚い物を見るような目つきで思い出さないで下さいよ」
薫はそうクスクス笑ってから、急に澄ました顔になってちょこんと小首を傾げると、

「水谷薫です」

と名乗った。萌子はその横から、

「私の家の隣に住んでる友達なんです」

と付け加える。

「そうなんだ」

久志が短くそう頷いて、薫を見やった。

その瞬間、萌子の胸に締めつけられるような痛みが走った。

その感情を抱いたのは、きつとこの時が初めてだった。その時はまだ正体不明の心の疼きに、萌子はただ戸惑いを覚えながら早鐘を打ち続ける心臓を持て余していた。

「今日はご苦労様でした」

わざとらしいほどしおらしく、薫がそう深々と頭を下げた。

「あ、ああ」

「気になさらないで下さいね。ウチのクラスは元々が少し異常なんですから」

「ちよつと薫……」

そんなこと言ったら先生に失礼じゃないの。萌子は思わず薫の制服の裾を引っ張った。けれども久志はちつとも嫌そうな顔をするこ
となく、

「何かちつとも授業にならなくて、悪かったね」

とはにかむように笑った。そのやけに素直な反応が意外だったらしく、薫はじつと覗き込むように久志を見つめた。

ズキン、とまた一つ胸が疼いた……。

「先生、彼女いるんですか？」

黄昏の気怠さが漂う、中途半端に混み合った列車の中で、薫は久志の身辺情報に関する質問をばんぽんと浴びせた。そんな彼女の見掛けに寄らぬ人懐っこさに、久志は少し呆れたように苦笑いを浮かべた。

「君たちは新任の教師に対して、その一点しか興味が湧かないのかい？」

「あら、女子高でこういった興味を持たれなくなった男の教師なんて、人生の墓場ですわよ」

薫はにこやかにそう言い放つと、軽い上目遣いで久志を見た。こ

ういう仕草が男にどんな刺激を与えるのか、彼女は自分の美しさを充分に知り尽くしている女の子だった。

「そういう時は、いないって答えた方が生き長らえるのかな？」

澄ました顔をして、久志がそう呟くように尋ねる。

「そりゃポイント上がりますわねえ」

「じゃ、いないってことにしよう」

「やだせんせ。目が結構マジですわよ」

元々どちらかと言えば人見知りしがちな萌子は、こうやって薫がぼんぼんお喋りを始めるとつい黙り込んで傍観者になってしまう。いつもなら、その方が気楽に感じられた。

それなのにこの時は、何故だか薫の軽快な口調がやけに癢に障った。萌子は何となく、二人に置いてきぼりにされたような寂しい気分になった。

除け者にされたような疎外感。こんな気持ち、例えば薫とその知り合いの男の子と三人で会っている時には、一度も感じたことがなかった。

「先生は、東京から来たんでしょ？」

久志の顔をちらりと見上げて、薫がそう尋ねた。

「あ、うん」

「どうして福山の高校なんかに来たんですか？」

「どうしてって……」

薫の質問の意味を図りかねたのか、久志は答えに窮してしばらく逡巡した。

「先生の……知り合いのつてで、ここの高校に美術教師の空きがあるって知ったから。今更僕みたいなのが潜り込むには、コネでも使って私立の臨時教師になるしかないからね」

「でも……」

自分の質問の意味を噛み砕いて伝えようと、薫は思案顔で言葉を選んだ。

「だからってこんな田舎まで来ることないんじゃないですか」

「今はどこだつて就職難だからね。そんなに簡単に、それも美術教師なんて需要の少ない職業は見つからないよ」

さらりとそう答えてから、久志は真面目な顔になって、

「それに結構いいところだと思うよ、福山も尾道も。これでも、案外気に入っているんだ」

本当は、昔お父さんが住んでた街だから。萌子はそう言いかけてやめた。何だかごちゃごちゃしていて、上手く薫に説明出来そうもない。

それに一昨日の様子だと、久志はあまりそのことに深く立ち入って欲しくなさそうな雰囲気だった。

「ふ〜ん」

薫はしばらくの間、胡散臭そうに久志のことを見ていたが、やがてポンと一つ手を打つと、

「そっか、判った。女に振られて、逃げて来たんだ」

列車は福山駅を出ると、軒の低い家並みや工場や薄茶けた枯野や田畑を貫くように走り、備後赤坂・松永・東尾道と停車していく。

日は既に山並みの向こうへと暮れ、取り残された昼間の残像のような光景が優しく車窓を過ぎ去っていった。

まるで、動かなくなってしまったロボット兵のように、によつきりと腕を伸ばしたまま乱立している造船所のクレーンの脇を通り過ぎて唐突に海が見え始めた頃、薫が久志に向かってこう尋ねた。

「先生、今日は何時に出て来たんですか？」

二人の話題はいつしか、久志の身上調査から尾道での暮らしぶりに移っていた。

「今日は6時50分過ぎの電車に乗ったかな」

「あら、ずいぶんと早起き」

「うん。まあ初日だからね。明日からはそんなに早く行かなくても良いんだ。それにね、駅から学校まであんなに近いと思わなかったから。職員室に行ったら、まだ誰も来てなくてさ。参ったよ」

「あらあら。今日は災難続きだったんですねえ」

「全くだよ」

薫は嫌みっぽくそう言ったのだが、ちっとも気付いていないのか久志はそう真顔でため息を吐いた。

「それで、明日からは何時に登校すれば良いんですか？」

二人に無視されているような気がして、萌子は珍しく二人の会話に割り込んだ。

「そうだなあ。7時半頃に学校に着ければ良いんじゃないかな」

「あら、じゃあ今日あたしたちが乗った電車で充分間に合いますよ。そうだ」

まるでとっておきのプレゼントを思い付いた子供みたいに、薫はポンと一つ手を叩くと目を輝かせてこう言った。

「それじゃあ明日から朝、駅で待ち合わせて一緒に登校しませんか？」

尾道駅の改札を出た所で、萌子たちは買い物をしていくという久志と別れた。

「ちよつと薫！」

久志の姿が見えなくなると、萌子は薫の袖を引っ張りながら詰め寄った。

「何であんなこと言い出すのよ！」

「あら、萌子は先生と一緒に登校するのが嫌なの？」

「そういうことじゃなくって。だって、先生だって迷惑じゃない」

「そうかなあ。案外楽しみにしてる感じだったけどなあ」

こうして口で突っ掛かってみても、萌子はいつだって薫にいいようにあしらわれてしまう。それでも、この日の萌子はいつになくしつこかった。

「だいたい、何で先生が生徒と一緒に登校しなきゃいけないのよ」「いいじゃない。あの先生、結構イイ感じだし面白そうじゃない」

「薫まさか……」

「ん？」

「……うつん。何でもない」

まさかあの先生のこと気に入ったの？

そう吐きかけた台詞を、萌子は寸でのところで飲み込んだ。

（何言おうとしてるんだろ。別に薫が誰を気に入ったって関係ないじゃない）

「ねえ萌子。『ひこうき雲』に寄って行こうよ」

唐突に思い付いたように、薫がそう言い出した。

「え？」

「ほら。だってあの先生と最初にあっただのがあの場所でしょ？

きつと千絵ちゃん、この話聴きたがるよ」

そう言つと薫は、萌子の返事を待たずにまた突然走り出した

第二章 美術部（２）

久志がまたそつと周囲を見回した。

怯えた子供のような表情が、そのたびに彼の顔をよぎる。

「せんせえ。何ビクビクしてるんですかあ？」

薫が呆れたようにその声を上げた。

「いや、教師と教え子が仲良く同じ電車に乗つてるところを見られるのも何かな、と思つて……」

「大丈夫ですよ。尾道から通つてゐる福女の生徒で、こんなに早く登校している子はいませんから」

「そ、そうか」

「もう。それに何で同じ学校の先生と生徒が一緒に登校しちゃうけないんですか？」

薫はプツと頬を膨らました。彼女の場合、そういう仕草一つ一つが何とも言えず愛らしい。

「いや、だつて、仮にも教師と生徒がプライベートで親しくするというのは、あまり感心なことじゃないんじゃないか？ それに君たちと僕は一応男と女だし……」

萌子と薫は思わず同時に『プツ』と吹き出してしまった。

「先生、何時代の人？」

「堅いつてば！」

「そ、そつかな……」

照れ臭そうに無理に笑みを浮かべる久志を見て、萌子は沸き上がる笑いを堪え切れないでいた。

「今どき誰も言わないわよ、そんなこと」

薫も、あまりの可笑しさに目尻を押さえている。

誠実そうなその外見そのままに、いやそれ以上に久志はいたって生真面目な性格のようだった。ちよつと不格好で、けれどもそんな久志の態度は萌子にとって決して不快なものではなかった。

（今時、言わないわよそんなこと）

そう心の中で突っ込みながら、萌子は自然と笑みを浮かべていた。尾道駅と福山駅の距離はさほど長くない。列車に揺られている時間は20分少々である。清々しい冷たさを帯びたホームに、三人は降り立った。

コンコースを抜けると、すぐ目の前に福山城の石垣が偉容を放つ。それを右手に見ながら線路沿いを歩くと、ものの10分程度で福山女子高校の正門に着くことが出来る。

「先生、こっちの方が近道ですよ」

広島県立博物館とふくやま美術館の間に広がる広場を指し示して薫はそう言った。そしてさっさとその中に入って行く。久志はよるめきながらその後続いた。

まだ時間が早いせいにか、登校する生徒の姿はまばらだった。それでも何人かの2年生が、

「先生おはよう！」

と追い越しざまに声を掛けていく。

「おはよう」

まだ表情に堅さが残ってはいたが、久志はそう声を掛けられるたびに、その持ち前の爽やかな笑顔を返して返事を返した。

萌子はふと、この先生は案外と人気者になるかもしれない、と思った。

優し過ぎるほど線の細い久志の輪郭からは、あまり教師としての毅然とした雰囲気は感じられない。先生というよりは、むしろ歳の離れた先輩のようである。

でもそれがかえって良いのかもしれない、と萌子は思った。

三人を追い越して行く彼女たちは、まるで友達に触れるような気安さで声を掛けていく。教師である久志には気の毒な話かもしれないが、気軽に接することが出来る年上の男性としてなら、彼は十分に魅力的に感じられるような気がした。

萌子は微かな優越感を胸の奥に抱いていた。例えばそれは、有名

人が隣人であつたかのような少々ミ－ハーな要素も含んだものであつたけれど、みんなより少しだけ早く久志に知り会えて、共有する記憶がわづかばかりでもあることが、引っ込み思案で臆病な萌子には掌でそつと慈しみたいような大切なことに思えたのだ。

「じゃあ、あたしこつちだから」

校門をくぐつてすぐの場所で、薫は武道場の方に向かいかけながら二人にそう告げた。

「あ、そうか」

そんな彼女を久志はちらりと見やり、そしてすぐにその視線を地面へと逸らした。

その瞬間、ふっと力が抜けるように、萌子は突然現実を悟つたような気がした。

（なあんだ）

二人で男の子と会っていると、いつしかその視線が薫を捕らえていることに、萌子はいつの頃からか気付くようになっていた。それはクラスメイトや同じ学校の先輩ばかりではない。中学の頃からは男性教師までもがちらちらとそんな視線を送ることもあつた。

それは、仕方ないことなのだと思う。

その美しさに心を奪われ、薫の気まぐれな表情の変化に喜々としてたり落胆の色を浮かべたりする彼らを、萌子は嫉妬するよりむしろ誇らしげに思うことの方が多かつた。

それは、彼女がまだ誰かに嫉妬するほど人を恋しく想つたことがない証でもあつたけれど、やっぱり薫の美しさは萌子にとって自慢であり誇りであつた。

けれどもこの時、萌子は自分でも気付かないほど小さな、哀しみと諦めと妬みを胸に宿していた。

そう。それは自分でも気付かないほど小さな、嫉妬心だつた。

「じゃあ、頑張つて」

久志のあまりにもありきたりで不器用な台詞に、薫はちよつと目を見張つてから、すぐに小生意気な笑みを浮かべて、

「先生こそ頑張つてね。3年生のお姉さま方は、ウチらみたいに
カワイくないから気を付けて」

と言いつ残して早足で去って行った。しばらく取り残されたように
突っ立っていた二人は、ふとお互いの存在に我に返ると、見つめ合
いぎこちなく笑いあった。

「行きましようか」

強張った笑顔のままそう言つと、萌子は先を急ぐように久志の前
を歩き始めた。

さつき落ち込んだばかりなのに、萌子の心臓はもうドキドキし始
めていた。そういえば、薫抜きで男の人と肩を並べるなんて、子供
の頃にも経験がない。

何か話さなくちゃ、と思うと萌子は余計に焦りを覚えた。

初対面の人と一緒に過ごす時には、お喋りな人の方が気が楽だっ
た。それに男の人となんて、何を話せばいいのかちつとも思い付か
ない。

「あ、あの……」

「あのさ……」

同時に口を開きかけて、二人はまた声に詰まって見つめ合った。
それから可笑しそうにクスクスと笑った。

「どうぞお先に」

取り澄ました顔で萌子がそう促すと、久志は笑いながら、

「いや、こんなに早く部室に行つて何をしてるのかな、と思つて
朝練やつてる美術部なんて聴いたことがないからさ」

「……別にこの時間に登校しなきゃいけない訳じゃないんだけれ
ど」

「水谷さんと一緒に来るため？」

「て言つか、薫と一緒に来ないと、学校に間に合う自信がないん
です」

「……は？」

中学生になってから、薫は弓道部に入った。萌子も美術部に入部

したが、久志の言う通り美術部なら朝早く登校する必要などない。実は中学に入って最初の頃は、二人は別々に登校していたのである。その結果萌子が残した記録が、1ヶ月で8回という学年ナンバーワンの遅刻の数であった。

そしてゴールデンウィーク明けから、再び薫が澤崎家に萌子を迎えに来るようになった。

「こんな時間に来ても、ホントはやることないんですけどね。部屋に行つて絵を描いたり、本を読んだり」

「そりや大変だねえ。朝起きられないっていうのも」

呆れてるのか同情してるのか、久志は堪えるように小さく笑った。でも今日は早起きしたんですよ。

そう反論しかけて、萌子は何故か急に恥ずかしくなって思わず黙り込んだ。

「で？」

「……はい？」

「いや、ほらさ、君が訊きたかったことは？」

「ああ。あの、あのですね」

それは会話のきつかけにと頭に浮かんだことを思い付いたままに尋ねようとしただけで、改めて訊こうとすると何だか少し照れた。

「先生は、美術部の顧問をやらないんですか？ あ、いえ、あのですね」

何だか質問が唐突過ぎたような気がして、萌子は慌てて言い訳めいた口調になった。

「前に美術教えてた近藤先生、美術部の顧問やってたんです。だから立花先生が代わりに顧問になるのかなって思つて……あんまり深い意味はないんです」

「そうなんだ。いや、まだそんな話は来てないなあ」

と久志は小首を傾げた。

「そうですか……」

「……その、美術部の顧問でさ」

しばらくためらった後で、久志は真面目くさった顔でこう訊いた。
「はい？」

「先生が描いていても良いのかな？」

冗談で言っているのではないらしい。久志のいたって真剣な表情に萌子は戸惑った顔で、

「それは……別に良いんじゃないんですか」

前の顧問は1日1回部室に顔を出せば良い方で、たいして美術部に拘わっていた訳ではない。

部活と言ったって、みんな個々に好きな作品を仕上げて、たまに作品展を開いたり校外のコンペに出展したりするだけだから、顧問の仕事などそういった時にしかないのだ。

「絵、描きたいんですか？」

「いや。部活のためだつて言ったら、仕事せずに絵を描いてられるかなつて」

その時の久志の顔は、まるで年下の少年のように無邪気だった。悪戯っ子のように目を輝かせて。照れたような笑みを浮かべて。

「ダメかなあ。こんなええ加減な教師」

「……いいんじゃないですか」

萌子は笑いを堪えながらそう答えた。部室でみんなに混じって絵を描いている久志の姿を想像しながら。何かいいかもしれない、と思った。

「別に顧問つて言つたつて、みんなに教えるとかいう訳じゃないですからね」

「じゃ、受けちゃおうかな。あ、でもその前に顧問の話が来なきゃダメか」

そう言つて笑う久志の、無垢で子供みtainな表情が萌子の心にすっと染み込んで来る。萌子は、知らず知らずの内に柔らかな微笑みを浮かべている自分に気付いた。

「君も放課後に絵を描いているの？」

そう尋ねられて、萌子は一瞬言葉をためらった後で小さく頷いた。

「はい」

「そつか。それじゃ」

久志は優しく萌子の瞳を覗き込んだ。

「一緒に絵、描こうか」

トクン、トクン。心臓の奥の方から、そう小さな波が湧き上がって来るような気がした。

こうして三人の奇妙な集団登校が始まった。

「おはよう」

翌日。やはり尾道駅の改札の前で待っていた久志の顔は、硬さの取れた自然な表情に変わっていた。鳶色の優しい目で微笑まれると、萌子は不意打ちを食らったようにドキリとした。

「よく見ると、綺麗な目をしてるなあ」

薫がそう感心したように隣で呟いた。

そうして毎朝30分ほどの道程を、三人は時間を惜しむようにお喋りを続けた。

と言つても、もっぱら喋っているのは薫一人で、話題は久志のことに関することばかりだ。時折笑顔を浮かべて受け答える久志と興味深げに質問を重ねる薫の二人の姿を、萌子は黙って微笑みながら見つめているだけだった。萌子が訊きたいと思ったことは、大抵薫が代わりに質問してくれた。

「中野区？」

「ああ。新宿から十五分くらいの所」

「て、都会じゃないですか。そこに家があるの？」

「親の家だけれどね」

「当たり前でしょ！それが先生の持ち家だったら、あたし何何でも先生のアパートに居座っちゃうわよ」

薫は少し興奮気味に、黒目勝ちのつぶらな瞳をくりくりさせると、やたらと嬉しそうな口調で、

「それにしても先生んち金持ちじゃない。もしかしてお坊ちゃま？」

「そりゃ、この顔見れば一目瞭然だろ？」

久志がもの凄く真面目な顔でそう答える。少しの間を置いて、萌子と薫は一斉に笑い転げた。

「……俺の親の物じゃないんだ。元々はじい様の住んでいた家でね」

若い頃、画家になることを諦めて親の家業を継ぎ、その事業を拡大させて資産家になった。彼の母方の祖父はそういう人物らしい。

（何か……）

「何か教科書に出て来そうな話ねえ。先生のお祖父様、松下幸之助とかいう名前じゃない？」

薫の軽口に久志は口を開けて笑ってから、萌子も聴いたことのある衣料品メーカーの名前を挙げた。

「え、その会長？」

「こりゃ本物のお坊ちゃまだ」

薫が呆れたように目を見開いて呟いた。

「そんなことないさ」

けろつとしてそんな風に笑う久志の穏やかさは、萌子にはやつぱり『お坊ちゃま』の為せる技にしか見えなかった。

「絵を描き始めたのはね、そのじい様の影響なんだ」

事業家としての道を歩み始めてからも、彼の祖父は画界との縁を絶ち切り難かつたらしく、絵を描いていた当時の友人・知人との親交をますます深め、やがて金銭的な手段で絵の世界との繋がりを得ることを覚えた。

「中学校の頃からついこの間まで僕が通っていた絵の先生というのも、じい様に紹介してもらった人なんだ」

「じゃあ、その才能もお祖父様譲りなんですな」

そう萌子が尋ねると、久志は弛緩したような緩やかな笑みを漏らした。笑っているはずなのに何故かそれがとても哀しげに見えて、

彼女はまた悪戯に胸を乱した。

「どうなのかなあ。何しろ僕の母にはその血筋はちっとも伝わっていないからね」

彼の母親は、絵の方はからつきし駄目だがその代わりにスポーツ万能な女性なのだという。それを聴いた瞬間、萌子と薫は思わず含み笑いを浮かべた。

「何だよ。その血筋は僕にはちっとも伝わってないって言いたいんだろう」

久志がそう言って口をへの字にすると、

「先生の家の家系が隔世遺伝なら、先生の子供はワールドカップに出れますよ」

薫がそう茶化した。

「……絵の才能はね、父親譲りなのかもしれないんだ」

小さな間の後で、久志がそうぽつりと呟くように言った。

「え？」

まただ、と萌子は思った。自嘲にも似た物憂げな影が久志の横顔をよぎる。それは、あの日夕暮れの国道沿いの歩道で、やはり彼が父親の話題を持ち出した時の横顔と同じだった。

（何でこの人は、こんなにも哀しそうに父親のことを話すんだろう）

「うちの父はね、絵の才能があつたんだ。それでじい様の受けが良くつてね。だから母と結婚出来たらいいんだ」

「遺伝と隔世遺伝が混合して、先生が出来上がったのかもしれないですよ」

「……僕は試験管の中で生まれた訳じゃないよ」

自分の存在がまるで化学反応で誕生したかのように言う薫に、久志は思わず苦笑した。

「先生のお父さんは、画家さんなんですか？」

萌子がそう尋ねると、久志は小さく笑って首を振った。

「いや、結局本職になることは諦めてじい様の会社にコネで入っ

たらしいよ。僕の生まれるずっと前の話だけだね。休みの日にじい様と二人でスケッチに出掛けたりしてたんだって。可笑しいよね」

久志はそう言って皮肉っぽい笑みを浮かべて、

「ま、ある意味画家のなり損ないの血が化学反応起こしちゃったんだから、僕に期待しても無理つてもんだよね」

らしくない、と萌子は思った。

出会ってから数日しか経ってないのだから、久志の本性を全て理解している訳ではないことは萌子にもよく判っていた。それでも、その数日の間に久志が垣間見せた、実直で誠実そうな人柄を思うと、そのどこか投げやりな口調は久志らしくないよう感じられた。

「じゃあお父さんは、ずっと趣味で絵を描いているの？ いいよね、そういう生き方って」

何だかとても憧れの職業でも語るような口調で薫がそう訊くと、久志は苦笑しながら軽く首を振って、

「いや、きつともう父は描いていないと思うよ。それに僕は生まれてから一度も、父が絵を描いているところを見たことがなかったし」

その曖昧で過ぎ去った者を語るような口調に、萌子は奇妙な違和感を覚えた。ちらりと薫の方を見やると、彼女はさほどおかしいとは思わなかったらしく、ちょっと拍子抜けしたような表情で、

「そうなんだ……」

と呟くように応じるだけだった。

（小学校に入って少しするまで、僕は父親の顔を知らなかったんだ）

萌子の脳裏に、久志のそんな台詞が蘇った。

その事実を知っていたからこそ、久志の微妙な言い回しに敏感に反応したのかもしれない。萌子はそう思った。でも、その事実と過去形の語り口がどうしても結びつかない。

（だってお父さんは尾道から帰って来たって……）

久志のことをもつと知りたい、と萌子は思った。けれども、久志

が触れたがらなかった話題を薫の前で持ち出すことに、萌子はためらいを覚えた。

戸惑いと臆病な気持ちの狭間で揺れ動いて、結局その時萌子は久志に抱いた不透明な違和感の原因を、突き止めることが出来なかった。

第二章 美術部（3）

「ねえねえ、大変」

晴美がそう言つて輪の中に入り込んで来る時は、たいていどこからかネタを仕込んで来た時だ。久志がこの学校に赴任して来る直前にも、彼女はこうやつて仲間を集めて一席ぶつた。

「あたし、見ちゃつた」

「何を見たつて？ 誰かがホテルから出て来たところでも見た？」

薫のいつもの毒舌に、晴美はにやつと笑つて、

「そんな刺激的な場面じゃないんだけどね」

「なによ。誰がデートしてたのよ？ 何組の娘？」

晴美の仕込んで来ることといつたら、イイオトコの情報か誰かの密会の目撃談じゃないと、薫はそう決め付けているらしい。

「ううん。生徒じゃないのよ」

「え？ じゃあ……」

「そうなのよ。」

聴いたら驚くわよ。晴美は、そんな自信たっぷりの顔をして、

「立花クンがね、黒沢と歩いているところ、見ちゃつたのよ」

教室の後ろにあるロッカーに荷物をしまつていた萌子は、晴美の台詞を聴いた途端、その小さな肩をビクツと震わせた。

「あたしんちさ、竹原に親戚んちがあるんだけどさ」

何故か萌子には、黙り込む薫の気配が背中越しに感じ取れた。いつもと変わらぬ声高な晴美の声が、やけに爛に障る。

「昨日、その親戚んちに行ったんだけどさ。その時見ちゃつたのよね。二人でさ、仲良く『街並み保存地区』の方に歩いて行くのを」

久志が赴任してから、二週間ほど経っていた。

久志の存在は、いつの間にか福女の風景の中に溶け込んでいた。前からそのあったかのように、決して騒がれる訳ではないけど人望が薄い訳でもなく、ありきたりな爽やかさを纏った教師として存

在していた。

「二人きりで？」

薫がそう晴美を問い質す。

「うん」

「でもそれだけじゃ……」

違うのよ。反論しかかった薫をさえぎるように、晴美が自信あり気にそう続けた。

「なんかもう、ラブラブなのよ。手なんか繋いじゃってさ」

「でも……」

やけに食い下がる薫の姿が、少しだけ滑稽に思えた。

黒沢美代子は、福女に赴任してもう二年になる国語の教師だった。そう、久志の前に最後に赴任して来た教師というのが、彼女のことである。

美代子の、落ち着いた教師らしい涼やかな目元を萌子は思い出す。彼女に、そんな艶聞めいた出来事はあまり相応しくないような気がした。

「黒沢、本気かもしれないよ」

それなのに、絵美までもが秘密を漏らすようにしたり顔になって、
「立花先生がここに来た頃、凄かったもん。部活の時、生徒を質問攻めにして。立花先生のこと何でもかんでも聞き出そうとして」

「立花クン、爽やかそうでちよつと良かったのにねえ。あつという間にお手つきかあ」

嘆かわしい。そんな口調で恭子が軽く頭を振った。その口調は、完全に晴美の証言を信じきったものだっただけ。

「黒沢も焦ったんじゃないの？ あんな若い男の先生、二度と入ってこないわよ」

宏美がそう言って、さも可笑しそうに笑う。

「立花クン、大人の色気にやられちゃったのかしらね」

「えゝ?! あれに色気なんか、ある？」

「そうよ。色気だったら、あんなおばさんに負けないわよ」

晴美がお茶目にそう言つと、丈の短い制服のスカートをチラリとめくる振りをしてみせて、周囲を笑わせた。

「萌子。ライバル出現じゃない」

薫がそう萌子の肩を突く。

「なによ。ライバルって」

萌子はそう拗ねた口調で薫を睨んだ。

「ほらほら、そうやってムキになるとこがとても怪しいですわよ」

（自分はどうなのよ）

萌子はそう心の中で反論した。

怪しいのは薫の方だ。

萌子はそう思った。そうやって人を揶揄してみせるところが、実は内心気に掛けている証拠ではないのか。

それなのに、いつものように『慈善事業』に乗り出したりはしない。

（本当に、気に入っちゃったのかな）

こんな時なのに、薫の気持ちを想像して萌子は胸の奥がキュン、と痛んだ。

嫉妬が恋心の裏返しだということに、この頃の萌子はちっとも気付いていなかった。

竹原、という地名に萌子は聞き覚えがあった。

それは数日前、往きの電車の中でのことだった。

『竹原、ですか？』

萌子がそう不思議そうな顔を見ると、久志は（あれ？）といった感じで首を傾げて、

『知らない？ 尾道から結構近いと思うんだけど……』

『ああ、ううん。そりゃ竹原がどこにあるかぐらい知ってますよ』

自分の仕草が誤解を招いたことに気付いて、萌子は慌てたように顔の前で小さく手を振った。

『知ってることは知ってるけど……』

竹原は尾道から駅3つ分広島寄りにある、古くから塩の生産を主要業として栄えた街である。

その駅前の繁華街からわずかに外れた場所に、江戸時代後期の面影をとどめる古い街並みがある。安芸の小京都、とも称されるその家並みは、国の重要伝統的建造物群保存指定地区にも選定されていて、今は『竹原街並み保存地区』として観光地となっている。

萌子は小学生の時の遠足で、一度だけ竹原の街を訪れたことがあった。

『古い街並みが残ってるところでしょ？ 小学生の時に、一度だけ行ったことがありますよ』

萌子の代わりに薫がそう答えると、久志は我が意を得たとばかりに、

『そうそう』

と細かく頷いて、

『尾道に行くのが決まった時に、一回行ってみたいと思ってたんだ』

萌子には竹原のイメージがあまり残っていない。古い木造の仄暗い空間に不思議な懐かしさを覚えたことぐらいで、後は級友との楽しい時間の微かな残滓が、記憶の片隅にあるくらいである。

そう、竹原には海がない。正確に言うと、市街地からほど近い場所に竹原港があり海辺には近いのだが、尾道と違って割と平坦な竹原の街からその海は見えない。

それが、竹原の印象が薄い理由かもしれない。

『好きな写真家がいるんだけどね。その人の写真集に、竹原の古い街並みを撮ったものがあるんだ。高校の時にその写真集を見て、その頃からかな、カメラも面白くなって思い始めたのは』

この人は、なんて無邪気な目をするんだろう。

急に饒舌になった久志のまくし立てるような口元を、萌子は微笑を浮かべて見つめながらそんな風に思った。

普段は 特に授業中などは、冗談一つ言つでもなく堅苦しいくらいその表情を緩めることをしないのに、こうやって自分のプライベートルトなことを話す時の久志は、まるで遊園地に出掛ける子供みたいにきらきらとした顔をしてみせる。

そんな久志の横顔を、今のところ福女の中で私たちだけが知っているのだという事実を、萌子はこそばゆいような気持ちでそつと胸の奥にしまっていた。

この時久志は、自分が絵を描く以外にカメラにも興味を持っていたと、そんなことを二人に話し始めたのだった。

『軒先越しの、突き抜けるような碧空を写した一枚を見てね。ああ、こんな透明な表情を写し出すことが出来るんだって。だから、出来れば一度、秋か冬の初めに訪れたいって、そう思っているんだ』

『じゃあ、今度一緒に行きます？』

そんな風に気兼ねなく誘える薫の性格が、萌子は正直妬ましかった。

どうしてこんなにも臆病なんだろう。こんなにおっかながっていは、せつかく見つけた掌の大切なものも、すぐ誰かに吹き飛ばされてしまう。

あの時、久志は大胆な薫の台詞に微笑んでみせたのだった。そんな彼の横顔を見ながら感じた忸怩たる思いを、萌子はふと思い出していた。

第二章 美術部（４）

久志が赴任してから数日後に、彼の所に美術部の顧問の話がやって来た。

「体育系の部活と違って特に指導する必要はないですから、気楽にやって下さい」

教頭のその一言を待つまでもなく、彼は喜んでその役を引き受けた。

「へえ、パステルを使うんだ」

それが、美術室で萌子の絵を見た時の久志の第一声だった。

美術部顧問として初めて放課後の美術室を訪れた彼は、改めて簡単に自己紹介を行い、それから生徒たちが各々作品に取り組んでいるところを一人一人巡回した。

久志は、萌子のところから一番遠い生徒から順番に回り始めた。彼が自分のことを充分に意識しているのが手に取るように判って、萌子はいきなり可笑しくなった。

じつくりと時間を掛けて、まるで萌子のそばに近づくのを避けるような動きで、久志はようやく彼女の背後に立った。

「ええ」

久志の問い掛けに、萌子はキャンパスに顔を向けたまま答えた。

普段の美術の授業では、今はクラス全員が水彩による静物画に取り組んでいる。そういえば久志の前でパステルを使うのはこれが初めてだということに、彼の台詞を聴いて萌子は思い当たった。

萌子がパステルを使うようになったのは、母の影響だった。

彼女が物心ついた頃から、玲子はパステルを使ってイラストを描いていた。その特徴的な甘い色調と多彩な色種を巧みに使って彼女が描き出す世界は、繊細で暖かみに溢れていて、多くの人の心を魅了する。

彼女は現在、尾道や福山など幾つかの街のタウン誌と、神戸で発

行されている大手の地域情報誌で活動をしている。二年前には、こんな地方で活動しているイラストレーターとしては異例の、画集の発表も行った。

決してメジャーではないけれど、関西を中心に彼女のファンは結構多く存在するのだ。家には時折ファン・レターも届く。

萌子が初めてパステルに触れたのは、小学五年生の時だった。千光寺山からの夕景を上手く色に表すことが出来なくて、母に相談を持ち掛けたのがきっかけだった。

萌子が玲子に絵の相談をしたのは、それが初めてのことだった。優しくそうに目を細めて、母は自分の仕事場から幾つもの橙色系のパステルを持って来た。

それから彼女は、自分の娘にパステルの使い方を教えた。比較的初心者向きと言われるその画材の色使いを、懇切丁寧に。

優しく柔らかなタッチが描き出せるこの画材は、萌子のお気に入りだった。画題のほとんどが尾道の街と薫の肖像である萌子にとって、その街並みや親友の横顔の優しさを表現するのに、パステルの色調はちょうど打ってつけなのだ。

「最近、パステルと水彩を併せて使ってるんです」
真っ直ぐに何かを見つめる、凜とした薫の横顔を捕らえたその絵を見て久志は一言、

「似てるね」

と評してから、どこか嬉しそうな柔らかな笑顔を浮かべて、

「僕と一緒にだ」

「え？」

「僕も、パステルを使うんだ」

窓辺で揺れる逆光の中で、久志は静かに微笑んだ。

「そ、そうなんだ……」

慌ててキャンパスに視線を戻しながら、萌子は破裂しそうな自分の心臓を必死になだめ透かした。

その揺れ動く気持ちだが、自分と久志の共通点をまた一つ知ったせ

いなのか、それとも逆光の中で微笑む久志が美しかったからなのか、萌子にはよく判らなかつた。

ただ一つだけ確かなことは、その体中を駆け巡る想いがひどく心地良いものであるということだった。

「先生は描かないんですか？」

わざと視線を逸らして、萌子は意地悪っぽい口調でそう尋ねた。

「うん……」

久志はそう小さく頷いたきりで、恥じらうように黙り込んだ。

萌子にはあんなに威勢の良いことを言っていた癖に、最初の2日間彼はすっかり萎縮したように、ただ黙々と部員たちの作品を見て回るだけであつた。

しかしとうとう堪え切れなくなつたのか、3日目の夕暮れに彼はこそこそとデッサン用の鉛筆を取り出した。

「へえ、上手いなあ」

久志のキャンバスをこつそり後ろから覗き込んだ3年の男子が、思わず感嘆の声を挙げた。

「おいおい、覗き見るなよ」

久志は照れ臭そうに、慌てて自分のキャンバスを手で覆い隠す真似をする。

「いいじゃん先生、上手いんだから」

その声を聞きつけて、他の生徒たちも久志の周りに集まって来た。「ホント、上手いねえ」

それは、窓から見える木々の向こうの福山城の天守をスケッチしたものであつた。幾つかの線を走らせて輪郭を整えただけの、全くの未完成品である。それでもそのしつかりとした力強いデッサンは、彼の技術の高さと確かさを如実に物語っていた。

「先生凄い、プロみたい」

女生徒の一人がそう驚きの声を挙げるのを、萌子はまるで我がことのように得意げになって聴いていた。

久志が、

『仕事をさぼって絵を描いていられる』

から顧問を引き受けた訳ではないことは、その後数日もしない内に判明した。

その窓辺の風景を、彼はいたく気に入ったようだった。部員でも毎日通って来るメンバーは限られていてほとんどが幽霊部員だというのに、久志は毎日美術部にやって来た。そして毎日その場所にキャンパスを置いて、夕方暗くなるまでほとんどその場所から動くことはなかった。

（よっぽど絵を描くことに飢えていたのかしら）

萌子がそう思うくらい、その表情は今まで見たことがないほど生き生きと輝いていた。

あらかたスケッチを終えると久志は、今度は窓の外には一切目をくれずに、パステルを取り出してキャンバスに直接色を施し始めた。やがて彼の描く福山城は、背景に深い碧空が、裾に紅葉の錦が彩られた。

それは、パステルの鮮やかさと曖昧さと透明さを充分に引き出した描き方であった。

「萌ちゃん、まだいる？」

帰り支度を始めた朋美が萌子にそう問い掛けたのは、久志が顧問になってから2週間ほど経ったある日の、校舎内に夕暮れの気配が漂い始めた時刻だった。

その日はもう、朋美と萌子たちの三人しか残っていなかった。自分の画材を片付けながら彼女は、

「私、そろそろ帰らなきゃいけないんだけど……」

「あ、いいですよ、先に帰って。戸締まり、私がやっておきますから」

美術室と美術準備室の鍵を下校時に施錠しておくことが、長年美術部の役目となっていた。朋美は、そのことを心配しているのである。

「そ、じゃあお願いね」

幾らかホツとした表情で萌子と久志の顔を交互に見やって、朋美が美術室から出て行く。

二人きりの静寂だけが、後に残された。

久志との二人だけの時間の突然の訪れに、萌子は俄かに緊張を覚えた。

出逢ってからもう幾日も経つのに、教師と生徒として毎日のように顔を会わせているというのに、萌子はいつまで経っても久志と二人きりになることに慣れなかった。

もっとも、いつも一緒に過ごしているとは言っても、授業の最中や部活動の時は周りにたくさんの方のクラスメイトや先輩・後輩がいるのだし、登下校の時だっていつも薫と三人なのだから、よく考えるところやって二人きりになるケースは今までそう何度もあった訳ではないのだ。

「どう、進んでる？」

珍しく自分のキャンバスから離れて、久志は萌子のキャンバスを覗き込んだ。

「うん……もう少し」

水彩とパステルを取り混ぜたその絵は、彼女自身今までで最も出来が良いと確信出来る作品であった。凜と澄んだ青空のような、薫の素直で真っ直ぐな美しさが上手く表現出来たように思う。

「先生こそ、進んでるんですか？」

悪戯っぽい表情を浮かべて、萌子は逆に久志のキャンバスを覗き込んだ。

「綺麗……」

それはどこにも存在しないような、それでいてリアリティを感じさせる、秋色の福山城の光景だった。

深い空の碧と壁面の白、天守の裾に広がる朱や黄色や橙の、淡く曖昧でそれでいて鮮やかな木々の色づき。立体感を持ったその絵は、見慣れたはずの城を描いた、取り立てて特徴のないただの風景画のはずなのに、萌子は不思議と異国情緒を感じた。

「さすがですね」

尊敬と感嘆と憧憬と、そしてわずかばかりの嫉妬をない交ぜにした小さな声で萌子がそう讃えると、

「そんな大したもんじゃないよ」

と久志は照れ臭そうに笑った。

「ま、久しぶり描いた絵としては、まあまあ描けた方だと思うけどね」

「……え？」

久志の言葉の意味にしばらく気付かず、萌子とはげたような間を置いてから久志を振り返った。

「正確に言えば卒論の絵を完成させてからだから、半年ぶりに筆を執ったことになるね」

そう言つて久志は、去年の暮れに卒論の絵を仕上げて以来、今年に入つてまだ一度も自分の絵の描いていなかったことを明らかにした。

「僕はね、ここに来る前の半年間、建築デザイン関係の会社でアルバイトのような形で働いていたんだ。だからまあ正確には、全く絵に触れていなかった訳じゃないけどね」

就職先も決まらずに卒業してしまった久志のために、彼の師に当たる人物がそのデザイン会社を紹介してくれたのだと、彼はそう説明をした。

「本当は、卒業後はその先生の下でもっと絵の制作に打ち込む予定だったんだけどね」

自分を貶めるような寂しい笑いを浮かべた久志は、

「その頃から、描けなくなっちゃったから……」

「何で？ 描けなくなつたって……」

「別に怪我したとかそういうんじゃないよ」

萌子の心配そうな情けない表情に、久志はゆっくりと微笑んで、

「何て言つかない。ま、一種の心の病だ」

「……」

「年が明けてすぐにね、母親が死んだんだ」

萌子はピクンと肩を震わせた。

「お母さんが?.....」

「あ、別にそれがショックで描けなくなっただっていうんじゃないよ。僕、マザコンじゃないし」

誤解されたくない。久志はそんな口調で、ちよつと慌てたように大げさに左手を振って見せた。それから哀しげに笑って、

「その時にね、どうしても気になることがあったんだけど、それを確かめる手段をなくしちゃったんだ」

そう言つて、久志は小さく息を吸い込んだ。

「親でないと判らないことだったんだけどね。母にはもう訊くことは出来ないし、父とはきつともう二度と会うことはないから」

第三章 千光寺山（１）

「お祭り？」

「そう、来週あるの。あつ、」

薫はそう言葉を切つて、久志のことを軽く睨んだ。

「今、莫迦にしたでしょ。田舎だなあ、て」

10月ももう終わりかけた、土曜日の午後のことだった。

ふくやま美術館と広島県立博物館の間に広がる緑の敷地にも、そこここに微かな色づきを見せる木々があり、確かな季節の深まりを感じさせる。

夕暮れにはまだ間があつた。西に少し傾きかけた柔らかな秋の陽射しが、芝生の上にこぼれんばかりに降り注いでいる。その上で両親と戯れる幼子。穏やかで静かな、それは幸福に満ち溢れた光景だった。

「莫迦になんてしてないよ」

薫のあらぬ言いがかりに、久志は思わず苦笑いを浮かべて、

「お祭りかあ。ウチのそばには、そういうことをやる神社とか、なかったからなあ」

「ほら、やつぱり莫迦にしてる」

「そんなことないって」

薫が今話題にしているのは、毎年11月3日に行われる『ベツチヤー祭』のことである。

吉備津彦神社の例祭であるこのお祭りは、三匹の鬼が人を追い回し、叩かれるとその年は病気をしないという言い伝えのある、一風変わった尾道の遅い秋祭りだった。

その日は御輿も出て、普段は静かな街も人で溢れ返り、露店も軒を連ねる。尾道の街中が華やかな雰囲気包まれるのだ。

いつもと変わらぬ、久志と薫のまるで掛け合い漫才のような軽快なやりとりを黙って聴きながら、萌子はぼんやりと久志の顔を注視

していた。

数日前の、尻切れトンボとなった彼の台詞が、萌子の脳裏に焼き付いたままだった。

あの後、久志は急に我に返ったように小さく2度、3度と首を振ると、

『何話してるんだろ。ごめんね、こんなどうでもいい話しちゃって』

そう照れ笑いを浮かべてから、わざとらしく腕時計に目をやって、『ほら、そろそろ薫さんを迎えに行かなきゃ』
と空々しく帰り支度を始めたのだった。

二人で閑散とした廊下を歩きながら、萌子は話の続きを聴きたいという欲求と、問い掛けることの出来ない自分の意気地のなさに胸苦しさを覚えていた。

そうして武道館で薫と落ち合うと、久志と二人きりになるチャンスはその後2度と訪れなかった。

『父とはきつともう2度と会うことはないから』

あの時、久志は確かにそう言った。その直前の台詞と重ね合わせれば、それが死別を意味するものでないことはすぐに判る。

あれから、萌子はずっと久志が発したその台詞の意味を考えていた。矛盾だらけのその想像の中で、

(わたしと同じ痛みを抱えている……)

そんな漠然とした予感が、胸を捕らえて離さなかった。

「先生、その日は暇？」

薫が意味ありげな微笑を浮かべてそう尋ねた。

「休みの日は、断らなくなつたっていつも暇だよ」

久志が皮肉たっぷりの笑みでそうやり返した。

「あら、これは独身男性に失礼な質問をしてしまいました」

悪びれた様子もなく、薫はそう小さく頭を下げてから、

「じゃあ、私たちと一緒にいきます？ お祭り」

と尋ねた。

「自分の教え子が変な男にナンパされたりしないよう、監視役について来るっていうのはどうかしら？ それなら、教え子と歩いていてもおかしくないでしょ？」

彼を相手にするとどうにも一言多い薫に、久志は思わず苦笑して「それじゃ、大切な教え子が悪い遊びを覚えないうつ、ついて行くことにしますか」

「先生、一緒に来るんですか。あ、でも薫」

思わず心の底からこぼれそうになった笑顔を中途半端に浮かべてから、萌子は薫を振り返って、

「その日は、龍太君も来るんじゃないの？」

「あ、龍太ね、その日以来ないんだって」

素っ気ない表情で薫はそう答えた。

「あ、そうなんだ……」

「バンドのね、練習が忙しいって」

一人会話に取り残された久志が、それでもその穏やかな顔を崩すことなく、

「誰のこと？」

「昔、近所に住んでいた男の子なんです。和田龍太君っていうんだけど、中学に入る前に引越しちゃって今は福山に住んでいるんです」

「高校に入るまで、ずっと連絡取ってなかったんだけどね」

萌子の台詞を補足しながら、薫は急にニヤニヤとした顔をして、

「昔っからね、萌子のお気がお気に入りなの。だから高校生になつてこの娘が福山に来てること知って、連絡取って来たって訳」

「薫！ 何言い出すのよ」

薫の思いも寄らない台詞に、萌子は顔を真っ赤にして声を荒げた。そんなはずはない。薫の言っていることはまるつきり逆だった。

小学生の頃から、龍太がお気に入りだったのは薫の方なのだ。

うつたえたように顔を強張らせた親友の反応を見て、薫は満足げな表情を浮かべて、それから萌子の背後の久志に向かって、

「センセイ、顔が青ざめてますよ。もう、冗談なんですからそんなに焦った顔しないで下さいよ」

「別に僕は驚いたりしてないよ」

薫の台詞に萌子が背後を振り返った時には、久志は特別変わった表情はしていなかった。皮肉屋な薫独特のジョークだと頭の中では理解していながら、彼女は急に弾んだ鼓動の乱れを押さえることが出来ずにいた。

「そうそう。龍太君は小さい時から薫一筋なんだから」

そう素っ気なくやり返したつもりの台詞が、唇の上で上滑りした。

「……彼、バンドやってるんです」

気まずい半端な間を置いて、その場を取り繕うように萌子は台詞を続けた。

「アマチュアだけど、福山じゃ結構有名で」

「明日ライブなの。そうだ」

薫がいつものように、唐突に久志を振り返って、

「先生も、明日来ませんか？」

「明日？ あ、いや……」

薫の誘いに、久志は何故か急にうるたえた顔になって、

「明日は、ちょっとダメだ」

「あれ？ 『休みの日は、断らなくたっていつも暇』 なんじゃなかったでしたっけ？」

薫の意地悪い視線に、久志は思わず苦笑した。

平日よりごみごみとしたコンコースを素通りすると、三人は福山駅の南口へと出た。

今日は福山の街に寄り道して、久志の服を萌子たちが選んであげる事になっていた。数日前からの約束である。

『福山で買い物をするとしたらどこかな？』

登校途中の電車の中で、久志がそう二人に尋ねて来たのがそもそものきっかけであったが、

『あたしたちが選んであげるわよ！』

と薫が張り切った声を挙げると、途端に久志は弱腰になった。

『い、いやそんないいよ』

『遠慮しなくっていいって。前からあたし思ってたのよね。センセイもうちよつと若々しい 恰好した方が良いんじゃないかしら。今の服、ちよつとイケてないんだもん』

そんなお節介を焼かれるのが怖くて遠回しに『お断り』してるんじゃないかしら、と萌子はその時そう思ったのだが……。

「薫、どこ行く？ 天満屋？」

萌子がそう訊くと、薫は小さく3回ほど首を振って、

「ダメよ。あそこに行つても大人しい服しか置いてないわよ」

「あの、大人しいので充分なんだけど……」

久志の蚊の鳴くような抗議は、あっさりと無視された。

「まかして。こつちこつち」

薫はそう言つて、二人を駅のすぐ横に立つ『キャスパ』へと引つ張つて行つた。

そこは萌子たちもよく利用する、比較的若向きな店が揃つたテナントビルだった。彼女たちぐらいの年齢層が好みそうな雑貨屋やカジユアルウェアの店が多く入っている。

女子高生がたむろする一画を歩きながら、久志がおろおろと周囲を見回している。その姿が可笑しくて萌子は含み笑いを漏らしながら、

（別にこういう場所にいても、ちつともおかしくない歳なのになあ）

などと思つたりしていた。

確かに普段の久志の恰好は、お世辞にもあか抜けているとは言い難いものがあつた。

赴任初日がスーツ姿だったのははじめとして判らなくもなかったが、その後も彼は萌子と出会つた時と同じ浅葱色のジャケットを毎日のように着用し、下も地味な色のスラックスで丁寧なネクタイまで締めて来ていた。

まだ休日に久志と顔を会わせたことはなかったが、その服装は萌子にもだいたい想像がつく。

まずは社会人向けのシックな感じの店で、久志が所望した薄手のコートを選んだ。

「こういう明るい色、似合うかなあ」

カーキ色のコートを纏って心細げに鏡を覗き込む久志の横で薫が、「ほら、これでおじん臭くなくなったでしょ」

と言ったのには、萌子も思わず吹き出してしまった。

「薫ったら失礼じゃない。先生そんなに老けてないよ」

「顔はね、顔は。素材は良いんだから、もったいないじゃない」

そう言いながら薫は、じつと久志の顔を見つめて、

「髪型も何とかしたいなあ。今度、あたしの行っている美容院に連れて行ってあげようか」

萌子と薫はその店を出ると、更に別の店へと足を運んだ。

「今日はコートだけでいいよ」

「ダメダメ。そんな野暮ったい恰好で来られたら、一緒に歩けないじゃない」

薫のそんな台詞に、不意に萌子は久志と一緒に歩く風景を思い浮かべた。それは淡い光に包まれた、優しい光景だった。

（そっか。先生と尾道の街を歩くんだ）

そう思った刹那、胸の奥の方からコトコトと何かが沸き上がって来た。

相変わらず辛辣な薫の言葉に、久志は口をへの字にして不満そうな表情を浮かべている。それを見て萌子は可笑しそうに笑ってから、急に薫を追い抜くと店先に飾られたトレーナーを手に取った。

「ね、これどう？ これならうんと若く見えるよ」

第三章 千光寺山（2）

栄光に向かって走る、あの列車に乗っていこう……

初めは、ボーカル・ソロだった。

既に熱気を帯びたステージの上で、龍太ただ一人に白色のスポットライトが充てられている。わずかに上がった黄色い嬌声は、すぐに潮が引くように消えていった。か細いキーボードの旋律に乗せたソプラノ気味の龍太の歌声が、ホールの中に響き渡っていく。

「裸足のままで飛び出して、あの列車に乗っていこう……」

音もなく、龍太の両サイドにいるギターがスポットライトに浮かび上がった。ステージの上が七色に変わる。

「弱い者たちが夕暮れ、さらに弱い者を叩く。その音が響き渡れば、ブルースは加速していく。見えない自由が欲しくて、見えない銃を撃ちまくる。本当の声を聴かせておくれよ……」

突然、ステージの周りでパンツ、という音と共にスモークが弾け飛んだ。びつくりした観客席から甲高い声上がり、それを合図に場内は激しい手拍子と歓声に包まれた。

ここは、福山市内に唯一存在するライブハウスだった。10月30日、日曜日。龍太の率いるバンドのライブは、街がすっかり闇に沈み切った時刻に始まった。

龍太のライブを見るのはこれでもう七、八回目になる。最初は慣れないロツクの乗りに戸惑っていた萌子も、この頃はもうすっかり慣れっこになった。

スポットライトが飛び交うステージも、耳元で炸裂するような強烈な音も、慣れて来ると酔ったような心地よささえ覚える。周囲に合わせて手拍子を打ちながら、萌子はステージの中央に立つ龍太を見つめた。

龍太が高校生になってから中学時代の仲間と作ったこのバンドは、『ブルー・ハーツ』のコピーバンドである。コピーもやるがオリジ

ナルもやる、なかなか本格的な連中だった。

もちろん、入場収入だけでこんなライブハウスを貸し切れる訳ではないが、それでも、知り合いを掻き集めたとはいえ40〜50人は入れそうなホールを観衆で埋め尽くくらいだから、ちょっとしたモノではある。

白いTシャツにジーパンできめた外見に茶髪というアンバランスなスタイルは、それはそれで結構似合っていた。どちらかといえば童顔な彼の端正な顔は、早くも汗でびっしょりになっている。

「やっぱり凄いね！」

久しぶりに見る龍太のライブに興奮したように、萌子は手拍子を続けながら隣にいる薫に向かって声を張り上げた。

「龍太君、まるで芸能人みたい！」

「そうかね」

薫はといえば、もうこんな光景は見飽きたと言わんばかりに涼しい顔をしている。

「ねえねえ、龍太君本当に芸能界にデビューしないかな？」

「……でもあいつ、福山のスターを目指すって言ってたよ」

「ハハッ。龍太君が言いそうなことね」

オープニングの『トレイン トレイン』を歌い終わると、額の汗を拭って龍太がスタンドマイクを引き寄せた。

「みんな、今日はありがとう」

飾り気のないそんな一言に、客席から一段と甲高い嬌声が浴びせられる。

「え〜約半年ぶりのライブです。みんな貧乏なんでこんなに時間が掛かっちゃいました。ちなみにベースの佐藤君が真っ黒なのは、土方工事のバイトのせいです」

龍太の小洒落たMCが、ひとしきり笑いを誘う。

萌子はずっと周りを見渡してみた。

圧倒的に女の子の数が多い。その大半が萌子と同じ高校生で、残りの大半が中学生らしき少女たちであった。

龍太の名前は、福山近隣の中・高校生たちの間で結構有名なのだという。

龍太のバンドが、ではなく龍太の名前が、である。

彼の通う高校は共学で、あまり福女の生徒とは交流はないのだが、それでも萌子の周りにも龍太の名前を知っている娘が何人かいる。

かつこいいよなあ。汗を滴らせて爽やかな笑顔を振りまく龍太を見つめながら、萌子はほとんど直感的な素直さでそう思った。

幾らか色白な彼の肌は、間近で見ると女の子が妬みたくなくなるくらいツルツルなのだ。引き締まった面差しに、やんちゃそうな瞳が彼の好感度をぐっと引き上げている。

「しばらくぶりにみんなと会えた訳ですが、今度は佐藤君がホストでもやってくれない限り、またしばらく会えないかもしれませんが、だから今日は目一杯楽しんでいつて下さい！」

龍太の叫びに、歓声が答える。

「あ、それから僕たちのアルバムが出来ました。と言ってもカセットテープですけど。皆さん良かったら、僕たちの借金まみれの人生を助けるために、後で買って行って下さい」

またひとしきり笑いが起こった後、凄まじい拍手が沸き起こった。小学生の頃から、龍太は学校中で好感度No.1の、嫌みのない爽やかなヤツだった。

親の転勤で小学校に入学する直前に引越して、4年生の夏休み明けに戻って来た彼は、すぐにクラスの中心人物になる。

その周囲にいるのは圧倒的に女子が多く、引込み思案な萌子なんか、言葉を交わすことさえためらってしまいそうほどだった。

龍太は、元々は薫と仲が良かった。女子の間で既にリーダーシップを発揮していた薫は、転校して来た龍太とすぐに仲良しになった。萌子にも龍太とよく遊んだ記憶はあるけれど、それは全て薫と三人の記憶だ。

萌子が龍太のことを本当に友達と感ずることが出来たのは、小学校5年生の夏のことだった。二人の秘密基地だったあの102号室

に、薫が龍太を連れて来たのである。

二人のために、龍太はわざわざギターを抱えてやって来た。

二人だけの観衆を前にギターを弾き語る龍太は、それこそもうウツトリするほどメチャクチャ格好良かった。

龍太はその後しばらくのあいだ、秘密基地の住人になった。

6年生になる前に龍太は、今度は福山へと引越してしまったから、龍太とても親しかったのはほんの一時のことだった。それからは、せいぜい年賀状をやりとりするくらいの関係が続いた。

薫からライブへの誘いを受けたのは、高校に入っつてすぐのことだった。訊けば、中学の頃から薫はずっと携帯やメールで龍太と連絡を取り合っていたのだという。

その話を聴いた時、

（やっぱり龍太君は、薫のことが好きなのかな？）

と萌子はそんな風を感じた。

あの頃、龍太は薫のことが好きなんじゃないかと、萌子は幼い心でそう感じていた。そして、それはとても似合っているように思えた。

薫がどう思っていたのかは判らない。その頃お姉さん気取りの澄まし屋だった薫は、そんな龍太の気持ちを知ってか知らずか、いつも素っ気ない振りをしていた。

中学に入っつて薫に彼氏が出来た時には、きっと薫は何とも思っていなかったのだろうと、萌子はそんな風に思ったのだが。

龍太は子供の頃より更にあか抜けて、格好良くなった。

（龍太君と薫なら、ホントにお似合いなんだけだな）

その分ライバルも多そうだけれど。そんなことを思いながら萌子は、周囲にいる女の子の顔を見回した。と、その中に見覚えのある顔を発見した。

福女の3年生だった。直接の面識はなかったが、龍太と知り合いであることを知られると何かと面倒臭そうだ。そう思っつて萌子はそつと首をすくめてステージに視線を移した。

途端に龍太と目が合った。彼は心底嬉しそうに微笑むと、

「萌ちゃん！ 元氣かあ！」

と大きく手を振り回した。

周りの視線が一斉に萌子に集中した。萌子はその痛いくらいの視線の嵐に、頬を真っ赤にして思わず俯いた。体中の血が逆流したみたいに、ドクドク言っている。

その後ライブが終わるまで、萌子は熱に浮かされたような気分のままで過ごした。

今まで味わったことのないような高揚感の中で、約二時間のプログラムはあっという間に過ぎていく。

ライブの終わりが近くなってから、龍太はオリジナルのバラードを感情込めて熱唱した。それからブルー・ハーツの『旅人』。終わりを予感した観衆の、惜しむような手拍子の中で龍太はその2曲を歌い上げた。

「あれ？」

コミカルで激しいリズムが唐突に止み、沸騰するような熱気の余韻が漂う中で、薫がそう愛らしく小首を傾げた。

「まだ、あの曲やってないやん」

「あの曲？」

そう問い返ししながら、萌子は薫が手元で広げたプログラムを覗き込んだ。それによれば、『旅人』がラストナンバーということになっている。

こんな時間貸しのライブハウスで、素人バンドにアンコールに促している余裕などあるはずがない。今までのライブでも、アンコールなんて観たことがない。

（あの曲って？）

「みんなありがとう！」

興奮が冷めないまま、場内に低くたれ込めているような雰囲気の中で、龍太が絶叫する。熱狂を引きずったままの客席から、怒声に似た歓声が上がった。

「最後に。今日ここにいる君に」

穏やかな声だった。誰に語り掛けているんだろう。龍太の声に、場内が一時不穏にざわめいた。

「僕は、君が好きです」

ああ、そうか。会場にいる一人一人に語り掛けているつもりなんだ。そう納得した観衆が再び嬌声を上げる。

「たとえ君が、僕を見ていなくても。そんな君のために、最後に、プログラムにないこの曲を贈ります」

最後もボーカル・ソロだった。一瞬、場内の明かりが全て消え、そして龍太の姿だけがステージの上で浮かび上がった。

「どぶネズミみたいに 美しくなりたい 写真には写らない 美しさがあるから……」

もしも僕が いつか君と 出会い話し合うなら
そんな時は どうか愛の 意味を知って下さい

リンダリンダ リンダリンダリンダ
リンダリンダ リンダリンダリンダ

どぶネズミみたいに 誰よりも優しい
どぶネズミみたいに 何よりも暖かく

リンダリンダ リンダリンダリンダ
リンダリンダ リンダリンダリンダ

もしも僕が いつか君と 出会い話し合うなら
そんな時は どうか愛の 意味を知って下さい
愛じゃなくても 恋じゃなくても 君を離しはしない
決して負けない 強い力を 僕は一つだけ持つ

第三章 千光寺山（3）

「ほら、やっぱりこっち見てるよ」

斜め後ろの席を一瞬返り見て、萌子はその視線から逃れるように身をすくめた。

日曜日の、もう夜の11時を回る時刻だというのに、福山駅のガード下にあるマックは萌子たちぐらいの年頃の若者たちでいっぱいだった。トーンの高い話し声が揺れるようなざわめきとなり、店内に独特のリズムを作り、漂っている。

「気にすんなよ。別に見られたっていいじゃん、減るもんじゃないし」

龍太は平然とした顔でそう言っ、二つ目のダブルバーガーに噛みついた。

「いやよ。そうでなくても、龍太君があんなところから呼び掛けたりするから、あたしみんなに凄い目で睨まれたのよ」

萌子がプウツと頬を膨らませて睨み付けると、龍太はさも可笑しそうな口調で、

「何だよ萌子。照れてるんじゃない」と笑った。

こうして龍太と一緒にいると、薫が男の子を振り向かせるのと同じぐらいの確率で、女の子が彼に視線を送って来る。もしこんなところをさっきのライブにいた娘たちに見られたら、またとんでもない誤解を受けてしまいそうだ。

龍太の彼女になる人は、相当苦労するんだろうな。薫のことを思い浮かべながら、萌子は思わず一人笑いを漏らした。

「何だこいつ。今度は笑ってやがる」

ころころ表情を変える萌子の様子を、龍太は薄気味悪そうに眺めた。

「ねえ、龍太君は彼女いないの？」

フライドポテトを口に運びながら、萌子は何気ない口調でそう尋ねた。

不自然なくらいの間があった。萌子が不思議そうに顔を上げると、龍太がそれこそ穴が空きそうなくらいじつと彼女のことを見つめている。

「？」

ポテトを口にくわえたまま萌子が黙って首を傾げると、彼は急に照れたように視線を逸らして、吐き捨てるようにこう答えた。

「いねえよ。そんなもん」

「ふ〜ん」

釈然としない表情で、萌子は口を尖らせた形のままそう頷いた。

「そういえばさ」

萌子の分のポテトを横取りするようにして口に運んだ龍太は、口をもぐもぐさせながら、

「最近お前らが仲良くしているっていう先生、今日は連れて来なかったのかよ」

何でそんなこと知ってるの？　しばらくぼかんとして龍太のことを見ていた萌子は、ふと気付いて薫を見やった。

「そうなのよ。デートの予定があるって、あっさり断られちゃった」

呆れ顔の萌子のことなどおかまいなしに、薫は涼しい顔でそう答えると、ストローを加えたまま上目遣いに龍太を見て、

「気になる？　萌子がぞっこんな男のこと」

「薫！」

何を言い出すのよ。ぞっこんなのは薫の方じゃない。

喉元まで出かかった台詞を、萌子は慌てて飲み込んだ。

薫は久志のことをなんて説明したのだろう。龍太はそれをどう受け止めたのだろう。勝手に自分の『お気に入り』にされるのも何だか癪だったけれど、龍太のことを思うと薫の気持ちは迂闊に喋ってはいけないような気がした。

気詰まりな雰囲気が三人のあいだに漂った。誰一人口を開くことなく、視線を逸らしたままでしばらくのあいだ時間が流れた。さっきまで心地よいBGMにすら感じられた店内のざわめきが、急に耳障りなものに思えて来る。

とにかく何か会話の糸口を探そうと、萌子が考えもなしに口を開きかけた時だった。

「そろそろ、行こっか」

まるで気持ちの噛み合わない、互いの想いを素直に吐露出来ない、ぎくしゃくとした雰囲気を振り払うように、龍太は乾いた口調でそう言つとがたとと乱暴な音を立てて席を立つた。

岡山方面へ向かう上り普通列車はすでにもうなくなり、23時35分発糸崎行きが発つてしまえば、後は数本の当駅止まりの普通と寝台列車上下三本の発着を過ごすだけとなる福山駅の改札付近は、しかしまるで真昼のような賑わいを見せていた。

ただ、日中の気忙しさとは違う、何かの終わりを感じ取る時の一抹の寂しさのような弛緩した空気だけが、確かに日曜の深夜なのだということを教えてくれていた。

「あゝあ。8時間後にはまたここに来なきゃいけないのね」

いかにも面倒臭そうな口調で、薫はそう首を振った。

（そっか。明日の朝にはまた先生とここを通るんだ）

薫が聞いたら力チンと来そうなことを心に浮かべて、萌子はずっと幸せな気持ちになった。

「いいじゃないか。俺も尾道に帰りたいよ」

薫の台詞に呼応するように、龍太はそんな意外な言葉を口にした。

「へえ。龍太がそんなこと言うの、初めて聞いたわ」

薫が茶化すようにそう言つて、龍太の顔を覗き込んだ。

「何？ やっぱり生まれ故郷は懐かしいもん？」

萌子も、龍太がそんな台詞を吐くのを初めて聞いた。少し気弱にさえ感じられる、らしくないその口調に彼女は悪戯な不安をよぎらせた。

「別に懐かしいとかじゃないけどね」

すつと視線を下に落として、龍太は左足でコンクリートの地面を
払う仕草をした。

「ほら、そうすればお前らと一緒に帰れるじゃん」

（やっぱり龍太君は、薫のことが今でも気になっているんだ）

その瞬間、萌子は龍太の心の内側をそんな風に解釈した。それか
ら、薫の横顔をそつと見やる。

「あら、そんなに私と別れるのがつらい？」

あくまでも本音は覆い隠したまま、薫は相変わらずふざけた口調
でそう龍太のことを茶化した。けれども龍太はそんな薫の挑発には
乗らず、何かの覚悟を決めたように割と落ち着いた口調でこう言っ
た。

「……高校を卒業しちゃうとさ、お前らともなかなか会えなくな
っちゃうからな」

真剣味を帯びた龍太のその表情と口にした台詞の不透明さに、萌
子たちはただ困惑して彼のその次の言葉を待った。

けれども彼は、それ以上台詞を続ける気はなかったらしく、やけ
に穏やかな顔で、

「……そろそろ電車、来るよ」

そう二人を促した。

「じゃ、また。打ち上げには、呼ぶからな」

改札をぐりかけた萌子たちに向かって、龍太は本当に優しそ
うな笑顔を浮かべて手を挙げた。

そうして彼は、二人がエスカレーターに押し上げられて見えな
くなるまで、改札の外ですつと手を振っていた。

第三章 千光寺山（4）

厚手のセーターの上から綿入りの半天を着込み、彼女の小さな顔の半分くらいありそうな大きなマスクをして、顔を上気させて虚ろな視線を宙に彷徨わせる。

萌子が迎えに行くと、薫は全身で病人であることを体現しているかのような格好で玄関に現れた。

半天の下から見えているジャージから察するに、どうやら寝起きのままの姿らしい。

さすがに萌子も『出掛けよう』と言う気にはなれなくて、何も訊かない内から（これからどうしよう）と思案を巡らせた。

ところが薫は何を血迷ったのか、マスクの下でもごもごと口を動かせてこうのたまった。

「……待つてで。今『ウンケル』を三本ぐらい飲んで来るから」
「ちょ、ちよっと待った」

萌子は慌てて、踵を返しかけた薫の半天の袖を掴んだ。

「まさかあんた、出掛けるつもりじゃないでしょうね」

「そうだけど」

「そうだけどって、薫あんた熱何度あるの？」

「ん……7度、ちよつとかな」

「何言ってるの。さつき8度3分もあつたんじゃない」

後ろからやって来た薫の母、佐知子がそう言って彼女の頭を小突いた。

「38度！？ あんた何寝言みたいなこと言ってるのよ。ほら、こんなところにいちや駄目じゃない」

萌子は急いで玄関を上がると、薫の背中を押しながらリビングに戻った。

背中を丸めてお粥を啜る薫に向かって萌子は、

「いい？ それを食べたらすぐ布団に戻るのよ」

「なんか、いつもと立場が逆やな」

と薫は恨めしげな目で萌子を見上げてから、急に激しく咳き込んだ。

「ほらあ。茶化してる場合じゃないでしょ」

「でもほら、立花ちゃんと約束したし」

何言ってるのよ、という風に萌子は呆れ顔になって、

「あたし一人で行って来るわよ」

「でも……」

何故か薫は未練がましい口調でそう言いさすと、不安げにじつと萌子を見つめた。

「なによ」

「いや、あんたたちを二人きりにするのはどうかな、と思って…

…」

「やだなあ。何心配してるのよ」

萌子はその屈託なく笑った。

「あたしが相手じゃ、先生も『過ち』を犯す気にもならないですよ」

やっぱり心配なんだ。戯けた仕草を見せる萌子の心に、そう小さな影が射した。

薫は、高熱をおしてまで久志に逢いたいのだろうか。

（薫がそんなに本気になったら、誰も勝てないや）

そんなことを思つて、萌子はふとそう笑い飛ばしたくなった。

「ほら、食べ終わったら横になってなきや。先生のことはあたしに任せて」

萌子がそう急かすと、薫はじれったそうな表情を浮かべて、

「あゝあ。こんな時に力尽きるなんて、一生の不覚だわ」とぼやいた。

窓辺にこぼれる光の中で佇む彼は、まるで一幅の宗教画のようだ

った。

久志と待ち合わせた喫茶店『都わすれ』は、尾道市文学公園の奥、志賀直哉旧居の脇にある、花と動物を愛するマスターが開いたこぢんまりとした店だ。

三田村不動産からもほど近く、萌子のもう一つの『御用達』の店である。

その白亜の建物の中にも外にも四季折々の花が溢れ、椅子の上で堂々と猫が丸くなっていたりする。

『都わすれ』は、そんな店だった。旅行雑誌などにも紹介されているから、今日みたいな休日は観光客で満席になることもしばしばであった。

萌子が訪れた時も、小さな店の中は客でいっぱいだった。顔見知りのマスターが目線だけで挨拶をよこす。それに軽く頷くと、萌子は窓辺の席に一人ぼつんと座っている久志に近付いた。

ここに来るまでのあいだ、小さな路地を一つ曲がるたびに萌子の心はワクワクとした気持ちで少しずつ膨らんでいった。何かが始まる前のようなそんな期待感が、今まで久志と逢う時に感じた緊張感とは違う胸の高鳴りを助長する。

風邪で苦しんでいる薫を思うと、まるで抜け駆けをしているような罪悪感を覚えたけれど、それでもやっぱり萌子は湧き上がって来るときめきを押し留めることが出来なかった。

久志は不機嫌そうな顔つきで、窓の外に目をやっていた。

萌子を選んだ、明るいクリーム色のトレーナーを身に付けている。萌子が近づくのに気付くと、彼は不自然なほど大きなため息を漏らした。

「ごめんね先生、遅くなって」

「いや……」

曖昧にそう頷いて、久志は萌子の後ろをきよろきよろと見やった。

「薫、来れないの」

「え、何で？」

久志が驚いたように聞き返す。

「風邪でダウン」

「……大丈夫なのか？」

「熱が少しあるみたい。ゆっくり休んでなって言って家に置いて来た」

「そっか」

そう久志が呟いた。その顔つきが、微妙に曇ったように萌子には見えた。水面に波紋が広がるように、胸の内に微かな疑念が広がっていく。萌子の心臓がとくん、とくんと脈打った。

「そりゃまあ、そうした方がいいな」

「先生、ご不満？ 薫がいなくて」

萌子はそう久志を見つめた。さっきまでの上機嫌が、引き潮のようには体の中からすつと引いていく。

「何言ってるんだよ。そんなことないよ」

「そう、良かった」

ほんの少しだけホツとして、萌子は小さな笑みを浮かべた。

「だって先生、何か怒ってるみたいなんだもん」

そう言いながら萌子は、久志の正面に腰を下ろした。

「それはな……」

久志が声を潜めて萌子の方に顔を寄せる。萌子は一瞬ドキツとした。

「ここ、カップルばかりで落ち着かないんだ」

萌子は思わず目を丸くして、それから吹き出した。

「先生ったら……」

なあんだ、と思った。ちょっと拍子抜けした気分だった。穏やかな安らぎの中で、萌子は自然と頬を緩めていた。

いじらしいほど純粋な、今時の23歳にはとても思えない久志の野暮ったさに、萌子は堪らない愛おしさを覚えた。優しい想いが、快く体中を駆け巡る。

「こうしていると、私たちもカップルに見えるのかな」

テーブルの上に置かれた透明なグラスが、プリズムとなって描き出す薄い光の模様を見つめながら、萌子はそう呟いた。

「え？」

まるで彼女の台詞を聞き逃したかのように、久志が戸惑い顔で萌子を見つめた。萌子も自分の吐いた台詞の意味に今更ながら気付いて、弾かれたように顔を上げて久志を見る。

二人の視線が、一瞬絡み合ったままほどけなくなったように、テーブルの上で交差した。

次の瞬間、萌子の全身を恥じらいが矢のように貫いた。顔が真っ赤に火照っていくのが判る。どうしようもなく無抵抗に、心臓が激しく波打った。

居たたまれない気分で、萌子はぐるりと店内を見やった。

頬杖をつき、或いは視線を絡め、幸せそうに笑い合いながら、幾組ものカップルがそこには存在していた。傍目には、何の憂いもなさそうに見える恋人たち。

萌子はふと、私たちもそんな風に映っているのだろうかと思った。そう思うと、彼女は急に上手く喋ることが出来なくなった。

気まずい沈黙が二人のあいだを支配した。会話の糸口を必死に探しながら、萌子は運ばれて来たアイス・ティの氷を意味もなくグルグルとかき混ぜた。

「薫君は大丈夫かな」

二人とも結局話題を探しあぐねて、久志は取って付けたようにそう薫の名を口にした。

「うん。大丈夫だと思う」

とくん、とくんと心臓が鼓動を刻む音を、萌子ははっきりと自覚していた。息苦しささえ、覚える。自分がこんなに純情で初心だなんて、萌子は思ってもみなかった。

けれども思い返してみれば、こんな風に男の人と二人きりで喫茶店に行くことなど、今まで経験したことがないのも事実だった。今は女子高だし、中学までだって薫の後ろを追い駆けてばかりで、龍

太以外の男の子とまともな会話をしたことがなかったのだ。

久志に問われるまで萌子は、今頃熱にうなされているはずの親友を氣遣う余裕さえ持ち合わせていなかった。

「あたしが来るまで出掛けるつもりだったのよ、薫。あんだけの根性していれば、きっと明日はけるつと学校に出て来るわよ」

萌子がそう言つて小さく首を振ると、

「彼女らしいね」

久志はそう小さく笑つた。

「……どこ、行こつか」

また会話に詰まつて、しばらく窓の外で揺れるコスモスを眺めてから萌子は、小さく吐き出すようにそう呟いた。

「どこでもいいよ。ガイドにお任せ」

そう返した久志の照れた笑みに不意を突かれて、萌子はまた激しく動揺した。

「……じゃあお隣から、かな」

「隣？」

「そう。志賀直哉が、尾道で暮らした家から」

遠くから、微かな神樂の音が聴こえて来る。群衆が移動するざわめき、うねり。テキ屋の威勢の良い声。華やかで、光に満ちた小春日和の午後。

尾道の街は、華やいだ雰囲気包まれていた。普段、観光地にしては静かな通りにもたくさんの人が溢れ、いくつもの露店がひしめきあうように肩を寄せて立ち並ぶ。何もない、幸せそうな顔の人々が、少し遅い秋祭りを楽しんでいた。

ベツチャー祭の中心は、三田村不動産の近くにある吉備津彦神社で行われるが、この日一日は街のそこに獅子舞や御輿が出て、肝心のベタ・シヨーキ・ソバの三匹の鬼も街中を練り歩く。市内一円が祭りの華麗さに包まれるのだ。

二人は最初、尾道市文学公園から西国寺までの道のりをゆつくりと歩いた。途中、タイル小路や御袖天満宮、福善寺などに立ち寄るおよそ2時間のコースである。

良く晴れた秋の一日だった。重なり合うようにして建つ家々の軒先から、深く澄んだ碧空が見えた。

萌子はこの日、この世の中に満ち足りた切なさというものが存在することを初めて知った。

それは確かに切ない心地良さであった。喜びでも、楽しさでもなく。久志の横に並んで見慣れた路地を歩きながら、萌子は見知らぬ異国を歩いているような気分を味わっていた。

久志は複雑に入り組んだ尾道の路地をいたく気に入った様子だった。時折立ち止まり、いつになく真剣な表情でじつと路地の奥の風景に目を凝らした。萌子は、自分が同じ絵を志す者として、久志と同じ視線を持っていることがとても誇らしかった。

西国寺の境内を埋め尽くす桜の木々は、すっかり色づいて冬支度を始めようとしていた。もう半月もすると、全ての葉を散らし裸木となってしまうことだろう。

「ここ、桜の名所なんです」

萌子は、前に何度か母の手に曳かれて来た桜の季節を思い返しながらそう言った。

「ほら、両側の樹がアーチみたいに枝を伸ばしているでしょ。桜が咲くと、まるでピンク色のトンネルみたいになるんです」

「へえ。見てみたいなあ」

久志の台詞の内に叶わぬ願いを込めた切実な響きを感じて、萌子は不思議そうに久志を見上げた。

「もしかしたらさ、春にはここにいないかもしれないから」

「あつ……」

久志に思いもかけない事実を指摘されて、萌子の心ははつきりと揺れ動いた。

「僕は臨時講師だからね。春になって近藤先生が戻って来るか、

正式な講師を雇うんだとしたら、そこでお役ご免だから」

「最初から、その予定なんですか？」

つい詰問するような口調になって、萌子は久志にそう尋ねた。

「うーん。別にいつまでやるって決まっている訳じゃないんだけどね。とりあえず春までは 尾道で暮らしてみようかなって思っ
て、この話を受けたんだ」

優しくて穏やかなその人柄の奥に、この人は確かに哀しみを湛えている。

久志の澄んだ瞳とは裏腹な微妙な語気の硬さに気付いて、萌子はそんな思いを強くした。夕暮れの校舎で、彼が見せた翳りのある横顔が浮かぶ。

そんな久志の抱く哀しみに共鳴出来るような、そんな漠然とした予感が彼女の心の中で灯火のように揺れていた。

「それくらいの時間があれば、何とかなるんじゃないかってね」

「何とかなるって？」

「また、描けるようになるんじゃないかって、そう思ったんだ」

歌うような、むしろ楽しげな口調で、久志はそう淡々と言葉を重ねた。

「時間を掛けて、場所も変えて。そうすれば元に戻るんじゃないかって。そうやって結局逃げて来たただけだけどね、僕は」

久志はそう言って、高く澄んだ青空を見上げた。

その後坂道を下るまで、結局久志はその話題に一度も触れることはなかった。途切れがちな会話をただ漠然と交わしながら、萌子は彼への言葉にならない問い掛けが胸の中で溢れてしまうような気がした。

坂道を降りてラーメン屋で軽くお腹を満たすと、二人は群衆で賑わう繁華街をのんびりと歩いた。

沿道にはもろこし、お好み焼き、綿飴といった食べ物からの当てゲームといったものまで、様々な露店が軒を並べている。食べたばかりで食欲など湧かないくせして、二人はそんな露店を幾つも冷や

かした。

「さて、鬼はどこ行つた」

さつきまでの憂いを帯びた表情をすっかり覆い隠して、久志はそう陽気な声で辺りを見回した。

「その三匹の鬼っていうのは、街中を歩くの？」

「うん。そのはず」

「その鬼に追い回されて叩かれれば、その年は病氣しないんだろ？ あれ？ でも……」

久志はそこできょんとした表情になつて、

「その年つてことは、あと二ヶ月しか持たないのか？ そのまじない」

その三匹の鬼たちとは、尾道郵便局のそばのアーケードの一角で逢うことが出来た。

三匹の鬼は、ゆつくりと練り歩く小さな御輿の後をのんびりと歩いていた。そうして、沿道に立つ人たちを戯けたように追い回す。そのたびにその人波は、まるで潮の満ち引きのように右に左に揺れた。

その辺りは特に混雑が激しかった。後から来た萌子たちは群衆を更に遠巻きにするような位置に立たされた。そうになると、久志はともかく背の低い萌子は鬼たちを見ることが出来ない。

萌子は仕方なく、近くにあつた縁石に飛び乗った。

飛び乗った、のがいけなかったのかもしれない。面積の狭い石の上に上手く着地することが出来なくて、萌子は思わずよろめいた。がつしりと、何かが萌子の右手を掴んだ。

久志の左手が、しっかりと萌子の右手を握り締めていた。じんわりと伝わる久志の幾らか高めの温もりが、萌子の右手を通して彼女の心臓を不規則に揺さぶった。

萌子は久志の顔を見つめた。彼は何気ない素振りで、萌子の方を見ようとしなかった。視線を不自然なほど真っ直ぐにして、時折揺れる周囲の人波に合わせて笑い声を立てる。

予期せず萌子の手を握ってしまったことに、彼が内心大いに照れているのが萌子にはとてもよく判った。何でこんなに久志のことが判るんだらうと思うくらい、今日の萌子は彼のことが何か何まで理解出来るような気さえしていた。

穏やかな愛おしさが、萌子の胸をそつと包み込む。

久志に倣って前方に視線を送りながら、萌子はそつと右手を握り返した。

夕暮れに、ロープウェイに乗って千光寺山に登った。

妙宣寺の脇にある登山口駅を出たロープウェイは、意外なほど急な角度で乗客を山肌に沿うように押し上げて行く。昇り始めてすぐ眼下に広がった屋根瓦がどんどんと小さくなって、尾道の街並みがミニチュアのようになっていく。尾道駅へ向かう4両編成のグリーンとオレンジのツートンカラーの列車が、まるで模型のようだった。細長い尾道水道が飴色の夕日に水面を染め、やがて遠くに瀬戸内海とそこに浮かぶ島々が姿を現し始めた。

日暮れ間際だというのに、ロープウェイは思いのほか混んでいた。二人は押し黙ったまま、窓の外にゆっくりと広がっていく尾道の街を見つめていた。

「わあ」

山頂駅でロープウェイを降りて展望台に続く道に出ると、久志は小さな歓声を上げた。横に並んで歩きながら、そんな彼の反応に萌子は満足げな顔をした。

「綺麗でしょ」

「……ああ」

千光寺山の中腹に広がる広場からは、眼下に尾道の街が一望出来る。まるでお堀みたいな尾道水道やその向こう側に広がる向島の街並みも。マツチ箱のように小さな家並みが、なだらかな傾斜に沿って山裾までびっしりと続いている。

視線を上げると、向島の向こうに濃く薄く幾重にも重なる芸予諸島の島影が映り、そのあい間にちらちらと瀬戸内の海が見える。そして、まるで海に浮かぶ浮き橋のように続く島影のその先には、色を失いかけた碧空の下で遠く四国山脈が薄い影を成していた。

千光寺山公園の広大な敷地は、実は萌子の家の裏にある道を登って行くと案外と簡単に辿り着ける。ここから見える景色は、幼い頃から萌子のお気に入りだった。特に夕暮れの眺めを、彼女は一番気に入っていた。

だから、今日1日のコースの最終地点にこの場所を選んだのだ。やがて、堪えていたものを吐き出すように、久志はふうつと大きなため息を漏らした。

「何て、言ったらいいんだろう……。美しい、だけじゃ言葉が足りない気がする」

夕暮れの港町は穏やかな横顔を見せていた。尾道と向島を結ぶ渡船が、電動仕掛けの玩具の船のようにゆっくりとしたスピードで細い海を渡って行く。

「へえ。著名人がスケッチした場所、だつてさ」

展望台の真下にある石畳に足を踏み入れて、久志が小さな石版を見つけた。この場所でスケッチした著名人として、梅原龍三郎らの名前が刻まれているのが見える。

こうした石版は、千光寺公園の中に幾つか存在する。西国寺、浄土寺、御袖天満宮といった幾つもの景勝地を持ち、見る場所によって様々にその顔を変える尾道の街の中でも、とりわけ千光寺の周辺からの眺望は、尾道の美しさを凝縮した景觀として古くから多くの文人や画家に愛され、その画題とされて来た。それぞれの画題とされたその場所々に、こうして記念の石碑が残されているのである。石版のそばに立って眼下の光景を見やっていた久志の右手が、無意識の内に絵筆を動かす仕草をしているのを見て萌子は可笑しくなった。

「先生。もつととっておきの景色、見せてあげる」

萌子はそう言つて、久志の右腕を取った。

思いもかけない萌子の行動に、久志は一瞬驚いたように身を固くしたが、彼女はそんな彼の様子を氣遣うことなく、半ば強引に展望台の裏手へと引つ張つて行つた。

ロープウェイを降りて展望台やその周辺の景色を堪能した観光客は、そのほとんどが山頂駅の右手を下つて行く『文学のこみち』へと向かう。

山道に沿つて尾道ゆかりの文人たちの作品の一節を刻んだ石碑が点在するその道は千光寺の境内へと続き、そこから再び展望台へ戻るコースや尾道市文学公園へ下るコースなどに別れている。

それが千光寺山公園に於けるもつともポピュラーな観光コースであり、萌子たちのように真つ直ぐ展望台の裏手の道へ向かう者は珍しかった。展望台を過ぎると、周囲は急に人影が絶えた。

萌子が久志を導いたのは、敷き詰められた芝生の中に庭石が点在する広場の、更にその奥だった。

「ここです」

傾斜がきつくなる手前で足を止めると、萌子はそう言つて松林の向こうを指さした。

その先に、金色の輝きに包まれた空間があつた。

松の枝越しに見えるのは、尾道の市街地の西側半分だった。まっすぐに貫く山陽本線の線路に沿うように、雑多な街並みが細く長く伸びていく。

その先に見える尾道水道が、夕日を受けてきらきらと輝いていた。街並みの向こうでその幅を急に広げて、三原湾へと続いている。

日は山の端へ沈もうとしていた。海も空も島も街も、全てが金色の光に映え、金色の光に染まり、金色の光に溶けていく。

まばゆい輝きを放つ水面を漁船が一隻、緩やかな航跡を残して渡つて行くのが見えた。

一日の内のほんの一瞬。それは幻のような光景だった。

初めてこの夕景を見た時、萌子はしばらくその場所から動くこと

が出来なかった。刻々とその姿を変えていく風景が、何かの生き物のように感じられた。

それから何度も夕暮れ時に山に登った。そして夕景を見るたびに、切なくなつた。優しい春の夕暮れにも、寂寥感漂う秋の夕暮れにも、同じように胸を締めつけられた。

いつの頃からか、この切ない気持ちを形にして残したいと思うようになった。萌子が絵を志した、それが始まりだった。

夕景を見に来るのはいつも一人だった。薫とさえ、この時間にこの場所に来たことはない。

それなのに今日は、どうしても久志にこの景色を見せてあげたい、と思ったのだ。

背後で息を飲んだ気配を感じて、萌子はそつと久志の方を振り返った。

いつかの萌子のように、久志は言葉を失い立ち尽くしていた。その鳶色の瞳が、段々と優しく和んでいく。

「綺麗だね」

久志はそう率直な感想を漏らした。

「不思議だね。人ってどうして美しいものを見ると、泣きたくないような、胸が締めつけられるような想いがするんだろう」

同じだ、と萌子は思った。自分が感じたあの切なさを今、同じ景色を見ながら久志も感じている。共鳴する感情の中に、彼女は久志との距離の近しさをはつきりと感じ取っていた。

「もう少し、ここにしようか」

久志の問い掛けに、萌子は黙って頷いた。

大きな岩に腰を掛けて、そして二人は暮れゆく街をじっと見ていた。徐々にその色を変え、色を失っていく海と空を見ていた。

久志とのあいだに会話が途絶えても、萌子はもう不安を包み込んだ苛立ちを感じることはなかった。肩が触れ合うほどの距離は、不思議なほど彼女を安らいだ気持ちにさせる。

二人はしばらくのあいだ、言葉もなくただ海と空を眺めていた。

「父さんがね、昔一度だけ話してくれたことがあったんだ」

久志が、唐突にそう語り始めた。萌子は黙って久志の顔を見た。

「尾道の夕焼けは、とても綺麗だって。山に登ると、瀬戸内海が見渡せるって。あれって」

夕景に目をやったまま、久志は呟くように言った。

「もしかしたら、ここからの景色のことだったのかなあ」

優しい顔だった。久志は初めて、翳りも憂いもないさっぱりとした表情で父親のことを口にした。

「先生のお父さんで、いつまで尾道にいたんですか」

萌子も表情を和らげて、そんなことを尋ねた。

「父さんはね、僕が小学4年生の春に戻って来たんだ」

萌子は頭の中で自分と久志の歳の差を計算した。久志が9歳ということは、萌子がちょうど9歳の時に当たる。

（そっか。パパがいなくなった頃だ）

彼女がそんな計算をしたのは、もしかしたらこの街のどこかで久志の父とすれ違っているのかもしれない、そんな他愛もない想像をしたからだった。

「先生のお父さんは、どの辺りに住んでいたんですか？」

そんな質問も、その他愛もない想像の続きであつた。無邪気な、あどけない表情を浮かべて、そう問い掛ける少女の顔を、久志はしばらく、萌子が不審げな顔になるまで、じっと見つめていた。

「知らないんだ」

そう呟いた久志の台詞の意味を、萌子は最初良く理解出来なかった。

「？ 知らないって……」

「父さんがこの街のどこで、どうやって暮らしていたのか、誰も知らないんだ……」

どこを見て笑っているのか判らない久志の弛緩した笑みを、萌子は戸惑った顔で黙って見ていた。そんな彼女を優しく見つめた久志は、一言こう告げた。

「僕の父はね、ずっと行方不明だったんだ。僕が生まれてから小学4年になるまでのあいだ」

その思いがけない告白は、萌子の想像していたことと似ているようにうでいて、とんでもなくかけ離れていた。萌子は言葉もなく、ただ久志のこゝろを見つめた。

「『お前の父さんは旅先で事故に遭って、しばらく記憶を失っていたから家に帰って来られなかったんだ』父さんが戻って来た時、僕は周りにそう聴かされたんだ。でも、何でその旅に出たのかは、誰も教えてくれなかった」

ゆつくりと襲い掛かって来る、鈍痛のような重苦さに押し潰されそうな萌子の気分とは裏腹に、久志は妙にすつきりとした、まるで憑き物が落ちたみたいに清々しい表情で話し続けた。

「僕が生まれる前に、僕を母さんのお腹に残して父さんは家を出てしまったんだと思う。行く先を誰にも告げずにね。その時に何があったのかは判らないけれど、大きくなって父と母のあいだに何か揉めごとがあったんだらうってことだけは、何となく察しがついた」
そう言って久志は、少しだけ微笑んだ。

「……父さんが事故に遭って記憶をなくしたっていうのは、本当のことだったんだ。旅先の見知らぬ街で事故に遭って軽い記憶障害にかかって、その事故で助けてもらった人に世話してもらって尾道に住み始めたらいいんだ。そして、この街で全く別の暮らしを始めた……」

「……」
「父さんが見つかったのは本当に偶然でね。たまたま父さんのいるところが偶然父さんと逢って、僕のことを話したんだ。父さんは僕が産まれたことを、その存在すら知らなかった。その時は連れて帰ることが出来なかったらしいんだけど、しばらくして父さんは家に戻って来た。自分の意志でね」

僕は。そう言いさして、久志はしばらく言い淀んだ。互いの表情すら読み取れなくなりそんな危うさの漂う夕闇の中で、風の音だけ

が二人の周囲を支配する。

「初めて見たその人を、父親だと思ふことが出来なかった。誰かに詳しく聴かされていた訳じゃなかったけれど、その頃僕は自分に父親というパーツが最初から用意されていなかったと思っていたからね。それなのに突然『はい、これが父さんね』って言われても、実感が湧かなかったんだ」

久志は終始微笑んでいた。何て優しそうに笑うんだろう。そう思うと、萌子の胸に切ない痛みが走った。浮かれた自分の不用意な一言が、堪らなく悔やまれた。

「今でもね、思う時があるんだ。実の子どもに他人のように接せられて、父さんはどう思っていたんだろうって。もう、その答えを訊くことは出来なくなっただけだね」

「先生それって……」

「ああ。別に父親まで死んだ訳じゃないよ」

萌子の哀しげな表情に気付いて、久志は氣遣うように弱く微笑んだ。

「いや、正確に言うと、生死も判らないって言った方が良いのかな」

ぼつりとそう呟くように話す久志の頬を、夕暮れの風が優しく撫でる。

「僕の父さんは、僕が中学を卒業した春に、またいなくなっただ。今度こそ、誰も知らないところにね」

第三章 千光寺山（5）

テストの答え合わせでもするように、久志は淡々と、時折微笑さえ浮かべながら話し続けた。萌子は読み上げられる回答を黙って聴く生徒のように、久志の顔を見つめた。萌子の頭の中の疑問が一つ一つ氷解して、そして一つに繋がった。

「僕の中学の卒業式があった次の日に、夕方フラリと出掛けて、そのままいなくなったんだ。深夜になるまで誰も家出だって気付かなくてね」

久志は思い出し笑いのように頬を緩めて、

「家にあった定期預金が一つ解約されていて、多分そこにあった百万ちよつとの金だけを持って父さんはどこかへ消えたんだ」

久志はそこまで話してから、ちよつと思案するような表情を浮かべた。

「いなくなる前の晩に、父さんから将来のことをやたらと訊かれてね。その時僕は美大の付属校に受かっていて、どんな形にしろ絵を描き続けていくつもりだって言ったら、満足そうに『うんうん』て頷いて」

まるで。そう言葉を切り、久志は短く黙り込んだ。

「まるで息子の成長に満足したって感じだった。それで次の日にいなくなつて。もしかしたら父さんは、僕が義務教育を終わるのを見届けるためだけに戻って来たんじゃないかって、その時そう思ったんだ」

『パパはどこに行ったの？』

父がいなくなつてから、萌子は一度だけそう母にしつこく問いただしたことがある。それは、父の背中を踏切の向こうに見送ったあの日の夜のことだった。

誤魔化そうと思えば幼い萌子のことなど軽くあしらえたはずなのに、玲子は萌子のその問い掛けにいつまでも答えようとしなかった。

それから十三年間 自分に父親という存在が永久に帰ることはないだろうということがはつきりと理解出来る年頃になっても 萌子は一度もその質問を母にも祖母にもぶつけたことはなかった。

あの夜の、母の堪らなく哀しげな顔が、萌子の心の内にいつの間にか理性に良く似た封印を掛けていた。

「もしかしたらこの街に戻ったのかもしれない。そう思ったこともあつたけれど……」

確かめようがなかった。久志はそう小さく息を漏らした。

いくら狭いと言っても、尾道は人口十万の都市である。確かに一人見つけ出すのは案外難しい作業かもしれない、と萌子は思った。そしてハツとした。

「じゃあもしかしたら先生のお父さんは今でも……」

「それはないよ」

久志は、萌子の言葉の意味を途中で察して、笑って否定した。

「きつとこの街にはいない。多分父さんはこの街の暮らしも捨てて、東京に戻って来たんだ。自分の子供の義務教育終了を見届けるためだけにね」

久志はそう言つて、眼下に広がる夕暮れの街を見下ろした。

「君と初めて逢つた時」

「え？」

「僕を三田村さんの所まで案内してもらつた時、『この街に来てみたかった』って言つたよね」

「……ええ」

「父さんがまたいなくなった時、考えたんだ。きつと父さんは義理を果たすためだけに東京に戻って来たんじゃないかって。父さんが本当に過ごしたいと、帰りたいと願っていたのはきつとこの尾道の街だつたんだって」

まるで胎内にいる赤ん坊のように、久志は自分の膝をぎゅっと抱きしめて背中を丸めた。萌子は急に、その小さく見える久志の体を抱きすくめたくなるような衝動に駆られた。

人気ない夕暮れに、まるで二人だけぽつんと取り残されてしまったような感覚。

膝を抱えた子供のような久志の姿は、とても小さく見えた。その時彼女が感じたものは、今まで抱いていたような憧憬ではなく、守りたくなるような愛しさであつた。

萌子は、久志と出会ってからずっと感じ続けていた近しさの意味を、今はつきりと理解したような気がした。

ぼんやりと膝を抱えたまま、久志が呟いた。

「一度ね、見てみたかったんだ。父さんが愛した街っていうのを」それから久志は、急に照れたように頭を掻いて、

「変な話をしてゴメンね。何でかな。こんな話、するつもりなかったのに」

「ううん」

萌子は小さく首を横に振った。

「話してくれて、嬉しかった。あのね」

こんなことを話して、何になるんだろ。萌子はそう自分に疑問を投げ掛けながら、浮ついた気持ちのままその台詞を口にした。

「私も、父がいないんです」

「え？」

萌子の言葉の意味をとっさに理解出来なかったのか、久志は不可解そうに眉をひそめた。

「先生んちと同じで、ウチも母子家庭なんです。ウチの場合、母一人娘一人だけねど」

空が、露草色にその色を変えようといっていた。もうすぐ、夜の帳が降りて来る。

「……亡くなったの？」

小さく、湿った声で久志がそう問い返す。

「ううん。私のお父さんもやっぱり家を出て行っちゃって、行方不明なんです」

きつとそれが彼の性格なのだろう。久志はひどくすまなそうな顔

をして俯いた。

「ごめん。人の気も知らないで、自分のことばかりぺらぺらと」

「ううん、いいの。気にしないで」

今度は萌子が、氣遣うような優しい笑みを浮かべる番だった。

「私の父は、私が4歳の時に家を出て行ったんです」

そうして萌子は、今まで家族以外は薫にしか話したことのない事実を、ゆつくりと語り始めた。

「誰にも、何も告げずに。この街で、父の姿を見たのは私が最後なんです」

今も脳裏に焼き付いて離れない、列車の向こうに消えた父の姿。

「父が出て行った訳を、母もおばちゃんも話してくれなくて。」

その内、ウチには最初から父親なんて存在しなかったみたいに、誰も父のことを話さなくなってる」

萌子が父のことを思い出すのは、クラスメイトにそのことで苛められた時だけだった。それも薫のおかげでやがてなくなり、中学に通い始めた頃にはもう誰も萌子に父親がいらないことなど口にしなくなった。

「どうせなら、最初から父親なんて存在しなければ良かったのかもしれないですけどね」

けれども、萌子は確かに知っていた。慈しむような父親の愛情を。それは幼い萌子に向けられた、ただひたすら優しい想いだった。

拭いきれない甘味な愛情の記憶は、萌子の心の中に口に出来ない疑問をずっと育てていた。母子二人きりの生活に何の疑問も抱かせないほど、周囲の人々、祖母や近所の住人や水谷家の人間が気を配ってくれたから、だからこそ余計に萌子はその疑問を口にすることが出来なくなっていた。

父は何故出て行ってしまったんだろう。私や母を捨てて、どうしていなくなってしまったんだろう。

その疑問は、あの踏切で見たどこか寂しげで真っ直ぐな父の瞳の記憶と重なって、いつまでも萌子の胸の内から離れることはなかつ

た。

「今でも判らないんです。父が優しい人だったのか、厳しい人だったのか。陽気な性格だったのか、無口な人だったのか。そもそも父親がいたという記憶さえ時々なくしそうなほど、毎日が当たり前のように過ぎていった」

父親がいないことで苦しみを感じた記憶が、萌子にはほとんどなかった。

父を見失った時のちぎれるような疼痛が揺り返しのように胸に去来することや、人より欠けたところがある寂しさが胸を訪れることはあったが、それも薫や周囲の人々と織りなす忙しいほどの日常の中で、最近はずっかり忘れ去られてしまっていた。

「けど本当は、ずっと知りたいと思ってるんです。父があたしたちを捨てた理由を」

萌子は、それを知らなければ自分はずっと何かが欠けた、中途半端な存在のままのような気がしていた。

「先生の悩んでることに比べたら、何か子供じみた悩みですよ。何も、困ることなんかないんだから」

喋ってしまったから、萌子は急に自分の抱えていたものが幼稚な悩みだったような気がして照れ臭くなった。

そう、大したことじゃないんだ。私は何も苦勞なんかしてないし、今のままでも充分に幸せなんだから。

「先生から見れば、きつと呆れるくらい私、幸せなんですよね」
恥ずかしそうにそう遠くに視線をやって、それから萌子は区切りをつけるように立ち上がるとスカートの裾を払った。

「判るよ」

ロープウェイの方に歩きかけた萌子の背中に、久志はそう言葉を投げ掛けた。

「え？」

その声に驚いたように萌子が振り返る。

夕闇に咲く花のように、岩に腰掛けたまま久志はただ微笑んでい

た。その瞬間何の脈絡もなく、萌子はその笑顔を、

（綺麗だ）

と思った。

心臓がとくとく、と体中にシグナルを送り続けている。頭のとっぺんから足の先まで、痺れるような感覚が全身を貫いた。

それは泣き出したくなるような切ない想いと、理由のない懐かしさであった。

「判るよ。僕も一緒だから」

確信に満ちた笑みで、久志は大きく頷いた。

「僕だって別に困ることなんて一つもなかったよ。でも、きっと一緒だ」

闇に溶けていく景色の中で、その言葉は幻のように萌子の頭の中で響いた。

「君もずっと、寂しかったんだよ。きっと」

第四章 すれ違い（１）

恋を、したことがない訳じゃない。

小学５年生の頃、隣の席になった男の子がとても気になった。きつとそれが私の初恋だと、萌子はそう思っている。

中学生の時にも気になった人はいた。どちらも想いを伝えるまでには至らない淡い恋心だったけれど、男の子を好きになったことぐらい私にもあるのだと、萌子はずっとそう思っていた。

だから、初めて出逢った時から久志に惹かれていることも、萌子は十分判っていたつもりだった。

行きよりも幾らか乗客の少ない、下り最終のロープウェイの中で、萌子は心臓が壊れてしまったんじゃないかと思うくらい早鐘を打つ胸を、必死に抑えようとしていた。今まで覚えたことのない、胸を締めつけるような苦しい切なさ戸惑っていた。

登山口駅で久志と別れて、街灯が虚しく照らし出す路地を一人歩きながらも、やっぱり萌子はどうにも治まらない胸の鼓動を持て余し続けていた。

夕食も喉を通らず、『疲れた』と言って早々に２階の自分の部屋に上がった萌子は、着替えもせずにベッドに寝転がった。

南向きの窓を頭にして置いてあるそのベッドは、萌子がこの部屋で一人寝起きするようになってから数えて三代目に当たるが、小さい頃から萌子はベッドの位置を一度も変えたことがなかった。

そこに横になると、暮れなずむ空の色や尾道水道の上にかかる月が見えた。ベッドに寝転がると、萌子は不思議と気持ちが落ち着くのだった。

萌子は、白い天井を見つめながら呟く。

「あたし、先生が好き、なんだ……」

判り切っているはずなのに、そうやって口に出すと改めて新鮮な驚きが萌子の体を熱く貫いた。

人を好きになるという感情を充分に理解していたつもりなのに、今の萌子は初めての微熱に怯える幼子のように無力だった。とくとくとき限なく湧き上がって来る久志を想う気持ちが体中に溢れ、萌子は自分の体がその内どうかなってしまふような気がした。

久志を慕う優しい気持ち彼女が彼女の心を喜びで満たし、そして悪戯に掻き立てる。

その想いの根底を間違ひなく、同じ気持ちを分かち合えるというその親近感が支えていた。

あの雨上がりの夕暮れに、萌子の心の中で好奇心が憧憬へと変わったのは、お互いが『父を失っていた』記憶があると知った瞬間であつた。そしてそれは、千光寺山の夕暮れの中で恋しい気持ちへと変化した。

『君もずっと、寂しかったんだよ。きつと』

わたしはずっと、寂しかったんだろうか。白い天井を見つめたまま萌子はそう自分に問い掛けた。

この13年間、母子二人だけの暮らしは余りにも穏やかであつた。優しくて気丈な祖母の存在や、穏やかで暖かみのある水谷家の人々との交流が織りなすリズムは、萌子たち親子に『父親』というパーツが欠けているという事実を、ともすれば消し去ってしまうような雰囲気があつた。暮らし向きも悪くなく、玲子との姉妹のような親子関係は人とは違ふ形の幸せを萌子にもたらしてくれた。

そう、本質的に萌子は幸せだつたのだ。親を失くした子供は、本当はもつと苦勞するはずなのかもしれない。時々そんな思いがよぎるほど、萌子は確かに幸福だつた。

薫という親友。千絵という希有な叔母の存在。優しくて若々しい母親。彼女の日常の中には、父のいない不幸を感じさせるものは何一つ存在しなかつた。

けれどもそんな日々の暮らしの中で、踏切の向こうで萌子を見つめる父の瞳の記憶は決して消え去ることはなかつた。常に思い続けている訳ではないけれど、萌子の心の片隅でそれは大きくなること

もなくまた消え去ってしまうこともなく、当たり前のような感情と
していつも居座り続けていた。

透明なガラスに封印したみたいに、その思いは萌子の心の中にず
っと閉じ込められたままだった。

薫がどんなに優しく聡明でも、自分が抱えている気持ちはきつ
と理解出来ない。そう思うと、萌子は彼女の前で小さなしこりみた
いなわだかまりを口にすることが出来なかった。

そしてどんなに幸せでもどんなに優しい人たちに囲まれていても、
萌子は一人ぼつんと宇宙に放り出されたみたいな気持ちを、ずっと
持ち続けていた。

久志と出会ってから、その思いはガラスの器から少しずつ溢れ出
していた。そして今日、千光寺山で久志の告白を聴いて、ガラスの
器は完全に砕け散った。

『寂しさ』を分かち合える、そんな存在。その柔和な横顔への恋
慕の情と同じくらい、共鳴する感情は久志への想いを強くしていた。

（明日、また逢える）

ごろん、と横向きになりながら萌子はそう思った。それからそん
な風に思ったことに可笑しくなって一人笑いを漏らした。

これまでだって毎日逢っていたのに、いまさらそんなこと思うの
もおかしな話だ。けれども萌子は、明日からの毎日がとても真新し
い日々のような気がしていた。

今は、ただ逢えるだけでいい。素直にそう思った。久志への募る
想いも、今は逢えるだけで満たされてしまうような、そんな気がし
ていた。

第四章 すれ違い(2)

「来週から、一緒に通えなくなるんだ」

久志の口から出た予期せぬ台詞に、萌子と薫は思わず顔を見合わせた。

あの日から十日近くが経とうとしていた。秋深まる、土曜日の放課後。

周囲の景色だけが移ろいゆく、そんな何の変化もない日々が続いていた。

いつかと同じように、ふくやま美術館と広島県立博物館の間に広がる緑の敷地を三人は歩いていった。時計は午後の1時を回り、下校する生徒の姿もまばらだ。

「小谷野先生に、三者面談の準備を頼まれていてね。月曜から早く行かなきゃならないんだ。帰りも判らないし」

萌子たちの不安を解くように、久志は小さく微笑んだ。

「あちゃ。そっぴゃ、もうそんな季節か」

薫はホッとした表情を浮かべ、それからいかにも『思い出しまつたあ』というように、自分のおでこを軽くピシッと叩いた。それから、

「じゃあ、先生も面談やるの？」

そんな風に好奇心旺盛な目をしてみせた彼女に向かって、久志は穏やかな笑みを崩さずに、

「まさか。僕なんかが面談したら、お母さんが不安がっちゃうよ」

小谷野は萌子たち三組の担任だった。久志は確か三組・四組の副担任のはずだが、彼が福女に来て以来そっぴゃ『副担任』らしい仕事をしているところを見たことがなかった。

「資料作りを頼まれているんだ。飯塚先生からもね」

久志はそう言って、四組の担任の名前も挙げてみせた。

「そっぴゃ。三者面談って、来週からだっけ？」

「ああ」

「じゃあ、今月いっぱいくらいまで一緒に登校出来ないんだ」

「……そうだね」

薫にそう問われて、久志は何故か物憂げな顔つきで中途半端に頷いた。

朝は逢えなくても、放課後にはいつものように逢えるのだから。淋しくない言い訳を頭の中で唱えながら、萌子はちよっぴり淋しい気分のまま薫を見やった。ほとんど同時にこちらを振り向いた薫と、一瞬視線が絡んだ。

ベツチャー祭りの翌日、薫は少し辛そうな顔で萌子たちの前に顔を出した。

『ホントに、大丈夫か？』

気遣わしげな久志に向かってただ微笑んだ彼女は、前日のことを問い尋ねるような素振りも見せなかった。

抜け駆けをしてしまった。そんな罪悪感に似た気持ちを、萌子は心の中で膨らませていた。それは自分勝手な妄想だと判っていたし、三人の距離が何か変わった訳ではなかったけれど、心に澱のように張り付いたもやもやとした気持ちは、それからいつまでも離れようとしなかった。

「センセが一緒じゃないなら、しばらくそこら辺でオトコノコを引っ掛けて帰ろうかしら」

悪戯っぽく蠱惑的な笑みを浮かべてそんなことを囁く薫に、久志は一瞬苦しいような表情を浮かべた。それから、周囲のざわめきに消え入りそうな小さな声で、

「あの、さ」

「ん？」

「この際、学校の行き帰りに一緒に通うの、辞めないか」

「え？」

萌子たちは虚を突かれたように久志に目を向けた。

「なんでよ」

いつになく棘のある口調で薫がそう詰め寄る。

「いや……」

後ろめたさを露わにして、久志はとつさに視線を逸らすと、

「やっぱり、まずいんじゃないかなって思ってたね」

「何が？」

「……教師が、特定の教え子とばかり一緒にいるのは良くないかなって」

「……ふん」

薫が小馬鹿にしたようにそう鼻を鳴らした。

「先生も、やっぱただの先生なんだね」

「？」

『意味が判らなかった』という風に、久志は少し情けない曖昧な笑みを浮かべて、小首を傾げてみせた。

「世間体ばかり気にしてるってこと」

「薫っ！」

辛辣な口調を咎めるように、萌子はそう口を挟んだ。

そんな風に見られる可能性を、萌子はちつとも考えていなかった。それはきつと久志のことを、無意識の内に他の教師と区別して見ていたせいなのだろう。『教師』という感覚で見ていなかった、と言った方が正しいのかもしれない。

『先生』と呼んでいたって、ホントは二人とも歳の離れた兄を慕うような気分だったのだ。

「誰かに、言われたの？」

そう問い返す傍らで、萌子はベツチャー祭りの光景を思い浮かべていた。もし、あの日のことを誰かに見られていたら……。

「いや、そんなことは……」

先生は嘘をつけない。一瞬視線を外した久志を見て、萌子は直感的にそう思った。面差しの硬さが、事実を如実に物語っている。

言い知れぬ不安が、不意に胸をかすめた。

初めて感じた『分かり合える』という感覚。それを根こそぎ奪わ

れてしまうような、そんな悪夢に似た予感。

失いたくない。臆病な思いが、唐突に萌子の胸の中を駆け巡った。

「仕方ない、ですよね」

逢えなくなる訳じゃない。萌子はもう一度自分にそう言い訳をした。

「生徒と登下校するのも恐がつてるようじゃ、休みの日にあたしたちと出掛けるなんてもつての他、よね？」

薫がそう久志を上目遣いで見上げた。その口調にはまだ棘がある。

「明日、誘おうかと思ってたのに」

「？」

「入舟町の『ドロス』で、パーティーがあるの」

「『ドロス』？」

「聞いたことない？ ピザハウスなんだけど」

それは、福山の学生のあいだではちよつと有名な店だった。30人程度は入れるパーティールームがあり、福女の生徒も大会の打ち上げなどにしよつちゅう利用している。

「そこで、龍太たちのバンドの打ち上げパーティーがあるの。明日

日

『監視役に、ついて来ます？』

いつもの薫なら、そんな軽口の一つも叩いただろう。けれども彼女は、恐いくらいの挑むようなまなざしを決して崩そうとはしなかった。

久志もまた、硬い表情を和らげようとはしなかった。

「どっちにしても、明日は用があるから」

「あら」

薫は嫌みったらしく大げさに驚いた仕草をみせると、

「休みの日は、断らなくたっていつも暇なんじゃなかったっけ

？」

薫のそんな揶揄にも、久志は苦笑いを浮かべるだけでまともに取り合おうとはしなかった。

「東京？」

萌子は思わず素っ頓狂な声でそう問い返した。

「うん」

龍太はそう深く頷いて、聞き覚えのある大学の名前を一つ二つ口にしてみせた。

パーティーはもう佳境に入ろうとしていた。熱気に火照った体を冷ますように三人は部屋を抜け出して、宵闇の街角で風に身を委ねていた。

酒に酔った訳ではない。未成年はアルコール厳禁の、いたって生真面目なパーティーだった。

バンドを支えてくれている人たちへ、感謝の気持ちを込めたパーティー。

龍太のその言葉の通りに、参加した面子はライブでいつも顔を合わせる同世代の少年少女たちばかりだった。

「……このままじゃ高校卒業したってすぐにプロでやれる訳じゃないしさ。でもせっかくだからもう少し夢を追っかけてみたいし。親もうるさいから、大学に進んでバンド続けて行こうと思ってるんだ」

そんな20人近い参加者の中で、何人かその場にそぐわない年嵩の行った男性がいた。それが、龍太たちに目を掛けてくれているプロデューサーだった。彼らの正体を知った瞬間、萌子は龍太がいつの間にか自分たちと違う世界にいることに気付かされた。

「親の金でやりたいことやる時間を作れるんだからね。こいつを利用しない手はない」

そう言つて龍太は、彼らしい華やいだ笑顔を浮かべた。

「……で、東京なの？」

微かに擦れたような声で、萌子はそう問い尋ねた。その傍らで、薫が不自然な笑みを浮かべている。薫は知っていたんだ。瞬間的に

萌子はそう悟った。

「で、東京なんだ。ま、それなりに野望もあるからね。別に東京に出たからってデビューの道が開けるとか、世の中そんなに甘いものじゃないってのは良く判ってるんだけど。でも、東京にいればデビューのチャンスは必ずやって来るって、そう言ってくれる人もいるし」

東京に出る。それは結構シヨクな響きだった。

萌子の学校も一応は進学校だから、彼女の周りでもそろそろ受験話が飛び交っている。萌子にはとても考えが及ばないことだが、大阪の大学を受ける娘も何人かいることだろう。

けれども東京の大学を受ける、という話は聞いたことがなかった。龍太の高校も萌子たちとさほどレベルが変わる訳ではない。男子ならば、東京の大学を視野に入れてもおかしくないのかもしれないが……。

「萌子はどうなんだ？」

「え？」

ぼんやりとそんなことを考えていた萌子は、不意に質問の矛先を向けられてうろたえたように龍太を見つめた。

「どこの大学を受けるとか、決めてるのか？ やっぱり美術系？」
そう問われて、萌子は力無く首を振った。

絵を描くことに対する情熱が、自分自身どれくらいあるのか良く判らない。それが、萌子が将来に対する希望を描けない、一番の理由なのかもしれない。

むろん母の職業に対する憧れはある。それは、高校に入ってからますます強く惹かれるようになった。けれどもそんな思いに反発するように、実際のところ萌子は久志が赴任して来るまで、むしろ部活動とは距離を置いていたのである。

自分の実力を図ることもせずに、どこか諦観した気持ちを抱いているのも確かだった。理想の高さと自分が感じている実力とのギャップに、いつしか萌子は何となく絵を描くことそのものが億劫にな

ってしまっていた。

「私の実力じゃ美大を受けるのはちょっとね。普通に大学に行つて、サークルか何かで続けるとは思っけど」

そう自嘲するように、萌子は首を軽く横に振った。

「そっか……」

龍太はそう声を落として頷いた後で、薫のほうを向いて、

「薫は大阪の大学、か」

「え？」

「やだなあ。まだそんなこと決めてないわよ」

驚いたように萌子が視線を向けると、薫は照れたようにそう笑った。

そんなの聞いてない。龍太の告白以上にショックを受けて、萌子は恨めしそうに薫を見つめた。

でも、考えてみればそれはとても自然な成り行きなのかもしれない。中堅校といえども、福女でトップクラスの成績を上げるということは生半可な出来ではない。確かに彼女ならば、その辺の国公立くらい現役で軽くクリア出来るだろう。

みんないつかは離れ離れになってしまうんだ。そんなことは前から判っていたつもりなのに、現実が姿を現すと途端に萌子は臆病なウサギみたいな気分になった。

「……そっか。寂しくなっちゃうね」

萌子がぼつんとそう呟くと、薫と龍太は思わず顔を見合わせた。

「いや、でも、休みになればこっちに帰って来るし、こっちでもまたライブをやるだろうから……」

ずっと離れる訳じゃない。龍太はそう言い訳めいた台詞を吐いた。もしかしたら、これが最後なのかもしれない。ふと、そんな漠然とした予感が萌子の胸を捕らえた。こんな風に、過ぎていく光景の全てが愉快で美しい時間は。

「そうよ。それに、龍太が東京の大学に受かるとは限らないし、むしろ可能性低いんじゃない？」

相変わらず辛辣な台詞を並べた後で、薫はちよつと意味深な口調で、

「それだったら、あたしだって東京の大学、受けちゃうかもよ」

「……」

「さて、と」

黙り込んだ幼馴染を尻目に、薫は何食わぬ顔をして、

「そろそろ、箱入り娘を送っていかなきゃね」

もう時刻は11時を回ろうとしていた。賑わう歓楽街にも、微かに深夜の匂いが漂い始めている。

「荷物、取って来るよ」

そう踵を返しかけた龍太を薫は手で制して、

「いいわよ。あたしが取って来る」

「薫……」

「二人で、しばしご歓談を」

やけに愛想良く笑顔を振り撒くと、薫はそれこそスキップでもし兼ねない勢いで店の中へと戻って行った。

ご歓談を、と言われたって何を話していいのかちつとも思い付かなかった。だいたい龍太と二人きりになるなんて、あまり経験のない出来事だったのだ。

「……決めたの？」

「え？」

思い付いたのは、結局この話題だった。

「東京、行くこと」

「……ああ」

（薫はどうするの？）

本当に訊きたかったのは、口に出来なかったその言葉だった。

龍太の薫への気持ちは、単なる勘違いなのだろうか。それとも、諦めるために福山を離れるつもりなのだろうか。

「萌子は、さ」

視線を伏せたまま、龍太はわずかなためらいを含ませてこう尋ね

た。

「東京に、出る気とかはないの？」

「私が？」

不意を突かれたように目を丸くして、それから萌子はくすくすと笑い出した。

「……笑い事じゃないんだけどなあ」

「だって、お母さんが許してくれるはずじゃない。せいぜい行けるとしても広島か岡山の大学よ」

不満げな顔の龍太を横目で笑いながら、けれどもその時萌子は全く別の思考に行き当たっていた。

『もしかしたらさ、春にはここにいないかもしれないから』

もし萌子が東京の大学を受けるとしても、彼女が上京するのは再来年の春の話になる。来春、久志が尾道を去るとして、2年後の春に彼は東京にいるだろうか。

そこまで想像を巡らせてから、萌子は急に自分のことが可笑しくなった。

（私はいつたい、何を望んでいるというのだろうか）

これから久志とどうなりたいのか、彼女自身よく判っていないかった。例えば想いを告げるとか、そんなことは不思議と頭に浮かばなかった。

その想いは、恋愛感情というよりむしろ『盟友』に対する気持ちに近いものなのかもしれない。今の萌子には、久志とこの先『特別な関係』になるということは、想像し難いものだった。

あるいは、もうすでに二人の立場は特別なものなのだと、彼女の中ではそう思ったがっていたのかもしれない。

（春になったら、彼は私の視界から消え去ってしまうかもしれない。その時に、その時までには私は何を望むのだろうか……）

「お待たせ」

胸の内に湧いた問い掛けに答えあぐねていると、じきに薫が店から姿を現した。

「さ、行きましょ。お嬢様」

薫は偉ぶってそんなことを言っているが、本当は逆だった。母子家庭の澤崎家は娘の行動に割とルーズだったが、水谷家は一人娘を腫れ物みたいに扱う。特に彼女の父は、娘を溺愛していた。

その娘が『慈善事業』しているなんて、口が裂けても言えない。そう思っただけは可笑しくなった。玲子ですら許してくれそうにないのだ。あの親では、東京はおろか大阪の大学だって許してくれないのではないだろうか。

「ごめんな、送っていけなくて」

「当たり前じゃない」

申し訳なさそうな表情を浮かべた龍太に向かって、薫は『当然でしょ』というような顔をした。

「ほら、主役はさっさと戻った戻った。みんな探してたわよ」

「うん……」

龍太はそう力なく頷くと、

「しばらく、逢えないな」

「え？」

「バンドも、しばらく活動休止なんだ」

「……」

「受験、備えなきゃ」

「あ、そうか」

「まったく、信じられないよ」

元気を空回りさせるように、龍太はわざとらしく笑って、

「この俺様が予備校通いだぜ？ 今の学校だって、サイコロ転がして受かったっていうのに」

龍太はそう戯けてみせたが、実際のところ彼は小学生の時から学年で五指に入る秀才だった。

「ま、また遊ぼうぜ。あ、そうだ」

と言って龍太は、急に明るい顔になって、

「クリスマス、またやるんだろ？」

「……うん」

水谷家が隣に引っ越して来てから、毎年交互にどちらかの家でクリスマス・イブにパーティーをやるのが、水谷家と澤崎家の恒例行事となっていた。去年は薫の家で、龍太も招いて行った。彼の即興ライブが、とても好評だった。

「じゃ、その時な」

龍太はそう言って、さっぱりとした顔つきで笑ってみせた。

別れ際に龍太は、女の子だけで歩くには少し危険な、いかがわしい路地を教えてくれた。

「少し遠回りだけど、大通りを歩いたほうがいい」

ところが薫は、そのいかがわしい界限へ足を向けようとした。

「大丈夫よ。別に暗がりを書く訳じゃないんだし」

「でも……」

その先は。そう言いさして、萌子は言葉を飲み込んだ。

たと言ったことがなくても、その先に何かがあるのかくらい萌子にだって判っていた。

「この先に駅への近道があるの。何回も来たことがあるから、間違いないわ」

（そっか……）

何回も来たことがあるのか。とても平静な気持ちで、萌子はその台詞を受け止めた。

薫がしょっちゅう連れ添う男性を換えていることは、いわば公然の秘密だった。けれども萌子はその内の誰一人として『彼氏』として紹介されたことはない。薫の口から『彼氏がいる』と聞かされたのも、中学１年生の時ただ一度だった。

彼女の中で、それ以外の関係はきつと恋ではないのだろう。たとえそれが、こんな場所を訪れる間柄であっても。

艶やかなネオン街を抜けると、辺りは忍ぶように急に薄暗くなった。各々の入り口を照らす暖色系の明かりと、料金が表示されたパネルの白い明かりが、仄かに二人を包み込む。

その通りは、福山でも特にラブホテルが密集した一角だった。その仄暗さのせいか、それともすれ違う男女の意味を意識したせいなのか。萌子は妙にドキドキしていた。それはまるで、幼い頃に廃屋で遊んだ時のような不安定な気持ちだった。

前を行く薫は、すっかり手馴れた様子で歩みを速めている。遅れまいとして、萌子もつい歩調を速めた。

「……きゃっ」

いきなり足を止めた薫の背中に、萌子はしたたかおでこをぶつけた。

「ちよつと！ どうしたの？」

「……萌子、あれっ！」

小さくヒステリックな声で、薫がそう呼んだ。

「え？」

薫が指差す道路の対岸が、萌子は初めの内よく見えなかった。

何も変わつたところなどない。この通りではごく当たり前なカッブルが、一組歩いているだけだ。手を繋ぐ訳でもなく、むしろ少し離れぎみに歩いているところが、変わつたところといえば変わったところだろうか。

対岸の二人が、仄かに明るい一角にさしかかる。見覚えのある横顔が光の中に浮かんだ。

「あれ、立花ちゃんと黒沢だよ」

気付いた瞬間から、心臓がしゃっくりしているみたいにドクドクと蠢き始めていた。気色の悪い緊迫感が体を包み込む。

（どうして……）

混乱しかけた萌子の頭に追い討ちを掛けるように、薫の声が直接響いた。

「今、ホテルから出て来たみたいに見えた」

この通りを歩く、男と女の意味。ただの通りすがりでもなく、抜け道を急いでいる訳でもない。それに今、確かに薫はこう言った。

『ホテルから出て来たみたい』と。

血の気が引いたように手足が冷たかった。鏡を見なくとも、顔が青ざめていることは自分でも気付いていた。呼吸の仕方を忘れたように息が詰まる。胸が苦しい。

二人の姿が通りの向こうに消えるまで、萌子も薫も呻き声一つ立てることなくただ立ち尽くしていた。頭の中が真っさらになるのを感じながら萌子は、

（夢なら覚めて欲しい）

知らず知らずの内にそう祈り続けていた。

第四章 すれ違い（3）

「来ない、みたいだね」

放心したような口調で、薫がそうポツリと呟いた。

来るはずがない。2日前、久志は確かに言ったのだ。『来週から、一緒に通えなくなる』と。

月曜の朝、萌子たちはしばらくのあいだ駅で久志が来るのを待つてみた。

別に久志の言葉を忘れていた訳ではない。もしかしたら二人とも、週末の出来事は何から何まで信じたくなかったのかもしれない。

「……いこつか」

ようやく夢でないことに気付いたように、薫は諦めた口調でそう言った。

「……うん」

二人は口数少なく、尾道駅の改札をくぐった。

階段を登る親友の横顔を覗き込んでみると、それに気付いた薫がわずかに眉を顰めた。

「なに？」

「ううん。何でもない」

その横顔に疲労の跡が窺えるかどうか、萌子にはよく判らなかった。普段と変わらないようにも、少し疲れているようにも見える。

やっぱり寝つけなかったのかしら。萌子はそんな風に思った。

昨夜、萌子はなかなか寝つけなかった。淡いネオンの光に映し出された二人の姿を思い出し、そこから二人の関係を嗅ぎ出そうと必死になった。けれども、そう思えば思うほど記憶は曖昧に薄れ、しまいには二人を目撃したのさえ本当のことだったのか判らなくなってしまった。

悩み疲れて眠りに落ちた彼女が見た夢は、竹原の民家の光景だった。仄暗い家屋の格子越しに見える眩い通りを、久志と黒沢がゆっ

くりと歩いている。微笑み合い、愛しみ合いながら。

あんな場所を歩いていたことよりも、久志が女性とあんな時間に歩いていたことの方が、萌子は正直ショックだった。

『やっぱ、歳の差には勝てへんのかね』

昨夜、福山駅への道すがら薫が唐突に呟いた一言が、不意に萌子の脳裏をかすめた。

黒沢美代子は、福女に来る前に広島の高校で3年勤めたという話を聞いたことがある。だから、確か年齢は27〜28歳のはずだ。

萌子たちからしてみれば充分に『おばさん』の領域に入る年齢だが、久志とは5歳ぐらいしか変わらない。ちょうど萌子と久志の年齢差と同じくらいである。

端から見れば、教え子である萌子を選ぶよりも美代子を取る方が、ごく自然で常識的なことなのかもしれないなかった。

（薫と比べるのならともかく……）

今までの恋なら、きっとここで諦めてしまっていただろう。当たり前前の結末に、どこかで納得しながら。

けれども今の萌子は、俄かには現実を受け容れ難い気分になっていた。昨夜のことと何かの間違いだと、直感めいた気持ちで頑なにそう信じ込もうとしていた。

あの日千光寺山で知った、久志と出逢ってからずっと感じ続けていた近しさの意味。愛おしさや共鳴する感情を、幻だと思っていたくなかった。

（確かめたい）

切実に萌子はそう思った。でもその勇気が自分にあるとは、到底思えなかった。

「立花先生、今日休みだって」

萌子の野暮つたいほどの気負いは、昇降口でいきなり腰砕けになった。

「え？」

「風邪引いたみたい。さっき職員室で言われたの」

下駄箱の手前でそう声を掛けて来た朋美は、萌子の顔を見て吹き出しそうになると、

「何よ、萌ちゃん。部活がなくなっちゃうみたいな顔をして」

月曜日は美術の授業が組まれていない。一緒に通わなくなった以上、彼に問い質せるチャンスは放課後の部活動しかなかった。それまでに勇気を貯めておこうと、萌子は知らず知らずの内に強張った顔つきになっていたのだ。

その緊張をいきなり突き崩されて、萌子は半泣きみたいな情けない表情になっていた。

とりあえず今日は確かめる術がない。そう思った途端、体中の力が抜けた。あまりに拍子抜けして、萌子は思わず笑い出しそうになった。

そうして萌子はやっと、少し落ち着いて物事を考えられるようになった。と言っても、もやもやした気持ちが晴れる訳ではなかったけれど。

「澤崎さん」

六時限目の前に黒沢にそう声を掛けられた時に思わずビクツとしてしまったのは、だからあんまりにも気が抜け過ぎていたからかもしれない。

遠慮がちなその掛け声に、萌子は驚いたように振り返った。優しい、白い光の束のような陽射しが長々と続く廊下に均等に差し込んでいる。

その白い束の一番手前に、黒沢が立ち尽くしていた。

「ちよつと、手伝ってくれる？」

その表情の硬さに、萌子は思わず昨日のことがばれたのかと思った。

久志も黒沢も、昨夜萌子たちが見ていたことには気付いていないはずだった。

黙ったままだ教師の顔を直視するという、あまり生徒に相応しくない萌子の反応にも、黒沢は意に介すことなく、そう言っ萌子

を文芸部の部室へ連れていった。

文芸部は、特別棟3階の入り口近くにある、小さな空き部屋を部室にしていた。文芸部の顧問でもある黒沢は、この部屋を自分の授業で使うプリントなどの置き場にしているのだ。

晩秋の午後の光が射す渡り廊下を並んで歩きながら、萌子は黒沢の横顔をちらつと盗み見た。

静やかな表情をした女性だった。彼女のすつとした面差しや眼鏡を掛けた姿は、ともすれば取っつきにくい印象を周囲に与えるかもしれない。

けれどもその眼鏡の奥の少し遠くを見ているような瞳は、たおやかで優しい感じを醸し出していた。

萌子は、黒沢の怒った姿を一度も見たことがない。そのまなざしと同じように、彼女はとても大人しい教師だった。

その刹那、萌子の胸に今まで感じたことのない激情が迸った。それはまるで風に吹かれた炎のように、一瞬激しく彼女の胸を焦がした。

部室に入る直前、萌子は廊下の遙か先をちらつと見据えた。

その奥の方に、美術室がある。

黒沢に声を掛けられて一瞬怯んだ気持ちだが、胸の中で徐々に盛り返して来るのを萌子は感じていた。

思えばこの時、萌子は悪戯な抑揚感と不安定な気持ちにすっかり舞い上がっていたのだ。猪突猛進。興奮した獣のように、ただ真っ直ぐにしか物事が見えていなかった。久志とのあいだに感じたあの穏やかな気持ちを、ただ一途に信じたい。盲目なその想いが、彼女を突き動かしていた。

部室の中はカーテンを閉め切っていて薄暗かった。小さい頃に覗き込んだ押入れの中のような秘密の匂いがする。

「これ、次の授業に使うから、半分一緒に持って行って欲しいの」
雑然とした部屋の奥の方にひっそりと鎮座している、デスクの上のプリントの束を指差して、黒沢は入り口で突っ立っている萌子の

方をちらりと見やった。

萌子はそんな彼女の顔を凝視した。

（何かの間違いだ）

根拠のない思い込みが、萌子の心を占めた。

部屋に踏み入ってプリントの束の上半分を持ち上げた萌子と、黒沢の顔がぐつと近付いた。

「先生」

平静を装ったつもりになって、萌子はそう鋭く切り出した。

「昨日の夜、入舟町の辺りにいませんでした？」

萌この問い掛けに、黒沢の反応は鈍かった。訝しげに首を傾げる仕草に、萌子はいらいラツとした。

（とぼけてる）

「どうして？」

「昨夜、先生のこと見かけたんです」

畳みかけるような問い詰めにも、黒沢は能面のように表情を動かさなかった。

「そう。昨夜は……先生たちと飲んでたから」

何だ。やっぱり勘違いか。

萌子はそう思い、ふつと気を抜いた。

今、黒沢は確かに『先生たち』と言った。

（立花先生だけじゃなかったってこと……）

きつと他の先生と別れた後で、二人で駅に向かっていたのだろう。あれはきつと薫の見間違いだったのだ。

都合の良い解釈かもしれない。自嘲するような思いが一瞬頭の中を駆け抜けた。

「仲、良いんですね」

少し皮肉るようにそう言葉を発してしまったのは、胸の内に湧いた疑惑を払いのけるように、急に首をもたげた嫉妬心からだった。

「え？」

「休みの日にまで飲みに行くなんて、先生たちってずいぶん仲が

良いんだなあ、て思つて」

この時萌子は、あくまでも『教員同士の仲』を揶揄したつもりだった。ところが黒沢は何を勘違いしたのか、急に鋭い口調になって、「誰のことを、言つてるの？」

「……」

「……なに、を」

「え？」

「昨夜、なにを、みたの？」

黒沢の声は怯えていた。薄暗がりの中で気付かなかったけれど、彼女はいつの間にか表情を強張らせたまま青ざめていた。

「私たちを、どこで……」

「……ホントは、高松町で」

その地名は、あのラブホテルが密集した辺りのことだった。

今度こそはつきりと、黒沢は驚愕の表情を見せた。プリントの束に手を掛けたまま、彼女はキツと萌子を見据えた。

訊かなければよかった。言わなければよかった。激しい後悔が萌子に襲い掛かった。

どうしていつもこうなのだろう。臆病なくせに、肝心なところで余計なことをして足を踏み外す。訊かなければ、もう少しだけ幸せでいられたのかもしれないのに。

「……出て来ると、見たの？」

正確に言うと、その場面を見た訳じゃない。けれども、萌子は気圧されるようについ頷いてしまった。

萌子が頷くのを見て、黒沢は思わず手で顔を覆ってしまった。その刹那、ざらついた感触が萌子の胸を撫でた。

ダメだ、と思った。次の台詞を想像しかけて、萌子の中で全ての思考が停止した。

「ホテルから出て来たことだけは、誰にも言わないで」

黒沢の声は今にも泣き出しそうだった。いや、もう半分泣いているのかもしれない。

「私、先生じゃいられなくなる」

『ホテルから出て来たことだけは』

その後の台詞は全く耳に入って来なかった。ずっと血が引いていくように、ゆっくりと心が醒めていく。遠ざかる感情の中で萌子は、

（ああ、また一人ぼっちになっちゃうんだ）

そんなことをぼんやりと思っていた。

第四章 すれ違い（４）

いつのまにか、ここに来ていた。

志賀直哉旧居の一段下に位置する尾道市文学公園の四阿からは、程良い高さで尾道水道を望むことが出来る。

平日のせいかな、あるいはこんな時刻のせいかな、辺りに人影は一つもなかった。

結局あの後、黙り込んだまま動かなくなった黒沢を置いて、萌子はプリントの束を半分持つて教室に戻った。次の一時限、萌子は嵐をやり過ごすように伏し目がちで無心に過ごした。黒沢の授業内容など、一つも頭に入らなかった。

放課後、久志と顔を合わせる勇氣もなく、薫を待つのも億劫で一人街をうろついていた萌子の足は、氣が付けばこの公園を目指していた。いつもなら足を向ける『都わすれ』にも寄らずに、萌子は四阿から見える尾道の街の夕暮れを、ふぬけたように見つめていた。

時の流れがもう一捌けしたら夜空に変わってしまいうような、向島の上に広がる空はそんな深い群青色をしていた。夕暮れの街の喧噪が麓から立ち上がって来て、萌子の耳元で微かに響き渡る。彼女の周囲は、それとは対照的な静けさの中にあっただ。

たった一本の白銀灯の明かりが、狭い園内に微かな陰影を描き出していた。こんな寂しい風景が、今の自分には一番似合っているような気がする。

何故久志と顔を会わせ辛くなるのかと問われたら、何とも答えようのない立場にいるのだということを、きりきりと胸を痛める傍らで、萌子は妙に冷静に考えていた。

二人のあいだに特別な感情が存在するなどというのは、呆れるくらい見当違いの妄想だった。

ただ境遇が似ているというだけで、年端もいかない自分の教え子に特別な想いを寄せるような、久志はそんな教師ではなかったのだ。

（もしも……）

もし仮に、久志の中に萌子に対するそういう種類の感情が存在したのだとしても、それと恋愛感情とは全く別ものなのだ。

それと同時に、ただそばに居られるだけで良いなんて幼稚な考えが、ただのまやかしに過ぎなかったのだということも、萌子は痛切に感じていた。

正直なところ、久志のことがどれくらい好きなのか、萌子は今までよく判らなかった。想いを募らせる一方で、いつかこういう日が来ても平静でいられるような、そんなどこか樂觀した気持ちが彼女の心の片隅にはあった。

（片想いになら、慣れていたはずなのに……）

けれどもそんな綺麗事は、本当は自分の心の中にこれっぽっちも存在していなかったのだと、萌子はいまさらながらに気付かされていた。

夕暮れの風は、夜気を帯びて冷たいくらいだった。こんな夕闇の気配の中には、確かに訪れる冬の匂いがある。

冷え切った空気を、萌子はむせるくらい目一杯吸い込んだ。それでも、心の内側から膨れ上がって来るような哀しみは消えてくれようとはしない。

今は、彼の名前すら思い浮かべたくなかった。何も想いたくなかった。ほんの少しでも心を動かせば、体中が悲鳴を挙げてしまいそうだ。

それなのに、気付かぬ内に萌子は久志との想い出をなぞるようにこの場所を訪れていた。

萌子は静かに腰を上げた。そして、狭い園内をゆっくりと歩いてみた。わずかに見上げた先に、窓辺から光こぼれる『都わすれ』の白壁が見える。寒々とした薄闇の景色の中で、その光景だけはとても柔らかな暖かみを持っていた。今の彼女には無縁の。

あの窓辺で、久志と言葉を交わしたのはいつのことだっただろう。萌子はそんなことを思い浮かべてから、ふっと一人笑いを漏らし

た。わずか2週間ほど前の出来事を、まるで遠い昔を懐かしむように振り返っている自分が、妙に可笑しかったのだ。

萌子はこの場所から始まったあの日のルートを思い出すように、闇に沈んでゆく山の方をゆっくりと視線でなぞってみた。

（タイル小路、御袖天満宮、福善寺、西国寺……）

あの日、久志は二人で歩く時間をとっても楽しそうに過ごしていた。萌子は、ずっとそう思っていた。

（先生は、ホントは楽しくなかったのかしら）

判らない、と思った。萌子はすっかり自信が失くしていた。思い出そうとすればするほど、あの時の久志の記憶は曖昧に脆く崩れ去ってゆく。

あの日『都わすれ』を訪れた時、訝しげに彼女の背後を気にした久志のその視線の意味を萌子は恐れた。けれども本当は、久志はただ自分の教え子たちが可愛くて、あの日の誘いに乗っただけなのかもしれない。

不意に、涙がこぼれた。悲しいのか寂しいのかそれとも虚しいのか、その涙の意味を一つも掴めぬまま、萌子は声も挙げずにただ頬を濡らしていた。

「萌ちゃん？」

突然そう名前を呼ばれて、萌子は弾かれたように振り返った。

逆光の中に誰かが立っている。眩しげに目を細めた萌子は、それが誰なのかすぐに判った。

「やっぱり萌ちゃんだ」

『都わすれ』のマスターだった。いつかと同じように、いくらか気弱そうな笑顔を浮かべて突っ立っている。

あまりに突然のことで、萌子は濡れた頬を拭うことさえ出来なかった。この距離と明るさで萌子の泣き顔に気付いたかどうか定かではないが、マスターは少しだけ表情を曇らせて、

「そんなところにいちや寒いだろう。おいで」

そう言っ、店内に誘うような態度を示した。

しばらくためらってから、萌子は大人しくマスターの後を追った。店に入って初めて、萌子は自分が体の芯まで冷え切っていたことに気付いた。店内の温もりが、冷たかった体と一緒に心まで溶かしていくようで、萌子は少しずつ気持ちさがほぐれてゆくのを感じていた。

店の中には1組のカップルしかいなかった。入って来た萌子たちに気遣う様子もなく、二人だけの世界を作り出している。あの日は、至る所にそんなカップルがいた。

あの日萌子たちが座った席は、もちろん今は誰もいなく綺麗に片付けられている。ぽつんとしたその空間が、今の二人の間柄そのものを現しているようだ。

目を真っ赤にした萌子にマスターは何も問い尋ねようとはせず、彼女をカウンター席に座らせると、カウンターの中に入って何かを火に掛けた。

しばらくのあいだ、萌子が所在なげに店内を見回していると、やがてコトリと音を立てて大きなマグカップが彼女の目の前に置かれた。

カップの中で真っ白なミルクが湯気を立てて揺れている。萌子は黙ってマスターを見上げた。

「お飲み。暖まるよ」

そう言ってから彼は、これから告げる台詞に口にする前から照れてしまったような笑みを浮かべて、

「寒いと、余計に辛くなっちゃうからな」

そう言っただけを向いた。

また目頭が熱くなって、萌子は俯いて鼻頭をこすった。それから、カップの温もりを確かめるように両手でそっと包み込んだ。

喉元を通る人肌ほどの温もりが、マスターの優しさだった。最後の客が去り、店内のざわめきが有線のささやきだけに変わっても、彼は後片づけに没頭したまま萌子に一言も声を掛けて来なかった。

萌子の中で、あんなに頑なだった何かが氷解するようにほどけて

いった。そうして彼女は、やっとその哀しみを冷静に受け止められるようになった。今まで彼女は、哀しみを感ずる感覚まで麻痺させてしまっていたのだ。

久志への扉を突然閉ざされて、途方に暮れる自分がいた。繋がっていると思っていた糸が、途中でぶつとりと断たれてしまったような気分だった。何の根拠もなく、無邪気に信じていた自分が、ひどく愚かに思えた。

萌子は小さく笑った。ホントに莫迦みたいだ、と思った。

なぜ、あんなにも信じていることが出来たのだろう。自分と先生が、同じ境遇という絆で結ばれているということ。ただそれだけで、二人の関係を特別なものだと思えたことが、今はとても不思議な感覚に思えた。

萌子は、そつと窓辺の席を振り返った。

（それでも……）

それでも、まだ確かなことが二つある。萌子はそう思った。

一つは、それでも二人の共有する想いだけは同じはずだということ。

そしてもう一つは、今でも久志が好きだという事実だった。

第四章 すれ違い（5）

そろそろ薫が迎えに来る（つまり、萌子が迎えに行くべき時間はとうに過ぎている、ということ）時間になっても一向に起き出す気配を見せない娘に、さすがの玲子もしびれを切らしたらしい。階下から大声を出すという方法を諦めて、彼女はどたと大きな音を立てて2階へと上がって来た。

「萌子！ いい加減にきなさい」

玲子は部屋の入り口でその声を張り上げると、ベッドに歩み寄って萌子の寝顔を覗き込もうとした。

「……薫に、先に行つていいよつて言っておいて」

頭から布団をすっぽりと被ったまま、萌子はもごもごとそう告げた。

「あら、どうしたの？ 調子でも悪いの？」

途端に玲子の口調が心配そうなものになった。

「うん。頭がちよつと痛い……」

「どうするの？ 学校休む？」

「ううん。学校は行く」

「そう？」

玲子はそう気遣わしげな声になってから、それでもどうしても一つ小言を言いたかつたらしく、ちよつと口を尖らせて、

「毎晩、あんなに遅くまで外をほつつき歩いているからよ。もう寒いんだから」

そつばやいた。それから、急に声色を変えて、

「無理しなくてもいいのよ」

そつ言い残して部屋を出て行った。

最後の、娘を気遣うような母の物言いがつい気に障る。そんな的外れな苛立ちが、後ろめたさから来るものだということは、彼女自身薄々気付いていた。

頭に軽い痛みがあるのは本当だった。

昨日はなかなか寝つけなかった。軽い眠りに落ちると、心の底から湧き上がって来るような恐怖心に揺さぶられるように目が覚めるのだ。目覚めて、哀しい現実気付くと胸が苦しくなった。

襲い掛かって来るような悪夢を見た感触と、目覚めた後の胸苦しさに、その内萌子は眠りにつくことが出来なくなった。

夜明け前に軽くまどろんだが、寝覚めの気分はかえって悪かった。目覚めてすぐに、萌子は口の中に苦い渴きを覚えた。

布団の中で、夜が明けたことをぼんやりと思った。あんなに哀しい夜も明けるのだという事実が、不思議なことのように思えた。

そして目覚めてすぐに、誰にも会いたくない、と思った。

こんな馬鹿げたことを、そうそう続けられるものでないことは萌子にも判っていた。何しろ学校に行かない訳にはいかないのだし、学校に行けば薫にも、久志にも顔を会わせることになるのだから。ごろんと横を向くと、萌子は掛け布団から少しだけ顔を出してみた。

カーテンの隙間から、低い鈍色の空が見えた。冬の訪れを告げるような、寒々とした灰色の空。布団からはみ出た手の甲が、ひんやりとした空気に触れる。

さびしい、と思った。訳もなく、萌子は自分が地球上で一人ぼっちになってしまったみたい感じがした。心が、芯から冷えて行くような感覚。

（いや、いつそのこと独りぼっちになってしまった方が、気持ち が楽になれるのかもしれない）

今でも久志と逢えるということは、私にとって本当に幸せなことなのだろうか。そんな胸を切り刻むような疑問が、萌子の脳裏をふとかすめた。

けたたましいほどの喧噪が、萌子には救いだった。

始業前のざわめきに満たされた教室に入ると、萌子は大人しく自分の席へと向かった。

「あら、萌子今頃来たの？」

晴美が目敏く萌子に気付いて、その声を掛けて来る。萌子が困ったような曖昧な笑みを浮かべると、晴美はそれ以上突っ込んで尋ねて来ようとはせず、すぐに話し込んでいた恭子の方へと向き直った。薫は自分の席で文庫本に目を落としていた。その後ろ姿が自分を拒絶しているようで、萌子はしばらく声を掛けられずにいた。

「あら、来たの？」

やっと萌子の存在に気付いたような素振りで、薫は意外そうな表情を浮かべた。

「大丈夫なの？」

「うん……ごめん」

「別に謝らなくてもいいけどさ」

薫は、一瞬物言いたげな目つきで萌子を見上げて、それからすぐに視線を逸らした。

昨日のことを話そうかと思って、萌子はすぐに考え直した。

そんなことを話して何になるのだろう。萌子は自分が哀しみに明け暮れる仲間を増やそうとしているみたいで、嫌気が射した。

話し掛ける訳でもなく、萌子はしばらく薫のそばに立ち尽くしていた。それに気付いた薫が、再び萌子を見上げる。

「……薫」

「ん？」

「あたし、もう大丈夫だから」

何が大丈夫なのだろう。そう自問しながら、萌子はいつしかそんな台詞を口走っていた。

薫はしばらくのあいだ黙ったまま、不自然なほど長く萌子の顔を見つめていた。その瞳を見つめてみると、萌子の胸はざわざわとさざめいた。

その瞬間、萌子はぽつんと宇宙の片隅に放り出されてしまったよ

うな気がした。今まで、どんなに辛いことがあっても決して失ったことのない大事な支えを、いきなり外されてしまったような感じがした。

「萌子」

「え？」

「あなた、もう大丈夫なの？」

問い詰めるような、鋭い口調だった。その語気に蹴落とされたように、萌子は弱々しく頷く。

「う、うん……」

「そう」

何だろう。萌子は抗い難い悪夢にうなされているような気分になった。

「もう、何ともないのね」

「……それ」

それ、どういう意味？ そう問い尋ねようとした刹那、立て付けの悪い教室の前の扉ががたと開いて、一時限目の教科の担当教師が入って来た。みんなが脱兎のごとく席に着く一時の喧噪の中で、萌子の漏らしかけた台詞は宙に浮いた。

気付かれているのかもしれない。不意にそう思った。私の拙い恋心なんて、簡単に見透かされてしまう程度のものだったのだ。薫にも、もしかしたら久志にも。

その日1日、萌子は休み時間になっても薫とほとんど会話らしい会話を交わすことが出来なかった。

萌子たち三組は、火曜日の四時限目に美術の授業がある。

三時限目の授業が終わるまで、萌子は不思議なくらい久志の存在を意識せずに過ごすことが出来た。あまりのあっけなさに（自分の想いはその程度だったのか）と一抹の寂しささえ覚えたくらいに。

けれども、萌子の中のたぎる想いはそんな生やさしいものではな

かった。

美術室に移動するために席を立ち上がった瞬間から、津波が押し寄せるように感傷が襲い掛かって来て、萌子は一瞬頭が真っ白になつて立ち竦んだ。

ざわめく廊下を人並みを縫うようにして歩きながらも、彼女は胸を締めつけるような様々な想いに足下から突き崩されてしまいような感覚を味わっていた。

何もなかったことにしてしまおう。それが、今朝登校する道すがらずと胸に言い聞かせていたことだった。

まだ、自分の胸の内を何一つ明かした訳ではない。萌子が覚えた二人の近しさと久志への愛おしさは、まだ彼女の一方通行にしか過ぎないのだから。このまま、この想いさえ沈めてしまえば、何もなかったことに出来る。まだやり直しが効く。

それが、萌子なりの一つの結論だった。そして、この時はまだそれが可能であると、彼女はそう思っていた。

とにかく、美術室に着くまでに気持ちを沈めなくちゃ。落ち着こうとして、萌子は知らぬ内に周りが何も見えなくなっていた。

「澤崎君……」

遠慮がちな、懐かしささえ覚えるその声を聞いた途端、まるで路地裏から飛び出して来た子供とぶつかった時のように、萌子は心臓が急停止しそうになった。

それは、彼女が特別棟に続く渡り廊下にさしかかろうとした時だった。弾かれたように振り返った萌子の視線の先に、階段を降りて来た久志の姿があった。

「どうした？ 顔色が悪いぞ」

よっぱど青ざめた表情をしていたのだろう。久志は急に心配げな声になった。

少なくとも萌子には、彼が本気で心配している気配が感じられた。久志の、誰にでも向けられる優しい気遣いが、その瞬間萌子には憎らしかった。

「うん……」

まともに久志の顔を見ることが出来ずに、萌子は足下を見つめたままぎこちなくそう答えた。

逃げ出したい気分だった。先週まで、あんなに逢える瞬間を心待ちにしていたというのに。久志と顔を合わせることが苦痛になるなんて、想像すらしなかった。

気もそぞろな様子の原因がまさか自分のせいだなんて、きっと先生は気付きもしない。萌子はそう思った。それとも、

（それとも、やっぱり先生は薄々感付いているかしら）

気付いていて欲しくない、と思った。気付いていて欲しい、とも思った。恥じらいと、それでも募る思慕の念が、萌子の心の中で複雑に交差した。

結局、二人のあいだには気まずい空気が残らなかった。

もつと、上手く話したかったのに。ぎこちなくなりたくなかったのに。

（やっぱり、ダメなのかな？）

久志とのどんな未来を描くよりも、今はそれが哀しかった。

不意に久志が萌子の顔を覗き込んだ。萌子は脳細胞が全て初期化されてしまったみたいに、思考が停止した。

「ホントに顔色悪いぞ。あんまり、無理するな」

気遣わしげにそう言った後で久志は、

「僕の授業なんか、どうせ受験のためにならないんだから、無理して出なくても良いし」

そう言って笑った。あの穏やかな、今までよりももっと親しげな笑顔で。

もう駄目だ。気が狂いそうな思考の渦の片隅で、萌子はそう思っていた。

この想いを諦めることなんて、とても出来そうになかった。けれどもこの想いを捨ててしまわなければ、このまま身も心もちぎれてしまう。

高熱を出した夜のように、萌子は永遠に続くような苦痛を持て余しながら、久志の前に呆然と立ち尽くしていた。そう、父の姿を見失って改札口の前で立ち尽くした、あの4歳の夕暮れのように。

第五章 重なる想い（１）

小学５年生の時の恋は、結局２年のあいだ口に出せないまま、卒業と共に終わった。中学生の時は、半年も過ぎた頃に相手に彼女がいることを知った。

それでもなお奪いに行くほどの思いではなかったのも事実だし、萌子がそんな性格ならば、きっとこんな風に思い悩むことはなかっただろう。

小学生の時は、学区の違いで別々の中学に通うことになった。それが別れたった。

卒業の時に哀しかったのか苦しかったのか、萌子にはその時の記憶がいまいち定かでない。ただ、

（ああ、もう逢えなくなるんだ）

というぼんやりとした寂しさが、生まれて初めて知った失恋の痛みだったのかもしれない。

中学２年生の時は、少しだけ哀しかったことを覚えている。その事実を知った夜、萌子はほんの少し泣いた。

それまでは、彼と廊下ですれ違う瞬間がとても楽しみだった。お互い違うクラスだった彼とは、廊下でしか顔を合わせることはない。体育の時間や特別教室への移動の時など、彼がいる教室の前を通る時は、ことさら期待に胸を膨らませたりした。

たった一夜で、その瞬間は辛くて苦しいものになってしまった。

あれだけ楽しみにしていた教室の前にさしかかる瞬間を、萌子はじっと視線を廊下に落としたままやり過ごすようになった。偶然にも彼とすれ違ってしまった時、彼女の心はどうしようもなく痛んだ。そのままこの身が引きちぎれてしまうのかと思うほど。

最初はその痛みに、その内本心に心が裂けてしまうのではないかと思った。その痛みを考えると、余計憂鬱になった。

そんな彼の存在が、いつしか懐かしい想い出に変わってしまった

のは、とても不思議なことだ。

確かにその痛みを覚えているのに、中学の時の思い出は萌子の中で今、琥珀色の黄昏のようにただ優しいだけだった。

彼の姿を見掛けるたびに柔らかな想いが心を撫でるようになったのは、さほど時間が経ってからのことではなかったように思う。結局彼とは一度も一緒のクラスになれなかったけれど、3年生なつてから萌子は、廊下で彼とすれ違う瞬間がまた楽しみになった。

届かぬ想いでも、叶わぬ願いでも、それはやはり彼のことが別の意味で好きだったからなのだろう。

早くそんな時が来れば、と思う。別の想いでまた好きになれば、と思う。

嫌いになど、なれるはずもないのだから。

紅茶色の街。

昔好きだった歌に、そんなフレーズがあった。

窓越しに見える街路樹はちょうどそんな風に色づいていた。鮮麗なペルシヤ絨緞のように彩られた秋色の街。けれども、それももうすぐ寂靜な水墨画のような冬景色に変わる。そんなことを萌子は思った。

窓の外の景色に飽きて、萌子はそつと店内を見回した。

どこか重厚なクラシックの調べに似た、落ち着いた雰囲気の喫茶店だった。半地下に建てられているせいか、それともモノトーンの明かりのせいかな、仄暗く古い床しさが物陰にそつと漂っている。

軋んだ、重たげな音がして、萌子はビクツと入り口の扉を振り返った。

こんな店に似つかわしい、初老の夫婦が入って来た。萌子は小さくふつと息を吐くと、姿勢を戻した。

喫茶店『ノエル』は、福山女子高校から程近いところにある。学校を出て駅に向かえばファーストフード店は幾つもあるけれど、そ

んな所でなく福女の生徒がちょっと気分を変えて憩おうとするには、この店はもってこいの場所だった。

実は、萌子もこの店を何度か訪れたことがある。

龍太が待ち合わせに指名したところは、そんな店だった。

（こんなところで、誰かに見られたらどうするのよ……）

ちよつとは相手の都合も考えて欲しい。そう思いながら萌子は、もう一度店内を軽く見回した。とりあえず、見慣れた制服姿は視界に入って来ない。

姿勢を戻して深く沈み込むように座り直すと、途端に欠伸が出た。

（……いつもなら、家で昼寝している時間だもんね）

はしたなく大きな口を開けながら軽く伸びをして、萌子はそんなことを思った。

もう5日も、美術部に顔を出していない。久志が赴任して来る前より、明らかに萌子の足は部活動から遠ざかっていた。

11月も、もう終わろうとしていた。あんなにいろんなことがあったはずなのに、それでもこうして過ぎてしまえばあつという間だった気がするの、とても不思議な感覚だった。

今は、何もかもが中途半端に過ぎ去る日々が続いている。

（何もなかったことに）

そう心に誓い、何事もなかったように装って意固地になって通い続けた美術室も、1日休むと2日足が遠のき、また休むと3日足が遠のいた。

廊下で久志や黒沢とすれ違うことに怯えながら、いつしか萌子は息を潜めるように学校で過ごすようになった。放課後、薫を待つことなく『ひこうき雲』に寄るでもなく、萌子は逃げ帰るように福女を後にする。そして眠れぬ夜を補うかのように仮寝を貪った。

今は何も生み出たくない。何も感じたくない。何かに触発されることさえ、今の彼女には傷口を塩水に漬けるようなものだったから。

そうやって時が過ぎれば、傷が癒されることを萌子は知っていた。

いや、僅かな経験を頼りに、そうなることを信じ込もうとしていた。大勢の中の一人として受ける美術の授業以外、気が付けば久志との接点はほとんどなくなりかけていた。

また、扉が軋む音がした。

入り口の方を振り返って、萌子は何故だかちよつとだけ胸が震えた。

そこには、今日萌子を呼び出した張本人の姿があった。

店内をきよろきよろと見回す龍太の姿を見ながら、萌子はしばらくのあいだ声を掛けることが出来なかった。

（変なの）

龍太の姿を見て、わずかな緊張を覚えた。変に胸がドキドキする。おかしい気分だった。龍太と待ち合わせて、硬くなるなんて。彼とさして向かい合うのが珍しいからだろうか。それとも……。

（あんなメール……）

『君にどうしても話したいことがある』

初めて送られて来たメールにそんな台詞が綴られていたら、たとえ相手が顔見知った龍太でも、やっぱり意識してしまうものなのだろうか。

昨夜携帯に送られて来たメールの内容を心の中で反芻しながら、萌子はソファから立ち上がるうとした。

判っているのだ。龍太が薫のことを話したがっているのは。

萌子が手を上げるより早く、龍太が彼女に気付いた。少し照れたような、はにかんだ笑みに触れて、萌子はまた小さく心をゆさぶられた。

龍太の姿を見ると、いつも少しだけ胸のときめきを感じた。たとえただの幼なじみでも、やっぱり彼は素敵な男の子だと思う。いつも感じていたその想いが、今の萌子には別の形で心に響いた。

（なんかまるで……）

心に浮かびかけた台詞に、萌子は心の中で首を振った。

まるで恋してるみたいだなんて。心の傷を龍太の存在で塞ごうと

しているみたいで、萌子は自分がとても卑しく思えた。

「ごめん。呼び出したりして」

相変わらずぶっきらばうな口調で、龍太が萌子の目の前に腰を下ろす。

いつもそうだった。ステージ上でのあんなに饒舌で爽やかな人柄とは裏腹に、普段の龍太は人が変わったように寡黙で話下手だった。時々薫が席を外した時など、萌子は何を喋ったらいいのか話題に窮することがある。

子供の頃はこんな風じゃなかったのだ。誰とでもすぐに打ち解けあう、人懐っこい男の子だった。

「待った？」

「ううん。さっき来たところ」

「そう……」

ひとしきり儀礼的な会話を交わして、店員が龍太の分のオーダーを取りに来てしまうと、もう二人のあいだに話題はなくなってしまった。

沈黙の後、二人は目を合わせると意味もなく笑い合った。

龍太も緊張している。萌子はそう感じた。二人のあいだを、緊迫した見えない糸が薄く張り巡らされている。

何だろう。この感覚。

「びつくりした」

「え？」

「いきなりメール来るんだもん」

龍太と萌子は、お互いの携帯番号は交換していたがメールアドレスまでは知らなかった。だいたい萌子が彼に逢うのはいつも薫に連れられてのことだったから、アドレスまで知る機会もその必要もまるでなかったのだ。

そういえば龍太が福山に越してから、二人きりで逢うのは今日が初めてかもしれない。

「迷惑メールかと思って、思わず消しちゃうところだったよ」

「おいおい」

龍太はそう苦笑いを浮かべて、

「頼むよ。メチャ緊張して送ったメールなんだから」

「え？」

「……いや、何でもない」

一瞬だけ親しげな顔を垣間見せた龍太は、また慌てたように仏頂面に戻った。

「……薫に訊いたの？」

「え？」

「あたしのアドレス」

「ああ」

龍太は萌子から視線を逸らすように、運ばれて来たアイス・コーヒーのストローに口をつけてから、

「迷惑だった？」

「え？ あ、ううん。ゴメン、そういうつもりじゃないの」

龍太を誤解させた。萌子はそう思って、少し大げさに顔の前で手を振ってみせた。

龍太と顔見知りだという事実は、萌子にとって幼い頃からのちょっとした自慢だった。彼はそれくらい憧れの存在だったのだ。特に小学生の頃は、クラスメイトからも羨ましがられるほどだった。

けれども龍太が引越してから、すっかり疎遠になってしまっていた。龍太がメールをやり取りするようになったのも、結局薫とだった。そのことに嫉妬していた訳ではなく、不満がある訳でもないが、やっぱり薫とは立場が違うのだな、と感じない訳にはいかなかった。

だから、本当は嬉しかったのだ。こうやって彼が頼りにして来てくれたことが。

「薫は、今日あたしと逢うこと知っているの？」

「えっと、どうかな」

龍太はそう視線を宙に廻らせて、

「萌子と逢うつてことは知ってると思うけど、今日かどうかは…」

そう言ってから、龍太は訝しげな視線を萌子に投げてよこした。

「薫からは、何も聞いてないの？」

今度は、萌子が曖昧な苦笑を浮かべる番だった。

別に薫と仲違いしている訳ではない。久志が現れる前と同じように、相変わらず3日に2回は薫が迎えに行く形で、二人は朝一緒に登校していた。帰りはほとんど一緒にいるが、元々毎日一緒に下校していた訳ではないのだ。

何事もなかったように、二人は以前と同じリズムで暮らしていた。でも、と萌子は思った。それは表面上だけのことで、薫とのあいだはやはりどこか狂ってしまっているのかもしれない、と。

萌子はあれから、薫と本音で話せていないような気がして仕方がなかった。

放課後、逃げ帰るように下校してしまう萌子のことを、薫がどう思っているのかはよく判らない。彼女が、久志のことにどうけりをつけたのかも。ただ、彼女のどこかよそよそしいというか素っ気ない雰囲気、萌子は敏感に感じ取っていた。

こんなことだって、今までならためらいもなく萌子に話してくれと思う。

それとも彼女ならではの鋭い勘で、薫は何かに気付いたのだろうか。

「絵、描いてる？」

唐突に、龍太がそう問い掛けて来た。

「え？」

「そう。絵」

自分の絵のことなんか龍太君に訊かれるのは、きつとこれが初めてじゃないかしら。何やら売れないコメディアンみたいなやりとりの後、萌子はそんなことを思いながら中途半端に頷いた。

「ええ、まあ」

「そう」

何故だか龍太はホツとした様子で小さく頷いた。

「お前から絵を取ったら、何にも残らないからな」

龍太の意外な台詞に、部活動に顔を出せないでいる現状を見透かされたような気がして、萌子はドキリとした。

「やあねえ、人を『絵描きバカ』みたいな言い方して」

動揺を悟られぬよう、萌子はわざとそうふくれっ面をしてみせる。

「あれ？ 違ったの？」

やっぱりからかったつもりらしく、龍太はそう戯けたように笑った。

「自分だって、『バンドバカ』なくせに」

けれども嬉しかった。龍太が何でそんなことを言い出したのか判らなかったが、それでも萌子は彼がそんな風に自分のことを見つめていてくれたことを、素直に好ましく思った。

拗ねたような萌子の台詞に、龍太はただ黙って優しく微笑んだ。その笑顔がとても美しく、萌子はまた悪戯に心をかき乱された。

（こんな風に……）

こんな風に、女の子は龍太の虜にされてしまうのだろうか。

（薫は、こんな気持ちになったことないのかしら？）

「そっちこそ」

「ん？」

「『バンドバカ』の方はどうなのよ」

萌子がそう訊ねると、龍太はなんとも形容し難い笑みを浮かべた。

「あ、そうか。しばらくお休みだっけ？」

「うん。ホントは、そのはずだったんだけどね」

小さく唸るような声を出してから、龍太はちよとだけ得意げな顔をして見せた。

「実はね」

そして訳もなくひそひそ声になる。まるで、とっておきのスクープをバラすみたいに。

「トーキョー、行くことになったんだ」

「……え？」

龍太の口調は『東京』ではなく完全に『トーキョー』であった。萌子は一瞬、彼が見知らぬ異国にでも行くのかと錯覚した。

それほどに、龍太の口調は浮かれていた。

「……とーきょー？」

「うん。クリスマスに」

「クリスマスって……」

そんな季節まであと1ヶ月しかないことに、龍太の台詞で萌子は改めて気付かされた。

「クリスマスって来月じゃない」

「そう。イブにやるイベントに参加することになったんだ」

「へえ……」

あまりの急転直下な話に、萌子はただ呆れるように頷くしかなかった。

「こないだライブやったろ？ あそこのオーナーが知り合いの、渋谷のライブハウスなんだ。ちっちゃいところなんだけどね。ほら、大学入って向こうに進出するにしても、やっぱり足掛かりがないとダメだろ」

龍太もこんな表情を浮かべることがあるのだと、正直萌子は驚きを禁じ得なかった。

普段はどちらかと言えばクールな、醒めた感じで斜に構えた顔つきを見せる彼が、今はプレゼントを見つけた子供のようにはいやいだ声を上げている。そんな姿、彼と知り合って7年間一度も見たことがない。

心底嬉しそうなその笑顔が、ことの重大さを物語っていた。

「他のバンドと合同なんだけどね。曲目も少ないし。でも、ま、一応『東京進出』って訳だ」

どんどん遠くなってしまう。こうやってせつかく身近に感じられ、でも、彼はすぐに手元から飛び立って行ってしまふ。子供の頃から、

龍太との距離はいつもこんな感じだった。

龍太と知り合いだという事実は、その内本当に自慢話になってしまうのかもしれない。萌子はふとそんな風に思った。

「すごいね」

萌子が素直な気持ちを表すと、龍太は本当に嬉しそうに微笑んだ。
「ウチのバンドって、あんまりクリスマススライプ向きじゃないんだけどね」

龍太はそう苦笑いを浮かべて、

「一応、ほとんど持ち歌でやるつもりなんだ」

「へえ」

「持つてる歌、フル回転だよ」

そうちよつと笑ってから、

「あ、でもラストは『ブルハ』でいくつもり」

「どの曲？」

「『リンダ リンダ』」

このあいだのラストソングだ。唐突に萌子は思い出した。
耳元で囁かれたような龍太の声を。

『そんな君のために、最後に、プログラムにないこの曲を贈ります』

「それってこないだのラストの？」

「うん。あの曲」

龍太は照れ臭そうに鼻を擦って、

「あれは俺の、恋のバイブルだから」

龍太の口から『恋のバイブル』なんて台詞が飛び出すとは思わなかった。萌子は思わず口元を緩めた。

「何だよ。なんか変か？」

「ううん」

小さく首を横に振りながら、萌子は龍太の意外とロマンティストな一面を感じ取っていた。

「……そっか。じゃあイブには、こっちにいないんだ」

ちょっと寂しげな口調で萌子がそう言うと、龍太は申し訳なさそうに、

「ごめんな。行くって言ったのに」

「ううん。そんなことないよ」

手を体の前に差し出して、小さく伸びをする仕草をしながら萌子は、

「いいなあ。イブの東京」

「え？」

「1回くらいさ」

萌子は自分のアイス・ティのストローに口をつけて、

「行ってみたいじゃん。イルミネーションとか、キレイだしさ」

それを誰と見たかったの？

心の奥底から返って来た問い掛けを、萌子は一人ぼっちの寂しさでそつと受け止めた。

「そう、思う？」

「え？」

不意に龍太の口調が変わって、萌子はドキツとした。

期待半分、不安半分。誰かの気持ちを探るような、そんな口調。

軽口を叩いたつもりだったのに、龍太の意外なほど真剣なまなざしに、萌子はたじろぐように答えに詰まった。

「……うん。ちょっと、いい感じじゃない？」

ふと気が付くと、龍太が見つめていた。

驚くほど長いあいだ、彼は萌子のことを見つめていた。普段から見慣れているはずの萌子でさえ、胸のときめきを抑えきれなくなりそうな強く優しいまなざし。あふれ出しそうな想いをその瞳に込めるように、龍太はただ黙ったまま萌子のことを見ていた。ざわざわと、ざらついた不安が萌子の心を捉えて離さない。

「……なに？」

結局、萌子が根負けした。声を出してしまえば負けになってしまいそうな気がしながら、萌子はそう声を上げずにはいらなかった。

龍太は弛緩した笑みを浮かべて、深く息を吸った。何か意を決するように。最後の一球を投じる前のクローザーのように。そして彼は静かに息を吐き出した。

「一緒に」

冷静に見えた龍太の、語気がわずかに震えた。

「一緒に行かないか？ 東京に」

第五章 重なる想い（2）

浮かれてる。

抑えようとしても抑え切れない、晴れがましい気持ちが忌々しく思えて来る。

頬の火照りが、車内の暖房が効き過ぎているからではないことは、彼女自身良く判っていた。

彼を、好きになった訳じゃない。

気持ちを告げられて、心を動かされた訳じゃない。

そんな安易な気持ちにはなりたくなかった。

今まで、人に疎まれるような生き方をした覚えはない。けれども人からまっすぐに好きと言われるようなことも、17年の人生でそう多くはなかったような気がする。

ましてや、異性から想いを告げられることなど、本当に初めてのことだったのだ。

悪戯に華やいだ気持ちが体の中を駆け巡ってしまうのも、仕方のないことかもしれない。

たとえそれが、恋でないとしても。

萌子が口を開くまで、たつぷり30秒はあったと思う。

実を言うと、萌子は龍太の台詞が一言も理解出来ていなかった。

ただまっすぐに彼の視線に気圧されるように、困ったような弱々しい笑みを浮かべて彼女は小さく首を傾げた。

「見に行ってみたいけど、ちょっと遠いなあ」

「泊まりだと、怒られる？」

「うん。ウチはもしかしたらいいって言うかもしれないけど、薰んちがねえ」

すると龍太は、表情を硬くして眉をひそめた。

「萌子、誤解している」

「え？」

龍太の声色は、何だか怒っているみたいだった。急に不機嫌そうになった彼の態度に、萌子はただ戸惑うばかりだった。

「誤解つて、なに？」

仮面に貼り付けた笑顔のような、ぎこちない笑みを萌子は浮かべる。龍太の台詞が、心の内がもう全く読めない。

「俺はね」

こんな風に感情を露わにする龍太を見るのは、もしかしたら初めてかもしれない。禁じられた場所に足を踏み入れたような、言い知れぬ不安が萌子の胸を締めつけた。

「お前と、イブを過ごしたいんだ」

「……どうして？」

「お前が、好きだから」

日が落ちるのが早くなった。列車が閑散とした東尾道の駅を発つ頃には、窓の外に見える街並みは輪郭が霞んでほとんど見えなくなっていた。ぽつんと、取り残されたように灯る淋しげな街灯が、スピードを上げた列車の車窓を過ぎ去って行く。

街の風景は見えなくなり、代わりに扉の窓に車内の喧騒が映る。

萌子は、ガラスに映った自分の顔をじっと見据えた。

やつぱり、あんまり女の子っぽい顔じゃないと思う。

人を好きになり、人に愛されたいと願っているくせに、萌子はどうしても自分が異性に好意を寄せられるような容姿をしているとは思えなかった。

自分を卑下する訳ではないが、身近に薫のような同性が存在するといふ『違うよ』って思ってしまうのだ。

『やつぱり、気付いてなかったんだ』

長い沈黙があった。視線を逸らし、黙りこくってしまった萌子を

見て、あの後龍太はすまなそうな口調でそう吐き出した。

きつと生まれて初めて『頭が真っ白になる』という経験を、萌子はしていた。全ての機能が停止した中で、心臓だけが早鐘のように激しく鼓動する。血管が、触らなくても判るんじゃないかと思うくらい激しく波打った。

（いま、なんて……？）

萌子は何だか恥ずかしくて、龍太の目を直視することが出来なかった。

『小学校の頃から、ずっと、気になってたんだ』

静かな店内で、龍太はそつとそう告げた。顔をこわばらせたまま、緊張した面持ちで。

『ずっと想ってたけど、いつか伝えようと思ってたけど、どうしてもそのきっかけがなかったんだ。でも』

でも。そう言いさして、龍太は言葉を選ぶように黙り込んだ。萌子はそつと視線を上げた。

その時の、龍太の射竦めるような強い視線が、萌子の心に刻印を記すように今も焼き付いている。情熱的で、強い意志を秘めた瞳。

『あの、立花っていう奴の話を薫から聞いた時、俺、もの凄く後悔したんだ』

尾道駅の改札をくぐる頃には、辺りはもうすっかり夜の帳が降りていた。気忙しさと淋しさが同居した夕闇の街を、萌子は一人ぼつんと歩き出す。

頬が熱い。いくら戒めようとしても、心の一部が浮き足立ってしまっ

このまま、自分で決めた想いを無に返してしまっって良いのだろうか。たとえ叶わぬことでも、そう簡単に捨ててしまっって良いのだろうか。

龍太の口から久志の名を聞いた瞬間、萌子は確かに心のどこかで痛みを感じた。

それともその選択は、麻酔のように心の痛みに効いてくれるのだ

ろうか。

『こんなやり方、姑息だと思うけどさ』

龍太はそう言つて、自分を嘲るように短く笑つた。

萌子が新任教師に惹かれてゐるらしいこと。その新任教師にどうやら交際相手が出来たらしいこと。彼はそれを、全て薫から聞き及んでゐたのだという。

『お前が、立花つて奴とダメになりそうだから、だから誘おうと思つた訳じゃないんだ。この話を聞いた時、真っ先にお前の顔が浮かんだ』

真摯な瞳で、龍太はそうまっすぐに話し掛けて来た。萌子はその誠実な視線を、やっと真正面から受け止められるようになった。

龍太が、人の心の隙に忍び込んで来るようなそんな卑怯な人間でないことは、幼馴染なのだから良く判つていた。いや、信じていた。

『それに、時間がなかつたからな』

そう言つて、やっと龍太はわずばかり微笑んだ。けど、

『あと1ヶ月で、答えを出して欲しい』

笑いかけた龍太の顔つきは、一瞬で変わった。

『こつやつて、今までみたいな曖昧な関係には、もう戻れないけど』

けど。そう言い捨てて、龍太は今まで触れたことのない、頑なな表情を見せた。

『けど、俺は本気だから』

「1ヶ月……」

街灯が淡く路地を照らす坂道の途中で、萌子は冷たい夜気に向かつてそう呟いてみた。

その時間の長さは、混乱している萌子の頭にはわずか数秒の出来事にさえ感じられた。彼女はまるで、難解な数式が書き込まれた黒板の前に突然立たされた生徒みたいな気分になっていた。

第五章 重なる想い（3）

「萌子なの？」

玄関を上がると、奥から玲子の呼び声が聴こえて来た。

「うん。ただいま」

「おかえり。今日も早いね」

玲子のその言葉に、萌子はその場に一人しかないのに思わず舌をペロリと出してしまった。

玲子にも、この頃萌子が部活をサボりがちなのは判っているはずだった。それでも小言を言ったりはしない。それは、萌子が志しているものに波があつたりスランプがあつたりすることを、彼女自身良く知っているからなのだろう。

もつとも萌子が今陥っているものは、決して母が想像しているようなものではないのだが。

「また『宿題』？」

「うん。あ、でも平気よ。急ぎじゃないから。ご飯の支度、あたしがするわ」

「ホント？　ありがとう」

障子越しに、顔も見ぬまま母とそんなやり取りをしてから萌子は2階へと上がった。そしてベッドに鞆を放り投げると、南向きの窓を開けた。

小春日和の穏やかな一日が過ぎ去ろうとしていた。傾きかけた西日が尾道の街に優しく降り注いで、家々の屋根がぼんやりと白く光っている。

見上げた11月の空は、対照的にどこまでも碧く澄み渡っていた。萌子はいくつと一つ小さく頷くと、鞆から帰りがけに寄った文房具屋の袋を取り出した。

中から出て来たのは、どこにでも売っているような折り紙だった。「あてはないけど、紙ヒコーキに……」

いくら天気が気持ち良いからといって、家の窓から紙飛行機を飛ばそうなんて、やっぱどうかしていると思う。

そもそもこの窓を開けた本来の目的は別にあるのだ。

もうすぐ薫が、二人の家の境にある階段を登って来るはずだった。薫の母に、彼女が帰って来たら萌子のところに寄ってもらおう言づけてある。その階段が、この窓から見下ろせるのだ。

今日、弓道部が休養日なのは前から判っていた。本なら学校で待ち合わせしても良かったのだけれど、帰りがけ薫に、

『ちよつと職員室に用事がある』

と言われて、先に帰ることにしたのだ。

それに、学校や帰り道の電車の中で話すにはちよつと気が引ける内容だった。

別れ際に特に約束はしなかった。もしかしたら薫はあのままどこかに寄り道をして、帰りが遅くなるかもしれない。けどそれでもいい、と思った。こんな曖昧な気持ち、いつ現れるか判らない待ち人と同じで、待ちぼうけに相応しいのかもしれないと思う。

（でも、ただひたすら窓辺に張り付いているのも億劫だな）

そんなことを思って駅舎を出た瞬間、見上げた空の碧に魅入られて萌子はいったい文房具屋に立ち寄ってしまったのだ。

セロハンの袋をやけに丁寧に開封して、萌子は中からオレンジ色の折り紙を一枚取り出した。

「紙ヒコーキなんて、何年ぶりだろ……」

もともと萌子は手先が器用だ。もう何年もやったことのなかった折順も意外と正確に記憶していて、結構簡単に1機出来上がった。

「こういうの、薫は苦手なんだよね……」

萌子はそんなことを思い出して、一人笑いをした。

昔、あの秘密基地の102号室から紙飛行機の飛ばしっこをしたことがある。萌子と、薫と龍太の三人で。あの時は龍太の紙飛行機も、萌子のやつに負けず劣らずよく飛んだのだ。

三人で夢中になって、買って来た3袋分の折り紙を全部飛ばして

しまつて、あとから下の住人にえらく文句をつけられた。

「あんまりいっぱい飛ばすと、また怒られちゃう」

忘れかけていた懐かしい記憶が、今ある感傷へと結び付きそうになつて、萌子は一人で面白くもない冗談を言つて誤魔化した。そうして窓際に立つと、2度、3度投げる素振りを見せてから、四角く区切られた尾道の街へ紙飛行機を飛ばした。

紙飛行機は、眩い西日を受けて碧い空にふわりと舞い上がった。

「くすんだレンガの、街を見下ろす、窓の形に広がる空へ……」
街並みに向かって飛んで行くその軌道を追いかけていると、気持ちがつつと晴れていく気がする。

何だか嬉しくなつて、萌子はいそいそと次の紙飛行機を折り始めた。

まだ、気持ちがあふあふしている。今朝からちよつとおかしい。それは萌子自身、何となく自覚症状があつた。浮かれ気分のまま、ハイテンションで突つ走っているのが自分でも判る。

2つ目に水色の紙を折ると、萌子は窓から身を乗り出すようにして紙飛行機を飛ばした。それは水谷家の屋根を越えて、尾道の街を見下ろすようにどこまでも飛んで行く。

その紙ヒコーキに乗れば、本当にどこまでも行けそうな、そんな気がした。

「あたし、どこに行きたいんだろ……」

今日1日、ずっと龍太のことを思い出していた。小さい頃から見て来た、その仕草や、そのまなざし。それが胸をときめかせるものだったことは否定出来ない。龍太はいつだって憧れだったし、そのそばにいられるだけでも十分に幸せだった。

でも、小学生の時に萌子が好きになつたのは、龍太とは違う男の子だった。龍太とはまるで正反対の、少し物静かな子だった。

別に龍太が遠い存在だから、だから別の人を好きになつた訳じゃない。それだけは、何度想い出を辿つても同じ答えに行き着く。

龍太に恋焦がれるような想いをした記憶は、やっぱりない。けれ

どもその横顔にドキドキさせられた想い出なら、たくさんある。

恋って何だろ。

人を好きになるって、何？

どんなに世界が変わったって、萌子を見る龍太は何も変わらない。

（変わらない、はずなのに……）

萌子は煮え切らぬ想いを断ち切るように、また1つ紙飛行機を空に飛ばした。

（このまま、龍太君を好きになっちゃうのかな）

それに抗おうとする気持ちも、ある。いや、まだその気持ちの方が断然強い。それがただの意固地なのか、断ち切れぬ未練なのか、萌子には判らなかったけれど。

けれども、安易な安らぎに流されてしまいそうな気持ちが、萌子の中で徐々に膨らみ始めているのもまた確かだった。

揺れ惑う萌子の気持ちにそ知らぬふりをして、紙飛行機は心地よさげに晩秋の空に溶けていく。

ふと下を見ると、薫が階段を上がって来るのが見えた。まだ萌子には気付いていない。

萌子はいよいよ悪戯心を起こして、折り紙の最後の1枚を手についた。そんなに上手くいくとは思っていなかったのに、最後の1機は見事に薫の鼻先を掠めるようにふわりと一舞いしてから庭に着地した。びっくり顔をした薫が、しきりに辺りをきょろきょろと見回す。

「かおる！」

やっぱり最後は、薫しか頼れない。萌子はふとそう思った。

第五章 重なる想い（４）

「ホントに入っているの？」

校門の前に立って、萌子は恐る恐る薫を振り返った。

門のところには『生徒・関係者以外の構内立ち入りを禁じます』
という校長名の看板が括り付けられている。

「平気よ」

薫は何食わぬ顔でそう答える。

「だってあたし、何度も中に入ってブランコで遊んだりしてるわよ」

薫が幼い子供たちと並んでブランコの順番待ちをする。とんでもない光景を思い浮かべてしまって、萌子は思わず吹き出してしまった。

「何よ」

「……うつん。何でもない」

それでもどうしても可笑しくて、萌子はくすくす笑いながら首を横に振った。

さつき、紙飛行機の飛んで来た方向に気付いて上を見上げた薫は、2階の窓から身を乗り出していた萌子を認めると、あの柔らかない笑顔を見せながら彼女に向かって小さく手を振った。そして澤崎家の玄関に廻ると、出迎えた萌子に向かって、

『ねえ、小学校行ってみない？』

と言い出したのだ。

萌子は薫と目を合わせた瞬間、（ああ、気付いているんだ）と思った。萌子が話したがることを、きっと彼女は待っていたのだらうと。

そうして二人は制服姿のまま、懐かしい母校へ向かった。

自分の家のすぐ目の前にあるのに、この校門をくぐるのは卒業してからわずか2、3回しかないことに、萌子はいまさらながら気付

いた。それも薫に連れられて恩師の顔を見に行ったもので、一人で母校を訪れたことは一度もない。

教師からいろんな意味で注目の高かった薫と違って、自分は印象の薄い生徒だった。と、萌子は勝手にそう思い込んでいた。

今でも萌子のことを覚えているのは、担任だった教師ぐらいだろう。あとは……。

「こらー！」

突然背後から声を掛けられて、萌子は思わず飛び上がりそうになった。

慌てて振り返った萌子の胸にあふれた感傷は、懐かしさと、

（あれからずいぶん経つんだな）

という思いだった。

萌子たちが6年生の時の担任で、美術クラブの担当だった渡辺は、その当時から頭が薄く年齢査証疑惑が巷（？）に流れるほど老け込んでいた。だからこうして数年ぶりに顔を合わせてもそんなに外見は変わらないのだが、それでも萌子は直感的に（歳をとった）と感じた。

「ここは部外者立ち入り禁止だぞ」

そう言っている端から昔と変わらぬ笑みがこぼれていて、渡辺が本気で怒っている訳でないのはすぐに判った。

「こんにちは先生」

「おう。久しぶりだな澤崎は。水谷は……」

「あたしだって、1年ぶりぐらいですよ」

「そうだったか？ 君は、今でも毎日顔を見ているような気がするなあ」

渡辺は二人の恩師であると共に、萌子にとって正式な初めての絵の師でもあった。きっと彼がいなければ、萌子の絵筆はただの手慰みに終わっていただろう。

彼は萌子の絵を正当に評価してくれた、身内以外で初めての人物だった。

「どうだ。絵、頑張ってるか」

あの頃と同じ、柔和なまなざしで渡辺がそう尋ねた。萌子は小さく頷いた。

「そりゃ、良質なモデルに恵まれてますから」

そう茶化した薫に小さく笑い返してから彼は、

「また、見せてくれな」

そう言われて、萌子は中途半端な笑みしか浮かべられなかった。

そんな彼女の複雑な心境に気付くはずもなく、渡辺はちよつと過去を振り返る目つきをして、

「お前の作ったオブジェ、今の校長も偉く気に入ってたな。まだ校長室に飾ってあるんだぞ」

と笑った。

あの頃と何も変わらない。それは一瞬タイムスリップしたみたいな、暖かな笑みだった。

「昔ね」

渡辺と別れた後、校庭の隅にあるジャングルジムに向かいながら、薫がそうぽつんと呟いた。

「え？」

「萌子が、羨ましかったの」

萌子は何かを聞き違えたのかと思って、思わず立ち止まってしまった。

「どうしたの？」

「いや、今、何て……」

「羨ましかったのよ。萌子が」

ジャングルジムにたどり着くと、薫は制服のスカートを気にする素振りもなく両手両足で登り始めた。小学生の頃とまるで変わらぬお転婆ぶりに、萌子もスカートの裾を押さえながら慌てて後に続いた。

一番てっぺんまで登ると、少し爽やかな風が吹いた。

正面に見える校舎は、釣鐘のような形の窓が美しかった。古い建

物だが優雅な趣がある。

その前の狭い校庭で、児童たちが戯れるように遊んでいた。私たちも良く遊んだ、と思った。校庭でもお寺の境内でも、もちろんあの102号室でも。薫や他の級友たちや、龍太とも。

（私は龍太君のことを、どんな風に思っていたのだろう）

好き、とかそんな想いは、あの頃の感情に似合わない気がした。みんなできて、それが楽しく感じる空間。ただ、それだけだった。

「あの頃ね」

遠くを見つめたまま、薫がそう語り始めた。

「うん」

萌子も彼女と別の方向を見つめながら頷いた。

「あたしにないものを持つてる萌子が、すごく羨ましかった」

「そんな……」

萌子が持つているものなんて、あの頃も今も絵の腕だけだ。薫はもつとたくさんの、普通の人なら必ず羨むものを持っている。人柄も、容姿も、明晰な頭脳も。

「萌子がね、あのオブジェ作った時」

「……うん」

校長がお気に入りだというそのオブジェは、萌子が5年生の時に尾道市が主催した小学生向けのコンペに出品したものだった。しमानみ交流館の開館を記念したもので、新尾道大橋がそのテーマになっていた。

オブジェになんて挑むのはもちろん初めてのことだった。渡辺の師事を仰ぎながら、大橋とその先に続く尾道の細い路地を表現したその作品は、思いがけず優秀賞を授かってしまった。

ある期間しまなみ交流館に展示された後、萌子の手元に戻って来たそのオブジェを、当時の教頭がぜひ昇降口に飾りたいと言いつた。

本当は凄く嫌だった。その前から全校生徒の前で表彰されたりして、萌子はもうめちゃくちや恥ずかしい思いをしていたのだ。

展示場所を職員室にしてもらうことにして、萌子はそのオブジェを学校に譲った。

オブジェを創作する行為自体に、それほど興味が沸くことはなかった。今でも、たまに息抜きとしてチャレンジするくらいなものがある。

「あたしね、あんたに敵わんて思っただの」

「でも、それは」

「ううん」

否定しかけた萌子の台詞を遮るように、薫はあの天使のような柔らかな笑みを見せる。

「そうじゃなの。そりゃあたしだって、いろんなことに恵まれると思うけど……」

でも、その笑顔は一瞬の出来事だった。夕暮れの気配に溶けてしまいそうなほど、薫の声音がどんどん小さくなっていく。

「でもね、あたしの叶う夢はいつでも二等賞なの」

「……え？」

夜が近い。校舎の裏手にある、千光寺山へと続く森が一番初めに闇に吸い込まれていく。

萌子はこの時刻が大好きだった。もしかしたら生まれたのが夕方だったからかもしれない。そして、この時刻になると不安も覚えた。それは、あの4歳の夕暮れのせいだった。

静寂に吞まれるように、二人はしばらくのあいだ黙り込んだ。

「龍太から、メール来た？」

「……うん」

薫の問い掛けに、萌子は心をキュッと引き締めた。

「昨日、逢って来た」

「……そっか」

嬉しいような、面映いような、淋しいような、薫はさまざまな心境を幾重にも表情に現して、ホッとしたように空を見上げた。

「アイツ、とうとう行ったか」

「薫はさ」

「ん？」

「いつから知ってたの？」

「いつからって？」

「その、龍太君の、気持ち、ていうか……」

「ああ」

萌子の問いに、何故だか薫は嘲るような笑みを浮かべて、

「最初から」

「さいしょ？」

「そう。最初から」

さも楽しげに、流行り歌でも口ずさむように薫は、

「あたしが龍太と仲良くなった頃からよ」

「そんな……」

萌子は正直驚き呆れた。『前から』『小学生の頃から』龍太はそう口にしてはいたけれど、そんな遙か昔のことだとは、露ほども考えていなかったのだ。

「って言うより」

薫はチラッと萌子の方へ小狡そうな視線を投げて、

「萌子とお友達になりたくてアイツ、あたしに近付いて来たんだから」

ジャングルジムのすぐ下を、10歳くらいの児童が駆け抜けて行く。穢れのない、邪気のない笑顔で。

龍太がこの学校へ転校して来たのは、ちょうどあれくらいの歳の頃だ。

その頃の萌子なんて、男の子はちょっと乱暴で迷惑な存在くらいにしか思っていなかった。

「ま、そりゃ最初の頃はね、恋とか、そんなんじゃないと思うけどさ」

まるで人ごとのように、薫は投げやりな調子で話し続ける。

「アイツんち、借家だったんだよね。だから5年生になった頃、

ちょっと焦ってた。いつか引越さなきゃならなくなつて、萌子と離れ離れになっちゃうかもって」

薫はそう喋りながら足をぶらぶらさせた。

「だからね、連れてつてあげたの。あの秘密の部屋へ」

初めて龍太がああの部屋へ来た日を、萌子は今でも鮮明に記憶している。あの日、萌子は先にああの部屋に行かされたのだ。こう言い含められて。

『あとでいいもん、持ってきて来てあげるからね』

「なのにさ」

そんなにしたらパンツ見えちゃうよ、というくらい薫はふんつと両足を高く上げて、

「アイツったら意気地なしだから、何にも言わないまま転校してっちゃってさ」

不意に、薫の声に湿ったものが混じったような気がした。萌子は顔を上げて、彼女の顔を窺った。けれどもその表情を押し量れないほど、濃い夕闇が辺りに漂い始めていた。

「龍太から毎年、年賀状来てたでしょ？」

「え？ あ、うん」

6年生の正月から、龍太から律儀に年賀状が届くようになった。

萌子は結構凝った年賀状を返したのに、彼は素っ気ない絵柄に手書きで『お元気ですか？』と『今度会いましょう』と記すばかりで、結局その誘いは高校に入るまで実現しなかった。

「中1の時の年賀状にね、その直前に買ってもらったケータイのアドレス、載せてみたの」

薫の声色が変わった、と萌子は感じた。こんな切ない、哀しげな声、聴いたことない。

夕暮れが、彼女の不安を助長させた。

「今度こそ、一等賞になりますようにって」

「一等賞？」

萌子は不思議そうに薫の方を向いた。

そして、言葉を失くした。

薫の陶磁器のように白い頬を、涙が一筋伝っていた。

自分の頬を伝うものが何だか判らぬ様子で、その涙を拭いもせず
に薫は語り続けた。

「わたしにはね、萌子の幸せは自分のことと同じくらい嬉しいの。
だから……」

そしてやっと、目をごしごしと擦るように涙を拭いた薫は、すぐ
に泣き笑いみたいな顔になって、

「全部言わなきゃ、フェアじゃないよね」

「え？」

「あたしね」

夕暮れの風が、彼女の柔らかな髪を揺らす。

「龍太のことが好きなの。きつと、龍太が萌子のことを好きにな
る前から」

ああ、まただ。

浮かれてるから、こうなるんだ。

久志のことだつて。

今だつて。

萌子は、自分がどうしようもなく取り返しをつかないことをして
しまったような気がした。

「龍太が転校して来た頃、みんなに囃し立てられてたの。龍太が、
きつとあたしを気に入るって」

薫は笑おうとしている。でもその端から涙がこぼれて来て、彼女
の綺麗な顔を歪ませる。

「もしかしたら、自惚れてたのかもしれない。だから、神様がし
っぺ返しをして来たの」

薫の口から嗚咽が漏れた。

「龍太から萌子のことを聞かれた時、頭が真っ白になってね。バ

力よね。でも、卑怯なことはしたくなかった」

そう、卑怯なこととはしたくなかったの。誰に聞かせるでもなく、薫はもう一度そう呟いて、

「龍太をああの部屋に連れてった時、諦めたつもりだったの。その言葉は言わないつもりで、心の中にしまつて。ずっと、ずっと。なの」

いつのまにか薫は泣きじゃくっていた。萌子の口からも知らずに嗚咽が漏れていた。

「ごめん」

「何、謝ってるのよ」

薫の白い手がそつと伸びて来て、萌子の頭を軽く撫でる。

彼女はどうしても優しい。自分だって泣いているくせに、そうやって慰めようとする。その優しさに、私はいつでも甘えてしまう。

今まで二人で過して来た時間全てを、萌子は後悔しそうになった。

「悪いのはね、萌子じゃないの。いつまでも意気地のない龍太と、諦めの悪いあたしなの」

「でも……」

「も1回、メル友からつて思つてもね」

薫は哀しげな笑みを浮かべて、

「結局あたしは龍太と萌子の橋渡しだった。でも、それでも良かったの。アイツは橋を作つてもちつとも渡ろうとしないし、萌子は相変わらず鈍感だし」

そう言つて薫は、ちよつとだけいつもの皮肉った笑顔に戻った。

「萌子のそばにいれば、たとえ後ろ姿でも龍太のことを見てられる。たまには、本当はそこが私の場所じゃないと判つていても、龍太の左側を独り占めすることだつて出来る」

「……」

「まだ龍太は誰のものでもなくて。絶対に手に入らないと判つていても、龍太はまだ誰のものでもなくて。逃げてるって、自分でも判つてた。でも、怖かったの。龍太が誰かのものになることよりも、

龍太が自分の目の前から消え去ってしまうことの方が。それならば」
薫は深く目を閉じた。

「それならば、心の痛みに耐えながら龍太のそばにいられることの方が、ずっと楽だった」

私はダメな人間だ。萌子はそう思った。

あの薫が、肩を震わせている。なのに私は慰めること一つ出来ない。

「もし、友達の間までいられば」

声を震わせながら、薫は続けた。

「ううん。アイツが萌子の心を射止めたとしても、三人でいられば、今まで通りなら。でもね」

そつと見やった薫の横顔は、何一つ思い通りにいかない運命に、疲れて果ててしまったように見えた。

「立花が、立花先生が現れて、全てが狂ってしまったの」

胸が痛い、と思った。体のどこにあるか判らない、心のとても奥深い場所が苦しいくらいに痛い。手の施しようがなかった。それが、堪らなく歯痒い。

「萌子が先生に惹かれてるのはすぐに判った。だってね」

こんな時なのに、薫は涙目で可笑しそうに笑って、

「萌子ったら、最初に報告して来た電話口から、おかしかったんだもん」

「え？ うそ……」

萌子も、思わず泣き腫らした目を丸くした。

「ホントよ。すぐ判ったんだから」

そう言つて、薫はまた表情を固くした。

薫が頬に張りついた髪を掻きあげる。その乱れた仕草に、ああ薫も女の子なんだって、萌子は突然気付かされた。

こんなに悩んでたんだ。そんなことも知らずに……。

「センセと萌子が上手くいけばいい。最初はそう思った。単純にね。でも」

薫はやけに爽やかな表情を浮かべて、

「龍太が萌子を諦めても、あたしを選んでくれるなんて誰にも判らない。それにね」

薫の笑顔は長続きしなかった。振り子のように揺れる心と同じように。

「龍太が、悲しむ姿は見たくなかった。やっぱり、アイツの味方でいたかったの」

夕闇の中で、薫が振り向いた。萌子は初めて、彼女の素顔を見たような気がした。

「味方でいたかったのに……」

まっすぐに萌子を見つめる薫の瞳から、とめどなく涙があふれて来る。

「卑怯なこととはしなくなかったのに、でもいつの間にかこう願ってたの。萌子と、先生がくっ付きあえばいいのにつて」

彼女の涙は、夕暮れが去っても止みそうになかった。

第六章 キャンドルナイト（１）

階段を登り終えてホームに立った途端、強烈な北風が萌子の耳元を走り抜けて行った。彼女は思わずその小さな身を更に縮めて、ダッフルコートの際元をかき寄せた。

風の冷たさにも、はつきりと年の瀬を感じられるようになった気がする。

改札を抜けると、街は冬の訪れを忘れさせるかのように無理にはしゃいでいた。

比較的新しい駅前のビルや、駅近くの海岸沿いに建つ尾道グリーンホテルの入り口には、今風の可愛いツリーが飾られている。けれども、古ぼけた一番通り商店街に一步足を踏み入れると、まるで様子が違って来る。

そこはまるで、おもちゃ箱をひっくり返したみたいだった。アーケードに頭を打ってしまいそうなほど不釣り合いに大きなツリーや、金色のモールを店中の天井に張り巡らせた八百屋。万国旗を掲げた店まである。

それじゃクリスマスじゃなくて運動会だよ。萌子は思わず心の中で突っ込みを入れた。

人々はみな、自分なりに飾り立てて幸福な年の終わりを迎えようとしている。萌子はそれに一人乗り遅れたみたいで、無性に人恋しかった。

いつもの路地を抜けて、海岸沿いの道に出る。

12月に入って、萌子はまた『ひこうき雲』に通り詰めるようになっていた。

別に薰と喧嘩した訳ではない。朝は今でも一緒に通っている。

ただ、まだ心の整理がつかなくて、というより余計混乱に拍車をかけられて、放課後の美術室に寄る勇気が出ないだけだった。

あの翌朝、福山まで向かう列車の中で薰はこんな話を始めた。

「小4のさ、秋の連休かな。みろくの里に行ったの、覚えてる？
美幸や友子とさ」

美幸も友子も、小学校の頃の遊び仲間だ。中学になって学区が違
ってしまい、離れ離れになってしまったが。

「うん。覚えてるよ」

「あれね」

薫はちよっぴり茶目っ気のある目をして、

「あの娘たちが仕組んだのよ。あたしと龍太をひつつけようとし
て」

薫や萌子のいたグループは、けっこう男の子との交流が多かった。
やっぱり龍太が中心のグループで、そんな風に何度か遠出をしたこ
ともある。

でも、そんな誰かと誰かが付き合うみたいなのは、その頃一度も
聞いたことがなかった。

それはただ、萌子が幼過ぎただけなのかもしれないけれど。

「龍太ったらねえ、ずいぶん優しいのよ。つつい勘違いしちゃ
った」

そう思い出し笑いする薫は、何だかやけに楽しそうだった。

「まさかねえ、鯛を釣るために先に海老を釣ってたとはね」

「それ、逆じゃない？」

思わず萌子はそう突っ込んだ。

「海老釣るために、わざわざ鯛釣ってたんじゃない？ そんなも
つたないこと」

そう言ったら、薫に大笑いされてしまった。

「てか、『海老で鯛を釣る』って、もっと違った意味じゃなかた
っけ？」

そうして二人でひとしきり大笑いしてから、薫はしんみりと言、
「龍太にとって、鯛は萌子だったのよ」

それから薫は、少しずつ龍太のことを話してくれるようになって
た。そのほとんどが、愚痴に近かったけれど。

「萌子、中学の時黒田君のこと、好きだったでしょ」

そう言われた時は、思わずドキッとした。

黒田君とは、あの一度も同じクラスになれなかった男の子のことだ。

「そのこと話した時ね、アイツもうパニック起こしちゃって。相手に彼女がいるって聞いてすぐ正気に戻ってたけど」

手に負えないわよ。彼女はそう愚痴ってみせた。

「ホント学習能力ないんだから。さっさと奪ってっちゃえばいいのにさ」

それはあたしも同じか。小さく、寂しげにそう呟いてから薫は、

「アイツね、何て言ったと思う？」

「？」

「『俺はバンドを成功させてから、萌子を迎えに行くんだ』って薫の口からそう知らされた刹那、萌子は密かに胸を衝かれた。

高校に入って、初めて薫に龍太のライブに連れて行ってもらった時、彼女はホントにびっくりしたのだ。

ただのクラスのアイドルは、いつの間にかすっかり遠い存在になっていた。

『バンドを成功させたら』

あの時、本当に龍太からの迎えが来ていたなら。もしかしたら……。

あれから、龍太と時々メールし合っている。お互いの気持ちを避けるように、他愛のないやり取りばかりだったけれど。

答えを強要しないところが彼の優しさであり、臆病なところなのかもしれない。

「ホント男って、融通が利かないっていうか……」

そんな萌子の胸に宿った想いなど薫はまるで気付かずに、さも可笑しそうな口調で、

「初めて萌子をライブに連れてった後、『言っちゃえばいいじゃん』って言ったのよ。でも『まだダメだ。もっとメジャーになら

なきや』って。結局度胸ないんだから」

少し嬉しそうで、少し淋しそうだった。薫はそんな口調で龍太と
のことを語り続けた。

「龍太とまた逢うようになってから、しょっちゅう電話やメール
してた。きつとね、普通に付き合ってるより連絡とってたと思うよ。
でもね、いつも萌子の話ばかり。ホント龍太くらいなもんよ。あ
たしとあんなに近くにいて、あたしのこと女だと思っけない男なん
て」

ホントだ。薫の妙に自信ありげな言い草に、それでもその通りだ
と思っ萌子は思わず笑ってしまった。

「あたしのことなんて、ただの便利な相談役と偵察役、ぐらいい
しか思ってないんだから」

薫はそうこぼして、

「で、結局あたしが探りを入れることになって。でもあんたは妙
に秘密主義で、そのくせ顔色を読み易くって」

それから、萌子の瞳を覗き込むようにして、

「ねえ。龍太じゃ、ダメなの？」

愛する人がいることは、とても幸せなはずなのに。人は何故、こ
んなにも迷ったり悲しい思いをしたりしなければならなのだろう。

『もし、友達のままでいられば。ううん。アイツが萌子の心を
射止めたとしても、三人でいられば、今まで通りなら』

半分嘘だ。萌子はそう思った。

人を好きになるということは、もつとわがままで欲深いものだとい
うことを、彼女はつい最近嫌というほど思い知らされた。時が経
てば経つほど、気持ちが悪ければ悪くほど、思うのだ。その人に振り
向いて欲しい、と。

でも、半分は本当なのだろう、とも思った。

人を好きだという想いを、そんな風に純粹に昇華させることが出
来るのなら。

それはもしかしたら、両想いになるよりも美しく心地よいものな

のかもしれない。

「もし……」

もし私が龍太を選べば、薫は綺麗な想い出を抱えて歩いて行けるのだろうか。

もし私が断つたら、龍太は薫のこんなにも純な気持ちに気付いてくれるのだろうか。

違う。私は何か肝心なところから逃げている。萌子は薄々そう感付きながら、薫や龍太の存在の大きさに心を絡め捕られて動けなくなっていた。

相変わらず重たげなきつね色のドアを押し開けると、いつもの通りカウ・ベルがカランカランと小気味良い音を立てた。

萌子がこうして『ひこうき雲』に3日も4日も続けて足を運ぶのは、実は2度目のことだった。

前の時は、すでに終わりを告げた想いを萌子が少しずつ少しずつ話した。それを千絵は頷きながら黙って聴いてくれた。

『あなたの想いは、決して間違っていないのよ』

まるでそう言っているかのように。

普段から、

『相談ごとつていうのはね、人に話そうと思った時はもう半分は結論が出ているものなのよ』

と言う彼女は、こうして萌子がまた頻繁に顔を出すようになってもあり余計なことは言わない。始めは、久志と出逢ってからすっかり足が遠のいていた姪っ子に向かつて、

「何だ、今度来る時は男連れかと思った」

と軽口を叩いてみせたが、途端に迷子の子犬のような情けない顔をした萌子を見て冗談ではすまないと悟ったらしく、それきり何も言わなくなった。

「いらつしやい」

カウンターの中から、千絵はいつもと変わらぬ笑顔を見せた。

店の中は、珍しく複数の客がいた。中年の夫婦連れ。二人組と三

人組の女性グループ。こんな季節なのに、みな観光客らしかった。カウンターに腰掛ける寸前、萌子はちらりと二人組の女性たちを見やった。萌子より少し年上の、大学生ぐらいの年齢だろうか。笑い合いながらガイドブックに目を通している。

萌子はふと、薫のことを想った。彼女と、あんな風に笑い合える日は来るのかしら、と。

「大丈夫？ 忙しい？」

「何言ってるのよ」

相変わらずの快活な笑顔で千絵は、

「閑古鳥が鳴きそうなくらいよ」

「良かった。じゃあ遠慮なく何か食べさせてもらおうかな」

「……あなたは『謙虚』という言葉を知らないの？」

「はい。知りません」

この店にはあまりクリスマスらしい飾り付けがない。入り口の外に腰の高さほどの可愛らしいツリーが飾られている程度だ。それでも店内をくると見回した萌子は、作り付けの棚の上に小さなサンタを見付けた。

「あれ、可愛いね」

「ん？」

カウンター奥の小さなキッチンに向かっていた千絵は、萌子の指差す方へ目をやって、

「ああ。いい感じでしょ」

「うん」

「聖なる夜に、ちょっと寂しかったからね」

「あれ？」

萌子はちよつと驚いた様子で、

「今年はお昼までじゃないの？」

千絵は毎年、イブはお昼過ぎで店じまいをしてしまう。そして澤崎家・水谷家合同のクリスマス・パーティーに顔を出していた。

萌子は一度だけ、

『広島に行かなくていいの?』

と訊いたことがある。その時千絵は、

『大人の恋だからね』

と萌子を軽くあしらってみせた。

「開くって言っても6時くらいまでね」

そう言つて千絵は、何だかとても嬉しそうな優しい目をしてみせた。

「彼がね、来るの」

「え?」

「24日、昼間だけ尾道に寄れるんだって」

「じゃあ」

萌子は興奮したように驚いて、

「店開けてる場合じゃないじゃない」

「ううん。違うの」

少し恥ずかしそうな口調で千絵は、

「そんなに時間もないからね。ここで、過ごしたいんだって」

「え?」

「だから、店開けることにしたの。ちょっとノエルっぽくしてね」
そう言つて千絵は、萌子の前に彼女が大好きなアップル・ティと、
パンケーキと何か印刷された紙切れを置いた。

『ゆきだるまサンタからのプレゼントが、
その下にあるよ』

「?」

「食べてみて。その注意書き通りに、ね」

パンケーキの上に赤いりんごと白いゆずのシャーベットが二段重ねになつていて、ご丁寧に目・鼻・口と手まで付いている。これが『ゆきだるまサンタ』らしい。パンケーキの外には砂糖菓子のパウダーと木苺のソースがあしらつてある。なかなか洒落た出来栄えだ。

「何だか、雪だるま食べちゃうのかわいそう」

そう文句をつけながら、萌子はシャーベットをスプーンで崩した。ゆずとりんごの味が程よく溶け出してなかなか美味しい。と思っていたら、スプーンの先にこっん、と硬いものが当たった。

「ん？」

「ダメよ。あんまり突いちゃ」

りんごのシャーベットがほとんどなくなってから、やっとその正体が判った。

それはよくバースデーケーキなどに使われる、チョコレートで出来たメッセージボードだった。

『今宵貴方に』

幸福が降りますように』

「わあ、可愛い」

「イブ用の、目玉商品にね」

千絵はそう戯けて見せたが、きつと照れ隠しだろう。彼のために作ったに違いない。彼を驚かそうと一所懸命に考えている千絵の姿を思つて、萌子は胸が熱くなった。

千絵ちゃんは幸せなんだ。こんなに離れ離れで、でも幸せなんだ。

「じゃあ、うちには来ないの？」

「ううん、行くわよ。彼ね、仕事で大阪に行くついでに寄つてくれるの。だから、彼を新尾道の駅まで送つて行つて、たぶん8時頃になつちやうけど」

「じゃあ、それくらいに始めようかな」

「ごめんね。今年は誰が来れるの？」

「んとね、ママとね薫と薫ママと。薫パパは仕事で泊まりなの。あとはおばあちゃんと千絵ちゃんと」

あんなに仲が悪いのに、千絵と祖母は何故かこの日のパーティーにだけは揃つてやつて来るのだ。そして何事もないかのように話を

する。たぶん二人は、1年でこの1回しか顔を合わせていないはずだ。

「6人かな」

「あらあら、女だらけの淋しいイブねえ」

千絵はおやまあという顔をしてから、何かを思い出したように、

「そうだ。あの子は？」

「え？」

「ほら、何て言っただけ？ あのロッカー君」

「龍太君のこと？」

「……そんな名前だっけ？」

「龍太君なら、その日ライブなの」

台詞の合間に、萌子は小さな呼吸を入れた。

「東京で」

「へええ。出世したわねえ」

千絵は甚く感心した様子で、

「今の内にサイン、貰った方がいいかしら？」

「それ、あたしもこないだ思った」

二人は目と目を合わせて、可笑しそうにくすくすと笑った。

「……それにしてもさ」

「ん？」

「あんたも薫ちゃんもそろそろ『その日、予定があるから』とか言い出さないもんかねえ」

その台詞を聴いて、きつと萌子がまた迷子の子犬みたいな顔をしたのだろ。千絵はちよつと突き放したような口調で、

「何かありそうな年頃みたいだけどね」

「……千絵ちゃんはさ」

また何かサプライズを思い付いたのか、キッチンに向かい始めた千絵に向かって萌子は、

「自分がとても好きな人が、相手も自分を一番好きだった経験って、ある？」

その途端に、千絵は思いつき『ぶっ』と吹き出した。萌子は軽蔑したように横目で千絵を睨んで、

「千絵ちゃん？　ちよつと不衛生なんじゃない？」

「だって、あんた、いきなり何を……」

千絵は慌てたように口元を拭って、

「あゝあ。このアイス、ダメだわ」

と嘆いてから、萌子の顔をじろりと睨んだ。

「何があつた？」

「……」

「振つた？　振られた？」

千絵の畳みかけるような問いに、萌子は黙って首を振って、

「振られたし、告られた」

「……はあ？」

「へええ、あんたがねえ」

千絵の台詞には明らかに、言外に『あんなに子供だったのにねえ』という響きが含まれていた。

「千絵ちゃん」

萌子はちらりと横目で睨んで、

「なによ。そんなに珍しいこと？」

「いやいや、そうじゃないけどさ」

「どうせ『あんたも大人になった』とか、言いたいんでしょ」

何から、どこから話したら良いかさっぱり見当がつかず、とりあえず龍太のことをしどろもどろ説明しているあいだに、店の客は三組が帰り一人が入った。

今は、初老の男性が窓際の席でコーヒーを飲みながら、夕暮れの街を見つめている。

「龍太君、だっけ？」

「……うん」

「いい、男じゃなかった？」

「……まあね」

「でも」

シンクに向かって洗い物をしながら千絵は、

「萌ちゃんにとつて『とても好きな人』じゃないんだ」

「……」

「あるよ」

突然そう言われて、何のことか判らなくて萌子は千絵を見やった。彼女は洗い終わった手を小さく振りながら、

「ホントに好きだった人が、向こうも好きでいてくれたこと。今、経験してるよ」

「……それって」

「そう、小田さん」

さすがに恥ずかしいのか、千絵はわずかに視線を逸らすようにして洗い終わったカップを手にとると、

「彼とはね、仕事の関係で出逢ったんだけど、初めて会ってから2年くらいは何もなかったの。あたしは、出逢った時から好きだったけど、彼には死に別れた奥さんがいて、今も想ってることが判って諦めたの。さすがに」

千絵は苦笑いを浮かべて、

「幽霊には勝てっこないからね」

「でも」

「そう。2年経った、あたしの誕生日に彼にディナーに誘われてね。そこで彼に言われたの」

店の中を流れる有線の曲が変わった。カーペンターズのイエスタデイ・ワンスモア。

「『言わないつもりで、ずっといたんだ。でも、どうしても我慢出来なかった。許してくれ』って」

言わないつもり。告げても、無駄な想い。告げては、いけない想い。

「自分との年齢差と、やっぱり死んだ奥さんのことがあって、どうしても言えなかったんだって、彼。奥さんにも、そんな想いを抱きながら接するあたしにも、悪いことをするって」

あたしは。そう言いさして、千絵は少しだけ考え込むように黙り込んだ。

「あたしは、嬉しかった。奇跡だと思った」

手にしたカップを慈しむように拭きながら千絵は、

「こんな恋、もう二度と出来ないと思っている。でもね」

そう言って千絵は、萌子の瞳を覗き込むように見つめる。

「だからって、今までの恋が全てウソだったなんて思わない。想われた恋も、想って報われた恋もあるけれど、どれも全力で真実だったと、あたしは思っているよ」

そして、あのたつぷりの笑顔を萌子に向けて、

「萌子。乞われる恋だって、あるのよ。女には、想われる幸せだってあるんだから。あなたは、少し生真面目過ぎるのかもしれない」

龍太に想われて、あたしは幸せだろうか？ 萌子は考えた。

幸せ、かもしれない。

じゃあ、何が駄目なのだろう？

薫のこと？ それとも……。

「千絵ちゃんさ」

「ん？」

「親友とさ、同じ人を好きになったこと、ある？」

千絵はしばらく、咎めるように萌子を見つめていた。それから吐き出すようにそっと、

「薫ちゃん？」

「……うん」

「どっちが好きなの？」

「薫が、龍太君を」

「そう……」

事の複雑さに、千絵は思わず肩をすくめる仕草をして、

「友達と、同じ人を好きになった経験、ない訳じゃないけどねえ」
参考にならないわ、と呟いた。

それから萌子はやっぱりしどろもどろになりながら、薫と龍太のいきさつを掻い摘んで話した。そのあいだに初老の男性は去り、店は二人だけになった。

いつしか、窓の外は暮色に包まれていた。二人きりで淋しいはずの店内も、煌々と照る明かりのせいか、何だか楽しそうに感じられる。

萌子の話を聞き終わった後で、千絵はしばらく黙り込んだ。

萌子も黙ったまま、有線の奏でる調べに耳を傾けていた。そう簡単に答えなど出るはずがない。萌子の中で、結論など何一つ出ていないのだから。

「あなたにとつてさ」

長い合間の後、千絵は言葉を選ぶようにゆっくりとそう問い掛けた。

「大切なことは、なに？」

「え？」

「萌ちゃんの言葉を聴いてるとね、あなたの気持ちが聴こえて来ない」

「え……」

「あなたが幸せにしたいのは龍太君？ 薫ちゃん？」

「……」

「あなたの、幸せは？」

（あたしの、幸せ？）

忘れ物をしてるわよ。千絵のおおらかな笑顔はそう言っていた。忘れ物。あたしは何を望んでいたのだろっ。萌子は何かを叩きつけられたような気分になった。

「忘れられないんですよ」

「え？」

「『とても好きな人』が」

不意に、久志のあの爽やかな笑顔を思い出した。そう、この場所で初めて見た屈託のない微笑みを。懐かしく、暖かい想いで。

途端に、募る想いがあふれ出して止まらなくなった。この場所だからいけなかったのかもしれない。まだ好きなんだ。自分が逃げていた気持ちに、萌子はやっとなつて気がついた。

龍太は、精一杯の勇気を出してくれた。薫だって、本心じゃないかもしれないけど、自分の信念を貫こうとしている。

あたしは、どうだろう。現実から目を背け、逃げ出して来ただけじゃないのか。

目頭を潤ませて俯いてしまった姪に、千絵は優しく手を差し伸べて頭をぽんぽんと撫ぜると、

「絶対に、もうダメなの？」

「女の人とホテルから出て来ると、見ちゃったの」

「それは……」

さすがに千絵も一瞬答えに詰まった。

「その人は、彼女なの？」

「……わからない」

久志と黒沢が親しい関係だなんて、学校の中で見ている限りでは全く判らなかつた。だからと言って、あの時の黒沢の驚いた表情を否定する材料になんか出来ない。

「でも、忘れられないんだ」

千絵の問い掛けに、萌子は作り物のようにコクリと頷いた。

淋しげに俯く姪に掛ける言葉を探して、千絵はしばらく逡巡した。そして、

「やっぱりね」

ゆつたりと微笑むと千絵はこう語り掛けた。

「萌ちゃんは一つ、肝心なことを忘れていると思うよ」

第六章 キャンドルナイト（2）

忘れ物。

あたしが忘れている、肝心なこと。

判っていた。それは、今まで生きて来た中でいつも後回しにして来た感情だった。

「さわざきもえこさん」

彼の、そういう茶目っ気のある喋り方は、あまり聞いたことがないような気がする。

改札をすり抜けようとしていた萌子は、感傷も何もなくてただ驚いて弾かれたように振り返った。久しぶりを見る、無邪気な笑顔がそこにあった。

久志は自動改札の向こうで小さく手を挙げると定期を改札に滑り込ませて、立ち止まっていた萌子の元へと近付いて来た。

とくとく、と心臓が血管に血液を流し込む音が聞こえ始める。それは、どこか懐かしい響きだった。

近付いて来た久志の表情は、どことなく硬く感じられた。久しぶりにこんな間近で見るせいだろうか。

「今、帰り？」

久志の、何とも間抜けな問い掛けに萌子は少し笑って、

「見ての、通りです」

担任から書類整理を頼まれて、珍しく帰りが遅くなった下校途中の福山駅でのことだった。

1年で一番陽が短い季節。駅構内の雑踏の中にも、夕暮れに追われる気忙しさが漂っている。

久志の顔を見て、こんなにも落ち着いていられる自分がとても不思議だった。こんなに突然出会ったら、もっと取り乱して慌てるも

のだとばかり思っていたのに。

でもまだドキドキする。ふんわりと浮き上がったその気持ちは、違う意味で好きになったあの中3の頃とは、上手く言えないけれどやはりどこか違うような気がした。

もう諦めたはずなのに。

（でもやっぱりまだ好きなんだ）

萌子は、それが一番素直な答えのような気がした。

「先生は？」

「ん？ いや、いつもよりちょっと早いんだけどね」

少し照れたように頭を掻く仕草も、何となく懐かしい気がする。

萌子は、久志の仕草一つ二つに愛執を覚えた。心を捉えた切なささえも、何だか心地よいものに感じていた。

「買物、してこうかと思ってね」

「ああ」

萌子は薰みたいにぽんと手を打って、

「一人やもめ、でしたもんね」

「おい、そりゃ×イチに使う言葉だ」

そして二人は大笑いした。二人で笑うのなんていつ以来だろう。

笑いながら萌子は、紛れてそつと涙を拭った。

二人で縦列になって乗るエスカレーターも、何だか萌子をドキドキさせた。それでいて、その気持ちの合間を縫うように絶望的な痛みが襲い掛かって来る。

他に、好きな人がいる人。もう、届かない人。

先に行く、意外と広いその背中を見つめながら、萌子は心の中でそつと呪文のようにそう唱えていた。

エスカレーターを昇り切った高架式のプラットホームでは、蛍光灯の明かりが奇妙な存在感を増し始めていた。

そういえばこのホームで、久志の姿を見つけて薫と二人で走り出したことがある。あの時は、時計の短針が今よりメモリ5つ分ぐらい遅い時刻を指していた。

あれからもう2ヶ月が過ぎた。私の気持ちは、あの頃と何か違うのだろうか。萌子は思った。

いろんな出来事が過ぎ去って、今二人のあいだにはあの頃と違う距離がある。その距離が縮まったのか遠くなったのか、それは判らないけど。

（遠くなったんだ、よね）

萌子は自分にそう問い返して、心の中で苦笑いを浮かべた。

今は近付くことさえ出来ない。久志とこんなに近くにいながら、その心に触れることさえ出来ない。近しいと感じたあの秋の日は、幻想に過ぎなかったのだろうか。

「元氣だったか？」

下り列車の入線を告げるアナウンスが流れる中で、久志が唐突にそう訊ねて来た。人混みの騒がしさとアナウンスが被って、萌子はその声が良く聞き取れなかった。

「え？」

人波に流されて、二人で並んでつり革に掴まったところで、久志はもう一度訊き直した。

「何か、久しぶりに逢ったみたいな気がするから」

そんなはずはない。今でも週に2回、間違いなく顔を合わせている。

授業中、久志と会話を交わすことはほとんどなかった。最初は、むやみに話し掛けて来ない久志のことを都合よく思っていた萌子も、次第に彼が自分を避けているのだと気付いた。彼は学芸会の木の役並みに、大根役者だった。

彼が何故萌子を避けるようになったのか判らなかったけれど、お互いそんな風にぎこちなく避けあっている内に、二人はいつの間にか溝を深めてしまったのかもしれない。今は、そんな風にも思える。やはり、時は巻き戻せない。

「……最近、忙しいのか？」

夕闇の中を進む列車の中で、つり革に掴まりながら久志はそう遠

慮がちに訊いた。それはもう本当に遠慮がちで、ざわつく夕方の車内では思わず聞き漏らしそうなほど小さな声だった。

「え？」

「いや……」

訊ねたことをすぐに後悔したような素振りで、久志は前を見たまま少しだけ黙り込んだ。

「最近、部に顔を出さなくなって思ってた」

「……すいません」

「あ、いや、いいんだ」

萌子の声のトーンの低さに、久志は慌てたように取り繕って、

「もつと顔を出してない奴なんか、いっぱいいるからな」

そう無理やり笑顔を浮かべた。

どう思ってるんだろう、と萌子は考えた。私が何故顔を出せなくなったのか、それを彼はどんな風に思っているのだろう、と。

「たださ」

相変わらず視線を前に向けたまま久志は、

「部長が、残念がってたからな」

「え？」

思いもよらぬ台詞に、萌子はつい久志の方を見やった。

「小笠原が、残念がってたぞ。澤崎は来年の部長候補、らしいからな」

「そんな……」

久志が来る前だって、そんなに熱心な部員じゃなかったのに。萌子は正直戸惑った。

「君は真面目だし、それに」

そこでようやく、久志が萌子の方を見やった。

「『あんなに上手い美術部員、他にいないよ』って」

そんなこと、美術部に入って1度も言われたことがない。いや、絵を始めてからこのかた、そんな褒められ方を1度もしたことがないような気がする。萌子は、驚くというよりむしろ呆気にとられて

しまった。

「俺も、そう思うよ」

「え？」

「君は、基礎がしっかりしていて実力があると思っているよ」

久志のいたって真面目な台詞に、萌子は言葉を失くして顔を真っ赤にした。

「そんな、褒め過ぎ……」

「そんなこと、ないさ」

不器用なくらい力を込めて、久志はそう断言した。

会話が途切れた。予想もしなかった台詞に、萌子の心臓は複雑怪奇に脈打っている。久志に褒められたことが、それとも自分の絵を褒められたことか。いや、その両方の理由で、萌子の心はすっかり舞い上がっていた。

「あのさ」

「は、はい」

「もしかしてさ」

「はい？」

久志が萌子を見つめた。萌子も久志の方を見やった。久しぶりに、その鷲色の視線と目が合う。

綺麗だ。何の脈絡もなくそう思い、萌子は不自然に頬を赤らめた。

「部活に来れないのは、僕のせい？」

その刹那、萌子は心臓を握り潰されたような気がした。ひやりとした感覚が体中を駆け巡る。奈落の底に叩き落されていくような感覚。

やっぱり知っているんだ。絶望的な感覚の中で萌子はそう思った。授業中の不自然な態度も、それならば説明がつく。

黙り込んだ萌子を見て、久志は肯定と取ったらしい。次の瞬間、彼はとても切ない笑顔を浮かべた。

「僕のことなら、気にしなくてもいいのに……」

「……え？」

「僕は、君をただ教える立場にあるだけなんだから」

「……」

少し意味が判らなかつた。教師と生徒なのだから、プライベートなことは気にするな。そう言いたいのだろうか。

「あのお祭りの日にさ」

突然、ベツチャー祭りの日のことを口にされて、萌子はドキツとした。

「君と僕はとても似ている。そう感じたのは確かだけど」

こんな時なのに。萌子は一瞬、喜びに似た胸の震えを感じた。少なくとも、あの夕暮れに感じたことはやはり同じだったのだろうか。「でも、それだけのことだから」

喜びは紙一重で虚しさにすり替わった。あの時感じたものなんて、二人のあいだを埋めるにはあまりに小さ過ぎたのだ。二人を隔てる、年齢や環境や、育つて来た道筋の違いを。

「もし、さ」

哀しく、達観した口調だった。久志はレールの揺れに合わせて体を揺らしながら、

「澤崎さんが部活に来にくいならさ。僕、顧問辞めてもいいかなって思つて」

ドン、と見えない力に突き飛ばされたみたいだった。その瞬間、萌子はいきなり泣き出しそうな気分になった。

私の身勝手な感情の脆さが、周りの人にどんどん辛い思いをさせている。思いも寄らなかつた。久志にこんなことを考えさせているなんて。

（しつかりしなきゃ）

萌子は必死に、自分を奮い立たせようとした。

「先生の、せいじゃないです」

大人しい声で、それでも萌子はきっぱりとそう言った。

「最近ちよつと家のことで忙しかつたし、それに……ちよつとスランプだつたし」

嘘も方便。萌子はそう自分に言い聞かせながら、少し早口にウソとホントを織り交ぜた言い訳を口にした。それから、心を決めて久志の方に向き直ると、

「でも、大丈夫です。明日くらいから、また出ますから」

「ほんとうか？」

いくらかホッとしたような、本当に嬉しそうな顔だった。久志のその笑顔を見た途端、萌子は心の底から『良かった』と胸を撫で下ろした。

そして思ったのだ。忘れ物、取りに行かなくちゃ、と。

第六章 キャンドルナイト（3）

龍太との待ち合わせまで、まだ少し時間がある。萌子は、待ち合わせたバラ公園までの距離を計算してから、天満屋に寄ることに決めた。

デパートの店内は、より一層クリスマスの華やかさに包まれている。

イブまであと1週間。年末の忙しなさとはまって、いつもの日曜よりもずいぶん混雑している。

萌子は案内板から目的地を見つけ出すと、エスカレーターに乗った。

手芸のコーナーも思ったより人が多かった。色とりどりの毛糸を手にしながらかを考えている人の横顔は、とても楽しそうに見えた。編んであげる人の姿でも想像しているのだろうか。

その人の描いた未来には、幸せが約束されているように思えた。萌子は反射的に久志のことを想った。

（きつと手編みなんか、恥ずかしがって着てくれなさそうだね）
萌子を選んだ市販のトレーナーさえ、最初は照れて着てくれなさそうだったのだ。そんなことを思い出して、萌子はくすっと一人笑いをした。

だからという訳ではないけれど、萌子はセーターやマフラーを編むつもりはなかった。

手芸コーナーの隅に目的の場所を見付けて、萌子は店の奥に進んだ。

そこには中学生くらい女の子が一人、手芸の本を立ち読みしていた。あどけなさの残るその横顔は少し硬く、口を真一文字に結びながら真剣な表情を浮かべて、目で文を追っている。

作ることに不安があるのか。それともそれを渡す瞬間を思い浮かべているのか。

隣に立って、萌子も本を手にとってぱらぱらとめくってみた。

編み物なら、マフラーやセーターを何度か作ったことがあるから少しは自信がある。けれども今度作ろうと思っている物は、初めてチャレンジするものだった。

「あつた」

そう呟いて萌子が開いたページには、ビーズで出来た小さく可愛らしい熊のぬいぐるみが写っていた。

あまり重荷にならないもの。贈っても心の負担にならないもの。

萌子は、久志への贈り物をそう決めていた。

きっかけに過ぎないのだ、贈り物は。自分の気持ちを、ありのままに伝えるための。

返事はほとんど期待していなかった。というより無理だと諦めていた。それでも伝えなければ、萌子は自分がこのままどこへも進めないような気がしていた。

一昨日久しぶりに美術部に顔を出すと、久志より先に朋美が驚いたように目を丸くして、それこそ飛び掛からんばかりに近寄ってきた。

「よかったあ」

「……部長？」

「萌ちゃん、もう来ないのかと思った」

そう言って萌子の手を取る朋美のその向こうで、久志は優しく微笑んでいた。

その日は帰りがけに薫も誘って、久しぶりに三人で帰った。

「あんたら、寄り戻ったん？」

踏切のところで久志と別れた後、薫が彼女らしい物言いでそう訊いて来た。萌子はそれに笑って首を振ると、

「違う。けど、あたしウソつくのやめたの」

嘘をつかない。それが一番正しいやり方だと、萌子は彼女らしい頑なさでそう思っていた。

だから今日、龍太に逢いに行くのだ。もしこのことを薫に話した

ら、きつと、

「莫迦！」

と罵倒されそうだけれど。

萌子は手に取った本といくつかの材料を購入すると、天満屋を出た。

冬晴れの日が続いていた。見上げると、高く澄んだ碧が目に入る。
(空を見上げると、こんなにも幸せな気持ちになれるのに)

バラ公園は、福山駅南口を出て東北東に15分ほど歩いたところにある。

薔薇は福山の象徴である。5月と10月が花の盛りで、5月上旬にはここでバラ祭りも行われる。だからその頃が一番華やかで人出も多いのだが、こんな寒さの中でも咲く薔薇はある。

実は萌子はそのことを、昨日龍太と電話で話していて初めて知った。

「え？ 薔薇って冬でも咲くの？」

「何だ、知らないのか。綺麗だぜ。結構風情があって」

龍太は意外と博学だった。それに頭も良い。『東京の大学を受ける』と宣言しているが、彼ならきつと良いところに受かるだろう。

カッコ良くて、ロマンティストで。女の子を、本当に幸せにくれそうな人。

公園の入り口には、龍太の言った通り黄色い薔薇が小さな花を付けていた。薔薇という文字に似つかわしくないその可憐で愛らしい花は、冬の寒さに耐え、一時の陽の暖かさに喜んでるように見えた。

この公園は、周囲を道路に囲まれて三角定規みたいな形をしている。薔薇がなければ、何の変哲もないただのちっぽけな公園である。その中心から少しずれたところに木々に囲まれた広場があって、二人はそこを待ち合わせ場所に使っていた。

龍太は先に来ていた。待ち合わせより少し早い。萌子が歩み寄ると、落としていた視線を上げてこっちを見た。

一瞬、心の隅を後悔がよぎった。

スニーカーにジープン。ダウンコートに鍔付きのキャップ。何てことない服装がやけにハマるのは何故なんだろう。こんなに素直に『素敵だ』と思わせる男の子なんて、滅多にいやしない。

萌子も今日は、彼女なりに精一杯お洒落をして来たつもりだった。けれどもコート一つとってみても、何だか見劣りしてしまう気がする。

（何で、あたしなんだろう）

「よお」

龍太とのあいだにいくらかの距離をおいて立ち止まってしまった萌子に、彼の方から声を掛けて来た。

「……おはよう」

そう返事を返してから、萌子は（ちよつとヘンかな）と思った。まだ午前中だけれど、陽はすでに二人の頭上高くにある。

「おはよう」

龍太はそう答えて彼の方から萌子に歩み寄って来た。いつもと表情が違う。あの仏頂面ではなく、妙にさっぱりとした顔つきをしている。

そういえば薫がこんなことを言っていた。

『あいつね、萌子の前にいるといつも機嫌悪そうでしょ？ あれね、緊張してるからなんよ』

今日の龍太はとても優しそうな顔をしていた。何かが終わり、何かが始まる予兆を、彼も感じ取っているのかもしれない。

『こつやつて、今までみたいな曖昧な関係には、もう戻れないけど』

もう戻れない。友達だったあの頃には。

「ごめんね。待った？」

「いや、そんなでもない」

龍太はそう軽く微笑んで、

「緊張して、早起きしちゃった」

「え？」

「いや。正確に言うと、よう寝とらん」

さらりとそんなことを言つてのける龍太に、萌子の心はまた複雑に揺れた。

（どうして……）

「とりあえず、座る？」

広場の中心には円形の花壇があり、そこにも明るい色の薔薇がいくつか花を咲かせている。龍太は花壇を見渡せるベンチを指差してそう訊ねた。

陽の当たるベンチに二人で腰掛ける。逆光の中で花たちがたたずんでいた。

そうしてしばらく、二人は黙つたままだつた。柔らかな冬の陽射しの中で、名残を惜しむように口を閉ざしていた。

「薔薇はさ」

陽だまりに揺れる花を見ながら、龍太が口を開いた。

「ん？」

「誰のために、あんな綺麗な花を咲かせるんだろうな」

そう呟くような台詞を口にしてから、龍太は萌子の方を見やった。

「お前さ」

「え？」

「今日、珍しく化粧してるじゃん」

彼は、にやつと笑つてそう言つた。それで、二人のあいだのぎこちない緊張がほどけた。

「すいませんねえ、いつもすっぴんで」

「いやいや」

ぷつとむくれた萌子に向かって笑いながら龍太は、

「お前、化粧気なくても十分可愛いんだけどさ」

（またあ）

と萌子は思った。どうしてこの人は、突然人を驚かせるようなことを、こんなにさりげなく口に出来るのだろう。

「綺麗だよ」

「え？」

「今日の萌子、すごく綺麗だ」

吸い込まれそうなまなざしだった。龍太はゆっくりと微笑んで、

「いつも、そうやっていればもつと素敵になれるのに。服もさ」

「え？」

「その服も、可愛いよ」

そう言ってから龍太は急に恥ずかしくなったのか、照れたような苦笑いを浮かべて、

「何か俺、口説いてるみたいだな」

「ホント。そうやって毎日違う女の子に同じ台詞吐いてるんですよ」

本当は、心臓が破裂しそうなくらいドキドキしていた。罪悪感を覚えるほど、強く心が揺れていた。

萌子の台詞を笑って受け流してから、龍太は急に真剣な顔をして、
「でも、本当にそう思うよ。よく似合ってる。今日は」

そう言いさして、龍太は一瞬ためらった。

「え？」

「今日は、俺と逢うために着飾って来てくれたの？」

「……うん」

そう。今日は龍太のために装って来たのだ。龍太のために服を選び、龍太のために慣れないルージユをひいた。

龍太と逢うためだけに。

「ありがとう」

思いがけない台詞だった。何か誤解を生みそうで慌てて顔を上げた萌子は、龍太の表情を見て言葉を飲み込んだ。

彼は、このうえなく満たされた顔をしていた。

「子供の頃さ」

懐かしい想い出を優しく包み込むような口調で、龍太は台詞を続ける。

「萌子、薄紅色の髪留めしてたことあっただろ？」

唐突にそう問われて、萌子は一瞬記憶をたどった。

（そんなの、あったっけ？）

思い出した。それは千絵が東南アジアの旅の土産にと、萌子に買って来てくれた物だった。エキゾチックで風変わりな髪留めだった記憶がある。

萌子はそれを、2学期の始まりにいそいそと学校に着けて行ったのだ。

その頃の萌子は、生涯唯一と言っていいロングヘアだった。後ろ髪をその髪留めで纏めるとみんなから珍しがられて、その日1日萌子はちよつとした主役気分だった。

「夏休み明けでさ。みんな萌子が外国人になったみたいだって。その頃さ、みんな薫のことを美人だ美人だって言ってる。そりゃアイツも綺麗だなんて思ってたけど、俺はアイツの後ろにいつつも隠れてるみたいにいる萌子だって、ホントは可愛いんだぞってずっと思ってたから」

今まで知らなかったけれど、それは彼が照れを隠す時の癖なのかもしれない。龍太はちよつと鼻を擦って、

「俺、何だか自慢げだったんだ。ほら、萌子だってこんなに可愛いじゃんって」

胸がいっぱいで、苦しいほどだった。

そんなに、いつも見ていてくれたなんて。

「……ありがとう」

もつと気の利いた言葉を伝えたかった。けれども萌子は上手く台詞が見つからなくて、そんなありきたりな一言しか言えなかった。

「福山に引越す時さ」

「……うん」

「ホントは言おうと思ったんだ。ガキだったくせにさ、萌子のこと『好きだ』って思い込んでたから」

珍しく顔を赤らめながら龍太は、

「でも言えなかった。それでお前と永遠に逢えなくなるのが恐かったし、それに前にいた大阪に比べれば、福山なんてすぐ隣みたいなものだと思っていたから」

目の前で組んだ手をじつと見つめるように、龍太は話し続けた。懸命に伝える言葉を探すように。そのもどかしさに苛立ちながら。

「でもな。たとえ10メートルでも100キロでも、逢えなければ距離なんて関係ないんだ。萌子の中で俺の存在は薄れていつてしまっただろうし、俺の気持ちは薄れたりしないけど、毎日いろんなことが起こってその中に埋もれていつてしまっただったし」

『お元気ですか』『今度逢いましょう』素っ気ない走り書きの裏側に、彼はどんな想いを募らせていたのだろう。

「小学校の同級生に正田っていたの、覚えてる？」

「正田君？ うん。覚えてるよ」

正田克俊とは小6、中1とクラスメイトだった。確か彼は龍太と仲が良かったはずだ。

「アイツにさ、小学校の卒業写真見せてもらったんだ。卒業式の後の謝恩会の」

「謝恩会？」

「ああ。そこに、萌子が写ってた」

じつと龍太が萌子を見つめた。生真面目な視線が、やがてふつと和らぐ。

「髪を短く切って、真新しい制服を着て。すごく、大人びて見えた」

今は、歳より幼く見えるけどな。そう余計な茶々を入れてから龍太は、

「ドキドキした。すげえ後悔した。なんであの時、言わなかったんだろって」

でも、と龍太は視線を逸らして、

「その時言える距離に、お前はいなくなっ」

すつと陽が翳った。急に冬の冷たさが肌に纏わり付いて来て、ま

たすぐに柔らかな陽射しが戻る。

「もつと、頑張らなきゃって思った。もしかしたらもうダメかもしれないけれど、次に逢う時には、お前の美しさに負けちゃいけないって」

龍太の齒の浮くような台詞が、萌子の耳にこそばゆく響いた。

「少し、大げさだよ」

「そんなことない」

龍太はいたって真面目な表情で、

「高校に入ってさ」

「うん」

「初めてライブやった時、やっと薫にお前を連れて来てもらうことが出来てさ」

「うん」

萌子は思い出すように目を閉じて、そしてゆっくりと頷いた。

「覚えてるよ。龍太君、めっちゃカッコ良かった」

「ホント？」

本当に嬉しそうに、驚いたように目を見開いて、龍太は無邪気な笑顔を見せる。

「萌子にそう言ってもらえりゃ、俺もう何にもいらないや」

もう何にも……。萌子は自分の気持ちを悟られたような気がして、一瞬言葉に詰まった。

「……龍太君のライブに行くたびにね」

「うん」

「どんなお客さんも増えてね。凄いなって、ずっと思ってた。ウチの学校でも、龍太君のこと知ってる娘、結構いるんだよ」

「へえ。俺ってそんな有名な人？」

「もちろん」

萌子は誇らしげに大きく頷いて、

「きつと、いつか遠くに行っちゃう人だと、ずっと思ってた」
「そんなことないよ」

「ううん」

微かに気色ばんだ龍太に向かって、萌子は小さく首を振った。

「だからね、こないだは本当にびっくりしたの。びっくりして、ホントに嬉しかった」

言わなきゃいけない。こんなに想ってくれる、龍太のためにも。

「龍太君」

萌子は顔を上げて、龍太の瞳をそつと見つめた。彼の瞳が不安げに揺れる。

泣いちゃいけない、と思った。あたしに、そんな資格はない。

「ごめん。あたし、一緒に東京へは行けない」

それが萌子の答えの大半だと悟ったのだろう。龍太は全身の力が抜けたように、ふうつと大きなため息を吐いた。

「そっか」

「ごめん……」

「いや」

龍太は意外でもないといった風に薄笑いを浮かべて、

「昨日呼び出しの電話をもらった時、何となく予想はしてた」

そう言い捨てた後、それでも彼は少しだけ寂しそうにそつと息を吐いて、

「諦められない？」

「え？」

「彼のことさ。それとも、忘れられない？」

「うんとね。そうじゃなくてね……」

何て言えばいいのだろう。萌子は必死に言葉を探した。伝えなきゃいけない。龍太には、本当の気持ちを。

「あたし、自分の気持ちから逃げたくないの」

萌子の台詞が理解出来なかったのか、龍太は困惑した顔で次の台詞を促した。

「あたしね、先生に自分の気持ち伝えるつもり。ううん」

萌子は半ベソをかきながらゆっくりと首を振って、

「ダメだつてことは判つてるの。でもね、このまま何もしないで終わってしまったら、ずっと後悔すると思うの。初めて」

萌子は深く息を吸い込んだ。

「初めて、そう思える気持ちに出会ったの」

あのホツとしたような久志の笑顔を思い出した。いつまでも見ていたくなるような、あの笑顔を。

「俺は、待つていてはいけないのか？」

苦しそうな声で、龍太がそう尋ねる。

「ごめん」

答えた萌子の声も掠れていた。

好きだという気持ちはみんな一つしか持っていないのに、どうしてこんなにもすれ違つてしまうのだろう。

「あたし、龍太君をそんな風にご利用したくないの。先生がダメだったらその次、みたいな。龍太君は」

（そう。あたしにとって彼は）

「とても大切な人だから」

萌子の胸を何度もやるせない思いが訪れて、やがて彼女は涙が止まらなくなった。あたしはどうしてこんな風に不器用な生き方しか出来ないんだろう。まっすぐにしか歩けずに、また人を傷つけてしまふ。

「ありがとな」

予期せぬ台詞を耳元で囁かれて、萌子は弾かれたように顔を上げる。

そこに、思いがけない笑顔があった。

「すごく嬉しいよ」

「でも」

泣き腫らした目で萌子は、縋るように龍太を見上げた。

「わたし、龍太君のこと……」

「しょうがないんだよ、それは」

教え諭すような龍太のその口調は、同い年とは思えないほど大人

びていた。

「お前がまだ、そいつのことが好きなんだから」

「え？」

「付き合えそうだから好きになる。そうじゃないだろ？　好きだから、一緒にいたいと思うんだ」

そして龍太は一つ、力強く頷いた。

「お前はまだ、その先生のことを好きなんだよ」

公園の出口まででいいと言ったのに、龍太はわざわざ駅の改札まで見送りに来てくれた。

「俺も、駅の方に用事があるから」

きつと言いつに違いない。萌子は直感的にそう思った。思えばそうやってさりげなく、私は　いつも彼の優しさに触れていたんだなと萌子は改めて感じていた。

（どうして今まで、気付かなかったのだろう）

自分の勘の鈍さが、今は恨めしかった。

駅までの道は、会話が途切れがちだった。少し先を歩く龍太の背中を見つめながら、萌子は自分が振られたみたいにしゅんぼりしていた。

「じゃ、ここで」

改札の前で、龍太はそう小さく手を挙げた。

「しばらく、お別れだな」

自分から断つたくせに、龍太が口にした『お別れ』という言葉の響きに、萌子の心は激しく揺れ動いた。

「もう、逢いたくない？」

そう呟いてから、萌子は自分の問い掛けた台詞の愚かさに気付いた。

あんなに好きだった久志の視界から、それこそ逃げ出すように離れていったのは、他でもない自分自身ではないか。

龍太はしばらく黙り込んで、じつと萌子を見つめていた。改札を
行き来する人々のざわめきが、二人のあいだを横切っていく。

と、突然彼は笑い出した。

「何言ってるんだよ」

「だって」

「お前は、逢いたくない？」

「そんなこと……」

きつと虫が良過ぎるんだ。萌子は思った。手に入れたいものはあ
る。でも、今立っている場所も失いたくない。

「だったら、またいつか、な」

「え？」

「しばらくは逢えないけど……」

龍太は、ちよつとだけ楽しい出来事に思いを馳せるような目をし
て、

「俺もライブの準備で忙しいし、年が明けたらそんなに逢う機会
もないだろうし。それに」

彼はにやつと笑って、

「お前の願いが万が一、いや百億分の一の確率で、奇跡的に、ち
よーミラクルで」

「ちよつと！ そんなに確率低いの？」

何だか可笑しくなった。龍太の戯けた仕草に、萌子はちよつとだ
け楽しい気分を取り戻して、笑いながら龍太を軽く睨んだ。

「はははっ」

龍太も嬉しそうに笑い声を上げて、

「ホントに願いが叶ったら、きつと俺と会ってる暇なんかなくな
るさ」

本当だろうか。

みんなと会う暇がないほど、二人で過ごせるようになるのだらう
か。

いや、そもそもそんな奇跡は起こりうるはずがないのだ。

それは龍太も判っているはずだった。判っていて、彼なりの優しさなんだと萌子はまた気付かせられた。

「じゃあな」

そう萌子を改札に送り出そうとして、龍太は急に何かを思い出したように、

「あつ、ちよつと待って」

「え？」

「これ、持ってた」

そう呼び止めて彼は、ポケットからMDを二枚取り出した。

「こないだの、ライブの。薫にも渡しといて」

「うん。ありがとう」

萌子はそれをととも大切そうに受け取ると、少し俯いて、

「ごめんね。とーきよーのライブ、行けなくて」

「うん。しょうがないよな、どっちみち遠いし」

「薫は知ってるんでしょ？ ライブのこと」

「うん。萌子に言う前に話した」

龍太は少し笑って、

「即座に『むりっ！』って言われた」

萌子も思わず一緒になって笑った。

遠慮したのだ、と思った。意固地になる薫の姿が目には浮かぶようで、萌子は何だか可笑しかった。私は幸せ者なのだと、少し思った。

「萌子、お前さ」

「ん？」

「D - s n a p、持ってたよな」

「うん。持ってるけど……」

「……じゃ、これ」

一瞬のためらいをみせてから、龍太は同じポケットからメモリーカードを取り出した。

掌に収まった小さな黒いプラスチックの欠片を見つめて、それから萌子は戸惑ったように龍太を見た。

「それは、お前だけに聴いて欲しいんだ」

「わたし、だけ？」

「そう。お前だけに」

どうして？ という台詞を、萌子は寸でのところで飲み込む。

龍太の視線が雄弁に語り掛けていた。彼の熱く、強い想いを。

「……ありがとう」

それだけ言つて、萌子はメモリーカードをバッグにしまった。

「じゃあ、な」

「うん。ライブ、頑張つてね」

「ああ。お前もな」

「……え？」

龍太に背を向けかけた萌子は、その一言で振り返つた。

「諦めるんじゃないぞ。お前は」

龍太はそう言つて柔らかく微笑む。

「失し物でも何でも、すぐ諦めちゃう癖があるからな」

萌子は、胸の奥が静かに熱くなるのを感じていた。涙腺のボルト

が、わずかに緩む。

「諦めるな、最後まで。それでもし」

龍太は鼻を擦ると、気恥ずかしそうに少し俯いた。

「辛くなったら、戻つて来いよ」

「え？」

「どうせ多分俺も、しばらくはお前のこと、忘れられないからさ」

彼はそう言つて、また照れたように鼻を擦った。

地上の賑わいをよそに、真昼のプラットホームは閑散としていた。ホームの端に立つて、萌子はバッグからメモリーカードを取り出す。

『しばらくはお前のこと、忘れられないからさ』

萌子は、掌に乗せた黒い小さな塊をきゅっと握り締めてから、D

- s n a p に挿入した。

スイッチを入れると液晶画面に『Hello!』の文字が躍り、次に『Non Title』というテロップが流れた。

『メリークリスマス&ハッピーニューイヤー!』

「え?……」

ヘッドホンの中からいきなり龍太が語り掛けて来て、萌子は不意を衝かれた。

『きつと今年はもう萌子と逢えることもないだろうから、今のうちに言っておくよ。』

俺は口下手で、上手く言葉にすることが出来ないから、明日逢ってもお前に上手く気持ちを伝えられないと思う。

俺は、歌うことしか出来ないから。

だから君に、プログラムにないこの曲を贈ります。

忘れないで欲しい。俺だけは君の味方だから。

いつまでも、君の。

君以外の全てを敵に回しても『

そしてヘッドホンの中の彼は、静かにアカペラで『リンダ リンダ』を歌い始めた。

萌子は突然、涙を堪え切れなくなった。唇を歪ませて堪えようとすればするほど、とめどなく涙が頬を伝う。

今初めて知る、龍太の本当の想いの深さを、萌子は心の奥でぐつと噛み締めた。

「メリークリスマス……」

周囲に聴こえないくらい小さな声で、萌子はそつと呟いた。

(頑張つて、龍太君……!)

もしも僕が いつか君と出会い話し合うなら

そんな時は どうか愛の意味を知って下さい
愛じゃなくても 恋じゃなくても 君を離しはしない
けして負けない 強い力を 僕は一つだけ持つ持つ

第六章 キャンドルナイト（４）

「なにゆえに」

坂道を下りながら吠える薫の論調は、まるで生徒会の下手な選挙演説のようだ。

「イエス様の誕生を心静かに祝うその前夜に、学校に束縛されなければならんのだ」

束縛されるのは、せいぜいその前日の午前中くらいだと思うけど。隣を歩きながら、萌子はそう心の中で突っ込みを入れる。

「神が与えた、３連休というチャンスを潰してまで」

ようするに、それが不満だけなのである。

今年は天皇誕生日が金曜日だった。ＴＶでは『ロマンティックな連休に』と騒ぎ立てている。土曜日もしき使われる小中高生には、元々何の縁もないのだが。

「去年だって、２４日に終業式やったじゃない」

「あれは金曜日だったでしょ」

薫は真顔で反論した。

「土曜日に終業式やっても、あんまり得した気分にならないのよねえ」

萌子は正直、今日が終業式で良かったと思っていた。その訳を話したら、薫に怒られそうだけれど。

クリスマスプレゼントという『言い訳』にはこの日でないと何となく格好がつかないし、そもそもそのプレゼント自体が昨日の夜まで出来上がらなかったのだ。

いざとなったら久志の家まで届けに行こうかとも考えた。場所は勝手知ったる何とか、なのだから。

本当はの方が良いのかもしれない。とりあえず鞆の中には出来上がったばかりの熊が潜んでいるけれど、それを渡すタイミングはまだ決めかねている。

でも、萌子にはそこまでの勇気が持てなかった。玄関のドアを開けた時の久志の反応を、一人で見える勇気が。それならばいっそ、雑踏の中で全てが過ぎ去ってしまった方がいい。

「降るかしらね」

薫は空を見上げて、唐突にそう呟いた。

「え？」

「なるかしら。ホワイトクリスマスに」

つられて見上げた空は、不思議な色をしていた。低く垂れ込めた雲が、天空からの光を透かして白く輝いている。それはひどく幻想的な情景だった。そう、まるで……。

「天使が降りて来そう……」

ポツリと呟いた萌子を優しくに見やって、薫はほんの少し笑った。「相変わらずロマンティストねえ、あなたは」

でもさ、と言いさして薫がしばらく黙り込む。

「？」

「ホワイトクリスマスなんかになっても、一緒に見る相手なんかいないし」

そうして薫は萌子の方を悪戯っぽく見やって、

「ねっ」

「はいはい、どうせ」

薫は何をどこまで勘付いているのだろう。萌子の脳裏をちらりとそんな疑問がよぎった。

実は、薫はクリスマス・パーティーの日に1度だけ『その日、予定があるから』と言い出したことがある。

それは中1の冬休みのことだった。もちろん夜遅くなることはなくて、ちゃんとその夜のパーティーに彼女は顔を出したのだが。

その冬、薫は中学の同級生と付き合っていた。萌子が知る限り、後にも先にも男の子と『付き合っていた』のはその冬1度きりのはずだ。『と付き合ってる』『××とずいぶん仲が良い』そんな噂を幾度となく耳にしたけれど、本気だったのはこれだけだったの

だと思う。

こんな夜を、今まで薫はどんな想いで過して来たのだろう。ましてや今年は……。

萌子はちらりと薫を見た。薫も偶然視線を上げた。その澄んだ瞳と目が合つて、萌子は少しうろたえた。

「なに？」

「いや、ね」

と薫は踏切を渡り切った先の商店街を見つめて、

「何でクリスマスソングって、別れの歌ばかりなんだろうって」

「え？」

商店街からは、朝っぱらから山下達郎の『クリスマス・イブ』が聴こえて来る。

「君は来ない、だのたといえ貴方が他の誰といても、だの」

「ああ。そういえば……」

「まっ、女6人の寂しいイブを過ごすあたしたちには、とても相応しいけど。今年は唯一の男もいないし」

一瞬、龍太のことを言つたのかと思つて、萌子は内心ドキツとした。

そうじゃない。薫の父のことだ。

確かに、二つの家で共にイブを過ごすようになってから一昨年まで、パーティーの参加者の中で薫の父は唯一の男性だった。彼はそのことをとてもひけ目に感じていたらしく、萌子たちが幼い頃によく酔つ払つては佐知子に向かつて、

「もう一人、薫の弟が欲しいなあ」

と迫つて、邪険にされていた。

そんな光景を見せられたおかげで、萌子は母に頼めば弟が出て来るものだつまり勘違いさせられてしまった。

「ごめんね、萌子。それはお父さんからの頼みじゃないと、ダメなのよ」

母は母なりに上手く諭したつもりだったのだろう。けれどもその

一言は、萌子の中にある一人ぼつちな気分を余計に膨らませたのだ
った。

「ママったらね、『今年は薫と一緒に独身気分ね』だって。ホン
トは淋しいくせにさ」

薫のそんな台詞に、萌子は小さく微笑んだ。

薫の父と母は本当に仲が良いのだ。それは、誰もが羨むくらいだ
った。遠く離れていても、きっと今日も互いを想い合っているのだ
ろう。

離れていても。一瞬しか逢えなくても。そしてたとえ届かなくて
も。それぞれの想いに、等しくイブは訪れる。

乗り合わせた列車はいつもより騒々しかった。時間が遅いからか
もしれない。今日は薫の朝練もないので、始業にぎりぎり間に合う
列車を選んだのだ。

福山の高校は、ほとんどが今日終業式のようなようだった。誰もが笑顔
で喧しい。まぶしいほど、幸せそうだった。もしかしたら、こんな
切ない想いを忍ばせているのはあたしだけなのかも。そう思わせる
くらいに。

もうすぐ、12時の鐘が鳴る。夢のような日々は終わるのだ。馬
車が南瓜に戻るように。どうせなら、最後まで夢を観ていたかった。

（ん？ これじゃキリストじゃなくてグリム童話だわ）

哀しみの淵に浸りかけて、萌子はふとそう思い可笑しくなった。

（イブだもの。もつと楽しい気分にならなくちゃ）

そうだ。久志に想いを打ち明けることも、もつと楽しみにしなき
や。萌子はそう思った。

（終わりなどではないのだから）

また、久志と笑って話せるようになりたい。

萌子の願いは、今はただそれだけだった。たとえ想いは届かなく
ても、また笑い合える仲になれるように。

別の想いで、また好きになれるように。

福女の校舎の中も、けたたましい喧騒に包まれていた。女の子が

集まると、こういう時はもの凄いパワーになる。

憂鬱な授業がないせいかもしれない。パパッとホームルームを終わらせて、校長の退屈な長話を聞き流しさえ出来れば、後は余計なものを余計なところを見ずに貰ってジ・エンド。楽しい楽しい冬休みの始まりである。

昇降口で下履きに履き代えて廊下に出たところで、萌子はふと思いついたように辺りを見回した。

「なに？ 誰か探してるの？」

薫がそう疑わしげな視線を向ける。

「うん……ちょっと……」

校内に足を踏み入れて初めて、萌子は予期せぬ焦燥感を覚えた。迂闊にも、久志をどうやって捕まえたら良いか考えていなかったのだ。

特にクラス担任でも何でもない久志が、こんな時どこで何をしているのか、萌子には見当もつかなかった。やっぱり職員室でのんびりお茶でも啜っているものなのだろうか。

「おはよー」

教室に入ると、真っ先に晴美がそう声を掛けて来た。いつかのように、親しい仲間たちに囲まれている。

「なあに？ 何かまた悪巧み？」

コートを脱ぎながら薫がそう言っていると、晴美はブクツと頬を膨らませて、

「なによう。まるで私が、毎回悪事的首謀者になってるみたいじゃないのさ」

「あら、違った？」

「失礼ねえ。楽しい楽しいパーティーの相談をしてるんじゃない」「だから、その『楽しい楽しい』の辺りが怪しいのよ」

薫のそんな台詞を、晴美はあははと豪快に笑い飛ばして、

「うん。確かに怪しい、かしんない」

「何やらかす気よ」

「立花ちゃんをね、今宵カラオケパーティーに誘うの」

「え？」

久志と出逢ってから、今までで一番心臓が跳ね飛んだかもしれない。驚き呆れたように声を発した薫の横で、萌子は声も立てられずに石膏のように顔面蒼白になった。

「あたしの友達がね、立花ちゃんの写真見せたらどうしても逢いたいって言い出してね。でもねえ、立花ちゃんじゃねえ。きつと素直に言うことを聞かないと思うから。だから、佐藤をだしに使ったの」

佐藤とは自称30代、推定45歳の社会科教師のことだった。

「佐藤にね、立花ちゃんを誘い出してもらうの。立花ちゃんには佐藤とその女友達とカラオケするってことにして。あのエロ教師、女子高生とカラオケ出来るって大喜びで」

確かに、普段から佐藤の言動はおかしいと評判だった。黒板に向かって回答を書いている生徒との距離が、異様に近かったりするのだ。『耳元で鼻息が聞こえた』という娘もいる。だいたい、社会科の授業で黒板に解答を書かせること自体おかしい。

「何かそれ、騙し討ちじゃん」

薫が珍しく、茶化すでもなく真剣に憤りを示してみせる。

「あら。でも、立花ちゃん案外喜んでるみたいよ。『一人きりのイブになるところだった』って」

一人きりのイブ。

ありえない、頭の片隅にも浮かばなかった言葉に、萌子は激しく戸惑った。

「ま、相手が女子高生って知ったら、立花ちゃんじゃ引いちゃうかもしれないけど」

そう肩を竦めてみせてから晴美は、

「だから、本当に行くのはあたしと恭子と友達の娘二人と、佐藤と立花ちゃんと……」

自分の手元を見つめながら指折り数えていたが、ふと顔を上げる

と薫の方を見やって、

「薫も行く？」

まさかあ、と言うように薫は苦笑いを浮かべてぱたと手を振ると、

「あたしたちは、おうちでホームパーティーよ」

「そつか。年中行事だもんね」

晴美はそう言ってちらりと萌子を見やると、

「萌子も……行く訳ないよね」

「う、うん」

萌子はそうぎこちなく頷いた。

その刹那、萌子の中で激しい焦燥感が再燃した。彼女は急に椅子から立ち上がると、自分でもわざとらしいと思いながら、

「あたし、美術室行つて来るね」

「なに？ 忘れ物？」

萌子の慌てぶりに、恭子が小首を傾げながらそう尋ねる。

「うん。ちょっと……」

怪し過ぎると判つていながら、萌子は生返事のまま教室を飛び出した。

（何で……）

一人きりのイブ。訳も判らぬまま浮き足立つ萌子の心に、晴美の台詞がリフレインする。競り上がって来るような焦燥感が、余計に萌子を惑わせた。

イブだからって、恋人同士で一緒に過ごさなきゃいけない訳じゃない。久志が喜んで合コンについていくような表現も、晴美が誇張し過ぎているだけかもしれない。

萌子は胸の中でいくつも言い訳を並べ立てた。けれども、そのたびに『一人きりのイブ』という台詞が耳の中に響き渡る。

とにかく久志に逢わなきゃ。萌子はそう思った。久志が今何を望んでいるのかも、自分の想いがどこへ向かうのかも、全ては言葉を交わしてみなければ判らないことなのだ。

それに少なくとも、晴美たちの誘いに関しては話しておいた方が
良い。それだけは間違いなさそうだった。

萌子はとりあえず職員室に向かってみた。そこで久志とどう接触
すれば良いか、それはちつとも思い付かなかったけれど、彼女は本
能の赴くままただひたすら小走りに廊下を駆けた。

そつと小窓から覗き込んだその先に、肝心の人影は見当たらな
った。拍子抜けした気分で覗き込むのをやめた萌子は、途方に暮れ
たように扉の前でしばし立ち尽くした。

いきなり『ガラッ』と扉が開いた。萌子はビクツとして5cmく
らい飛び退いた。

数学教師の宮本が、じろじろと不躰な視線を撫で付けながら萌子
の脇を通り過ぎて行く。

萌子は

「ふう」と小さくため息を吐いた。

（美術室、かなあ）

あとはそこぐらいしか思いつかない。そう考えながら萌子は踵を
返す。

そこに、久志が佇んでいた。

「わあっ！」

萌子はびっくりして10cmくらい後ずさった。

「なんだよ」

久志が怪訝そうな顔で萌子を見る。

「蛙踏んづけたみたいな声出して」

「……ゴキブリ踏んづけたぐらい驚きました」

萌子が真顔でそう言うと、久志は思いつきり笑い出した。

久志は穏やかな顔をしていた。このままで、もう少しこのままで
萌子の中の決意を鈍らせそうなほど、出逢った頃と何も変わらない
柔らかな雰囲気、その瞬間二人を包み込んでいた。

「どうした？ こんなところで」

そつ。この穏やかな時間に、あたしは懂れたのかもしれない。

失いたくない。一瞬、後悔に似た気持ちで萌子をためらわせた。

「あの……」

「ん？」

ためらいを振り切るように萌子が声を絞り出そうとしたその時、再び扉が開いて今度は社会科の佐藤が顔を出した。

「何してんだ。もうホームルームの時間だぞ」

わざとらしいほど厳めしい顔をしてみせた後で、佐藤は二人をじろりと一瞥して足早に去って行った。

「いけね。もうそんな時間」

久志がそう慌てて、職員室の扉に手を掛けようとする。

「せんせい」

その背中を萌子が呼び止めた。

「ん？」

何気ない調子で久志が振り返る。

「放課後、美術室に来て下さい」

「……え？」

「話したいことが、あります」

その刹那、萌子の胸をもう一度だけ、後悔に似た気持ちがかすめた。

「さむっ！」

薫がそう呟いて、艶かしい膝小僧をキュツと閉じる。

予定通りに、校長の長話が講堂中に響いていた。

福山女子高校には、体育館とは別に講堂が設けられている。何かの式典の折には、たいていこの講堂に全校生徒が集められた。

この学校は比較的歴史が浅い代わりに、施設は良く揃っていてしかも適度に小洒落ている。中学3年の時に薫と二人で学校訪問をして、その洒落た雰囲気は萌子たちはずぐに惚れ込んでしまった。施設全体の充実振りばかりでなく、広く開放的なエントランスや階段

の手すりに施された細工など、女の子の心を程良くくすぐりそうなものがあちこちにある。

元々、近隣の伝統ある中堅校と肩を並べるほどの進学率に惹かれていたし、女子弓道部が強いということもあって、二人は迷いなく福女を受験することに決めたのだった。

中学生の頃のように、1時間以上も立たされてるくでもない話を聞かされたことに比べれば、こうして椅子に座っていられる分だけ確かにずいぶん楽なのだが……。

「いくら座らせてるからって、長々喋って良いってもんじゃないのよ」

膝を擦り合わせながら薫はそうぼやいた。

いかに良好な設備とは言っても、さすがに講堂中が冷暖房完備とまではいかない。夏場なら吹き抜ける風にくらか癒されもするが、真冬になると寒さが堪えた。特に今日は、一段と厳しい冷氣がつま先から伝わって来る。

「どうせここにいる9割は女なんだから、せめて床暖房ぐらい付ければ良いのに」

薫は更にそうこぼすと、

「ねえ？」

と隣に座る萌子に賛同を求めた。

が、萌子はそれに全く反応しなかった。まるで蠅人形のように動かなくなっている親友の姿に薫が首を傾げていると、その向こうにいた恭子が、

（ダメダメ）

というように黙って首を振った。

「萌ちゃんは今、校長先生様のありがたいお言葉に聞き入ってるんだから」

実のところ、萌子の頭に校長の言葉は一文字たりとも残っていなかった。ぼんやりと意味もなく、ただ演壇を注視していただけだった。

百メートルを全力疾走して来たばかりのランナーのように、まだ心臓がドキドキしている。こんな寒さの中で、ほんのりと頬が熱い。興奮して、力が抜けてしまいそうだった。たった一言声を掛けただけで、全ての力を使い果たしてしまったような気がする。

『話したいことが、あります』

あの時、そう告げられて久志は一瞬体を強張らせた。

それから、引き締まった面持ちのまま小さく頷いたのだ。

「判った。じゃ、後でな」

そう言つて萌子の肩をさり気なく『ぽん』と叩いて、そして久志は職員室へと消えて行つた。

久志の反応は、よく読み取れなかった。しばらく腑抜けたようにぼんやりとして、それから萌子は突然思い出したように胸の動悸が激しくなつた。

その鼓動の高まりが、いつまで経つても治まらない。まるで心臓が鼓膜のすぐ裏側で息づいているかのようだ。

彼女の中で今、湧き立ちそうになる期待と絶望に備える諦めの気持ちだが、激しくぶつかり合っていた。

萌子は視線をずらすと、生徒たちの脇で一列に腰掛けている教師たちの方を見やつた。

無粋なくらいに生真面目な顔で、久志はじつと校長の話を聞き入っていた。窓から射し込む淡い光が、彼のいる一角だけをほんのりと明るく照らし出している。それはとても美しく、見惚れてしまいそうな情景だった。

彼の姿をまぶたに焼きつけておこう。不意に萌子はそう思った。たとえこの恋がこの先どこへ向かおうとも、こんなにも純粋に、まっすぐに想い続けていられるのは、これが最後かもしれないのだから。

この想いを、いつまでも忘れないように。
萌子はそつと久志の横顔を見つめ続けた。
いつまでも、忘れないように。

鍵を差し込む前に、萌子は扉の取っ手に指を掛けてみた。
がたがたと音がして、でも開くことはない。当たり前だ。その鍵
はたった今、彼女自身が職員室から取って来たばかりなのだから。
それでも確かめずにはいられないほど、萌子は緊張して、少し臆
病になっていた。

扉を開くと、微かにかすれた絵の具の匂いがした。カーテンを開
け放つと、萌子は少しだけ勇気を出して窓も開け放つ。

途端に、目の覚めるような冷たい風が頬を撫ぜた。

窓の外は依然としてどんよりとした曇り空だった。本当に、今に
も白いかけらが天から舞って来そうな空模様だ。

その鈍色の空の下で、こんもりとした森の向こうに聳え立つ福山
城の天守も、心なしかくすんで見える。

萌子は部屋の中を振り返ると、教室の隅に飾られた1枚の額を見
つめた。

錦秋の福山城。あの時、萌子が嫉妬すら覚えた久志の絵は、額に
納められて教室の壁に飾られたのだった。

萌子は、唐突に二人だけで過ごしたあの薄暮の美術室を思い出し
た。それから、いくつもの場面が彼女の脳裏を次々と訪ねた。千光
寺山から見た夕暮れ。二人で歩いた尾道の小路。落ち着きのない緊
張した面持ちで尾道駅の雑踏にいた久志の顔。雨に濡れそぼつ紺色
の傘と浅黄色のジャケット。

いつだって、その景色の隣にこの気持ちがあったように思う。

(いつから、こんなに好きになってしまったのだろう)

萌子は一つ小さなため息を吐いて、静かに窓を閉めた。それから、
教室の片隅にあるキャンバスへと向かった。

『久しぶり描いた絵としては、まあまあ描けた方だと思うけどね』
あの時、美術部員が揃って絶賛した絵の出来をそう嘯いてみせた
久志は、今は一風変わった絵に取り組んでいる。

イーゼルに立て掛けられたままのキャンバスを覆う白い布を、萌子はさっと跳ね上げた。

黒い森。小人たち。妖精。そしてそれを見つめる下弦の月。

デッサンの時点ではいまいち掴み切れなかった構図が、彼の指先で彩られるパステルによって徐々にその全容を現すに連れて、そばにいた美術室の常連たちは感嘆の声を上げた。

「これ、こんな片田舎に放っておく腕じゃないわよ」

そう言っ腕を組んだ朋美の横で、これには萌子も思わず首を縦に振った。

そう。本来なら、出逢っているはずのない人なのだ。

「これって、何をモチーフにしたんですか？」

無邪気な口調で下級生がそう尋ねると、久志は茶目つ気たっぷりに不器用なウインクなどしてみせて、一言こう告げた。

「メルヘン」

その瞬間の久志の照れた笑顔と自分の胸を貫いた痛みが、萌子には哀しかった。

あの頃なら。たとえ叶えるには拙い片想いだとしても、きっと心はときめいていただろう。その純真な想いが今はただ懐かしい。

知らなければ、もっと幸せだったのかもしれない。久志との距離も、自分の想いの深さも。

萌子がもう一つ小さな吐息を吐いたその時、ガラガラと派手な音を立てて唐突に扉が開いた。萌子は布を掛け直す余裕もなく、驚いたように入り口を振り返った。

「ごめんごめん、遅くなっ」

萌子の心臓がきゅっと縮まった。胸の鼓動が、今までで一番早くなる。

「いや参った。訳わかんない『冬休みにおける校外指導について』なんて余計な話、延々と聞かされちゃって」

緊張してる。萌子はすぐに気付いた。ぎこちない笑顔で喋る久志は、不自然なほど饒舌だった。

「俺の住んでるとこじゃ、君と薫君ぐらいしか監視出来ないのにな」

冗談を言ったつもりらしい。久志はわざとらしく一人で笑い声を上げた後で、萌子の背後にあるものに気付いて、

「あつ、こらこらダメだよ。まだ見ちゃ」

と萌子の方へ歩み寄って来た。

「未完成品、見られると恥ずかしいだろ？」

そう言つて久志が伸ばした手と、

「ごめんなさい」

と萌子が振り上げた手が、布を掴む寸前にぶつかり合った。

「あつ……」

「……わりい」

どちらともなく手を引いて、そこに気まずい間が出来た。

萌子はチラッと久志の顔を覗き見た。少し気恥ずかしそうな、ばつが悪い表情を浮かべて久志はわざと視線を逸らしている。

その刹那、萌子のはっきりと思い出した。

そう。こんな気弱そうな優しさ、堪らなく愛おしかったのだ。

私と少し似た男の人。

大好きだった。きつとあの雨の日の夕暮れから、ずっと。

たとえ明日には、露と消える想いでも構わない。伝えたい、この胸の内を。

萌子の心を今、初めて知る激情が迸っていた。

「ごめんな、遅くなっちゃって」

「ううん」

「で、話つてなに？」

心に決めたはずなのに、上手く言葉が出て来なかった。伝えなければいけない想いが、頭の中で渦巻いている。

久志はそつとキャンバスに布を被せると、窓際に歩み寄った。

「ホントに降りそうだな」

「え？」

「雪がさ。今夜降ったら、ホワイトクリスマスだな」

温和な笑顔だった。少し照れたように、笑いながら萌子を見つめる鳶色の瞳。

「先生」

「ん？」

「渡したいものが、あるんです」

「……俺に？」

「はい」

鞆をまさぐる手が、緊張で震える。手間取りながら萌子は、淡くシルバーゴールドに輝く包みを取り出した。

ラッピングも全て萌子の手製だった。貰ってもらえるかどうかさえ判らない贈り物を、彼女は昨夜丹精に想いを込めて包んだ。

「これを……」

「俺に？」

「うん」

「あ、ありがとう」

嬉しいというより、戸惑った顔つきだった。久志は不思議なものを見るような目つきで手渡された物を見つめてから、やがて丁寧に包装を解き始めた。

「……これを、俺に？」

中から出て来たビーズ製の熊を手にとって、久志は萌子を見つめた。

萌子は黙ったままコクリ、と頷く。

「これ、手作り？」

もう一度、萌子がコクリと頷く。

永遠に続きそうな沈黙だった。本当は、久志が黙り込んでいたのはほんの数秒なのかもしれない。それでも萌子には、息苦しいほど長い時間だった。

どんな結末でもいい。

彼女は一度ぎゅっと目を閉じてから、子犬のような目で久志の顔

を見上げた。

今にもこぼれそうな笑顔が、そこにあった。

「よかった……」

「え？」

萌子は戸惑い顔で久志を見つめ返した。鳶色の瞳と、視線が絡み合う。

その瞳が、本当に嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう」

久志は少し大げさなくらい大きく、安堵のため息を漏らした。そして萌子の瞳をじっと見つめると、一言こう告げた。

「君とは、もうダメなんだと思ってた」

第六章 キャンドルナイト(5)

心臓が、トクトクと音を立て始めるのを感じた。知らず知らず体の奥の方から、心地よい感覚が湧き上がって来る。

(いまなんて……)

頭の中が真っ白だった。彼の発した言葉の意味も判らず、ただ心だけが浮ついた予感に先走っている。

びつくりしたように萌子が見開いて見つめると、久志は恥らうように視線を背けた。

「君と、あの時みたいに話せる日は、もう来ないと思ってたから」そう呟いて、久志は顔を上げる。萌子を見つめると、いくらか興奮した面持ちのまま口元をぎゅっと引き締めて、そして小さく頷いて見せた。

(あの時……)

言葉にしなくても、萌子にだけは判った。夕暮れの風。金色に染まる水面。千光寺山から見えた景色。穏やかな気持ち。共鳴する想い。

その瞬間、萌子の中で何かがほどけた。

彼も、本当は戻りたかったのだ。あの安らぎに満ちた夕暮れの二人に。

萌子の胸の内に、どんどん晴れやかな気持ちが広がってゆく。嬉しさに、泣き出してしまいそうだった。心の中に、あの満ち足りた切なさがだんだんと戻って来るのを感じる。

(ああ、そうか。私の心は、いつの間にか時計の針を進めることをやめてしまっていたんだ)

戻れるのかもしれない。願いが叶う、というよりそれは『戻れる』という感覚だった。久志の存在を近しく思えること。それだけあれば、萌子は十分だった。

久志を見つめた。久志も萌子を見つめ返した。二人の鼓動が互い

に伝わっていくように、萌子の胸を早鐘が打ち続ける。

どれくらい、そうやって見つめ合っていたのだろう。胸が躍るような、面映いような、柔らかく暖かな時間。

ふと、久志が何かを思い付いたように表情を動かした。

「なあ」

「……はい？」

「腹、へらないか？」

「え？」

そう言われて初めて、萌子もわずかな空腹を感じた。

緊張が解けたのかもしれない。ここに来るまでは、とても食事などする気分ではなかった。

「昼飯は食べた？」

「ううん。まだ」

（ご飯食べに連れてってくれるのかな？）

萌子の中で虫の良い考えがちらつと頭をかすめた。とりあえずお腹を落ち着かせて。それから、聞きたいことは山ほどあるのだ。

「パーティー、しないか？」

しかし、久志の口を突いて出た台詞は、思いがけないものだった。

「え？」

「ここで、さ」

「……？」

『？』マークをいくつも頭の周りに飛ばして、萌子は困惑した顔付きで首を傾げる。

そんな萌子に久志は優しく微笑み掛けて、それから茶目つ気たつぶりな顔をしてみせた。

「二人だけの、クリスマス・パーティーをしようよ」

思惑通り（？）万札をゲットした萌子は、久志に買出しを命じられた。

「とりあえず、チキンだな。ケンタッキーでいつか。それからショートケーキを2つ。飲み物もいるなあ。あ、でもアルコールはダメだぞ」

こんなにはしゃいでいる久志を見たのは初めてのことだった。嬉しさ半分、戸惑い半分といった気持ちで、萌子は困惑気味に久志を見やった。

「雇われ教師なんだから。見つかったらクビになっちまう」

「部室でパーティーやるのは、クビの対象にはならないんですか？」

萌子は茶化したつもりでそう言ったのに、途端に久志は妙に真剣な表情になって考え込んでしまった。

「うーん」

腕を組んでそう唸ってから、

「部屋、暗くしとくか」

とにもかくにも、そうして萌子は買出しへと部屋を追い出された。「そのあいだに部屋、整えておくから、な」

とりあえず駅前に出てチキンを購入する。それから、その近くのお気に入りのケーキ屋に立ち寄った。

どこへ行ってもえらく混雑していた。イブの華やきに憑り付かれたように、街中に人があふれ返っている。

けれども、そんな騒然とした雰囲気も待ち時間の長さも、萌子はまるで気にならなかった。

教室を出てからずっと、まるで雲の上でも歩いているかのようにふわふわとした気分に使われていた。実を言うと、ここまでどうやってたどり着いたのかいまいち記憶が定かでない。

（ウソみたいだ）

ここまでの道すがら、その一言がずっと頭の中を廻り続けていた。本当のことを言えば、まだ久志の口から何一つ聞き出した訳ではない。また得意の早とちりではないかと、萌子は何度も頬をつねりたい気分になった。

(でも……)

『君とは、もうダメなんだと思ってた』

でもその一方で、確信めいた気持ちで彼女の胸の中でだんだんと膨れ上がって来ているのもまた事実だった。

(フラレちゃったのかしら)

もちろん先生が、ね。黒沢の顔を思い浮かべながらそんなことを考えて、萌子はいよいよ愉快な気分になった。

(でも……)

彼は確かに言った。『あの時みたいに話せる日』を待っていた、と。

レジの順番を待ちながら萌子は、通りに面した大きなガラス越しに道行く人の顔を眺めていた。

みんな、幸せそうだった。この世に不幸など何一つ存在しないかのように、明るい笑顔で足早に通り過ぎて行く。ついさっきまで自分はそのような幸せとは無縁な、群れからはぐれた渡り鳥みたいな気分だったはずなのに。

とても不思議な気分だった。瞬き一つすれば消えてしまう、儚い夢を見ているような気がする。

けれども、萌子の手にはチキンの入った袋があり、そして彼女は今確かに2人分のショートケーキを買おうとしていた。

(しっかりしなきゃ)

ケーキと共にその店で売っていた低アルコールのシャンメリーを買い、最後に百円ショップに寄ってから、萌子は足早にコンコースを抜けて北口へと出た。

見上げた空は、寒々とした灰色だった。雪の前触れの空。そんな曲のフレーズが頭に浮かぶ。吐き出した息が、目の前で白く舞い上がった。

(そう。ちゃんと確かめなきゃ)

落葉を踏みしめるように石垣沿いの道を急ぎながら、今朝よりは明らかに穏やかに落ち着いた心持ちで、萌子はそんな風に思ってい

た。もう、何も間違えたくない、と。

時計の針はすでに午後の1時を大きく回っていた。こんな時刻になると、下校して来る生徒の姿もまばらだ。

ましてや、こんな日にいまさら学校へ戻る者など皆無である。萌子は自分の姿を見咎められはしないかと、内心ドキドキしていた。

「……え？」

周到に周囲を見回してからそつと扉を開けた萌子は、部屋の暗さに戸惑って思わず立ち尽くした。

「あ、来た来た」

久志が嬉しそうに、暗がりから姿を現す。

「先生、これ……」

「この方が雰囲気、出るだろ？」

暗い、と思ったのは、窓という窓全てのカーテンが締め切られていたからだ。

（まさか先生本当に……）

美術室の中はやけに広々としていた。描き散らかされていたキャンバスは全て隅の方へ追いやられて、その代わりに白い布に覆われた小さなテーブルと椅子が二つ、真ん中に置かれている。

そのテーブルの上に、奇妙なものがあつた。

金色をしたそれは、一見変わった燭台に見えた。中央に皿があり、そこに蠟燭が一本立っている。

その金の皿を取り囲むように、たくさんの天使が宙を舞っていた。薄い金の板で出来ているそれらは、燭台から方円状に幾筋も伸びた細い棒に繋がって、不安定に揺れている。

「準備室で、見つけたんだ」

萌子の視線の行き先に気付いて、久志はそう教えてくれた。

「準備室？」

「ああ。たぶん……」

久志は、萌子と対峙するような位置からゆっくりとテーブルに歩み寄ると、

「昔、生徒か誰かが作ったんじゃないかな」

「え？」

「ほら、見てみな」

そう言つて久志が指差す部分を、萌子もテーブルに近付いて覗き込んだ。

「ホントだ」

精巧な造りだけれど、確かにところどころ売り物にはない粗さが垣間見える。手作りな感じが、素朴な味わいとなつて滲み出ていた。

「きつと、卒業した生徒が置いてつたんじゃないかな」

久志の声に反応するように萌子は顔を上げた。想像したよりずっと近くに彼の顔があつて、萌子は思わずドギマギした。

恥ずかしがり屋の二人は、見つめ合う間もなくさつと顔を背けて距離を開けた。

「これね、面白い仕組みになつてるんだ」

「え？」

そう小首を傾げた萌子に久志は、

「見ててみ」

と悪戯っぽく笑い掛けて、ポケットから取り出したライターを燭台に近付けた。

蠟燭に灯された火がしばらく不安定に揺らめき、やがてその姿を真つ直ぐに立たせ始めた頃、唐突に音もなくゆっくりと天使たちがその炎の周りを回り始めた。

「……え？」

それはまるで、メリーゴーランドの模型のようだった。ゆっくりと、ゆっくりとしたスピードで天使は静かに回り続ける。

「……きれい」

「こういう仕組みに、なつてるんだろ？」

魅入られたようにテーブルに顔を寄せた萌子を見て、久志は満足げに腕を組んでそう呟く。

「君には、１度驚かされてるから」

「え?.....」

「あの日、千光寺山で.....」

「.....」

「これ、この学校に来てすぐに見つけたんだけどね。あの日からずっと、いつか君にこれを見せて驚かせてやるうと思ってたんだ」
声にならなかった。胸が詰まって言葉が上手く出て来ない。とめどない感情が堰を切ったように胸の内にあふれ出して来る。

信じていいんだ。今、彼といるこの瞬間を。

あの時。久志と黒沢の二人を目撃した瞬間から。ずっと途切れたままだった時間がやっと繋がった。萌子はそう思った。もう2度と繋がることはないと思っていたのに。

真実はまだ判らない。けれども当てにならない萌子の第六感が、強く告げていた。

(もう、信じてもいいんだよ)

「あれ。なんか湿っぽくなっちゃったな」

黙り込んでしまった萌子を持て余すように、久志はボリボリと頭を掻いて、

「さ、パーティーパーティー。腹が減ったぞ」

無理に戯ける久志の姿を見て、萌子は泣き出しそんな顔で思わず笑った。

テーブルの上に百円ショップで購入して来た紙コップと紙皿とナプキンを並べながら、

「なんか.....」

「え?」

「何か、幼稚園のクリスマス会みたいだな」

久志のそんな台詞に、萌子はくすくすと笑った。

たった今、萌子もそれと同じことを考えていた。同じ物を同じ視線の高さで捕らえられる。久志の、そんな存在の至近感が萌子にはとても好ましく思えた。

私と少し似た男の人。

その気後れした笑顔に、人見知りな優しさに惹かれる時よりも、自分と似通った部分の多さを感じる時にこそ、彼を欲する気持ちがより強くなる気がする。

もっと知りたい。魔法が解けたように、萌子の気持ちはだんだんと貪欲になつていた。

「幼稚園生が飲んだら、酔っ払っちゃうかしら」

萌子は茶化すようにそう笑いながら、紙袋からシャンメリーを取り出すと、久志に向かってちらちらと振ってみせた。

「おいおい。そんなに振り回したら、開ける時に吹き出しちゃうよ」

「あつ」

萌子は思わず口に手を当ててから、

「せんせい、開けて」

とにつこり笑つて瓶を差し出した。

何だかやけに楽しかった。久志との距離があ頃まで戻つて、そこからぐんぐん近付いて来るみたいだ。

それから、二人で乾杯をした。紙コップを合わせただけでは『ぐしゃ』という音しかしなかったけれど、今の萌子にはどうでもいいことだった。

「良く出来てるなあ」

よっぱど腹が減つていたのか、ケンタッキーとショートケーキを同時に頬張りながら、久志はビーズ製の熊を掌に乗せて眺めた。

「手先、器用なんだね」

久志らしい実直な褒め言葉だった。萌子は思わず俯いて、

「それだけが、取り柄ですから」
と呟いた。

こんなに心を近く感じていても、いやだからこそ、久志に一声掛けられるだけで胸が破裂しそうになる。日焼けした後にシャワーを浴びた肌みたい、全身がひどく過敏になっている。

その痛みが、心地よかった。

「しかし、参ったな」

「どうしたんですか？」

「いや、ね」

熊を掌に乗せたまま、久志は急に困惑した表情を浮かべて、

「俺、何も用意してないよ」

「それは……」

自分が身勝手だから……。そう謝りかけて、萌子は不意に意地悪を思い付いた。

「カラオケ合コン用のプレゼントは用意したんですか？」

途端に、久志は目を『白黒』させてむせ返った。

「何でそれを……」

久志のあまりに正直な慌てぶりに、萌子は思わず腹を抱えて笑い出した。大笑いしている彼女を仏頂面で眺めながら、久志はぼやくようにこう言った。

「仕方ないだろ。一緒に過ごしたい相手とは、すっかり音信不通だったんだから」

ドキッとした。

紙コップを掴んでいた指先まで、一気に凍りついたような気がする。いきなり奈落の底に突き落されたみたいな感覚。過剰な期待と拭い去れない不安が、胸の中で激しく交差する。

（一緒に過ごしたいって……）

誰のこと？

最初から最後まで、萌子は胸に湧いた疑問を一つも口にすることが出来なかった。

告げてしまってから、自分の吐いた台詞の重要性に気付いたのだろつ。久志は急におどした態度を見せて、

「ただ、佐藤先生に誘われたから仕方なかったんだ。他に断る用事もなかったし」

（何故、他に用事がなかったの？）

思いが上手く声にならない。問い掛けることの出来ない自分の

意気地なさに、萌子は胸苦しさを覚えた。

（忘れ物してるよ）

臆病になりかけた心に、千絵のおおらかな笑顔がそう語り掛けた。その瞬間、彼女の心にほんのわずかな勇気が生まれた。スプーンひとさじ分ぐらいの、小さな勇気が。

「どうして……」

「え？」

それでもやっぱり、少し声が震えた。

「どうして今夜、黒沢先生と一緒にじゃないんですか？」

今度は確かに、長い沈黙だった。

萌子がそう問い詰めた刹那、久志は声もなくただ驚いたように目を見開いた。その驚きの本当の意味を、萌子は窺い知ることが出来ない。

久志はそのまま、萌子のことを見つめ続けた。忙しく瞳を動かしながら。その姿は、伝える言葉を必死に探しているようにも、言い訳に苦慮しているようにも見えた。

萌子は息を詰めて答えを待った。もう逃げ出さない、そう一心に決めて。

知りたいのだ、と思った。確かな真実を。

視線をまっすぐに萌子に投げかけたまま、やがて久志がそつと口を開く。

「いいこと、思い付いた」

「……？」

「クリスマスプレゼント」

「え？」

「こっち来て」

久志は邪気のない笑みを浮かべて、自分の腰掛けていた椅子を窓際に出来たスペースに引きずり出すと、萌子を手招きした。

「ここ、座って」

何かなんだかさっぱり訳が判らなかった。まるで萌子の気負いをはぐらかすかのような言動だった。

（答えになつてない）

そう反発しかけた気持ちはいしかし、鳶色の美しさに吸い込まれてしまったように、久志と目が合つてすぐにずっと消えてしまった。

萌子は割りと従順に、彼の指示通り窓際に歩み寄った。

「ちよと待っててな」

萌子を椅子に座らせると、そう言つて久志は美術室を出て行く。ほどなくして戻つて来た彼は、小さなキャンバスを一つ抱えていた。隣の準備室から取つて来たらしい。

「……せんせい？」

そのまっさらなキャンバスを、他の画が掛かっていたイーゼルと掛け替えて自分の真正面に据えるのを見て、やっと萌子は久志が何をやるうとしているのか気付いた。

「一体何を……」

「ごめんな」

イーゼルの足元にデッサンの用意をしながら久志は、
「さすがに色は施してられないや。時間は、ある？」

「……6時くらいまでなら」

萌子の答えに久志は満足したように軽く頷いて、

「それまでに、仕上げる」

気付いた瞬間から、胸の震えが止まらなくなった。頬に自然と赤みが射す。それは、神に仕えるより遥かに崇高な儀式で、裸になるよりも遥かに恥ずかしい行為のような気がした。

久志に自分の姿を描いてもらうなんて……。

（あたしなんか……）

即座にそう思った。どんなに美しく仕上げてもらつても、いや美しければ美しいほど恥ずかしさが増すような気がする。

（でも……）

見てみたい、とも思った。久志の瞳というフィルターを通して、自分がどう映っているのか知りたい。

低アルコールのシャンメリーに酔ったように、萌子は全身が心臓になったみたいにドキドキしながら、綿菓子の上を歩くみたいになわふわとした気分になっていた。

ダメだ。そうやってまたうやむやにしてしまったら。何の脈絡もなく龍太の顔が浮かんだ。ダメだ。何のために……。

「……どうしてさ」

「……え？」

萌子を窓の方に向かせて、その横顔を萌子が恥ずかしさを覚えるくらいじつと見据えてから、すつとキャンバスに向かった久志は、誠実な性格そのものに真摯に手を動かし続けた。

「どうして、黒沢先生、なの？」

言葉足らずな久志の台詞も、萌子にはすぐに理解出来た。彼女は凝り固まったようにまっすぐ保っていた姿勢を崩して、首だけを回すように久志を見やった。キャンバスから顔を上げた彼と、一瞬視線が触れ合う。

「……見たんです」

「？」

気付かぬ内に、体が小刻みに震えていた。怖いのか、興奮しているからなのか。

「先生と、黒沢先生が高松町のホテル街を歩いているところを」
再び、沈黙が教室の中を支配した。肯定を示す沈黙。萌子は心が揺らぐのを感じた。

「……出て来るとこ、見たのか？」

「一緒にいた薫が、見たんです」

久志は黒沢とまるで同じ台詞を吐いた。萌子は、今度は正確に答えてみせた。

久志のその言葉は、崖っぷちで揺らぐ萌子の心に最後の一押しを加える一言だった。あんなに覚悟を決めたはずだったのに、萌子の

心は呆気なく崖下へと落下していく

（でも、それは過去の話。今、先生は……）

そんな風に藁をも縋るような自分の心境が、かえって惨めで滑稽だった。

「何も、なかったんだ」

心を貝のように閉じかけていた萌子は、久志の声の悲痛な響きに驚いて俯きかけた顔を上げた。鳶色の瞳と、再び出会う。

久志は悲しげに萌子を見つめていた。後悔、残戯、苛立ち、悲痛、さまざまな苦しい思いを、その瞳に込めて。

「部屋にすら、入っていないんだ」

信じようよ。

唐突に、萌子の頭の中で誰かがそう囁いた。

いい歳をした男女がホテルの入り口まで行つて引き返して来た。なんて、今どき幼稚園児でも信じない戯言だと思ふ。

でも、萌子は何故か久志のそんな世迷いごとを信じる氣になった。思えば、あの千光寺山で聞かされた彼の身上も、容易く信じられるような話ではなかったのだ。あの時信じた気持ちを、大切にしていた。

（先生は、そんなややこしいウソをつける人じゃない）

「フロントで、彼女が泣き出してしまったんだ。あ、いや、別に無理矢理連れ込んだとか、そういうことじゃないよ」

自分の台詞があらぬ誤解を受けると気付いたのか、久志は慌てて口早にそう言い訳をした。その慌てふためきぶりが妙に可笑しくて、萌子はいき表情を緩めた。

そう。先生はそんなややこしい嘘を、上手につける人じゃない。

「僕はその、仕方なくというか、付き合いされたというか……」

「どうして、そんなところに行つたんですか？」

「え？」

久志が視線を上げた。萌子は相手を落ち着かせるように、緩やかに微笑んでみせた。萌子の意思を確かめるように、久志はじつと彼

女を見据える。

「……頼まれたんだ」

「え？」

「一緒について来て欲しいって。ついて来てくれなきゃ、ベツチヤー祭りの日に僕と君が一緒にいるところを見たと、学校に言いふらすって」

久志は、ため息と共にそんな台詞を吐き捨てた。

（それは『頼まれごと』じゃなくて、単なる『脅し』じゃないの？）

萌子はそう思ったけれど、たぶん久志は『脅された』なんて言える性格ではない。

「学校で変な噂が流れたりしたら、君も僕も学校にいられなくなるかもしれない。そう思うと……」

久志は一瞬そう言いよんどんから、萌子の方を向いて、

「前を向いて。続きを描くから」

萌子は慌ててカーテンの方を向いた。蠟燭の炎に照らし出されて自分の影が大きく揺らいだ。その周りを天使たちが緩やかに廻っている。

夕暮れが近いのだろうか。蠟燭の明かりが部屋の陰影をくつきりと壁に映し出し、揺らめく。美しい、幻想的な光景だった。

その中で、久志の走らせる素描の音と彼の落ち着いた声だけが響いた。

「黒沢先生とは、ここに赴任した当時からよく話が合ったんだ。

歳も近かったしね。休みの日に映画に行ったこともあるし……」

「竹原にも？」

姿勢を正したまま萌子がそう口を挟むと、久志の驚く気配がして、

「人の口に戸は立てられないね」

ちよつと呆れたように苦笑いを浮かべたのが判った。

「……あの日は、黒沢先生から飲みに誘われたんだ。一緒に飲んだのは初めてで、彼女はもの凄く酔っ払っちゃって」

久志はそう言いさして、わずかに黙りこんだ。彼の緊張が萌子にも伝わる。萌子は思わず身を硬くした。

「こう、訊かれたんだ。『澤崎さんのこと、好きなんですか』って」

その刹那、胸を痛みが貫いた。甘く、切ない感情が傷口から広がる。

「前から、疑っていたらしいんだ。君や薫君と一緒に登下校していることを、暗に注意されたこともある。だから、君たちと一緒に通うのを止めようと思ったんだ」

何故、諦めてしまったのだろう。

久志の口から一緒に通えなくなるという台詞を聞いた時、やっぱり少しだけ諦めの気持ちが入ってしまったのだらうと、今に思ふとそんな気もする。

そんな気持ちがあったから、その後訪れた出来事を当たり前のように受け止めてしまったのかもしれない。

「……ホテルに入って、彼女は自分のしようとしていることに今更ながら気付いたみたいで。フロントの前で泣き出してしまったんだ。『やっぱりやめましょう』って」

あの時。萌子は、ホテル街を足早に抜ける二人の姿を思い起こしていた。

よく考えれば、実に簡単なことだったのだ。手を繋ぐ訳でもなく、少し距離を置いて歩く姿は、恋人同士のそれではなかった。

「誤解、だったんだね」

「……え？」

「君が、部活に現われなくなった理由は」

「……うん」

「僕も、誤解していた」

「え？」

「君が僕を避けるようになったのは、僕に気を遣ったんだと、ずっと思ってた」

「？」

意味が上手く汲み取れなかった。萌子はカーテンの方を向きながら小首を傾げた。

久志は、なかなか次の言葉を継ごうとしなかった。再び、キャンパスの上を走る筆の音だけが部屋の中に響く。

「君と……」

「……え？」

「君と、龍太君はどんな関係なの？」

驚きをそのままに、萌子は弾かれたように振り向いた。久志は見咎めることなく、そつと萌子を見返した。

鷲色の瞳が不安に揺れていた。

その刹那、萌子は二人のあいだにとても大きな誤解が横たわっているのに気付いた。風船の空気が抜けていくように、萌子の中で張り詰めていた何かが急速にしぼんでいく。

誤解なんだ。不安が安らぎに化学変化を起こす中で、萌子は安堵に似た疲労を感じていた。何で、こんなに遠回りをしてしまったのか、と。

「誤解です」

久志の瞳をじっと見返して、萌子のはっきりとそう答えた。もう間違えたくない。そんなことで、久志との絆を失いたくない。もう何も、見失いたくない。

「龍太君は……あたしとつき合いたいって言うてくれたけど、断りました。それに、それはつい最近のことです」

萌子は小さく唾を飲み込んだ。

「あの頃は、何もありませんでした」

「そう、なのか」

気が抜けたサイダーのように、久志はぼんやりとした表情で言葉を漏らした。

「黒沢先生に聞かされてたんだ。龍太君は、地元じゃちょっとした有名人なんだって」

次第に自分の思い込み違いに気付かされたのか、久志は自嘲気味な笑顔を浮かべて、

「……龍太君のライブに行かなかったのは、君と彼の仲を確かめるのが、怖かったんだ」

「……」

「君と薫君と三人で、僕のコートを選びに行ったことがあるだろ？」

「……うん」

「あの時、君は龍太君のお気に入りだって聞かされてさ」

「あれは！……」

「冗談めかしては、いたけどさ」

久志はわずかに淋しげな気配を見せて、

「あの頃僕は、まだ君のそばに辿り着いたばかりで、どれが本当のことか判断出来なかったんだ。何も見えなくて、不安だらけだった。君と」

久志は萌子を見つめた。

「少しは通い合える部分もあったと思っていたけど、自信がなかった。君が、部活に姿を現さなくなって」

「……うん」

「君が僕に気を使ってるんだと思った。こんなものか、と思った。気持ちが通じ合っているなんて、まやかしなんだと思った」

『気持ちが通じ合っているなんて……』

（先生も……）

あの時、二人のあいだの心の近しさを感じていてくれたんだ。萌子は涙ぐみそうだった。あの夕闇の中、二人の気持ちは一緒だった。それなのに。

久志が気遣って緩めた手の感触に、萌子は疑いを持ってしまった。彼の優しさに気付くことなく。久志がもう一度、緩めた手を握り締めた時には、萌子の心はもうそこになかった。

その時の、久志が感じた虚しさを思った。

恋は盲目、と言う。けれども二人は盲目のあまり、互いの姿さえ見失ってしまった。

「僕たちは、お互いすぐ諦めてしまふ癖があるみたいだね」

久志がそうポツリと呟く。

それは、子供の頃にそんな思いをしてしまったからかもしれない。萌子はふと、二人はやはり似たもの同士なのだと思った。

「今までののは、全部勘違いだ」

これで終わり。久志の瞳はそんな風に和らいだ。萌子に横を向いてと指示する代わりに、彼は静かな声で、

「あと少しで終わるから」

そう告げた。

とても安穩とした気持ちで、萌子は再び正面を向いた。

「黒沢先生に言われて」

キャンバスに向かう久志の気迫が部屋中に漂う。筆先に神経を集中させながら、久志は言葉を継いだ。

「ホントは少し迷ったんだ。でも……」

でも。そう言いさして、久志は一瞬口をつぐんだ。

「でも……忘れられなかった」

それきり、彼は黙り込んだ。

穏やかな時間が流れていた。蠟燭の炎が風もなく揺らめく。壁に映し出された陰影に沿って、天使たちが静かな歌声を奏でる。清らかで、濃密な時の流れ。

久志とのあいだに会話が途切れても、萌子はもう不安を覚えることはなかった。そう、岩陰に腰掛けて色を失いゆく海と空を見つめた、あの千光寺山の夕暮れのように。

「あつ、雪だ」

教職員用昇降口のガラス戸に背をもたれて久志が出て来るのを待っていた萌子は、夕闇に舞い始めた白い欠片に気付いて脱兎のごと

く走り出した。

ぼんやりと明るい鈍色の空から、白い羽のような雪がゆつくりと舞い降りて来る。

辺りはもうたつぷりと暮れていた。街角のイルミネーションが、雪に滲むように霞んで見える。

今年初めての雪。生まれて初めての、ホワイトクリスマス。

「せんせー。雪だよ、ほら」

昇降口に姿を見せた人影に向かって、萌子はそう声を掛けた。校舎からこぼれる明かりの中で幼子のようににはしゃぐ萌子の姿を、久志は穏やかに微笑んで見つめていた。

「何してんの？ 行こうよ」

「……ああ」

久志はそう頷くと、庇の下を出て萌子に傘を差し掛けた。

「……澤崎さん、傘は？」

「忘れて来ちゃった」

萌子はそう答えてちらつと舌を出した。

「これ、貸そうか？」

「ううん。大丈夫。駅に着いたら買うから」

萌子は、左肩に下げたキャンバスの入った手提げ袋を少し持ち直すふりをしてから、

「さみしいな」

「……え？」

「何で薫のことは『薫君』って呼ぶのに、あたしのことは『澤崎さん』なんですか？」

「それは……」

「『萌子』じゃ、駄目？」

久志が息を呑む気配が感じられた。夕闇に二人の白い息だけが浮かんでは消える。

「萌子、君？」

初めて久志の口からこぼれた彼女の名前は、イントネーションか

らしてまるでおかしかった。それを耳にした瞬間、萌子は思わず吹き出してしまった。

「何だよ」

「……萌子、でいいです」

「でも……」

「じゃ、萌子さん」

「萌子さん……」

もえこさんもえこさん……。本人の横で、久志はそうぶつぶつと呟いた。

「せんせい！ 練習するんなら家でやって下さいよ」

静かな夜だった。ふくやま美術館と広島県立博物館の間に広がる緑の敷地にも、人影はもうない。芝生の上が、うつすらと白く色付いている。教師と生徒の相合傘も、見咎める者はもう誰もいなかった。

「めんどくさいなあ」

傘の先から空を見上げる素振りを見せて、久志はそうばやいた。

「雪まで降って来ちゃったもんなあ」

「でも、行かないとまずいでしょ」

佐藤の誘いのいきさつはもう話してある。ただでさえ億劫に思っていた久志は、当然行く気をなくした。でも先輩教師の誘いでもあるし、久志は真実を知らないはずになっている。

「やっぱ、断るのはまずいよな」

「何時集合だっけ？」

「えっと、7時」

「じゃ、帰ったらすぐ電話する」

二人で角突き合わせて相談した結果編み出した苦肉の策が、久志の家族が突然尾道を訪れたことにしよう、というものだった。そのために、集合時間に合わせて萌子が電話を入れることになった。もうお互いの電話番号とメアドは交換してある。

「なるべく、カラオケボックスに入る前に、な」

久志の情けない声を聞いて、萌子はちよつと意地悪したくなった。
「先生が晴美たちとカラオケしている姿、ちよつと見てみたいんだけどな」

「おいおいおい。頼むよ」

「ウソですよ。ちゃんと電話しますってば」

雪が降り始めても、駅前の人通りは絶えていなかった。雪と光のファンタジーが、祝祭に花を添えているようだ。

駅が見えて来たところで、萌子は自然と傘の下から離れた。

ふと、これからこんな日々が続くのだと思った。今まで何の意識もしていなかったけれど、久志は紛れもなく恩師なのだ。

「じゃ、気をつけてな」

改札の前で久志は軽くそう手を挙げた。もつと話したいことがあるような気がしたけど、そうのんびりともしていられない。

「あとで、電話します」

そう言うってから萌子は、明日からの約束を何も交わしていないことに気付いた。

（でも、いいや）

まだ、時間はあるはずだ。ゆっくりとゆっくりと。

「じゃ、またあとで」

そう踵を返した萌子の背中に、久志がそつと声を掛けた。

「なあ、萌子」

「え？」

驚いたのは、急に呼び止められたせいだろうか。それとも、呼び捨てにされた心地よさのせいだろうか。

萌子は少し大げさに振り返った。

「明日……」

「え？」

「明日、映画にでも行かないか？」

第六章 キャンドルナイト（6）

「萌子なの？」

玄関の扉が開く音を聞きつけて、奥から玲子の声が飛んで来た。

「うん。ただいま」

「遅かったじゃない。薫ちゃん、手伝いに来てくれてるわよ」

「ごめんごめん」

そう言って台所の暖簾をくぐろうとしたところで、萌子は薫とち合わせた。

一瞬二人は、『ただいま』も『おかえり』も口にすることが出来なかった。交差する視線の中で、言葉にならない問いと答えが行き来する。

やがて、薫がゆつくりと柔らかく微笑んだ。

「おかえり」

「うん……」

「手伝ってくれる？」

「うん。じゃあ着換えてから……」

そう告げて、萌子は2階に上がった。

急がなきゃ。と思いつつも、萌子は誘惑を堪え切れずに、ついキヤンバスを取り出してイーゼルに立て掛けてみてしまった。

キヤンバスの中で、無垢な少女が遙か彼方を見つめていかる。すっと伸ばした指先に、未来を宿しながら。

『先生ダメだよ』

完成したばかりの素描を見て、萌子は気恥ずかしさを打ち消すようにわざと声を荒げて久志を睨んだ。

『嘘描いちゃ』

『俺の指先は』

萌子の照れ隠しを、久志も予測していたのだろう。彼はそ知らぬ風を装って、

『ウソは描けないんだ』

と嘯いてみせた。

萌子はしばらく自分の、自分とは思えない横顔に見惚れていた。次第に頬に赤みが差して来る。まるで久志の握る絵筆で着ているものを全て剥がされ、慰みを施されているみたいだった。心の奥底を弄られるように、めまいに似た熱情が体の芯を迸る。

大きく深呼吸をして、萌子は携帯を取り出した。さっき入力したばかりの久志の携帯番号を呼び出す。

胸が震えた。緊張が蘇る。

親指を数秒、携帯の上で惑わせてから、萌子は少し強めに発信ボタンを押した。

久志からのメールに気付いたのは、食事をしている最中だった。

いつ来るかと肌身離さず持ち続けた萌子のスカートのポケットの中でそれは、一際存在感を示すように激しく身悶えた。

すぐに気が付いたけれど、何となくみんなの前でチェックをするのが嫌で、萌子は皆の食事が片付くまで首を長くして待った。そしてデザートとの合間に、何か用を思い出したふりをして階段を駆け上った。

部屋に入るのもどかしく、萌子は携帯の画面を開いた。

『さっきはありがとう。おかげで無事脱出できました。』

今、一人寂しく尾道ラーメンをディナーして帰るところ（笑）

明日、１１時に福山城の公園で待ち合わせませんか？
見る映画は任せて下さい。

明日、楽しみにしています（ハートマーク）
『ぶっ』

見るなり萌子は思わず吹き出してしまった。

「ハートなんか、使ってる……」

一生懸命絵文字を使う久志の姿が妙にいじらしくて、萌子は知らず知らずの内に一人微笑みを浮かべていた。

「もえこ？」

唐突にそう呼び掛けられて、萌子はハツとして振り返った。

ドアの隙間から、薫が不審そうな顔を覗かせている。

「どうしたの？ そろそろ千絵ちゃんのケーキ、食べるよ」

「あ、うん。ごめん」

妙にうるたえる萌子のことを、薫はしばらく物問いたげな表情で見つめた後で、

「……入っても、いい？」

と尋ねた。

「うん……」

萌子はこわばった表情のまま小さく頷いた。

部屋に足を踏み入れてすぐに、薫はその存在に気付いた。

「……先生が、描いてくれたの」

物も言わず少女の横顔に見入っている薫へ、萌子はそつと声を掛けた。

入って来れば、キャンバスに気付くのはすぐだと判っていた。気付かれれば、説明しない訳にはいかないことも。判っていて、薫を部屋に招き入れたのだ。

「……いつ？」

「今日……」

薫はしばらく黙って萌子の顔を見つめていた。目の前にある数式を、時間を掛けて噛み砕き理解するかのように。

「そっか。それで、か……」

そう呟いて、薫が窓辺に寄る。

曇った窓ガラスを開け放つと、まだ降り続く雪模様が見えた。家々の屋根は薄化粧を施され、尾道の街は白く輝いて見えた。

「……おめでと」

「え？」

「おめでと、なんでしょ？」

「うん……」

叱られた小さい子供のように、萌子は視線を俯かせて、

「怒ってないの？」

「あたしが？ 何で？」

薫はちよつと意外そうな表情を浮かべてから、薄く笑って、

「喜んで良いのかしらね。それとも悲しむべき、かしらね」

そう肩をすくめる仕草をしてみせた。それから、あの天使のような笑みを浮かべると、

「おめでと。良かったね」

「薫……」

不意に涙が出ると、もう止まらなくなった。泣きじゃくる萌子を軽く抱き寄せるように、薫はそつと腕を伸ばした。

「ごめんなさい……」

「何言ってるの」

「でも……」

「謝っちゃダメよ」

幼子を教諭するように、薫は優しい声を出して、

「それが、龍太のためなんだから」

薫に何度そう言われても、萌子は彼女の腕の中で、

「ごめんなさい、ごめんなさい」

そう繰り返すばかりだった。

第六章 キャンドルナイト（7）

昨夜の吹雪は、舞い疲れたように夜半過ぎに上がった。明け方まで淡く街を染めた雪も、萌子が家を出る頃には跡形もなく消え去っていた。

クリスマスは、前日と打って変わって鮮やかな冬晴れの空が広がった。窓の外には、瀬戸内の冬特有の眩い陽射しに満ちあふれている。

車窓から海が見えなくなる頃まで、体をよじらせてじつと窓の外を見ていた萌子は、ふっと一息吐いて態勢を元に戻した。

手にしていたペットボトルの蓋を開けようとして、思わず手を滑らせる。

「あっ」

萌子の手から滑ったペットボトルは、ころころと勢い良く車両の反対側まで転がって行った。斜向かいに座っていた初老の男性がそれを拾い上げる。

「……すみません」

萌子は恥らうように小さな声で謝ってペットボトルを受け取った。そして急いで自分の席に戻ると、小さくなりながらペットボトルのお茶を呷った。

今朝から万事この調子だった。とにかく物が手につかない。朝食の席でお茶碗を2度落とし、醤油の瓶を倒した。

昨夜は思ったより良く眠れた。人は、至福の時は眠れるものだと知った。

それなのに、目覚めて今日の予定を思い出した途端に、体調が変化した。

脈が速い。手先が痺れる。頭はボーとしたまま何の思考も入って来られない。

こんな時でなければ、すぐさま病院行きの症状だ。

久志とは1度、二人きりで過ごしたことがある。あの時、路地を一つ曲がるたびに覚えたワクワクした気持ちとはずいぶんかけ離れた緊張感を、萌子は今感じていた。

こうなることを望んでいたはずなのに。萌子は宝くじで一等を引き当てたみたいに、すっかりてんでこ舞いになって、気持ちの余裕がなくなりかけていた。

11時より少し前に福山に着いた。改札を抜ければ、登城口はすぐそこだ。萌子は時計に目をやって、ちよつと早いかな、と思った。（でも、何でお城の公園なんだろ）

その疑問は、二の丸広場に出てすぐに解けた。

コンコースを抜けて石垣と山陽本線の高架に挟まれた道を少し広島方面へ戻ると、やがて細い傾斜道が見えて来る。その坂道を登って、門をくぐると比較的広い広場に出た。

聳え立つ天守の前庭、といった趣の二の丸広場は、いくつかの現存や再建された建物が点在し、芝地を囲むように砂利道がくねくねと設けられている。

思ったよりも人影は少なかった。観光客や散歩を楽しむ初老の間たち、親子連れ。そこに、萌子たちと同世代の姿は皆無だった。

萌子は2度ほどのこの広場を訪れたことがある。いずれも桜舞う季節で、1度目は子供の頃に母の手に曳かれて、2度目は福山女子高校に入学したての頃、下校途中に薫と歩いた。

それ以外に、ここに足を踏み入れたことはなかった。たとえ毎日のようにそのそばを通っていても。桜の花でも咲いていなければ、あまり足を向けるところではないかもしれない。

待ち合わせた11時にはまだ間があった。久志からの連絡もまだない。萌子は手近なベンチに腰を下ろした。

確かにここなら穴場だ。クラスメイトに見つかることもほとんどないだろう。

黒沢に疑われたように、久志と同じ傘の下に入ることがどれほど危ういかということを、萌子も十分に理解していた。尾道でならと

もかく、この福山の街や学校で親密な雰囲気を見られたりしたら、取り返しのつかないことになるかもしれないということも。

理解はしていたけれど、それがどれほどのことなのか想像はつかなかった。

そもそも、まともに異性とつき合ったことすらないのだ。教師と付き合うということがどんなもので、それがどれくらい辛いことなのか、比べる材料を持ち合わせていないから比較しようがない。

（だいたい、つき合ってるって言うのかなあ、これ）

すっかり舞い上がったまま、萌子は結局また久志から肝心な言葉を聞きそびれたような気がしていた。もちろん、こうしてプライベートルトで逢ってくれることは果てしなく嬉しいことなのだけれど。

（先生は、あたしのこと……）

どう思ってるんだろ。心の中で久志に対するわだかまりが反復しかけた刹那、手にしていた携帯が激しく震えた。

「着いてる？」

携帯越しに聴こえる久志の声は、とても不思議な感じがした。そんなさりげない非日常が、萌子の心をまた悪戯に掻き立てる。

「うん。ベンチに座ってる」

「ごめんごめん。今行くから」

待ち合わせた時刻まであと2、3分ある。別に遅れた訳でもないのにそうやって謝ってみせるところに、彼の人の良さが滲み出ていた。

久志は本当にすぐに現れた。律儀に門の手前から電話をして来たらしい。

眩しい光の中で、彼のシルエットがだんだんと大きくなっていく。期待と緊張に、萌子の胸はどんどんと膨らんでいく。

「ごめんな」

「ううん」

久志を見上げながら萌子は、しばらく動き出すことが出来ずにいた。

あんなにも焦がれ続け、絶望し、一縷の望みを抱き続けた想い。
願い続けた夢が今、幸福な現実となって確かに目の前にある。それが、俄かには信じ難い出来事のように思えた。

「待った？」

「ううん。少しだけ。ちよつと早く着き過ぎちゃったから」

そう軽く首を振って、萌子はスカートの裾を払うように立ち上がった。

「映画館、行く？」

「ん？ いや……」

萌子の問い掛けに、久志は何故か逡巡してみせた。不思議そうに小首を傾げた萌子に向かって彼は、

「見ようと思った映画は、まだ時間があるんだ」

そう言い訳めいた台詞を一つ吐いてから、

「なあ。あそこ、登ってみないか？」

そう振り返って、そそり立つ白亜の壁を指差した。

福山城の天守に登るのは、生まれて初めてのことだった。入館料に二百円も取られるということも、初めて知った。

そのことを久志に話すと、彼はうんうんと頷いて、

「まるで、海沿いに住む子供の夏休みみたいだね」

「？」

「親戚の田舎が海沿いであつてさ。毎年夏に泊り込みで海水浴に行つてたんだ。俺はそれこそ毎日泳いでただけどさ。そこに住む従妹が言うには、地元の子供は泳ごうと思えばいつでも泳げるから、逆に滅多には泳がないもんなんだって」

久志の話に適当に相槌を打ちながら、萌子の思考は全く別のところにあつた。

そのたとえ話が的確なのか、萌子にはよく判らなかつた。ただその話の中で、久志に従妹がいることを萌子が知らなかつたという事実だけが、心の中でふるいに掛けられて残つた。

人は、愛する人のことをどれくらいまで知っていればいいのだろ

う。あたしはまだ、彼のことを何も知らない。そう、誕生日さえも。これから、彼のことをどれだけ知ることが出来るのだろう。全てを知りたい、と彼を欲する気持ちと、このまま盲目でいたい、と思う臆病な気持ちの狭間で、萌子の心は揺れ動いた。

「先生の誕生日っていつなの？」

受付にいたのは、覇気のない初老の男性だった。黙って彼に料金を払いリーフレットを受け取った二人は、蛍光灯からこぼれる橙色の明かりの中を足早に進んだ。

天守は御多分に洩れずコンクリート製で、中は展示室になっていた。往時の城内の模型や、当時使われた生活用品や武器・鎧兜・書物などが、雑然とも整然ともとれる並べ方で展示してある。

とりあえず、そんなことくらいなら尋ねても良いのではないかと自分に言い聞かせて、萌子はそう質問を投げ掛けてみた。

「俺の？」

久志は幾分照れ臭そうな表情を浮かべて、

「ここに来る前に終わっちゃったんだ」

「何日だったの？」

「9月15日」

「わっ、敬老の日」

「そう。だから、昔から『年寄りの日』ってよく苛められた。『今日は労わってあげなきゃね』とか言われてね」

久志はそう言って軽やかに笑った。

「……そっか。そんな先になっちゃうんだ」

久志の台詞につられたように笑ってみせてから、ため息ほどの間を置いて萌子は少し残念そうな声を出した。

「バレンタインでも、渡し足りなかったクリスマスプレゼントでも構わないよ。プレゼントは1年中受付けてるから」

久志はそう戯けてみせてから、

「それに来年のその頃も、きっとここにいるからさ」

「……え？」

「実はね、臨時講師延長の話をもらってるんだ。来年の春以降も、引き続き福女で講師をやってくれないかって」

「そうなの？」

使い捨てカイロに触れた指先のように、萌子は心の芯がゆっくりと暖かくなつてゆくを感じていた。頭の片隅で、やはり不安に思っていたのだ。春になれば、彼が去つてしまふかもしれない、ということを。

「じゃあ来年も、講師を続けるの？」

嬉しさを堪えきれず、つい浮ついた口調になりかけながら萌子がそう尋ねると、久志ははにかんだ笑顔を見せて、

「本当は、断ろうかと思っていたんだ」

「え……」

「君と、元通りに戻れないなら、つて」

霧が晴れて視界が広がるように、萌子の中の不安が一つまた一つ解消されて、不思議なくらい穏やかな気持ち心が満たしてゆく。何故だろう。昨日までは、あんなに俯いて過ごしていたのに。

最後に、中世から続く福山の営みを紹介するフロアを抜けて、二人は五層目へと上がった。

薄暗かった階下のフロアに比べると、最上階は明るく開放的だった。その落差の激しさに、二人は思わず、

「ほう」

とおかしなため息を漏らした。

最上階は四方が大きく開け放たれていて、眩しいほどだった。その外に、人一人通れるくらいの回廊が備え付けられている。回廊を廻る欄干の赤は、外から見ると白亜の天守に鮮やかに映えて良いアクセントになっていた。

「わあ」

回廊に出て、萌子は改めて感嘆のため息を漏らした。

そこからは福山の街が全て見渡せた。東西にどこまでも広がる街並み。福山駅の高架の向こうには、駅前の小さなビル群が見える。

その先は、小高い半島に挟まれた福山港まで景色が続いていた。こうして見ると、改めて福山が大きな街であることに気付かされる。冬の澄み渡った陽射しを吸い込んで、街は心なしか霞んで見えた。穏やかだった。天空から見下ろす師走の街からは、その喧騒まで伝わって来ることはなかった。

「先生、ほら学校」

ゆっくりと回廊を回り巽の方角を眺めた萌子は、久志を振り返ってそう指差した。

「うん」

久志もその方角を見つめ、目を細める。

ふくやま美術館と広島県立博物館のその先。逆光の中にミニチュアのように浮かぶ通い慣れた校舎を、二人はしばらく黙ったまま見つめていた。

「ごめんな」

不意に、久志がそう呟く。

「え？」

「こんな風にしか、逢えなくて」

久志は少し悲しそうに微笑んで、

「変だよな。前は、一緒に学校に通っていたくらいなのにな」

萌子は黙って小さく首を振った。構わないのだ、どんな形でも。

（あなたと心が通じ合っていれば）

そう口に出したかった。けれども、想いは言葉にならなかった。

「これ、さ」

しばらく萌子のことをじっと見つめていた久志は、気を取り直したように手にしていた紙袋を萌子に差し出した。

「1日遅れだけど……」

「え？」

「あ、でもいいのか。今日がクリスマスだもんね」

久志はそう自分を納得させるように頷くと、

「サントさんからのプレゼントを、預かって参りました」

と萌子に向かって仰々しく紙袋を奉げて見せた。

「……これって」

「いいから、いいから。開けてごらん」

久志にせつつかれるまま、萌子は戸惑いながら中から紙包みを取り出し、包装を解く。

中から出て来たのは、淡いベージュのマフラーだった。萌子が目を丸くして久志を見上げると、彼は嬉しそうに笑ってそのマフラーを萌子の首に掛けた。カシミアの柔らかな感触が、彼女の首筋をふんわりと包み込む。

「萌子の、大人化計画第1弾」

「え？」

見ると久志は笑っていた。それにつられるように、萌子も笑顔になった。

秘密の恋。

そんな言葉が、不意に胸をかすめる。そういうのも、いいかもしれない。そんな風に、萌子は思った。

「さ、飯でも食べて映画を見に行くか」

「はい」

久志の問い掛けに萌子は元気よく頷いてから、茶目っ気たつぷりにこう付け加えた。

「今日の目的は、あくまでも美術部の校外活動。ですよ？ センセ」

第七章 2枚の絵(1)

トン、と肩を叩かれて、萌子は読み耽っていた文庫本から顔を上げる。

久志のすまなそうな笑顔が、そこにあった。

「お待たせ」

そう言って萌子の向かいに腰掛けた久志は、

「ふう」

と小さく息を吐いた。

もしかしたら、駅から走って来たのかもしれない。そういうところに久志は妙に律義で、生真面目だった。

「ごめんな。出掛けに捕まっちゃって」

「ううん。そんなに待った訳じゃないし」

萌子はそう言って文庫本を鞆にしまいながら、

「誰に捕まってたの？」

「ん？ ああ。一年生の、秋月さんに」

「……そう」

萌子はそう頷いて少し表情を曇らせた。

「あの娘、やけに熱心だよな」

手を焼いた、といった風に久志が肩をすくめてみせる。

「熱心、て言うよりちよつとしつこいでしょ」

あの娘の態度を『熱心』と評してしまうあたり、やっぱり久志は人が良いというか、少し『鈍い』ところがあるような気がする。萌子はそんなことを思った。

「あの娘、先生のこと好きなのよ」

興味深げにテーブルの上にあるポップのメニュー表を眺めていた久志は、その姿勢のまま、まるでカラクリ人形のようにギクシャクと萌子の方を向いた。

「……何だって？」

その仕草があまりに可笑しくて、萌子は思わずふてくされた顔のまま吹き出した。

「……ま、先生が気付いてないのなら、問題ないけどね」

久志と過ごす学園生活は、以前と何も変わっていないかった。いくら人前では親しく出来ないと言っても、廊下ですれ違えば会話も交わすし、週に2回の美術の授業の時も全く話さない訳にはいかない。それに、放課後美術部に顔を出せば必ず顔を合わすのだ。仲の良い教師と生徒、という構図は変えようがなかった。

変わったのは、学校の行き帰りを共に過ごすことが出来なくなったことぐらいだろうか。

逆に、こうして二人だけで過ごす時間が追加された。メールでのやり取りも増えた。

全てが順調なはずだった。

こうして久志と向かい合っても、もうむやみに緊張することはない。その代わり、久志と逢えない時間がやけに長く感じ、悪戯に不安を覚えることが多くなった。

一つ安らぎを覚えれば、すぐにその次の安らぎを求めたくなる。

萌子は、自分の中で突然暴れ出した独占欲を、不思議な思いで見つめていた。

「ブレンド、1つ」

観葉樹の陰に隠れて立ち尽くしていた従業員に手を挙げて合図を送ると、久志はそう注文を口にした。

1月11日、水曜日。3学期の始業日から、6日ほど経っていた。ここ『グリーンヒルホテル尾道』は、萌子が小学生の頃に尾道駅前の再開発と共に建てられた、比較的新しいホテルだ。

本四国連絡橋の全面開通に伴い、尾道駅前には古ぼけた駅舎を除いて小奇麗に改装された。丸いドーム型のしまなみ交流館と海際に建つこのホテルはその中核を成すもので、出来た当時は一際目立ったものだ。

それも今はすっかり尾道の風景の中に溶け込み、この街を訪れる

観光客を優しく迎え入れている。

時刻は、午後6時を回ったところである。二人の周りには、毛布にくるまれたような優しく穏やかな時が流れていた。

ホテルの2階にあるロビーは人影もまばらで、平日のせい、それともこんな中途半端な時刻のせい、フロントに立ち寄る人もなく閑散としている。窓辺に設けられたラウンジにも、客は萌子たちともう1組の観光客しかいない。

窓から臨む尾道水道は、深い闇に包まれていた。対岸にある造船所の明かりが、より一層輝きを増す。その輝きを受けて水面が小さく揺れた。

「この、甘ったるい匂いは、何？」

コーヒーが運ばれて来て一息ついた久志は、いまさらのようにクンクンと鼻を動かした。

久志が言う通り、ロビーを甘ったるい香りが満たしている。奥にある洋菓子店『ナチュール』のシュークリームの匂いだ。

『おのみち 坂のシュークリーム』

と名付けられたそれは、尾道では名の知れたこの店の名物で、萌子も時々家を買って帰ることがあった。

その店に寄る以外に、地元の間人が立ち寄ることはほとんどない場所だった。久志に見せたいものがあるという理由の他に、萌子がこのを選んだもう一つの理由が、それだった。

帰り道に久志と逢うのは今日が2回目だ。先週の土曜日、まだ日が高い時刻に二人はメールで申し合わせ、時間差をつけて美術室を後にした。そうして尾道駅前のミスタードーナツで落ち合った。

秘密の逢瀬は、萌子にドキドキするような緊張感を与えてくれたけれど、その一方でやはり誰かに見られているのではないかと気が気でなく、せつかく久志と二人きりなのに、彼女はちっとも集中出来なかった。

この前の日曜には二人で三原へ買い物に出かけた。

三原は尾道から電車で2駅離れたところにある、福山ほどではな

いがそれなりに大きなショッピングモールがある街だ。

周囲の目を気にしなくても良いという事実は、二人をずいぶんと楽な気持ちにさせた。二人はショッピングを楽しみ、港までの散歩を楽しんだ。久志は意外と話好きで、やっぱり無邪気だった。

尾道の街を連れ添うのさえたためられる、そんな関係が疎ましく思えることもある。まだ始まったばかりなのに、いきなりこんなことになって先行きが不安になることもあった。

けれどもそれ以上に今は、彼ともっと何かを共有したいという渴望が彼女の心の中を凌駕し、喉の渇きのように萌子を貪欲に突き動かしていた。

「シュークリームの匂いよ。奥のケーキ屋さんで売ってるの」

萌子がそう告げると、

「ふん」

と久志は興味深げに頷く。

「結構美味しいんだ。人気あるし」

「へえ」

と久志は軽く奥を振り返って、

「まだまだこの街のこと、知らないことがあるんだな」と呟いた。

「もつと知らなきゃ、な。これからもずっと住むんだし」

「……え？」

「あの話、正式に受けて来たよ」

そう言つて久志は目を細めて微笑んだ。

あの話……。クリスマスの日、仄暗い福山城の天守で聞いた話。

萌子はすぐに察しがついた。

「じゃあ、4月からも？」

「うん。とりあえず、君が卒業するまで。よろしくな」

不意に、胸がキュンとなる。そのほとんど突然と言っていい胸のときめきに、萌子は戸惑い視線を逸らして俯いた。

先生とずっといられる。この街で。

まだ手を繋いだこともない間柄なのに、萌子は一瞬そんな途方もない想像で悪戯に胸の内を掻き立てた。

「でも……」

「ん？」

一瞬頬を染めかけてすぐに表情を曇らせた、萌子の顔を覗き込むように久志は小首を傾げて見せる。

「先生は、ホントにそれで良いんですか？」

「え？」

「だって先生は……」

『これ、こんな片田舎に放っておく腕じゃないわよ』

いつか、朋美がそう唸った声を思い出す。本当なら出逢っているはずのない人。こんなところで燻っていてはいけない人。

「だって先生は、ホントは先生になりたかった訳じゃないでしょ？」

あたしのために。萌子はそのままで自惚れるつもりはなかった。けど、ほんの少しでも久志の心を自分が引き留めてしまっているのだとしたら……。

久志はすぐに、萌子が発した言葉の意を解いたらしい。彼は気遣うように柔らかく微笑むと、

「ちゃんと、描くよ」

と頷いて見せた。

「まだまだ自分では納得出来ていないんだ。納得して、そしたらちゃんと先のことも考える。校長にもそう話した。だから、とりあえず臨時講師のままで、てね」

いつか。そう言いさして、久志は何かをためらった。

「ま、とりあえず君が卒業するまでは一緒だ」

無理をするような明るい声だった。久志は自分に言い聞かせるように頷いて、

「それまで、君がもし美大を受ける気があるなら、手助けすることは出来るよ」

「うん……」

「本当に、美大受ける気はないの？」

それは3日前にも1度訊かれたことだった。その時は思わず笑い飛ばしてしまったのだけれど。

こうして久志との距離が近くなって、萌子はまた絵に対する情熱を少しずつ取り戻して来たように感じていた。実力、は判らない。そもそも系統的な絵画に対する指導を、萌子はこれまで1度も受けたことがないのだ。あまりに独学で、その割にこれといって特徴のない画風。そりゃ人よりは上手いだろうとは思っていたけれど……。

「萌ちゃんの絵は」

久志の中で彼女の呼称は『萌ちゃん』と決まったらしい。年が明けてから、彼は萌子のことをそう呼んでいる。

小さい頃から近所のおばちゃんにはそんな風に呼ばれ続けているけれど、年の近い男性にそう呼ばれると、萌子はどうもくすぐったい感じがした。

「確かに人の目を釘付けにするような激しい個性がある訳じゃないけど、温かみがあって柔らかで、いつの間にか人の目を引くような、いつまでも見つめていたくなるような、そんな絵だと思うよ」特徴がない。3日前に萌子がそうばやいた時、久志は一言『それも個性だよ』と優しく反論した。その時足りなかった言葉を補足するように、久志は萌子を諭してみせた。

「それに、君の技術の高さは自信を持って良いと思う。お母さんの、血を引いてるんだね」

母を引き合いに出されて褒められると、どうしようもなく反発してしまう。そんな自分のひねくれた根性が萌子にはかえって歯痒かった。素直になれずに、萌子はつい顔を背けた。

視線を逸らした先に、1枚のパステル画が飾ってあった。描かれているのは対岸の向島の風景だ。季節は春で、山桜の薄いピンクや新緑の黄緑が淡く鮮やかに山肌を彩る。まるで、訪れる春をキャンパスいっぱい喜んでいるような絵だった。

『際立つた特徴がないそのスタイルは、これといった名所旧跡を持たない尾道の街とよく似ている。けれども、その街が多くの人に愛されて止まないので同じように、彼女の描く世界もまたいつの間にか人を惹きつけ、心の中にそつと染み込んで来る。それはその絵の持つ暖かさだとか優しさだとかが、知らず知らずの内に観る人の心を穏やかな気持ちにさせるからなのだろう』

玲子が画集を出版した時、とある評論家がそんな文章を寄稿した。それは、母の絵を端的に表した評論だった。

今でも、母の絵には強く憧れる。そんな母の絵と同じような感想を得ることは、少しこそばゆいような感じがした。

母には及ばなくても。同じ道を辿ることが、私にも出来るのだろうか……。

「先生」

「ん？」

「これ、母の絵なんです」

「え？」

今日、ここに来て一番言いたかった台詞を口にして、萌子は小さく俯いた。そんな彼女の様子を氣遣うことなく、久志は壁に掛かった絵を見上げて小さく唸った。

「へえ。凄いな、これ。何だか、春が踊り出すみたいだ」

邪気のない瞳でその絵を見つめた久志は、独特な言い回しでそう表現してみしてから、

「逢つてみたいな。君のお母さんに」

「えっ？」

それは、趣旨を取り違えればとても意味深な台詞だった。そして萌子は、ものの見事にその意味を取り違えた。

いきなりぶわつと顔を真っ赤にして俯いた萌子を見て、久志は驚いたようにオロオロし始めた。

「どうした？」

「……何でもない」

「何でもないって……だって、顔が真っ赤だぞ。熱でもあるのか？」

いくら何でも、そんな急激に発熱するはずがない。

（もう。ニブチンなんだから）

そんな突拍子もない発想を悟れという方が無理な話なのだが、萌子はとにかく恥ずかしくて心の中で久志にそう八つ当たりした。

久志の台詞の意味はすぐに判った。判ったけど、だからといってすぐ動悸が治まる訳ではない。萌子は俯いたまま、軽く深呼吸をした。

「大丈夫、です」

一瞬、居たたまれない気まずさが漂った。会話の糸口を探るように視線を動かしながら、萌子は、

（ああ、あの時みたいだな）

と思い返していた。

あの『都わすれ』でのひとときを。

「あ、そうだ」

結局またあの時と同じように、取って付けたようにそう切り出したのは久志の方だった。

「写真、持って来たよ」

「え？……」

「ほら、元日の。御袖天満宮で写したヤツ」

そう言っただけで久志は、鞆から1冊のミニ・アルバムを取り出した。

元日の午前中。

家族とのひとときを過ごした後、萌子は長江町にある祖母の家から久志の家に向かった。

祖母に着付けてもらった、淡いピンクの振袖を着て。

紙の手提げ袋には、こっそりと祖母が作ったおせちを忍ばせていた。

千光寺山の麓を回り浄土寺の境内の脇道を上がるまでのあいだ、小さな路地を一つ曲がるたびに萌子の心はワクワクとした気持ちで少しずつ膨らんでいった。

あの秋晴れの日、『都わすれ』へ向かう道すがら感じた、何かが始まる前のような期待感。あの時と同じようできて、けれどもあの時とは何もかも違うような気がした。

あれから何度も疑った久志の気持ち。そして自分の想い。

路地を行く足取りさえ、ゆっくりと確かなものに変わったような気がする。もっともそれは、履き慣れない下駄のせいもあったのだけれど。

「おっ」

ドアを開けて顔を出した久志は、少し意外そうに小さく声を漏らした。驚かそうと着込んで来たくせに、萌子は途端に恥ずかしくな

って、

「おばあちゃんに、着せてもらったんです」

そう言って俯くのが精一杯だった。

久志は何も言わなかった。『綺麗だ』とも、『よく似合ってる』とも。ただ目を細めて微笑んでいるだけだった。

女の子が喜ぶようなことを言える人じゃない。それがちよっぴり物足りなくもあり、そんな久志の不器用さに萌子は親近感を覚えもした。

部屋の中は案外片付いていた。一般的な『男の一人暮らし』しか想像出来なかった萌子は、少し意外に思った。

「先生、結構綺麗好き？」

「何で？」

「ううん。思ったより片付いてるなって思って」

「失礼なやつちな」

久志はそう苦笑した。

「大掃除くらいは、やったさ」

「ホントですか？実はこっこの部屋に洗濯物の山が詰め込んであ

るんじゃないですか？」

萌子がそう悪戯っぽい疑惑の視線を向けると、

「そんなことないさ」

と、久志は変に胸を張ってみせる。

「何なら、開けてみたら？」

「……いいんですか？」

久志の妙に自信ありげな、何かを企んでいるような態度が気になったけれど、萌子はその先への好奇心をかえって掻き立てられて、ついその取っ手に手を伸ばしてしまった。

「……先生、これ」

がらんとした部屋の窓辺に、キャンパスが一つ置かれていた。

窓には薄いレースのカーテンが引かれていて、その先の景色は見えなかったけれど、キャンパスの上の描きかけの風景がその窓からの眺望であることに、萌子はすぐに気付いた。

その部屋は、中学生の頃に萌子が薫とよく過ごした部屋だった。夕暮れ、尾道の街に夕日が沈むまで。そこからの景色の美しさを、萌子は誰よりもよく知っている。

『尾道が一望出来る部屋』

そういえば、久志はそうリクエストをしてこの部屋を紹介されたのだった。

丹念に、少しばかり気味に描かれた尾道の雑多な街並み。まだデッサンの段階だけれど、その絵からはこの街の柔らかくて優しい面差しが滲み出るように伝わって来る。

上手い。素直にそう思った。

その精密な筆使いに、萌子は息を呑んだ。この絵がどんな風に仕上がるのだろう。狂おしいほどの期待を、その絵は萌子に抱かせた。「この窓からね」

立ち尽くした萌子を見て、自らの企みに満足した様子の久志は、そう言って萌子の背後に立った。

「朝な夕な街を眺めていると、不思議なくらい落ち着くんだ。穏

やかでゆつくりとしていて、とても優しく僕の心に触れて来る。やっと」

やっと。そう言いさして、久志はその言葉の感触を噛み締めるように一瞬黙り込んだ。

「やっと、自分の居場所を見つけたような気がする」

柔らかな微笑みを浮かべた横顔に不釣り合いな切ない響き。萌子はハツとして久志の顔を見上げた。自分の父親を語る時の、彼のあの物憂げな横顔を思い出しながら。

「あ、いや。少し大げさかな」

萌子の物問いたげな視線に、久志は少し慌てたように急いで照れた笑みを浮かべて、

「別に家が居どころ悪かった訳じゃないよ。そんなに不幸な人生だった訳でもないし。ただ……」

「え？」

「ここ何年か、ずっと考えていたんだ。僕はどうしてここにいるんだろうって」

やっと。そう言いさして、彼はまたしばらく黙り込む。

「この街に来て、君と出逢って、やっとその意味が判った気がする」

それは、とても遠回しな告白の言葉だった。鈍重な二人はしばらく経ってからそのことに気付いて、そつと耳まで赤くなった。

おせちはおろか雑煮すら食べていないという久志に祖母お手製の料理を見せると、彼は途端に目を輝かせた。

「旨そうだなあ。今年の正月は、食い物だけが不満だったんだ」

そう言ってから、久志は何か問いたげな目で萌子を見た。

「残念ながら、正月料理のレシピはまだ引き継いでおりません」
済ました顔で、萌子はそう頭を下げてみせる。

「ほう。じゃあ、他の料理はちゃんと教わってるんだね」

「……え？」

「楽しみにしてるよ、そこで作ってくれるのを」

久志はそう言って、彼の背後にあるキッチンをあごでしゃくつて示してみせた。

「じゃ、それまでにきちんと片付けておいて下さいね」

「大丈夫。俺、ガス台に薬缶しか置いたことないから」

本当は、すぐドキドキしていた。心臓が破裂しそうなくらいに。久志は、自分の台詞がどんなに萌子の心を掻き乱しているのかも知らずに、ケラケラと笑っている。萌子は拗ねたように久志を軽く睨みながら、今にも飛び出して来そうな心臓を必死にだめていた。それから、二人で御袖天満宮に初詣に行った。

穏やかな年の初めだった。まだ午後浅い時刻なのに、日はすでに西に傾き始めている。木立の合間から射すたおやかな光が、二人を優しく包んだ。

「写真、撮ろうか」

そう言い出したのは久志の方だった。二人はコンビ二に寄って、1番枚数の少ない12枚撮りのインスタント・カメラを買った。

元来、萌子は写真が苦手だった。映るのが恥ずかしいから、学校の行事も集合写真に写ったものくらいしか残っていない。

ましてやそれを久志の撮ってもらうなんて。いろいろ注文をつけて来る久志に大人しく従いながら、萌子は緊張して体が上手く動かなかった。

「誰かに撮ってもらおう」

何故だか判らないけれど、この日の久志は妙に積極的だった。

手の甲を5cm離して並んで立ち、ぎこちない笑顔を浮かべて、そうして二人は幸せそうにスナップ写真に納まった。

もう一度、あの時のように。

ホテルの入り口で久志と別れて、少し時間差をおいて夕闇の街へと歩き出した萌子は、ぼんやりとそんなことを思った。

せめて尾道の街だけでも、久志と並んで歩きたい、と。

第七章 2枚の絵(2)

「せんせー。何かコンペに応募するんですか？」

美術準備室から顔を出した生徒が、そう言つて茶色い紙封筒を振りかざす。別の生徒の絵を見ていた久志は、それを見て慌てたように駆け寄つて、

「こらこら。それ、俺宛てのだよ」

「ごめんなさい。てつきり美術部宛てなんだと……」

元々、美術部に来る郵便は部員が開封していた。本当なら顧問が受け取つて開けるのだが、美術部は顧問がほとんど顔を出さないため、職員室に鍵を取りに行った生徒に直接手渡されていたのだ。

「いや、ま、美術部宛てつて言つたら美術部宛てなんだけど……」
ちよつときつく言い過ぎたと思ったのか、久志は声のトーンを落としてもごもごと呟くと、

「ほら、コンペに応募するのは君たちだ」

と言つてA4版のチラシを取り出した。

「白鳥美術館主催、青創コンペ2007？」

チラシを受け取つた生徒が、素つ頓狂な声でそう読み上げる。萌子もその背後に寄つてチラシを覗き込んだ。

それは高校生以下向けの絵画コンクールの案内だった。美術館の名前は聞いたことがなかったが、下に名を連ねる審査員たちの名前の中にはいくつか聴き覚えがある。

「これ、東京の美術館じゃん」

萌子の傍らから覗き込んでいた男子が、そう声を上げた。

「そうだよ。東京に知り合いに頼んで、送ってもらつたんだ」

久志は何だか自慢するような口調でそう言つと、

「別に東京に住んでないからつて、応募しちゃいけない訳じゃないぞ。資格は『高校生以下』つてことだけなんだから」

「ふん」

みんな関心があるのかないか判らないような中途半端な声を出して、各々チラシを覗き込んでいる。

「ウチの学校、県内のコンペの案内しか来ないからね」

こんなぐうたらな部でも、一応年に数回コンペに出展している。広島県全域の高校から応募が集うコンクールで、萌子も1年生の時に優秀賞に選ばれた。

ふと見上げると、久志と目が合った。彼は鳶色の瞳を細めて、穏やかに笑う。

わたしのため、かしら。萌子の頭を、一瞬そんな不遜に似た考えがよぎった。

「先生。でもこれ、応募×切間近ですよ」

目ざとく気付いた別の生徒が、そう疑問を投げる。

「今までに描いたものでもいいんじゃないかな。応募規定には『発表・未発表を問わず』となっているから」

「でも、そんなちゃんとした作品……」

「そうだ」

そう朋美が声を上げて萌子を振り返った。

すでに岡山の美術専門学校に推薦が決まっている彼女は、今でもこうして時々部室に現れる。本当はもう『部長』の職から降りていなければいけないのだが、何故か美術部の場合は卒業まで3年生が勤める慣習となっていた。

『来年は萌ちゃんです』

先日、二人きりになった時に朋美からそう言われた。萌子が返事にためらっていると、

『答えは、追い出し会までに決めてね』

と肩をポンツと叩かれた。まるで、

『あなたなら大丈夫よ』

そう言っているみたいに。

「萌ちゃんの絵は、どうですか？」

「部長？」

「ほら、水谷さんの肖像画……」

「うん。僕もそう思ってたんだ」

朋美の意見に、久志は一つ大きく頷いて、

「あれなら、いけるよ」

その刹那、萌子の胸に宿ったためらいの理由は、自信がないからではなかった。むしろ、その逆だった。自信めいた気持ちを悟られたくなくて、萌子はいくらでも宥めようとするような薄笑いを浮かべてしまった。

「でも……」

けれども、萌子がつさに見せた謙遜の仕草は、久志に消極的な印象を与えてしまったらしい。彼はそれ以上押しつけることなく、封筒からもう一枚チラシを取り出した。

「これなら、まだ時間があるよ」

「全国街並み絵画コンペ？」

5月×切のそのコンペは、全国の『小京都』と呼ばれる街が結成した会が主催だった。その会に名を連ねる古い街並みが画題の対象で、その中には尾道や竹原の名前もある。大賞や優秀賞の他、主催した街別にそこを画題とした作品に贈られる特別賞が設けられているのが、いかにも特徴的だった。

「尾道を描く奴なんかいっぱいいるかもしれないけどさ」

少し離れたところから、萌子の瞳を覗き込むように久志はそう語り掛ける。

「尾道に関しちゃ、負けられないだろ」

彼の悪戯っ子みたいな笑顔を見た瞬間、萌子は訳もなくそう確信した。わたしのために、探してくれたんだと。

「なんか」

秋月はづきが、不服そうにそう小首を傾げる。

「澤崎先輩のためのコンペみたいですね」

「そんなことないよ」

慌てた様子で、久志は取り繕うように笑顔を作った。

「秋月君もほら、こないだ仕上げたのがあるじゃないか。あれなんか、いけると思うよ」

あゝあ。そんなに取り乱しちゃバレちゃうよ。
些細なことで動揺を隠し切れなくなった久志を、呆れたような目で見ながら萌子は、

（あたしたちに、忍びあう恋は無理かもしれない）
そんなことを思って、そっと可笑しくなった。

第七章 2枚の絵(3)

「あれ？」

ホームに姿を現した久志を見て、萌子はちよつと目を丸くした。

「追いついちゃった」

ばつの悪そうな表情を浮かべて、久志はぼりぼりと頭を掻く。

今日は特に、久志と待ち合わせる予定はなかった。萌子は、福山の街で買うものがあつたから、先に美術室を後にしたのだ。

「ま、いつか。たまには」

久志はすぐに子供みたいな顔になって、そう小さく笑った。

「ここで無視してると、かえって変ですよ」

少し離れたところに福女の制服姿が見える。萌子は、教師と生徒としておかしくない距離を心掛けて、久志の横に立った。

朝から冷たい雨が降り続く土曜日だった。午後に入って少し雨足は弱まったけれど、ホームの端に立って軒先によく目を凝らすと細かい雨の粒が見えた。雪になるほどではないが、やはり少し寒い。

「先生、今日はぜひぶん帰るの早いんだ」

「うん」

久志は視線を落としてそう頷くと、

「なんか今日は気乗りがしなくてね」

それに、君もいなかったから。そんな台詞が続きそうな口調だったけれど、もちろんそれは萌子の空耳だった。

久志の視線や仕草に、時々人よりも多くの好意を感じることがある。その感覚はすでに確信に近いレベルだったけれど、それを実証出来る事実はまだ何一つなかった。

結局また、

(だいたい付き合ってるって言うのかなあ、これ)

という疑問符だけが、萌子の頭の中に取り残された。

確かめてみればいい、のかもしれない。それはもう、そんなに不

安を覚えることではない。けれども生来の臆病さと怠惰な性格が、萌子を何となく億劫がらせていた。

福山駅のホームを離れるとすぐに、車窓を雨の滴が幾筋も流れ始めた。滲んだガラスの向こうで、過ぎ去る福山の街は白く霞んで見える。

こんな霧雨に濡れそぼつ風景を、前にも1度見たことがある。そう思った刹那、萌子の脳裏に尾道水道を見つめる紺色の傘と浅黄色のジャケットの後姿が蘇った。

「先生」

「ん？」

乗客がまばらに腰掛ける7人掛けのシートに、久志と並んで座った萌子は、少し斜めを向いて久志の横顔を見つめた。

「先生と初めて会った日のこと、覚えてる？」

「……君に、不動産屋さんまで案内してもらった日のこと？」

「そう」

「そりゃもちろん。そういえば」

久志は斜向かいの車窓を見つめて、

「あの日も、こんな雨の日だったね」

「……うん」

久志に倣って正面の窓を見ながら萌子は、

「今日、『ひこうき雲』に行ってみない？」

「ひこうきぐも？」

「あの時の喫茶店の名前なの、それ」

「……あの、君の叔母さんがやっているお店？」

「『おばさん』なんて言ったら、一生口きいてもらえなくなりますよ」

「？」

「あの人、『千絵ちゃん』って呼んであげないと、もの凄くふてくされるの」

萌子のそんな台詞に、久志は少し目を丸くしてから可笑しそうに

笑った。

尾道駅に着いても、雨は一向に止む気配がなかった。駅舎の軒先から少し体を乗り出すようにして雨足を確かめた萌子は、手にしていた赤い傘を広げようとした。

「あっ！」

突然、背後で久志がそう大きな声を出す。

「え？ どうしたの？」

「傘、忘れた……」

「どこに？」

そう問い返しながら萌子は、久志がシートの手すりに傘を掛けるシーンを思い起こしていた。

「もしかして、電車の中？」

「うん……」

久志は打ちひしがれたように俯くと、

「参ったなあ。また、コンビニで買わなきゃ」

不意に、愛おしさが胸の内を駆け巡った。

買い物を忘れた子供みたいにしゅんぼりとした久志を見て、萌子は何故か微笑みかけたくなるような感情を抱いた。

「先生」

「ん？」

「傘なら、ありますよ」

そう言って萌子は、赤い傘を開いてそつと差しかけた。

「『ひこうき雲』に行けば、何か貸してもらえるだろうし」

「でも……」

久志はそう躊躇して、辺りを見回す仕草をしてみせる。

「大丈夫。傘に隠れていれば顔なんか見えないから」

久志は試すような視線で萌子を見た。萌子はしなやかな笑みを返してみせた。

「そつか。大丈夫、かな」

「うん。大丈夫」

「よし、じゃ」

久志の顔に悪戯っぽい笑みが宿った。

「相合傘、やっちゃおうか」

あの日、鞆を頭に乗せて小走りに駆け抜けた路地を、萌子は傘の下で久志に寄り添うように歩いた。くすんだ、心なしか寂れた感じのする人気ない狭い路地を進むと、やがて急に視界が開けて海沿いの道に行き当たる。

（そういえば……）

そういえばあの時、久志はここから何を眺めていたのだろう。

それは、彼と出会って最初に抱いた疑問だった。出逢うきっかけだったのに、萌子は今までその疑問をすっかり忘れていた。

「先生」

「何だい？」

「先生あの時、ここから何を眺めていたの？」

「え？」

「あの、『ひこうき雲』に入って来る前に……」

「見てたのか」

驚くというよりはむしろ『恥ずかしいところを見られた』といった風に、久志は照れ笑いを浮かべて頭を掻いた。

「店に入る前に見かけたんです。雨の中でずっと立っているのがとても気になって。それに」

萌子はシニカルな笑みを浮かべて、

「凄いい色のバッグを持っていたし」

萌子の皮肉が通じたらしい。久志は思わず苦笑いを浮かべてから、

「そっか。凄い偶然だったんだね」

と感心した素振りを見せた。

そう。凄い偶然だったのだ。あの時久志が『ひこうき雲』の扉を選んだことは。運命、と言い換えても良いかもしれない。萌子はそう思った。

「あそこから」

あの時眺めていた方向を、久志はチラッと見やつて、

「描かれた絵を見たことがあるんだ」

「ふ〜ん」

「静かに揺れる海と、高々と伸びるクレーンと」

久志はそこから見える眺望をそう言葉でなぞらえてみせて、

「尾道へ来たら、最初に行こうと決めてたんだ。そしたら、着いた途端に雨に降られて」

久志は情けない笑みを浮かべて、

「あまりに寒くて、どこかに避難しようと思って見回したらあの店が目に入って。ホント、凄い偶然だよな」

あの日、二人が別々に押し開けた『ひこうき雲』の扉は、相変わらず重たげだった。カウ・ベルがカランカランと小気味良い音を立てる。

萌子に続いて入って来た久志の姿を認めた千絵は、

「いらつしゃ……」

と言いさしてから、慌てたように声色を作り直した。

「いらつしゃいませ」

「こんにちは、千絵ちゃん」

そのトーンの高さの違いが可笑しくて、萌子はクスクス笑いながら、

「立花先生だよ」

「？」

「ほら、前に来たことあるじゃん。『絵描きさん』よ……」

そう言われて、千絵はすっかり黙り込んでしまった。彼女の中でカチカチとスパコンが作動する音が聞こえて来るような気がした。

千絵はまず久志の顔を認識しようと努めた。それはすぐに認識出来たらしい。彼女は小さく呟くように、

「ああ、あの時の放浪画家……」

萌子の後ろで、緊張した面持ちのまま久志が小さく首を傾げた。自分にそんなあだ名が付いているなんて、もちろん知る由がない。

そこから千絵の解析能力がフル回転した。30秒も立たない内に彼女は全てを飲み込んだらしく、ほんの少し嘲るような笑みを浮かべて、

「なるほど。『とても好きな人』か」

「え？」

「いえいえ。さ、どうぞ。好きな席へ」

言われるまでもなく、席は選び放題だった。雨のせいか、店内はまた一人も客がいない。

「千絵ちゃん。コーヒーの味、考えた直した方がいいんじゃない？」

「これ。客の前で何を言うの」

「だって、きつと先生この店で客の姿を見たことないよ」

ねえ、と振り返った萌子は、石造のように固まっている久志を見つけた。

「せんせい？」

「え？ あ、いや。で、では、失礼します」

誰に断っているのか、久志はギクシャクとした足取りで勝手にカウンター席に腰をおろした。

「先生……？」

「もしかして、緊張してる？」

「あ、いや、君のご家族とお会いするというのは……」

「もしもし？ これ、ただのおばさんよ？」

「ちよつと！ 『ただの』ってなによ。『ただの』って」

千絵は萌子に向かってそう口を尖らせてから、久志に向かって優しく語り掛けるように（傍目にはニヤニヤと笑いかけているようにしか見えなかったが）、

「先生、それじゃ家庭訪問の時に困りますよ」

「いえ、私はあくまでも萌子さんの部活の顧問なので、家庭訪問はやらないんじゃないか、と思いますけど……」

次の瞬間、萌子と千絵は思わず顔を見合わせてから、カウンター

の内と外でいつせいに笑い転げた。

「そういえば」

千絵の入れてくれたアップル・ティを口にして、二人はようやく心地がついた。真冬の雨に打たれて、思ったより体が冷えていたのだ。

「先生は、本当に画家さんなんですってね」

「はっ……」

少し落ち着いたとはいえ、久志は依然として律儀で堅苦しかった。そんな彼の様子を、千絵はむしろ楽しそうに眺めている。

「ま、画家の卵と言いますか、その、まだ受精もしていない卵子くらいのレベルで」

「ぶっ」

千絵はまた、俎板の前で思わず吹き出しそうになった。

久志は冗談を言ったつもりではないらしい。相変わらず生真面目そうな顔つきのまま、きょとんとした目をしてみせる。

「このまま、無精卵にならなければいいのですが」

萌子と千絵は腹を抱えて笑い出した。真面目に語っているところが、なお可笑的い。

「萌子。あんたの専属顧問、ホントにだいじょうぶ？」

萌子の耳元に顔を寄せて、千絵は久志にも聞こえるような声ではつきりとそう言った。

そんな揶揄にも、久志は気分を害した様子を見せなかった。ゆつくりと微笑む彼の穏やかさに、結局みんな参ってしまうのだ。千絵も毒気を抜かれたように、

「いえね。『画家』さんとして一つ、お願いがあるんですけどね」と呟くようにそう言った。

「何ですか？」

「先生に、絵を描いてもらいたいんですの」

「絵、ですか？」

そう、と千絵は短く頷いて、

「このお店の絵を、ぜひ」

千絵のその台詞に、萌子と久志は同時に店内を見回した。

「うん。これだけ空いてりや、確かに描きやすい」

そう軽口を叩く姪っ子を、指先で軽く小突きながら千絵は、

「どうですか？」

久志はしばらく、その問いに答えようとしなかった。その目は、店内の構図を読み取っているようにも、ためらっているようにも見えた。

「……あの」

「はい？」

「私も一つ、お願いしてよろしいでしょうか」

「……」

久志の思いがけない台詞に、千絵は萌子と顔を見合わせた。

「何ですか？」

「このお店に、飾ってもらいたい絵があるんです」

「先生の絵？」

「いえ」

久志は一瞬、そう逡巡してみせてから、

「私の父の絵、なんです」

その瞬間、思いがけず萌子は胸を不規則に揺さぶられた。

久々に、久志の口から『父』という言葉聞いた。たぶん、あの千光寺山で過ごした夕暮れ以来だろう。

まるで胎内にいる赤ん坊のように、自分の膝をぎゅっと抱きしめて背中を丸めた久志の姿が、唐突に目に浮かんた。それから、駆け抜ける車輪の向こうで背を向ける父の姿も。

久志への想いは、思えばそこから始まったのだ。ぽつんと宇宙に放り出されてしまったみたいな二人。彼となら、その寂しさを分かち合うことが出来る。久志と過ごす時間が多くなるに連れて、萌子

はついそんな気持ちを忘れそうになっていた。

「お父さんの？」

「ええ。今はもう、行方も判らないのですが」

哀しみも憂いもなく、久志はただそう言つて微笑む。あんなに情けなく思えた彼の笑顔が、その刹那不思議なくらい頼もしく見えた。

「そうなんですか……」

相槌の打ち方を忘れたみたいに、千絵は困つたように萌子を見た。萌子は千絵に向かって小さく一つ頷いてみせる。

その肯首をどう受け取つたのか、千絵は微かな笑みを浮かべて、

「お父さんも、絵描きさんだったんですか？」

「いえ。それこそ無精卵だったんですが」

久志はそう言つて一人笑いを浮かべると、

「父は、一時この街に住んでいたことがあるんです」

「まあ、そうなんですか」

「ええ。それで、その時描いた風景画が家に残つてたんです。ちようど」

久志はそう話しながら、背後を振り返るようにして、

「あの防波堤の辺りから描いた風景画が」

それで合点がいった。久志が何故、あそこからの風景を一番初めに見たがったのか。

「でも」

萌子はちらつと納得のいかない表情を浮かべて、

「あんまりあそこで絵を描いてる人、見たことないよね」

尾道は絵の街である。キャンバスやらスケッチブックやら、写生することに使えそうなものがそれこそそこら中に花開いている。海岸沿いの空き地から、名もない路地裏まで。

対岸の向島を描く人も多い。けれどもその場合、たいていは『ひこうき雲』の前よりもう少し栈橋寄りの場所でスケッチすることが多かった。

「そんなことないわよ」

幼子に優しく教え諭すように、千絵は静かに微笑んだ。

「昔、あの場所でスケッチしていた人がいたわ」

誰のことなんだろう。過ぎ去った恋を懐かしむようなノスタルジックな千絵の口調に、萌子は一瞬甘い想像を走らせた。

「でも、まさか、ね」

「え？」

「ううん。何でもないわよ」

何を訝しんだのか、一瞬眉をひそめた千絵はすぐに笑顔を取り戻して、

「見てみたいわ。その絵」

「そうですか。所詮素人に毛が生えた程度の出来だから、あんまり飾るのに相応しくもないかもしれないけど……」

自分から言い出したくせに、久志は急に気弱になって父親の絵の出来にまでへりくだってみせる。

「そんなの構わないですよ。凡庸な名画の複製を飾るより、この街に縁がある人の絵が掛かっている方が、よっぽど良い」

千絵は、壁に掛かっているモナの肖像画を見ながら、そんな風に歓迎の言葉を述べた。

「その絵、先生の手元にあるんですか？」

「ええ」

久志は柔和な顔で頷いて、

「この街に来る時、押入れから捜し出して来ました。父が」

久志の口調も、どこかしら郷愁を感じさせるものに変わった。

「愛した街を、もっとよく知りたかったから」

「そうですか……」

久志の感傷が千絵にも伝わったのか、彼女はそうしみじみと頷いてから、彼女らしい性急な台詞を口にした。

「じゃあ、明日にもどうかしら」

第七章 2枚の絵(4)

キシ、キシ。

岸壁と船を結ぶ舳の軋む音が聞えて来る。

晴れた日の尾道水道は、限りなく穏やかだった。元々『潮待ちの港』として発展した街だ。古くから風除け・風待ちの港であった尾道は、真冬でもその穏やかな表情を崩そうとしない。

防波堤の際に立つて、萌子は全身で日の光を浴びるように大きく伸びをした。彼女を包み込んだその光は、山を包み、街を包み、水面に煌めいた。

春はまだ遠い。けれどもこうして陽射しの中にと、花の季節がすぐそこまで来ているような錯覚に陥る。

幸せだから、だろうか。萌子はそう自分に問うた。

久志との距離がそうすぐに変わるとは思えなかった。それが、彼が奥手だからなのか、彼なりのけじめなのか、萌子には判らなかったけれど。

(半年過ぎても、貴方って手も握らない……)

古い歌の一節を思い出して、萌子は可笑しくなった。

きつと彼は、半年どころか1年過ぎても手も握らないに違いない。

(3度目のデートまでにキスしなきゃ、その先はない……だっけ？)

雑誌の片隅で見たそんな迷信も思い出して、萌子は半ば真剣に今日は何回目のデートだったかしら、と数え始めた。

もどかしい気持ちだが、萌子の中に全くない訳ではない。女の子らしい夢や未来を心に描くこともある。でも、それらが萌子の心に焦りを植え付けるようなことはなかった。

違うのだ、と思う。久志とのあいだには、そんな世俗では表しきれない繋がりがあるのだと、萌子はそう信じていた。初めて、本当に好きになった人。それは、人とは少し違った恋なのだと、彼女は

そう感じていた。

（三寒四温）

お互いに不器用で、どこかぎこちない恋。だから、ゆっくりと暖めていけば良いのだと思う。そうすれば、寒暖を乗り越えていつか花咲く春を迎えるように、どんな恋よりも美しい花を咲かせられるような、萌子はそんな予感がしていた。

（でもさ。とりあえず『好き』ぐらい、言ってくれてもいいのにな）

自分の臆病さは棚に上げて、萌子がそんな不満を脳裏に走らせた時、遠くの路地から大きな荷物を抱えた久志がもつさりと姿を現した。

「重いよ。これ」

姿を現してから幾分経つてようやく萌子の元に辿り着いた久志は、開口一番そう嘆いてみせた。

「結構、大きいんだ」

久志が抱えて来た絵は、想像していたものより遥かに大きかった。もう少し小さい スケッチブック程度のものを思い描いていた萌子は、俄かにその中身への期待を膨らませた。

「うん。結構大作」

滅多に言わない、戯けた台詞を口にした久志は、

「良い絵、だよ」

ポツリと本音を漏らした。

「ホント？ 楽しみだな」

萌子は本当に楽しみにしていた。それは自分と久志の仲を縁付けた彼の父親の存在に、いつしか親近感を覚えていたからかもしれない。

「さ、入ろう」

穏やかな笑みを浮かべて頷き合った二人は、山小屋のような分厚いきつね色のドアを押した。そしてその途端、二人できょとんと目を丸くしてしまった。

「いいとこに来た！」

カウンターの向こうから、千絵の悲鳴に近い歓待の声が挙がる。

「千絵ちゃん、どうしたの？ これ……」

萌子が呆れたように尋ねると、返事の代わりにエプロンが飛んで来た。

「こんな時に限って、美代ちゃん休みなのよ」

『ひこうき雲』の店内は満席だった。いくら休日の昼時だからといっても、こんなに客が入ることは滅多にないことだった。萌子は、この店の席が全て埋まっているところを初めて見たような気がした。週末の昼間、千絵は一人手伝いを雇っていた。それが保科美代子だった。近所に住む中学生だ。雇う、といっても子供の小遣い稼ぎ程度の話で、普段はのんびりおしゃべりをしてわずかばかりのお駄賃を貰って帰ることも多かった。

「美代ちゃんと同じ時給じゃ、働かないわよ」

慌てふためいている千絵の顔が可笑しくて、萌子はそう一言釘を刺してからエプロンに袖を通した。

「ごめんね。この辺に座って待っててくれる？」

簡易のパイプ椅子を引っ張り出して来て久志に勧めながら、萌子はそう軽く頭を下げた。

「うん。気にしないでいいよ」

こんな時でも、久志は穏やかな表情を崩すことがなかった。軽く微笑んでから、

「ウェートレス姿、得と拝見致します」

「もう、莫迦」

久志の余計な一言が萌子を悪戯に緊張させた。萌子は立ち働いている間中、ずっと久志の視線が気になって仕方がなかった。そんな萌子を、久志は飽きもせずただ微笑んだまずっと見つめていた。

「ごめんねえ。お腹空いたでしょう」

一息ついた様子で千絵が久志にそう声を掛けたのは、午後1時を優に越えた頃だった。カウンター席に移り、ブレンドの入ったコー

ヒーカップを片手にきよろきよろと店内を見回していた久志に向かって千絵は、

「食べたいもの、何でもリクエストして」

「しょうが焼き定食」

カウンターに戻った萌子が、横からそう宣言した。

「あんたにはまだ訊いてないわよ」

「もう。じゃあ、先生早く決めて。あたしお腹の皮が背中につく付いちゃう」

「大丈夫よ。そのあいだに立派な脂肪が入ってるでしょ」

萌子と千絵の軽快な『叔母・姪漫才』に笑顔を浮かべながら久志は、

「じゃ、同じもので良いですよ」

千絵がキッチンに向かうあいだ、萌子はようやく落ち着きを取り戻して、久志の隣に座って自分で入れた紅茶を美味しそうに啜った。

「せんせい」

「ん？」

「見たいな」

「え？」

「先生の、お父さんの絵」

そう声を掛けた刹那、久志はすっと緊張を走らせた。真意を慮るように萌子の瞳をじっと見つめる。見つめられて心臓が破裂しそうになりながら、萌子は何気なく微笑み返した。

「なんか、プレッシャー感じるな。自分の絵でもないのに」

そう呟きながら、久志は壁に立て掛けてあった袋から額縁に入った絵を取り出した。

「うわぁ」

萌子は思わず感嘆の声を上げた。

予期せぬ迫力だった。静かな尾道水道の先に建つ造船所のクレーン。その光景が今にも浮き上がって迫り来るような、それはそんな立体感あふれる油絵だった。

萌子の反応に心なしに面映そうな顔をした久志は、

「油絵とは、思わなかった？」

「うん」

「親父はね、結構器用だったんだ。油絵も水彩画もこなしてね」

久志はそう言った後で、何かとてつもない発見をしたように目を輝かせて、

「なあ。君のお母さんの絵と、同じ角度からの絵だと思わないか？」

「え？」

「これは近景、あれは遠景の違いはあるけどさ」

久志にそう言われるまで、萌子は全く気付かなかった。母の絵がどこから描かれたかなんて、考えてみたこともなかったから。

萌子は、グリーンヒルホテル尾道に飾られたあの絵を、母が実際に描いている場面を見たことがなかった。ホテルから絵を依頼されたのは確か萌子が中学生の時だったが、その時玲子は古い絵を1枚出して来て、それをホテルに提供したのだ。

いくら忙しくても、そんな風に仕事をごまかすような、母はそんな人ではない。だから萌子は、その絵が母にとって何か思い入れのある作品なのだろうと、勝手にそう思っていた。

「もしかしたら、同じ場所から描いたのになって思って」

同じ場所から。もしかしたら、同じ時に。そんな妄想は、萌子に久志との運命をまた強く感じさせた。

「はい、お待たせ」

千絵がカウンターを回り込んで来て、萌子たちの背後からしょうが焼きとライスの皿を差し出した。それらは当然のように、まず久志の前に置かれた。

「千絵ちゃん、どう？」

萌子はそう言って、久志とのあいだに置いて眺めていた額縁をくると千絵の方へ向けた。

「へえ。なかなか素敵じゃない」

そう言つて目を細めた千絵は、次の瞬間何かを思い起こしたように小さく首を傾げた。そして一瞬目を見開くと、そのままピキリと凝り固まつてしまった。

「……どうしたの？」

感動した、にしてはあまりに長いあいだ黙り込んでしまった叔母に、萌子は不審げにその声を掛ける。

「……うつん。なんでもない」

「なんでもないって……」

萌子の問い掛けにも応じようとせずに、千絵は悪い夢でも振り払うかのように頭を大きく2度、3度と横に振った。それから無理やり気を取り直すような口調で、

「萌ちゃんの分、今持つて来るからね」

萌子は思わず久志と顔を見合わせた。久志もさすがにその穏やかな顔つきを崩して、怪訝そうに眉間にしわを寄せた。

今日はそれが目的の大半だったはずなのに、萌子たちが食事に手を付け始めても千絵はその絵について触れようとはしなかった。他愛もない話題を振り撒いて可笑しそうに笑うその姿に、話を逸らすうとしている気持ちがかえって見え隠れしていた。

ぎこちなく、気詰まりな時間が過ぎた。食事を終え、千絵がもう一杯入れてくれたコーヒーを飲み干すと、久志は何もなかったように、

「じゃ、そろそろ始めますね」

と言つて、スケッチブックを取り出した。

萌子たちが忙しく立ち働いていたあいだに、彼は描く絵の構図を定めていたらしい。店の奥、作り付けの棚に向かうようにして、久志は手馴れた感じで筆を動かした。

久志がスケッチする様子を萌子が呆けたようにぼんやりと注視している、その背後に千絵が立った。てっきり食器を片付けるのだと思つて、半身をずらした萌子の耳元で、

「さっきの絵、ちよつと見せて」

千絵はそう囁いた。

「……その絵に、何かあるの？」

千絵の絵に向けたまなざしは、傍から見ても尋常なものではなかった。睨みつけるような視線で見つめながら物思いに耽る姿は、どう見ても『絵を吟味』しているようには見えない。

萌子の質問を全く無視して、千絵は顔を上げると今度は久志の顔を睨みつけ出した。じつと視線を送りながら、やはり何かを思い出そうとしている。

「千絵ちゃん？」

萌子が不安げにそう声を掛けると、千絵はようやく姪っ子の方を向いて、

「昔ね、見たことがあるような気がするの」

「？」

「……この絵を」

最初、全く意味が判らなかった。千絵ちゃんは何を言ってるんだろ。心の中で思わず肩をすくめなくなるような気分になった後で、萌子は唐突に閃いた。

（もしかして千絵ちゃん……）

千絵は、久志の父を知っていたのではないだろうか。この絵が描かれた場所はこの店の真ん前だ。これだけの絵が、1日2日で完成したとも思えない。長いあいだ同じ場所に通い詰めれば顔見知りも出来るだろうし、もしかしたらこの店に息抜きに訪れたかもしれない……。

（バカバカバカ）

そこまで推理してから、萌子は思わず自分の頭を叩きそうになった。

そんなことがあるはずがないのだ。

久志の父がこの街にいた頃、千絵はまだ10代後半だったはずだ。それにこの店が開店したのは、萌子が中学2年生の時のことなのだから。

第七章 2枚の絵(5)

目の前に停まった銀色のクーペに、萌子はわずかに顔をしかめた。そこは国道から少し山側へ入った道路だった。車がすれ違うには十分な道幅があったけれど、決して広い道ではない。路上駐車など、やはり迷惑な場所だった。

尾道は坂の街である。海の手も山の手も、車が快適に走れる場所には限られている。それなのに、最近は車で訪れる観光客が増えた。駐車場を備えている場所も少ないから、必然的に路上駐車も増える。この近くにはロープウェイの登山口駅や、招き猫美術館などの観光所がある。車の持ち主は、ここに車を停めて散策するつもりなのかもしれない。

萌子がそう考えて少し不機嫌な顔になりかけた時、助手席側のウインドウがスルスルと開いた。

「お譲ちゃん、乗って行かへん？」

関西弁と広島弁をごちゃ混ぜにしたような、おかしいイントネーションだった。絶対に地元の人間じゃ使わない言い回しだ。

(なに？ いったい……)

得体の知れない不快さを覚えながら、萌子はおそろおそろ車の中を覗き込む。

「……せんせい!？」

その正体に気付いた途端、萌子は本気で吹き出してしまった。

サングラスを少し下げて、あの鳶色の瞳が悪戯っぽく微笑んでいた。

「どお？ いい車だろ？」

「先生」

「ん？」

「メチャクチャ、似合っていないです」

銀色のマツダRX7もサングラスも、まるで似合っていない。そ

のアンバランスさがあまりに可笑しくて、萌子は思わず嬉しそうに笑って助手席に滑り込んだ。

『ガレットウーリ・コモンのワッフルを買って、店の前で待って』

久志がそんなことを言い出したのは、昨日の土曜日のことだった。それが当たり前のように、萌子も日曜日には彼と逢うつもりでいたけれど、久志のその台詞はちょっと意外だった。

『尾道で逢うの？』

よく考えると、先週の日曜日尾道で過ごしたのだ。千絵の店の中では、顔見知り会う可能性なんてもちろんないけれど。

少しずつ、感覚が麻痺して来ているのかもしれない。お互いに。

久志と二人でいても、誰も見咎めるものはいなかった。それは、たとえ萌子がどんなに愛しい想いを募らせていても、傍目から見ればただ教師と親しくしているようにしか見えないからだ。平日の学校の行き帰りなら、きっとそんな風にしか見えなだらう。少し淋しい事実だけれど。

けれども、休日にして二人で逢うのは、もっと慎重にならなければいけないのかもしれない。たとえ尾道でなら、学校関係者に目撃される確率は高くないとしても。

（でも、ベツチャー祭りの時は見られてたし、ね）

黒沢が二人の仲を疑ったのは、あの祭りの日に萌子たちの姿を見たからだ、久志は言っていた。

あの頃、二人の仲は決してやましいものではなかったはずだ。それでも、二人を見てそんな風に勘ぐる人もいる。

（もっと、気を付けなきゃ）

でも、気持ちの良い晴れた日に、ワッフルを持って千光寺山に登るのも悪くないかもしれない。今朝玄関を出る時、萌子はそんな風に華やいだ気分を抑え切れなかった。

『ガレットウーリ・コモン』は、喫茶店『こもん』のテイクアウト店舗として、『こもん』から路地一つ分離れたところに建てら

れた店だった。『こもん』は、ロープウェイの登山口駅近くに建つ、尾道好きには良く知られたワッフル専門の喫茶店である。

ここで人気のワッフルを買って、尾道の街を歩く。自分で思い描いた今日のデートコースが現実のものになると、萌子はすっかり信じ切っていた。

「どうしたの？ この車」

似合っていない、と言われてすっかりしよげ返っている久志に向かって、萌子はにっこりと微笑んだ。そうやって感情を露わにする久志の姿は、また一步その存在に近付いたような気分にさせる。

「借りて来たんだ。君と、しまなみ街道でもドライブしようかと思つて」

「え？」

「……電車で行けるような距離じゃ、人目が気になるだろ？」

ちゃんと考えていてくれたんだ。久志のそんな細やかな気遣いが、萌子の胸にそつと染み込んで来る。優しい、と思った。その刹那、喜びが体の奥底から湧き上がって来た。

「全部、お任せ？」

「ん？」

「行くとこ、先生に任せちゃっていいの？」

「もちろん」

とても嬉しそうに、久志が大きく頷く。

「じゃ、ガイドにお任せ」

そう言つて萌子は、助手席に深々と座り直した。

「よし」

力強くギアをローに入れてから、久志はちよつと訝しげに前方を見据えて、

「ところでここ、どうやってたら国道に戻れるんだ？」

久志の運転するRX7は、国道2号線を上り浄土寺の麓を通り抜けた。そして市街地の外れから国道を逸れて、尾道大橋へと向かう。萌子は、ハンドルを握る久志の横顔をそつと盗み見た。

不意にときめきを覚え、うろたえた。

よく考えてみると、萌子が車の助手席に乗った経験はほんの数えるほどしかなかった。母の玲子は免許を持っていないし、千絵も免許は持っているが車は持っていない。

男性の運転する車の助手席なんて、もちろん生まれて初めての経験だった。

前方を見据える久志の横顔は、意外なほど凛々しかった。優しく少し頼りなげ。そんな萌子が惹かれた素顔とは正反対の男らしい側面が、また悪戯に萌子の胸を掻き乱す。

「どうした？」

萌子の視線に気付いた久志が、少し照れ臭そうにそう尋ねる。

「なんでもない」

慌てた素振りを見せて、萌子は両手をポンッと膝に置いて前を向いた。

車は緩やかな坂道を快いスピードで登っていく。フロントガラスの向こうに、びっくりするくらい鮮やかな蒼が広がった。

「……でも、意外だったな」

「何が？」

「先生が、スポーツカー選んで来るなんて」

「そうか？」

視線を前に向けたまま、久志はこそばゆそうに鼻の下を擦って、

「実家に置いてあるのと、同じ型なんだ。この車」

「ふん」

「学生の頃は結構乗り回してたからな。湘南とかも、よく行ったし」

久志はそう言って、萌子が名前しか知らない海岸の名前を挙げてみせた。

（じゃあ、ここにいる先生は、私の知らない先生なんだ）

唐突に、そんな考えが萌子の心を捕らえる。

薄いサングラスを掛け、革ジャンを羽織ってスポーツタイプのハ

ンドルを握る男性。

未知なる者へのときめきは、不意に不安へと姿を変えた。

（その時、誰がこの席に座っていたのだろう）

萌子は、赴任初日に冷や汗をかきながら彼女の存在を否定していた久志の姿を思い出した。その言葉を鵜呑みにした訳ではないけれど、たとえば久志が東京に彼女を残して来ているとか、萌子は今までそんな発想を1度も抱いたことがなかった。

3ヶ月前には、その存在すら知らなかった人。

当たり前なのだ、彼のことを何も知らないのは。生まれてから17年間、二人はまるで違う道を歩いて来たのだから。

「ま、任しておいて。それでも結構運転は上手い方だから」

久志の戯けた口調に、萌子は少し複雑そうに曖昧な笑みを漏らした。

因島を素通りし、二人を乗せたクーペは生口橋を渡ったところで西瀬戸自動車道を下りた。一般道に出ると、久志は生口島の西側へと車を向ける。

「もう少しだから」

「……え？」

「本日の、美術部の校外活動第1弾」

「？」

風景が一変した。

麗らかな陽に照らされた、穏やかな街並みを銀のクーペは進んだ。時折垣間見える瀬戸内海が、ガラスを散りばめたように輝いている。

「さあ、着いた」

道が海岸線から離れて緩やかにカーブし始める手前で、久志は急に車を停めた。そして、海岸の方を指差す。

「降りてみようか」

「……うん」

海岸沿いに広がる芝地の真ん中に、それはあった。

「これ、なに？」

奇抜なオブジェを前にして萌子がそう尋ねると、久志は小さく片頬を歪ませて、

「『地殻』」

「え？」

「そういう題名の野外彫刻なんだ」

「ふん」

納得したのかしないのか、いまいちはっきりしない口調で萌子はそう頷くと、その野外彫刻に目をやった。

青く塗られた太い管に、白御影石が寄り添うように立て掛けられている。その向こうには醒めるような青空が広がっていた。

「この町が開催した『せとだビエンナーレ』っていうコンペがあつてね。そこで受賞した作品が、この島のあちこちに設置されているんだって」

「へえ。そんなの、知らなかった」

しまなみ街道が開通してから、島の活性化に繋げようと新しい美術館が開かれたりテーマパークがオープンしたりしていることは、萌子も知っていた。でも、生口島のそんな試みは今まで聞いたことがなかった。

「たまには他の美術品に触れてみるのも、刺激になっていいだろう？」

久志はそう似合いもしない教師ぶった口調になってから、

「こういうオブジェがいくつも集まっている浜があるんだ。行ってみようよ」

そう告げて、ジャンバーの襟を立てるようにして車に急いだ。萌子も、久志に貰ったあのピンクのマフラーを巻き直して後に続いた。冬の海岸は、日中でもやはり少し寒い。

生口島の中心街を抜けて、車は南の海岸沿いの道へ出た。穏やかな海を右手に、柔らかな陽の中を走る。

「サンセット・ビーチだ」

不意におぼろげな記憶が蘇って、萌子は小さくそう叫んだ。

「え？」

「この先に、そういう名前の砂浜があるの」

昔、千絵に連れられてこの浜に海水浴に来たことがある。そう、何故か千絵と薫と、そして龍太と一緒にだった……。

そう思い出した刹那、ノスタルジーと感傷がいつぺんに入り込んで来て、萌子は切ない気持ちに流されそうになった。

ほんの少しの後悔と、ほんの少しの罪悪感。

「じゃあ、きつとその浜だ」

つい寡黙になった少女の様子に気付くことなく、久志はそうポツリと呟いた。

『うつろひ』

そう題されたオブジェは、石垣を積み上げた防波堤の上で風に揺れていた。一列に並んだ５本の柱の天辺に、緩くワイヤーが渡されている。風に吹かれ、あたかも青空に線を描くように、それらはゆらゆらと宙を漂っていた。

風に、雨に、陽の光に。さまざまな自然の事象に左右されて表情を変えるその芸術品に、萌子はひどく興味を覚えた。

絵画は、その断片を切り取ることでしか想いを表すことが出来ない。その一瞬の切なさや、どれだけキャンパスに表せるかどうかに懸かっている。だからこんな風に、作者の手を離れてからも自由気ままに表現し続けられるものを、萌子は正直羨ましく思った。

ふと振り返ると、久志が間の抜けた表情でオブジェを見つめていた。萌子は少し可笑しく思ってから、

（先生は、何を思っで見つめてるんだろう）

それは、愛しい者への関心ではなく、ただ志を同じくする者への純粋な興味だった。

やがてそのオブジェから離れると、二人は砂浜を歩き始めた。

「綺麗なビーチだなあ」

白い砂浜を見つめて、久志が意外そうな声を上げる。

緩やかな弧を描いて、砂浜が１キロほど続いている。遠浅の海は

あくまでも穏やかだった。

「瀬戸内海って、あんまり泳げるイメージじゃなかったんだけどな」

「え？ 何で？」

「いや、あんまり綺麗なイメージがなかったから……」

「そんなことないですよ。失礼ですね」

萌子は笑いながら、そう頬を膨らましてみせた。

尾道には泳げるようなところはないが、向島へ渡れば小さな海水浴場がいくつか点在する。萌子だってこれでも海の子なのだ。中学生くらいまでは、みんながよくバスに乗って海水浴に出掛けた。

「この辺の海は、とっても穏やかなの」

昔、1度だけ夏に日本海へ出掛けたことがある。見たこともないような大きな波に、萌子は思わず足が竦んだことを思い出した。

「だから、とっても泳ぎ易いんですよ」

「そうなんだ……」

人だかりの風景でも思い浮かべたのだろうか。久志は少し遠い目をしてから、

「今度、夏に来ようか」

「え？」

萌子はドキツとして久志を見やった。相変わらず穏やかな顔で久志がそつと微笑む。

幼い頃に見た夕焼けが、唐突に蘇った。夏の夕暮れに見た、『サンセット・ビーチ』の名にふさわしい荘厳な茜色の空を。

あの夏を、久志と過ごす……。

「先生の、えっち」

「……え？」

「どうせ、水着姿いっぱい砂浜でも思い浮かべてたんでしょ？」
萌子の茶化すような言葉に、久志は情けないような呆れ顔になって、

「ちよつと待った。何でそういうことになっちゃうんだよ」

「知らないっ」

萌子はそう笑いながら舌を出すと、駐車場に向かって走り出した。

多々羅大橋を渡り大三島へ入ると、久志はまず萌子を大山祇神社へと誘った。

「凄〜い!」

境内を覆い尽す楠木を見上げて、萌子は思わずため息を漏らした。昼なお仄暗い境内は、まるでいにしえの空気がそのまま息づいているようだ。

「萌ちゃんは」

とても満足げな瞳で、久志がそう語り掛ける。

「きつと、感受性がとても強いんだろっね」

「え?」

「何を見ても、いつもそうやってすぐに目を輝かせる」

その言葉の響きは、嬉しいようでどこかこそばゆかった。萌子は恥ずかしそうに俯いた。

久志は自分のことをちゃんと見ていてくれる。それはどんな甘い囁きよりも、萌子の心を幸福で満たした。

神社にお参りした後、二人は近くにある大三島美術館に立ち寄った。それから港に降りて昼食をとり、市街地から少し離れたところにある『ところミュージアム』へ向かった。

野外彫刻と美術館巡りなんて、地味なデートかもしれない。街中を抜けて、またのどかな風景に戻ったフロントガラスの向こうを見つめながら、しかし萌子はとても充実された気持ちになっていた。好きな人と、同じ価値観を分かち合う。それはこの上なく幸せなことなのかもしれない。久志と出逢えた幸運。それは時が経つに連れて、萌子の中でより確かなものになっていく。

『ところミュージアム』は、ちよつと変わった現代彫刻美術館だった。

うらぶれた岬の外れに、その一風変わった建物は忽然と姿を現した。横から見ると、大きな毛虫が緩やかな斜面にへばりついているように見える。

「これも、展示品の一つなのかな？」

入り口の自動ドアのガラスに、ポップアート風の人の顔が描かれていた。左手が男性、右手が女性。自動ドアが開まると、二人が接吻しているように見える。

萌子と久志は思わず顔を見合わせた。自然と笑みが浮かんで来る。玉手箱を開ける前のような気分。不思議と、面白いことが待っているような気がした。

予感的中した。

入り口で出迎えてくれたポリネシアチック(?)な立体作品を手始めに、美術館の中では奇怪なアートが次々と二人の前に現われた。まだ真新しい館内は程よく清潔で、明るく開放的な感じがする。

「凄い。全部木で出来たキオスク、だって」

その一角に足を踏み入れると、途端に久志は子供のような歓声を上げた。

それは、精密に出来た駅の売店だった。全て木片で作り上げられたものだが、とにかく作業が細かい。手前で売られている新聞から吊るされて陳列されているティッシュ、雑誌からガムまでが精巧に再現されている。

「見て見て。こっちに公衆電話まであるよ」

裏に回り込んだ萌子も、興奮したように無邪気な声を上げた。

「凄いなあ。大変そうだけど、ちよつとやってみたいなあ」

おもちゃを覗き込む子供のように忙しなく顔を動かす久志を見て、萌子は可笑しくなった。

(先生だって、そうやってすぐに目を輝かせるじゃない)

「でも、さ」

萌子は少し考え込むようにそう呟いた。

「『キオスク』って何の名前？」

「え？」

不思議なことを聴いた、というように久志がきよとした目で萌子を見る。

「これ、駅の売店でしょ？」

「うん。だからキオスクって……そっか」

一人で納得したように、久志は突然笑い出した。

「なによ。一人で判ったような顔して」

萌子がそう拗ねると、久志はさも可笑しそうに、

「ごめんごめん。関東じゃ、駅の売店のことを『キオスク』って言うんだよ」

「……へえ」

「今度、東京に来たら見せてあげるよ」

「え？」

萌子はドキツとした顔で、久志を振り返った。

「でもなあ、東京でも最近はキオスクが減ってるからなあ」

久志は、自分の吐いた台詞の意味に全く気付いていなかった。さ
んざめく萌子の心に勘付く素振りも見せず、そう苦笑してみせる。

萌子は、自分だけドギマギしているのが何だか馬鹿らしくなりながら、それでも細動する胸の震えを止められずにいた。

館内最後の展示物は、建物の一番奥で唐突に開けたテラスからの眺望だった。

「ふわあ」

西日を受けて、海がキラキラと揺らめいていた。斜面に突き出すように建てられたそのテラスからは、瀬戸内海の多島美が望める。あふれんばかりの陽の光を浴びたそれは、冬とは思えぬ柔らかな光景だった。

「きれい……」

二人はしばらく、呑まれたように言葉を失くして、ただ佇んでいた。

「こういうものを見ると……」

「え？」

「やっぱり、絵を描きなくなるね」

久志の言葉に、萌子は深く頷いた。

知らず知らずの内に、その風景を切り取って頭の中に描いている自分がいた。どんなに懂れても、自分が感じたものを表現する手段はモニュメントでも文章でもなくやはり絵なのだと、こういう瞬間に強く思う。

久志も、この景色を見て同じ思いを抱いたのだろうか。

（それならば、嬉しい……）

「もつと……」

「え？」

振り向いた萌子に、微笑みかけるようなまなざしを向けて、久志はこう言った。

「もつと描きなくなるようなところに、連れて行ってあげる」

そうして、久志がこの日最後に萌子を誘ったのは、亀老山展望公園だった。

西瀬戸自動車道に戻り、二人を乗せた車は大三島橋を通って伯方島へ渡った。島をかすめるように通り過ぎると、すぐに伯方橋が見えて来る。

伯方橋を渡る頃には、もう夕暮れが辺りに迫りかけていた。少し風が出て来たようだ。右手からオレンジ色の夕日を浴びて、目の前の光景が左右に揺れた。

亀老山展望公園は、大島の南端に位置する標高307メートルの亀老山山頂にある。大島は芸予諸島の南端に位置し、そこを越えればもう四国である。

枯野を渡る風の音が、今にも聞こえて来そうだった。しまなみ街道を離れると、辺りは俄かに寂れた景色に変わった。雑木林に囲まれた、曲がりくねった山道を車は進んでいく。

さびしい。萌子は直感的にそう思った。美しく、幻想的で、それは断絶的な光景だった。

いつしか二人は黙り込んでいた。カーブが続くその悪路のせいか、久志はいつになく真剣な顔つきでよそ見すらしやうとしない。木立の合間から射す銚色の夕日が、時折久志の頬を優しく染めた。

「さあ、着いた」

山道を15分ほど走ると、展望台下の駐車場に着いた。久志に促されるように車を降りた萌子は、不思議そうな面持ちで目の前の『建物』に目をやった。

「これが、展望台？」

「そう」

それは、萌子が思い描いていた櫓のような建物ではなかった。こんもりとした小山の真ん中に坑道のような裂け目が入っていて、その奥に階段が続いているのが見える。萌子はふと、昔どこかで見た古墳の入り口を思い出した。

「ここは、1回展望台を建ててから、また周囲に土を盛って木を植えてあるんだ。周囲の景色に溶け込むように、ね」

「へえ。そうなんだ」

感心したようにそう頷いてから、萌子はクスツと小さな笑いを漏らした。

「なに？」

「ううん。よく調べてあるなあ、って思ってた」

「？」

「何か、あたしが観光客で先生が地元の人みたい」

きつとこの日のために、ガイドブックをひっくり返したりしたのだろう。久志のそんな姿を思い浮かべると、萌子は可笑しくもありまた胸が熱くもなった。

坑道の中は狭く、圧迫感さえ覚えた。見上げると、藍色に変わり始めた空が見える。

夜が近い。二人はせかされるように足を速めた。それはあたかも、宝の在り処へ急ぐ冒険家のような。

木造のデッキに上がった途端、猛烈な北風が襲い掛かって来て、

萌子は思わず乱れ髪を手で抑えた。

「こつちだ」

回廊の先に見えるもう一つのデッキを指差して、久志が風音に負けないよう語気を強めた。

きつとその時、二人は予感していた。この先に見える光景を。

「……凄い」

展望台の端に立って、萌子はそう一言呟いた。それ以外の感情は、全て北風に飲み込まれてしまった。

来島海峡の向こうに、日は沈もうとしていた。麓から伸びた1本の線が島々を結び、四国へと続いている。

切ない夕暮れだった。夕日が海に幾重にもグラデーションを描き、島影は沈黙のままシルエットに変わる。そして海峡の向こうで、今治の街が淡く明かりを灯し始める。

「こんなところまで来たの、初めて」

生まれて初めて、萌子は四国の大地をこんなに間近で見た。

「ずっと、遠いところだと思っていたのに……」

けれどもそこには1本の橋があり、彼女の足元からその大地へと続いていた。ここから見る景色は、海も空も島々も、全てがどこまでも続いているように見えた。

「今日は、ここまでだ」

「……うん」

「でも……」

「え？」

萌子の隣に立ち、同じように来島大橋を見つめながら、久志はそつと萌子の手を握った。

その刹那、萌子は身じろぐことすら出来なかった。一拍の間を置いて、心臓が胸を突き破らんばかりに暴れ始める。

久志の掌は、柔らかく優しくかった。その人柄を示すように、穏やかなぬくもりがそつと萌子の掌を包み込んだ。

（どうしよう）

狂おしいほどの想いが、体中を駆け巡っていた。こんなにも久志が好きなんだと、掌から伝わるそのぬくもりに今更ながら気付かされる。

離したくない。

生まれて初めて知る強欲な感情に、萌子は戸惑いを隠せずにいた。

「いつか……今度来る時は、あの海峡を渡ろう」

掌を弱く握り締めたまま、久志は視線を合わさずに固い口調でそう呟く。

「うん……」

萌子は小さくそう頷いて、手の震えを押し隠すように久志の手を強く握り返した。

第七章 2枚の絵(6)

山小屋のような分厚いきつね色のドアを押すと、千絵ご自慢のスイス製のカウ・ベルが、カランカランと小気味良い音を立てた。

「いらつしやい」

カウンターの向こうから、千絵の朗らかな声が聞こえて来る。

いつもと変わらぬ光景のはずだった。ただ一つ、萌子が今日ここに『呼び出されて』来たのだということを除けば。

千絵が萌子に電話をかけて来たのは、昨夜のことだった。千絵から電話がかかって来るなんて、記憶にないくらい久しぶりのことだった。いや、もしかしたら彼女から萌子宛ての電話なんて、生まれて初めてのことかもしれない。

「明日、ヒマ？」

「うん」

「帰り、うちの店に寄れないかな？」

話したいことがある。千絵の口から出たその言葉に、萌子は全く心当たりがなかった。

「一人で来てね」

そんな隠密めいた台詞と千絵のトーンの低さが、萌子は小骨が喉に引っかかったみたいに関心になって仕方がなかった。

『一人で』と言われたら、薫を誘うことも出来ない。放課後、萌子は美術室にちよつとだけ顔を出すと、久志に声を掛けることもせず、にそさくさと福女を後にして来た。

「ごめんね、呼び出したりして」

そう謝る千絵の様子は、電話口の声と違って普段と変わりがないように見えた。

(強いて言えば、素直に謝るところがヘンかしら)

心の中で面白くもない冗談を思い浮かべながら、萌子はカウンターの左から3番目の席に腰を下ろした。それから、周囲を見渡すよ

うに顔を上げる。

壁にはまだ、モナの肖像画が掛かっていた。

（やっぱり、気に入らなかったのかしら）

久志がここを訪れてから、もう10日ほど経っていた。あの時素描した絵を、彼は今美術部の時間帯にせせと仕上げている。

相変わらず巧みな久志の指遣いによって描き出される、彼の作品にしてはいささか凡庸な風景画を、美術部員たちは首を傾げて見守っていた。

「これ、どこの店なんですか？」

そんな 特に秋月はづきあたりの詰問にも、久志は笑って答えようとはしなかった。

バレそうでバレない。そんなぎりぎりの綱渡りを、彼は楽しんでいるんじゃないだろうか。最近の久志の言動を見ると、時々そんな風に思うことがある。

その絵を依頼した代わりに、千絵が飾ることを約束したはずの絵は、まだ店内のどこにも飾られていなかった。

確かに、久志の絵のように一目見て『プロだ』と感じさせるような出来ではなかったけれど、久志の父の絵も店の中に飾るのに見劣りするようなものではなかったと思う。その迫力ある筆遣いに、萌子は何かしらの感銘を受けたくらいだ。

その絵を見た刹那の、千絵の表情がどうしても思い起こされる。

絵を見つめたまま、長いあいだ黙り込んでしまった彼女の、その脳裏に過ぎったものは何だったのだろうか。

「立花先生は、どうしてる？」

一人で来いと言ったくせに、千絵はそんなことを尋ねて来る。

「どうしてるって……今日は美術室に置き去りにして来た」

姪っ子のそんな気が置けない台詞に、千絵は思わず苦笑を浮かべた。

「いつも一緒に帰ってるの？」

「ううん。今は止めてるの。誰が見てるか、判らないし」

「そう……」

微妙な間があった。千絵は少し逡巡した後で、

「萌ちゃんは、あの人と付き合っているの？」

あまりにストレートな問い掛けに、萌子は声も出せずに目を瞬いた。

「もう、いたしちゃった？」

「そんな……」

千絵の明け透けな台詞に、萌子は首筋まで一気に赤くなった。彼女のそんなシャイな反応の真贋を見極めようとするかのように、千絵の目つきが鋭くなる。

「そんなんじゃない……」

（何をいきなり）

と思いながら、萌子はポツリとそう答えて恥らうように俯いた。

「ただ、一緒に遊びに行ったりしてるだけ……」

「そっか」

安堵とは違う、けどそれに良く似た大きなため息を、千絵は一つ吐いた。

「あんたはネンネだもんね」

諫めているのか、それともけし掛けているのか。とにかく、こんな風に久志のことで千絵から問い詰められるとは、夢にも思わなかった。萌子は不安に揺らぐ瞳で千絵を見つめた。

「もし間に合うのなら、付き合うの止めなさい。あの人は」

「そんな！」

いきなり心臓をわしづかみにされたみたいに、萌子は胸が詰まった。顔面から血の気が引いて、見る見る青ざめていく。

まさか千絵からそんな忠告を受けるとは、思ってもみなかった。きつとどこかで、

（千絵は反対しないはず）

という甘い読みがあったのだ。千絵ならば、この理不尽な後ろめたさを判ってくれるはずだ、と。

久志が萌子の教師でなければ、ここまで来ることはなかっただろう。あの雨の日、三田村不動産に案内して、そこで二人の描く線は離れ離れになってしまったかもしれない。

ただ好きというだけじゃない、どこか運命めいたこの巡り会いを、せめて千絵にだけはありきたりな常識で判断して欲しくなかった。

実際、後ろめたさは感じている。だから余計に反発したくなるのだ。

「そんなに……」

「え？」

「そんなに悪いことしてるの？ 私たち……」

千絵はしばらくのあいだ、萌子の言う『悪いこと』の意味をじつと考えていた。その意味に気付いてからも、彼女はじつと萌子の顔を見つめ続けていた。優しい、慈愛に満ちたまなざしで。

「それは、あなたたちが『教師と生徒』だつてこと？」

「……うん」

「そんなことで、あたしが責める訳ないじゃない」

「……え？」

意外な台詞だった。萌子は濡らしかけた瞳をキョトンとさせて、

千絵の顔を見やった。

「あなた、お父さんの顔を覚えている？」

「……お父さんの？」

萌子の呟きに、千絵が小さく頷く。

矢継ぎ早な場面転換を求められて、萌子は意識が上手くついて行かなかった。千絵にそう問われた時、萌子の中にはまだ久志に対する熱情が燦つていて、千絵が言う『お父さん』が一体誰のことなのか、一瞬思い付かなかった。

それくらい、今日の千絵の発想は情緒不安定だった。

「……お父さんって、あたしの？」

「そう。あまりに小さくて、覚えていない？」

「……ううん」

萌子はちよつと自信無げに、それでも確かに首を横に振った。

いつでも最初に思い出すのは、あの夕暮れの踏切だった。大きくなるに連れて記憶の底に沈殿しそうになっていた、でも最近またよく揺り起こされる思い出。

他に父の思い出がない訳ではない。おぼろげだけれど、その面影も覚えている。けれどもそれ以外の、例えば父が何を生業にしていたとか、そういった細かいことは一切覚えていない。

と言うより、知らないのだ。そんなことを教わるには、萌子はまだ幼過ぎた。

でも、その名前と生年月日だけは知っている。

小学生の頃に引き出しから偶然見つけた、とつくに期限の切れた健康保険証。澤崎の姓が付いた、萌子の知らない男性の名前がそこにはあった。

それにしても、千絵は何故そんなことを言い出したのだろうか。その真意が掴めぬまま、萌子はカウンターの向こうに立つ千絵の顔をじっと見据えた。

「姉さん あなたのお母さんとお父さんがどこで出会ったのか、訊いたことある？」

萌子は思いつきり頭を振った。

父がいなくなったあの夜以来、萌子は母の前で父のことを1度も口に出したことがなかった。それ以前にも、父や母にそんなことを尋ねた記憶はない。そんなことを教わるのにも、萌子はまだ幼過ぎた。

「そっか」

千絵は納得したように小さく頷いて、

「あんたまだ、小さかったもんね。えっと……」

「4歳の時よ」

「え？」

「お父さんが出てっちゃったの、あたしが4歳の時」
「そっか」

千絵は感慨深げな表情で、

「結婚して2年後にあんたが生まれて、その前に4年この街で過ごしてるから……」

そう指折り数えてから、少し意外そうな顔をして、

「あの人、この街に10年もいたんだ」

それはまるで、目撃した有名人のプライベートをしたり顔で話すような口調だった。あるいは志賀直哉や林芙美子といった、尾道を訪れたことのある著名人を自分の親戚のみたく語るような。

「あんな、風のように去って行ってしまった人なのにな」

ノスタルジー。

千絵の顔に一瞬現われた優しげな表情に、萌子はふとここで久志の父の絵の話をした時のことを思い出した。

「あなた、お父さんのこと、知りたい？」

千絵は、そう言つて萌子の瞳を覗き込んだ。

この13年間、ホントは堪らなく聞きたかったその台詞を聞いて、萌子は思わず体を強張らせる。

「……千絵ちゃんは、知ってるの？」

萌子はそう絞り出すように声を漏らした。千絵は柔らかに微笑んで小さく頷きながら、

「彼がこの街にいた、10年間のことならね」

「？」

「あなたのお父さんはね」

そして彼女は、萌子が想像も出来なかった言葉を口にした。

「この街に来た時、記憶を失くしていたの」

柔らかな陽が射す。

それはまるで、ヴァージン・ロードのように光り輝いて見えた。

今確かに開けた、新しい門出を祝福するように。

昭和46年3月。

玲子は大阪の街を歩いていた。風はまだ冷たく、沿道の桜もまだ

蓄を付ける気配すらない。それでも射す陽は確実に暖かさを感じさせ、何より彼女の弾む気持ちが間違いない春を告げていた。

今日は大阪美術大学美術部の合格発表の日だった。

玲子はすでに地元の短大に合格していたけれど、それはただ『この先も人生が続く』というのと同義語で、彼女にとってこの日が本当の合否を決める日だった。

（受かった……）

掲示板に自分の番号を見た時の気持ちは、嬉しいというよりもホツとした気分だった。あれだけ両親の反対を押し切って受験したのだ。意地もあつたし、気持ちの上で崖っぷちに立っていたのも事実だった。

『お金がないから』

そのたった一言で玲子は、中学校はもちろん高校も地元の公立校を選ばせられた。

それもこれも、長女ゆえの不自由さである。8歳離れた妹は今、中学受験専門の学習塾に通っている。

いつでも我慢するのは長女の役目。そんな玲子にとって、大阪の美大を受けることは人生初の『わがまま』だったのだ。猛反対の末に両親が出した条件は、

『浪人は許さない』

というものだった。

絵を描き続けたい。そう思い始めたのはいつのことだろうか。大人しく優等生だった玲子が、常に胸の中にしまい続けていた思い。確かに絵が上手で、中学・高校と美術部に在籍し幾度も賞を取ったことはあつたけれど、引っ込み思案な彼女がそんな大それた夢を抱き続けていたことなんて、本人が口にするまで周囲はちつとも気付かなかつた。

この受験に失敗すれば。夢見た未来は、そこで敢えなく潰えてしまう。

希望を切り開くか、それともただの人生を粛々と過ごすか。少し

大げさかもしれないけれど、玲子はこの受験に一生を賭けたような気分で挑んでいたのだった。

だからこの時、彼女が少々浮かれ気味だったことは否めない。

大阪の街は、驚くくらい人も車も往来が激しかった。喧騒が、のんびり屋の玲子をあつという間に飲み込んでいく。ずっと尾道で生まれ育った玲子にとつて、そのスピードの速さは戸惑いを覚えさせるのに十分なものだった。

この街で、これから4年間を過ごすのだ。たった一人で。親元から離れることはもちろん、生まれ故郷を離れることも玲子には初めての経験になる。

見知らぬものへの不安と高揚感が悪戯に気持ちを煽って、玲子は知らず知らずの内に浮き足立っていた。

（それにしても……）

とにかく人の歩みが忙しない。雑踏の流れについていこうとして、玲子はいよいよ早足になった。

信号が変わりかけても、横断歩道を渡る人波は絶えることがなかった。つられて玲子が走り出そうとした瞬間、信号が赤に変わった。

（あつ……）

歩道の端で、玲子はたたらを踏むように立ち止まった。バランスを崩して、手にしたビニール袋が道路の方にすっ飛んでいく。

「あつ！」

そう声を上げたのは玲子ではなかった。

「パステルブラシ……」

そのビニール袋の中身は、さっき寄り道した画材店で購入したパステルブラシだった。以前からどうしても欲しいと思っていた、持ち手が竹製の珍しいものだ。多少なりともこの世界に携わっていなければ答えられないその台詞を口にして、玲子の隣にいたその男性はチラッと視線を投げて寄越した。

澄んだ瞳だった。玲子より少し年上　20代中頃だろうか。

笑った、ように見えた。彼は玲子に向かって曖昧に表情を崩して

から、横断歩道へ足を踏み出した。

そこからはスローモーションのようだった。ビニール袋を拾い上げようと腰を屈める彼の姿。右折しようと、少し危険なスピードで横断歩道に突っ込んで来る車。

後は何も覚えていない。急ブレーキの音だけが玲子の耳に取り残された。

「記憶喪失って、不思議なものでね」

手慰みに食器を片付けながら千絵は話し続ける。

「全てを忘れてしまう訳じゃないのよ。もちろん、そういう場合もあるけれどね。お医者さんが言うには、記憶をしまって置く引き出しが何らかの衝撃で開かなくなる……」

「それが、事故のせい？」

「そう。彼の場合、外傷は右足の骨折だけだったんだけど、目を覚ました時に自分の下の名前と生年月日しか思い出せなかったの」

「じゃあ、それ以外の引き出しが……」

「開かなくなっちゃったって訳。彼は免許証とか定期とか、身元が判るものを何も持っていないくてね。鞆には着替えが入っていたし、話す言葉も標準語で。そうそう、自分の身元が判らなくなっちゃっても、不思議と物の名前とかは覚えてるのね。とにかく地元の人間じゃない、ということだけは判ったんだけど……」

千絵は、萌子の目の前に置かれたカップに2杯目のコーヒーを注いだ。いつしか、また店の中は二人きりになっていた。

初めて聞く話に、萌子は少し興奮していた。おぼろげだった父の輪郭が、記憶の中で次第とはっきりとして来るような気さえする。

「姉さんは凄く責任を感じててね。父さん あんたのおじいちゃんに頼み込んで彼の入院費を出してもらって。社会人になったら少しずつ返すって約束でね。それから早々に大阪で一人暮らしを始め、毎日のように病院に通い詰めて」

そして千絵は戯けたように小さく笑って、

「陳腐なお話だけだね。そうやって二人は結ばれちゃったの。ウチの親は大らかって言うか、いい加減って言うか、退院しても記憶の戻らない彼を自分がやっていた会社に無理矢理雇い入れたの。記憶を失くした人はね、特例で新たに戸籍を作ること出来るの。それで、澤崎姓で戸籍と住民票を作ってね。そうして、彼は尾道で暮らし始めたの」

「ママとは？」

「大阪と尾道で遠距離恋愛。4年間、よく続いたわよね。毎週のように大阪から鈍行で帰って来てたのよ、あなたのママは」

そこで千絵は少し間を置いた。萌子のカップに注いだコーヒーの残りを新しいカップに注ぎ、自分の目の前に置く。

「出会いは偶然だったけど、二人には必然的に惹かれあうものがあつたのよね」

「？」

「二人ともね、絵を描くのが好きだったの」

「絵？」

心が、不意に乱れた。

絵を描くのが好きな父親。

そんな話、無論初めて聞いた。

「この街にいた10年間、彼はずっと絵を描き続けていたわ。真面目で誠実で仕事熱心で、姉さんのこととても大切にしていたけれど、きつとそれ以外の時間はひたすら絵を描き続けてたんじゃないかってくらい、たくさんの絵を」

楽しい思い出を懐古するように、千絵は一瞬目を細めて、

「休みの日に、二人でスケッチに出かける姿を良く見かけたわ。

絵に向き合っているとね、二人ともホント幸せそうだった」

ずっと、萌子の心に暖かい何かが忍び込んで来る。

幸せだったんだ。見るのが叶わなかった父と母の姿を、萌子はそっと思ひ浮かべてみた。

「わたしはてつきり、記憶喪失なんて凄く辛い思いをするものだ
と思ってたけど、あなたのお父さんはね、何か憑き物が落ちたみた
いにさっぱりしていて」

そうして。そう言いさして、千絵は萌子を静かに見つめた。

「姉さんは大学を卒業してすぐに彼と暮らし始めて。次の年にあ
なたを身籠って。あなたが生まれて4歳まで……」

千絵は、懐かしさを噛み締めるような穏やかな表情で話し続けた。
「姉さんは、確かに幸せそうだった。相手の素性が判らないとか
そういうことはあまり関係なかったみたい。今目の前にいるその人
を信じて、そう信じた自分を信じて。彼も、その信頼に違わぬ優し
く誠実な人だった。姉さんを、確かに愛してた。10年のあいだ、
姉さんはもちろんあたしたち家族もとても幸福だったの。二人が信
じ合っていることが、良く判っていたから」

「じゃあ、なんでお父さんは」

その一言を聞いた途端、千絵の顔に哀しげな陰りが射した。

（知っているんだ、千絵ちゃんはその訳を）

息切れを起こしそうな激しい動悸が、不意に萌子の胸を襲った。

あの4歳の夜から、ずっと封印し続けていた疑問。あれから、1度
も口にする事のなかった思い。

「……思い出したんだと、思う」

「え？」

「自分の記憶を。自分の帰るべき場所を」

夢と現実。

萌子は、幼い頃に抱いた疑問をふと思い出した。眠っているあい
だに見る夢。その夢の中に出て来た風景や動物や人たちは、こうや
って起きているあいだはどこに隠れてしまっているのだろう。

「彼がいなくなる半年ぐらい前から、少し様子がおかしかったの。
後から思えば、だけれど。急に物思いに耽ったり、時々苦しい表
情を見せたり」

現実を思い出してしまったら、夢の中の登場人物は全て嘘になっ

てしまうのだろうか。

「わたしはね、いつか醒める夢なんじゃないかって、ずっと思ってたの」

「え？」

「二人が幸せそうに見えるたびにね、何故か違和感を覚えたの。本当はここにいるはずのない人。そう、思っていたからかもしれない。こうしているあいだにも砂時計の砂は減り続けていて、いつか全ての砂が下に落ちてしまうように夢から醒める日が来るのかもしれない、って」

千絵は大きなため息を吐いた。それから、萌子の瞳をそつと見返す。

「彼はやっぱり、夢から醒めてしまったのね」

「え？」

萌子が首を傾げると、千絵はそれには答えずにカウンターの下に隠していた小さなキャンバスを取り出した。

「これね、彼があたしのことを描いてくれた肖像画なの」

キャンバスの中で、20歳の千絵が笑っていた。肖像画には不釣り合いな、彼女らしい快活な笑顔で。

「ここを見て」

千絵はそう言って、キャンバスの右下隅を指差した。

「……サイン？」

それは、少し崩した感じで書かれた署名だった。素人でも、こういうことをする画家は多い。萌子は自分の作品に、ひらがなの『も』をデザイン化したような署名を使っている。

「久しい、っていう字？」

萌子が眉間にしわを寄せながらそう訊ねると、千絵は小さく頷いてからそのキャンバスを持ち上げて、

「こっちに来て」

と萌子をカウンターの裏に呼び寄せた。

「千絵ちゃん、これって……」

カウンターの奥に置いてあった平たい包みを千絵が開けると、そこには久志から預かったあの油絵があった。

「これとこれ、よく見比べてみて」

千絵は二つのキャンバスを重ねるようにして置くと、それぞれの右下隅にあるサインが比較出来るように並べる。

ズキン、と胸が痛んだ。

「同じ署名なのよ、これ」

「……」

「あたし、この絵が描かれるのを見たことがあるの。あなたのお父さんの手で」

（何を……）

「知り合いの画商に見てもらったわ。この絵、間違いなく同じ人の手によるものだって」

千絵は、何を言いたいのだろう。

意識がぼんやりと遠ざかっていく。萌子の脳が、これ以上思考し続けることを拒否しようとしている。

それなのに、千絵の声は何故かはつきりと萌子の頭の中に響いた。まるで時を刻む鐘のように。

「萌ちゃん。これはね、どちらもあなたのお父さんが描いたものなのよ」

土堂小学校の門を階段の上に仰ぎ見ながら、その脇の小路を入って行くと、一見突き当りに見える曲がり角のところに澤崎家はある。月明かりに照らし出された我が家を、萌子はしばらくのあいだ眺めていた。

萌子の家は青いトタンの三角屋根が可愛い、洒落た洋館だった。路地からはやや奥まっついてその造りは判り辛い、坂の下から見ると山の中腹にへばりつくように建っていて、とても目立つ。子供の頃から、萌子の家を訪れる友だちはみな彼女を羨ましがっ

た。

『可愛いお家に住んでるね』
と。

彼女の生家は、外観だけでなく内装もとても凝っていて、こじんまりとしたまるでお伽話に出て来そうな家だった。

ここは元々死んだ祖父が所有していた土地で、古い民家が建っていたのだという。萌子の父と母が一緒になった時に、それを壊して祖父が二人のためにこの家を建てた……。

そんなことも、萌子は今日初めて知った。

萌子は良く覚えていないけれど、この可愛い家の中に確かに記憶されているのだ。父と母と、そして萌子の三人が暮らした4年間が。

（こんなところで……）

もう、忘れかけていた想いだった。このまま忘れ去ってしまったても、萌子が生きていく上で何一つ支障はなかっただろう疑問。それでも、萌子の心の片隅で大きくなることもなくまた消え去ってしまうこともなく、当たり前のような感情としていつも居座り続けた想い。

夕暮れの踏切で消えた父の姿。ずっと知りたいたと思っていた、その背中の方。その欠片を今、萌子は掴みかけていた。

こんな哀しい事実と引き換えに。

本能的に知ることを拒絶しかけた萌子の心の中に、情け容赦なく踏み込んで来た千絵のその台詞を、萌子はもう一度思い返した。

『あなたと立花先生は、半分血を分けた兄妹なのよ』

第八章 風花（１）

「あちっ」

火にかけた鍋に指先が触れて、萌子は思わず取っ手から手を放してしまった。ガチャン、と派手な音を立ててコンロの上に転がった鍋から、せつかく泡立てたクリームが遠慮なくこぼれる。

「……もっっ」

発作的にシンクに向かって菜箸を投げつけた。カーン、と甲高い金属音が予想以上に大きくキッチンに響き渡る。萌子は思わず身を竦めて、それから誰もいないと判っているリビングの方へ目をやった。

母は留守だった。今夜は、広島在住の画家が集まる会合に出掛けている。一人でいると、こんなこじんまりした家の中でもずいぶん広く感じられた。

ふと手作りチョコを試してみようと思い立ったのも、無性にいらんとしたそんな家の中の雰囲気のせいかもしれないなかつた。

「やめちゃおっかなあ……」

本番まで、まだ１０日もある。手作りチョコに挑むのは萌子自身初めての経験だったけれど、元々料理やお菓子作りが得意で手先が器用な彼女にとって、それは造作ない作業のはずだった。

（『お兄ちゃん』に手作りチョコなんて……）

兄。

それと同類の言葉を思い浮かべるたびに、萌子の胸をぬめった何かが撫で付けたような違和感が通り過ぎる。その感触に嫌悪感を覚えながらも、萌子は自分を痛めつけるように、それらの言葉を思い浮かべるのがいつの間にか癖になっていた。

「やめやめ」

萌子は投げやりな調子でそう呟くと、このままにしておいたら間違いない母に怒られると思いながら、キッチンをほっぽりだしてリ

ピングに戻った。

イラついている。それは萌子自身良く判っていた。何をやっても中途半端で、ちっとも集中出来ない。

（お酒でも飲みたい気分……）

アルコールを口にしたことなど、片手で数えられるくらいしかない。そんな気分を判りもしないくせに、大げさにため息など吐きながらぼんやりと周囲を見回していた萌子の目に、サイドボードの中で琥珀色に輝く瓶が映った。

それは、母が愛飲しているウイスキーだった。決して酒飲みでない母が、『宿題』に煮詰まった時に口にするものだ。

スリルだとか、イケナイことをしているドキドキ感とかは、全然湧いて来なかった。本当に酒に酔いたがっているように、萌子は黙々と瓶を取り出して琥珀色の液体をグラスに注いだ。

「ワン・フィンガー、だっけ？……」

ウイスキーの嗜み方なんて、もちろん知るはずがない。ロック、水割り……。さまざまな言葉が萌子の頭の中をよぎったけれど、結局ほとんど何の考えもなしに彼女はそつとウイスキーに口をつけた。

「ゲホッ……」

口の中に苦い感触が広がり、途端に萌子は激しくむせ返った。

「……何これ」

つくづくついてない。萌子はそう思った。今夜は、何をやっても裏目に出るような気がする。

（今夜だけ、じゃないか）

全てが上手くいっている気がした時もあつたのだ。今となれば、その頃の自分が滑稽な道化者に思えて来るけれど。

（『お兄ちゃん』を、好きになっちゃうなんて）

もう一口。少し落ち着きを取り戻した萌子は、好奇心に煽られるように再びグラスに口をつけた。今度はむせることなく、胸元を熱い感触が通り抜けていく。ほどなくして、ふわっと浮き上がるような感覚が萌子の体を包んだ。

あつという間に酔っ払った。ふわふわと覚束ない頭の中から、この1週間どこにも吐き出せなかった思いが次々と這い出て来る。

（どうして気付かなかったのだろう）

そんな罪悪感に似た気持ちは、真実を知った瞬間から萌子の胸にずつと付き纏っていた。そんなことはどだい無理な話だと判つていても、久志が兄だということに気付けなかった自分を、萌子は酷く悔やんでいた。

（それをあんな風に……）

自分が抱いた想い。その欠片を思い返すだけで、羞恥心が全身を貫き通す。取り返しをつかないことをした。その思いだけが、ぐるぐると頭の中を回り続ける。

出来ることなら、消し去ってしまいたいくらいだった。

（もしも……）

もし初めから兄妹だと判っていたら、こんな想いは生まれて来なかったのだろうか。

答えなど、出るはずがなかった。そう判つていても、萌子はそう思わずにはいられなかった。何度もそう思つて、何度も胸を痛めた。

（もしも……）

不毛な思考を繰り返すたびに、萌子はあの掌の温もりを思い出す。そして、考えるのだ。初めから兄妹だと判っていたら、久志はどんな気持ちを抱いたのだろう、と。

それも、出るはずのない答えだった。

『兄』を好きになつてしまったことを、萌子は深く後悔していた。けれども久志を好きになったことは、どうしても悔やむことが出来なかった。

（こんなので、やっぱりイケナイことなのかな）

消し去つてしまいたいほどの恥ずかしさが全身を駆け巡る。それでも捨てきれぬ想いの深さが、彼女自身恨めしかった。

深くなる罪の意識。断ち切れぬ想いを意識すればするほど、萌子はどんどん自己嫌悪に陥っていく。この1週間、そんな苦しさを萌

子はどこにも吐き出せずにいた。

母にも、叔母にも、親友にも。そして一番大切な人にも。

（出逢わなければ……）

数日前、別れ際に吐いた自らの台詞を萌子は思い起こしていた。

その台詞を聴いた刹那、微かに顔を歪めた久志の横顔も。

その顔を見た途端、萌子はそれ以上何も言うことが出来なくなっていました。

（先生は……）

久志は今、何を思っているのだろう。こんな風にまた質することが出来なくなってしまった彼の心を想いながら、萌子はだんだんと意識が遠くなっていく。

（ダメだ。このままじゃ怒られちゃう）

母が帰る前に何とかしなくちゃ。そう思いながらだんだんと眠りの底に落ちていく。意識が現実から夢へと入れ替わる寸前、彼女は数日前に久志が見せた仕草を思い出していた。

風が伝えたのだろうか。

萌子は、二の丸広場の入り口に姿を現した久志の存在に気付いて、顔を上げた。

途端に、胸の中にさざ波が立つように、ざわざわとした不安が駆け抜ける。

（どうして……）

どうしてこんなに揺れてしまうのだろう。彼の存在を意識しただけで、3日もかかった哀しい決意も砂上の楼閣のように呆気なく突き崩されてしまう。後に残るのは、言葉では表せない切ない感情だけだった。

（もう、ダメなのに……）

いけない、と思うその傍らで、もう少しだけ、そう懇願する哀れな自分がいる。

「待った？」

相変わらず、柔和な声音だった。いつかと同じように、眩い光の中でだんだんと近付いて来る久志の顔を正視出来なくて、萌子は不自然に視線を宙に這わせたまま久志の方へ顔を向けた。

「うつん……」

もつと上手く話したいのに、萌子の口からは必要最低限の台詞しか出て来なかった。余計な口を開けば、禁じた想いがとめどなくあふれ出てしまいそうで、萌子はつい無口になった。

二人の足元を、からからと枯葉が転がっていく。

今日は朝から冷たい風が吹き続けていた。時折、中国山地から干切れ飛んで来た雪雲が頭上を通り過ぎて、一瞬日陰を置いていく。

春など、もう永遠に訪れない気がした。

萌子のぎこちない態度が伝播したのか、久志は白けた顔で黙って萌子の横に腰を下ろした。

クリスマスの日よりも、二の丸広場は更に閑散としていた。風の音だけを聞きながら、二人はしばらく黙りこんだ。

「大丈夫か？」

「え？」

「何か、悩みごと？」

「……」

「萌ちゃん、暗い顔してるよ」

その優しさに心が揺れた。急に素っ気なくなっただ萌子の態度を、久志はそんな風に解釈してくれるのだ。思わず胸が熱くなった。

『ひこうき雲』に呼ばれてから2日間、萌子は久志を避けていた。顔を合わせたのは木曜日に組まれている美術の授業の時だけで、彼女は放課後美術室に立ち寄りもしなかった。

また逃げてる。そう咎める声がどこからか聞こえて来そうだったが、結局萌子にはそれ以外になす術がなかった。

2日間、ずっと考えていた。久志が兄である、ということの意味を。

答えは何一つ浮かんで来なかった。気持ちの整理も全くつかなかった。けれども、1つだけ心に決めたことがあった。

久志を、兄と思わなきゃいけない。たとえそれが、半分しかない血の繋がりだとしても。

たとえどんなに、愛しい想いが募ったとしても。

怯えた子犬のような目で、萌子はそつと久志を見やった。慣れ親しんだ、鳶色の瞳と出会う。

萌子は、もしかしたらこうして目を合わせた瞬間に、自然と肉親の情が湧いて来るのではないかと密かに期待していたのだ。けれどもその刹那彼女の中に湧いて来た感情は、昨日までと何一つ変わらないものだった。

（あたしは、今でも……）

「何か悩んでるなら、話してごらんよ。どんなことでも聴くから、さ」

いつもと違わぬ優しい台詞。けれどもその瞬間、さつき胸を熱くさせた久志の思いやりが萌子は急に疎ましく思えて来た。

（どんなことでも……）

萌子が実の妹だと知ったら、それでも久志は同じ優しさを投げ掛けてくれるのだろうか。

「せんせい」

哀しげな瞳で、萌子は久志を見やった。

「ん？」

「お城に、登りません？」

天守閣の入り口の受付に、その初老の男性は更に覇気を失くして佇んでいた。久志は一言も発せず、二人分の入館料を差し出した。館内はあの時よりも更に閑散としていた。というより、人の気配が全くなかった。薄気味悪さの残る薄暗がりの中に、コツコツという二人の足音だけが機械的に響く。

（そっか）

やけに足音が響き渡るのは、二人のあいだに会話が全くないから

だった。

あの日二人は、ろくに展示物を見もせずに互いの語る言葉に夢中になっていた。1階から4階までなんて、それこそあつという間だった。

あの日と同じ暗がりの順路が、今日はやけに長く感じられた。

最上階にもやはり人影はなかった。四方が開け放たれた正方形の部屋はがらんとしていて、萌子の胸に虚しさを宿らせる。

「外、出てみようか」

久志の問い掛けに萌子は黙って頷くと、先立つように光が差し込む西向きの扉に歩み寄った。

「きやつ」

回廊を走り抜けるように、突然強烈な横風が吹きつけた。思わずよろめいた萌子の腕を久志の手ががしりと掴んだ。

「……ごめん」

「いや……」

鬱陶しいほどの厚い雲が、心なしか近付いたような気がする。上空を灰色のユニットが通るたびに、寒々とした日陰が天守を覆い尽くす。

風にたなびくように立ち、二人はしばらく地上にひれ伏す福山の街を見つめていた。

「何でも答えてくれる？」

「え？」

萌子の唐突な台詞に、久志は戸惑った表情を浮かべる。

「どんなことでも聴く、って言ってくれた……」

「あ、うん……」

そんな風になじったくせに、萌子は何を訊けばいいのか判らずについ黙り込んだ。情緒不安定な教え子の態度に、それでも久志は辛抱強く萌子が言葉を継ぐのを待った。

「先生は……」

「ん？」

「先生は、先生のお父さんが尾道でどうやって暮らしていたと思う？」

質問の意味が汲み取れなかったのか、それともただ答えあぐねただけなのか。久志は少しのあいだ黙って萌子の顔を凝視していた。そうやって切り出してしまっただけから、萌子はいまさらのように後悔で胸をドキドキさせていた。

「それを、知りたいと思ってたんだ」

「え？」

そう切り出した久志の顔つきは、いつもと違って凜々しい感じだった。こんな時なのに、萌子の胸は不意にときめいた。

「父さんはたまに尾道の話をしてくれたけど、それは気候や景色やそこに住む人の人情に関することばかりで、父さんがどんな風に暮らしていたのか全然教えてくれなかったんだ」

彼の心の強さに思いがけず気付かされたのは、次の瞬間だった。

さり気ない口調で、久志はこう続けた。

「どんな風に、誰と暮らしていたのか」

胸が、締めつけられた。知っているんだ、この人は。自分の父親に、もう一つの暮らしがあったことを。

「誰と、どこで暮らしていたのか。知っているのは、たぶん死んだ母さんだけなんだ」

「え？」

「父さんが戻って来た時ね、もちろん僕は小さかったから何も教えてもらえなかったんだけど、事故に遭ったことや、その時近くにいた人に世話になって尾道で暮らしていたこと以外、父さんは誰にも詳しいことを話さなかったらしいんだ。ところがね、父さんが再び行方不明になった時、母さんは『心当たりがある』って言って、一人で尾道を訪ねたんだ」

何かを想像しようとして、その思考の先にある嫌らしい感触に萌子は思わず怯んだ。

「……結局父さんの手がかりは何も掴めなかったらしいんだけど、

きつとその時母さんは父さんが尾道で暮らしていた場所を訪ねたんだと思う」

「……」

「母さんが死んだ時、少し後悔した。やっぱり父さんが暮らしていた場所を訊いておけばよかったって。母さんが生きていた頃は、どうしても訊けなかったんだ。何だか、後ろめたくて」

久志は、何か大切な気持ちを確かめるような顔つきになって、

「この街に来れば父さんの手がかりがつかめるなんて、そんなことは思ったことはないけどね。せめてこの街の風に触れれば、父さんの気持ちや最後まで隠し通した母さんの気持ちに少しは近付けるかなって」

戯けた口調と裏腹な、一途なまなざしだった。久志は目元を緩めることなく、

「でも、出来れば知りたいんだ。父さんの尾道での暮らしを」

そしてその一途な想いは、そのまま萌子に向けられた。思わぬ形で久志から追求の目を向けられた彼女は、ついうろたえた。

「あの……」

「何か知っているの？」

こんな時でも、口調は穏やかだった。それでも萌子は、その語気の裏側にある期待感に気付いてしまった。彼の心が躍るほどに、彼女の心は沈んでいく。

（全てを知っても、先生はこんな穏やかな気持ちでいられるのかしら）

わたしが、妹だと知っても。

「訊きたいことがあるんです」

「ん？」

「先生のお父さん、何ていう名前ですか？」

一瞬のためらいがあった。それから、その質問の意味をどう解釈したのか、久志は微かに表情を硬くした。

「立花 芳久。芳しいに、久しいって書く」

幾度も覚えたはずの絶望が、今更ながらに萌子の胸を襲う。

幼い頃に見た健康保険証。そこには『澤崎 芳久』という名前が記されていた。

「誕生日は？」

未練たらしい。そう思いながら萌子は質問を重ねる。久志は表情をいつそう硬くしながら、

「昭和29年3月3日」

名前や生年月日なんて、跡付けの証拠でしかない。何よりのあの2つのサインが、雄弁にことを物語っているのだから。それでもその事実、沈みゆく気持ちに拍車をかけた。

萌子の表情によほど危機感を覚えたのだろう。久志は強張った顔つきのまま、

「どうということだい？」

何と言えはいいのだろう。どうやって、説明すればよいのだろう。いつそのこと、

『わたしはあなたの妹なのっ』

そう叫んでしまいたい。

紡ぐ言葉に惑って、萌子はしばらく黙り込んだまま鳶色の瞳を見つめていた。

「先生が持つて来た絵」

「？」

「『ひこうき雲』に持つて来た先生のお父さんの絵、あるでしょ？」

「……ああ」

「あの絵をね、千絵ちゃん見たことがあるんだって」

「え！？」

驚きを隠さずに、久志は大きく目を見開いた。

「じゃあ……」

らしくない、興奮した面持ちで彼は萌子ににじり寄った。その瞳を、萌子はとても哀しげに見つめ返す。久志の顔に、また不安な表

情が宿った。

「何か、あるんだね」

「……あの絵に」

「ん？」

「絵の隅っこに、先生のお父さんがサインしてたの、知ってる？」

「ああ」

久志はそう小さく頷いて、

「父さんの残していった絵には、みんなあのサインが入っているよ」

「……私のお父さんもね、絵を描いていたんだって」

「君の、お父さん？」

久志の口調が、微妙にためらいを見せた。そのことに触れて良いのか、探るような気配が窺える。父がいないなんて、彼も全く同じ境遇だというのに。そうやって萌子の気持ちを気遣いごちなくなってしまう久志の優しさが、彼女の胸を切なくさせた。

「こないだ、千絵ちゃんに教えてもらったの。私のお父さんはこの街にいた10年間、ずっと絵を描き続けていたんだって」

また、灰色の雲が天守を覆い尽した。風が強まり、二人の距離を激しく揺さぶる。久志の瞳を見つめ続けながら、萌子は何かに取り憑かれたようにしゃべり続けた。

「私のお父さんは、この街に来た時記憶を失くしていたの」

「え……」

「大阪で事故に遭って、その時そばにいたお母さんを頼ってこの街に来たの。お母さんと二人で、尾道の風景を描き続けて」

突然、白い破片が萌子の目の前を横切り始めた。

風花だった。あつという間に、久志の姿が霞むくらい視界が白っぽくなる。

不思議な光景だった。遠くの間々は冬の日差しに輝いて見えるのに、手に届きそうなほどの距離にある久志の姿はどんどん薄らいでいく。

「……この街に10年いて、あたしが4歳の時にこの街を出て行ったの」

久志の存在が遠ざかる。結局、1度も好きだと言えないまま。

「千絵ちゃんね、私の父さんに描いてもらった肖像画があるの。その右隅にもね、サインがしてあるの。あの、『久しい』って字をモチーフにしたサインが」

「……それは」

「そう。同じ人が描いた絵なの。二つとも、先生のお父さんが」

「……」

「先生のお父さんはね、この街であたしのお母さんと暮らしていたの。お母さんと、私の三人で」

第八章 風花（2）

寒い日が続く。

見上げた、真つ青な空に心を奪われながら、萌子はそう思った。節分を過ぎても、春とは名のみばかりの日々が続いていた。このところ、雨どころか曇り空さえ訪れていない。山の向こうの雪便りをよそに、ここ数日この辺りは山陽地方独特の穏やかな冬晴れの日ばかりだった。

穏やか、と言ってもやはり朝の寒さは身に堪える。

「さむっ」

相変わらず寒がりな薫が首をすくめるのを横目で見て笑いながら、萌子は自分のマフラーを巻き直した。

「萌子さあ」

「ん？」

「ピンクのマフラー、するの止めたの？」

「え？」

慌てたように小さく傾げた萌子の首には、去年まで使っていたグレーのマフラーが巻きついている。

元々、萌子はマフラーを巻くのが苦手だった。首元のごわごわした感触が嫌で、毎年寒さが深くなるこの時期にしか着けることはなかった。

「萌子が珍しくずっとマフラー巻いてるからさ」

薫は横目で探るような目つきをして、

「あれ、立花ちゃんからのプレゼントでしょ？」

「え？」

いまさらそんな純情ぶつても。そう思う端から、萌子は顔が真っ赤になった。そんな親友の稚拙な反応を、薫は冷ややかに見つめて、

「あんたら、また何かあった？」

萌子がそのマフラーを外したのは、久志と福山城に登った次の日

からだった。

はじめをつけるとか、そんな大げさなつもりはなかった。ただこのマフラーは、彼を想う一人の女の子として受け取ったのだと、そう思いたかっただけだった。

『先生とあたしは、半分だけ血が繋がってるの』

張り詰めた空気にいたたまれなくなつて、萌子がそう追い討ちをかけるように言葉を継いでも、久志はしばらくのあいだ能面のように表情を崩さなかった。

あの時、あたしは何を期待していたんだろう。

彼の驚愕した顔？ それとも絶望した顔？ それとも……。

じれったいほどの時間をかけて、久志はやがてゆっくりと表情を動かした。

苦笑い、だった。

萌子は思わず目を疑った。驚き過ぎて気がふれたのかと思った。

『そつか』

久志が感情のこもらない、抑揚のない声でそう呟いた。久志が何を考えているのか判らなくて、萌子は黙ったまま久志を見つめた。

『寒くないかい？ そろそろ、いこつか』

そうして久志は、いつもの優しい台詞を取り戻した。それきり、彼の本心を質す機会を萌子は失ってしまった。

『……出逢わなければ、良かったのかも』

真っ直ぐな言葉を投げ掛ける勇気がなくて、でもモヤモヤした気持ちに耐えられなくて、萌子はいあまのじゃくな一言を口にしてしまった。その刹那、苦しそうに歪めたその顔つきだけが、萌子が知り得た彼の本心だった。

あれから1週間。案外何も変わらない日々が続いていた。妹だと告げた瞬間は、全てを失うくらいの覚悟をしていたのに。

変わったことなんて、萌子の首筋のマフラーくらいだ。

放課後の部活動も、週末のデートも、当たり前のようにあった。当たり前のように過ぎていく毎日が、呆気なく感じられる。その呆

気なさが恐くて、この前の日曜日は薫を誘って三人で映画を見た。
このまま、二人のあいだには何もなかったことになってしまっ
たろうか。

久志が何を考えているのか、萌子には良く判らなかった。そのこ
とに触れようとしないのは、萌子と同じ臆病者だからなのかもしれ
ない。それにしても、彼の萌子に対する態度は変化がなさ過ぎた。
萌子がピンクのマフラーを巻かなくなったのを、彼も気付いてい
るはずだった。もしかしたら久志はそれを、妹分に贈るような軽い
気持ちで手渡したのだろうか。

それならば、きっと何も変わらない。最初から、兄と妹ならば。
イブの夕暮れ、美術室で味わった穏やかな気持ち。亀老山展望台
で、萌子の手を握り締めた久志の手の温もり。一つずつ確信に変わ
り始めていたこの恋の行方が、夏の逃げ水のようにするりと逃げて
いく。

「デートには付き合わされるし、ねえ」

「ごめん。迷惑だった？」

「全然」

心細げな顔をする親友を覗き込むように、薫は笑顔を浮かべて、
「どうせ暇人だしね。せっかく無罪放免になった龍太も、全然誘
いに乗って来んし」

「……」

「ほらほら。冗談なんだから、そんな顔しないの」

萌子の久志への想いを知っているのは、今のところ千絵と薫だけ
だった。そして薫だけが、萌子と久志の本当の繋がりを知らない。

この1週間、薫の前で何度真実が口を突いて出かかっただろう。
メールに頼ろうとしたこともある。けれども、結局萌子に送信ボタ
ンを押す勇氣はなかった。

薫なら、話せば判ってくれるだろう。少しは気持ちを楽にしてく
れるかもしれない。そんな誘惑が萌子の胸を何度もかすめた。でも、
あまりに複雑な身内話を、親友とはいえ赤の他人に話すのはさすが

に気が引けた。

「薫はさ」

「ん？」

「お兄ちゃんが欲しいと思ったこと、ある？」

萌子の突拍子もない質問に、薫は面食らった顔をしながら、

「……弟とか妹が欲しいと思ったことはあるけどねえ。お兄ちゃんは、物理的に不可能じゃないの？ いまさらママに『生め』って言う訳にもいかないし」

薫らしい論理的なものの考え方に、萌子は思わず笑ってしまった。そう、本当は可笑しな話なのだ。後から兄が出来るなんて。

「せんせい？」

萌子がそう声をかけると、久志は突然我に返ったように視線を戻した。

「どうしたの？ ぼんやりして」

「うん。いや、何でも」

いつも通り、久志は穏やかな笑みを浮かべてみせる。けど、その笑みを思い出すまでの中途半端な間が、かえってぎこちない印象を萌子に与えた。

このところ多い。萌子はそう思った。

最近の久志は、薄ぼんやりとしていることが多かった。授業中でもそうでなくても、物思いに耽っているような表情をしょっちゅう浮かべている。こうやって二人でいる時も、中途半端に会話が途切れることが多かった。

何も変わらない。そう思ってみても、やはり少しずつ何かが狂って来ているのだ。

何を考えているのだろう。その心の内が読めない分、萌子の胸の内の不安は増した。言葉にされるのが恐いくせに、何も言ってくれないと心細くなる。

戸惑っているの？

諦めようとしてるの？

それとも……。

「あの、さ」

「はい？」

「僕さ、1度東京に戻ろうと思うんだ」

久志の口からそう言葉が漏れた瞬間、萌子はい彼が里心を起こしたのかと勘違いした。

金曜の夕暮れ。天満屋の2階にある『アフタヌーン ティ』は、程よいざわめきに包まれていた。何か良い出来事を期待するような、温和な表情の人々。誰もが自分たちの空間に夢中で、部活を早めに切り上げ密会する教師と生徒を見咎める素振りもない。

幻想のような気だるい空間。耳にした言葉は、風のように儚げだった。

「叔父さんに、会って来ようと思ってるんだ」

「おじさん？」

「うん。ホントは父さんの従兄弟だから、おじさんって呼ぶのは可笑しいんだけど……」

一息吐くように、久志はわざと下手な笑い顔を浮かべてから、

「おじさん 和雄さんっていうんだけど 和雄さんは、行方不明になっていた親父を捜し出して来た人なんだ」

「え……」

弾かれたように萌子は視線を上げた。久志は、萌子の視線に気付いて弱々しく微笑んだ。

どこを見て笑っているのか判らない、弛緩した笑み。あの千光寺山で見せた、気弱な顔と同じ表情だった。けれどもあの時のように、彼の胸の内を知りそれに共鳴することは、出来なかった。

「和雄さんはね、僕の先輩でもあり、父さんの後輩でもあるんだ」
「？」

「和雄さんは僕の出た大学の先輩なんだ。同じように画家を目指

していた時期があつてね。親父とは従兄弟同士でもあるけれど、同じアトリエに通っていた同士でもあるんだ」

「ふ〜ん」

「大阪の知人のところで、おじさんは父さんの描いた絵を見かけたんだ、本当に偶然。絵のタッチと、右隅に書かれていたサインに気付いてね。そこから、その絵の出所を辿って父さんを見つけ出した」

淡々とした口調だった。そんな久志の横顔に、萌子は何の感情も見出すことが出来ない。

「高校生の時、おじさんから直接教えてもらったんだ。父さんはどうやって見つけたのかを。でも、その時にそんな話は一つも出なかった。父さんが尾道でどんな暮らしをしていたか、なんて」

「……」

「きつと、違うんだ」

「え？」

ハツとするほど、醒めた顔つきだった。久志は、今まで見せたことのない嘲った表情を浮かべて、

「おじさんや母さんや僕の家族が話してくれたことは、きつと何か違うんだ。何か、大切なことが欠けている……」

「……」

そこで、会話が途切れた。

久志はその鳶色の瞳で、萌子のことをじつと見つめた。萌子は射竦められたように、身動きが取れなくなった。

こんな哀れむような瞳、見たことがない。今まで覚えたことのないような不安が、彼女の胸を包み込んだ。

一人ぼっち。

そんな言葉が、萌子の頭をかすめた。

二人が共鳴するもの。それは父を失くした記憶のはずだった。何が違って、何が真実なのかは判らない。けれどもその何かを知ること、久志は記憶を失ったという事実を払拭しようとしている。萌

子は、そんな気がしてならなかった。

（また、置いてきぼりだ）

一人ぼつんと、宇宙に放り出されたみたいな気持ち。

知らなければ良かったのかもしれない。久志への想いをはっきりと自覚した時と、同じ気持ちを萌子は抱いた。知らなければ、幸せだったかもしれない。久志との血の繋がりも、久志への想いも、久志の存在そのものも。

萌子はその見えない『何か』を知った先に、幸せな行く末をどうしても描くことが出来なかった。

第八章 風花（3）

「萌子は、先生にチョコとかあげるん？」

晴美にさり気なくそう訊ねられた瞬間、萌子は心臓が裏返りそうになった。

2月13日、月曜日。街は、また華やかな雰囲気を取り戻していた。クリスマス・イブ、三が日、そしてセント・バレンタイン。年を追うごとに、冬が華やかな季節になっていくように思う。イルミネーションなんて、萌子が子供の頃は年末にしか灯っていなかったのに、今は冬の間中、街を鮮やかに彩っている。

デパートの入り口はまるで縁日だった。淡いピンク色にコーディネートされたフロアには、さまざまなワゴンやショーウィンドウに囲まれた洋菓子店が顔を並べる。そこに、チョコレートに群がる蟻のように『女の子』が密集していた。圧倒的に現役の『女の子』が多いけれど、どちらかといえば少数派のOGの方が威勢良い。

「全く、みんなどこに投資しようっていうのかしらね」

呆れ返ったように呟く薫には、チョコを選ぶという気はさらさらないみたいだった。

「……顧問が男の先生のところは、みんなでチョコあげたりしてるみたいよ」

「そう、なんだ……」

美術部は去年まで女性教師が顧問だったから、そういう風習はさっぱりなかった。たぶん美術部の女子部員は、誰もそんなことを思い付きもしないのではないかと萌子は思った。

（『先生』になら、あげてもいいんだ）

萌子は心の中で、自嘲気味な笑みを浮かべる。心をかすめる、苦しい想い。

結局、手作りは諦めてしまった。今、そうやって心を込めても意志はきつと戸惑うばかりだろう。そんな風に彼の心の重荷にはなり

たくなかった。

（でもね、今さら何もないっていうのも……）

「こんなみんな売り場に群がってるけど、8割方はきつと『義理』なのよね」

薫が小馬鹿にしたようにそう鼻を鳴らす。

「この中で、ホントに好きな人にあげる娘なんて、どれくらいいるのかね」

「あら」

この中でただ一人、すでに『本命』チョコを買い込んでいる恭子が、手にした小さな手提げの紙袋をゆさゆささせながら、

「好きな人がいたって、つき合っちゃえばバレンタインなんて半分義理みたいなもんよ」

「醒めてるわねえ」

と薫が思わず苦笑しながら、

「どおりで、選ぶのがえらく早い訳だ」

「そんなこと言ってるあんたらこそ、ここに用事はあるの？」

買い物につき合って、言い出したのは恭子の方だ。それなのに、彼女はそんな身勝手な言い草をして仲間の顔を見渡した。

「あたしはね、お兄ちゃんにあげるの」

晴美の何気ない台詞に、萌子の心臓はまたピクリと跳ね上がる。

「そーいや晴美は、毎年律儀にチョコあげてるわねえ」

「だってねえ、可哀想じゃない？　きつとウチの兄貴が貰えるチョコ、この1個だけよ」

「……あんたの兄貴、そんなにブサイクだっけ？」

初めから兄だと判っていれば。

こんな風に笑いながらチョコを選ぶ自分を、萌子はそっと思い描いてみた。

「……お兄さんがいるってさ」

「え？」

「どういう気分なのかな」

萌子の突発的な台詞に、それぞれ兄を持つ晴美と恭子は思わず首を傾げた。その向こうで、薫が萌子に向かって冷ややかな視線を投げる。

「どうって……」

「うざっただけよ、兄妹なんて」

恭子はちよつとうんざりした声を出して、

「バレンタインだってね、チヨコ寄せせチヨコ寄せせて。『友達と数競ってるから』何て言ってるさ。『お前にはプライドないんかいっ！』って怒鳴りつけちゃった」

「そっかなあ」

冷徹な恭子とは対照的に、晴美は小さく首を傾げて、

「あたしはそんなにお兄ちゃん嫌いじゃないなあ。たまに遊びにも行くし」

「あんたはブラコンだからね。だからちつとも彼氏が出来ないのよ」

「んなことないわよ。失礼しちゃうわね」

晴美はそういつてプクツと頬を膨らませた。そんな風になると、元からの丸顔がますます丸く見える。

「そんなこと言って、お兄ちゃんに彼女が出来たら『キーツ』となるんだから」

恭子はそう晴美のことをからかった。

（彼女が出来たら……）

突然、不整脈みたいに脈拍が乱れ飛んだ。心臓がバクバク言っている。

あれから何度も、頭の中で未来を描いた。けれども萌子はその絵の中に、久志のそばに立つ自分の姿を描くことは出来なかった。

今はいい。ただ、隣に立てなくなるだけだから。

でも……。

（その隣に、違う誰かが立ってしまったら……）
胸が、切り刻まれるように痛んだ。

萌子は、ワゴンに山積みになったチョコレートの箱を一つ、手に取った。

「なに？ 萌子も誰にあげるの？」

「うちの親父に、よね？」

萌子の代わりに薫がそう答えて、ニシシツと笑う。

「何で萌ちゃんが、薫のお父さんにチョコあげなきゃいけないのよ」

「だって、あたしがあげたら柄でもないでしょ。萌子はね、毎年寂しいパパのために代役を果たしてくれてるの。ね？」

すまし顔で薫がそう言い放つと、萌子は微かな笑顔を返して見せた。

『柄でもない』

薫はそう言つて、きつと龍太にもチョコを贈ったりしないのだろう。強がりかもしれないけれど、今の萌子には彼女の姿がやけに清々しく見えた。

久志の動く気配は、すぐに判った。

キャンバスに向かっていても、萌子の指はほとんど動いていなかった。感知網を張り巡らすように、五感をフル活用して久志の仕草を探っていたのだ。萌子のサーチシステムに久志が引つ掛かったのは、部活動が始まって小一時間経った頃だった。

久志の後を追うようにして教室を出た萌子は、すぐ隣の美術準備室の扉に手を掛けている久志を見つけて、一瞬躊躇した。

「……先生」

『バレンタイン』なんて言つても、女子高じゃあんまりそわそわした雰囲気にはならない。それは毎年のことだった。やっぱり贈る相手が実在しないと、興味も半減してしまうらしい。

女子高ならば男性教師みんながもてそうに思えるけど、今の福女の中でその対象となるのは、せいぜい久志くらいである。

だから萌子は、久志のそばがもつと騒がしくなるのかと思つていただけれど、今日1日彼の周りは案外静かだった。

部活が始まってすぐに、秋月はづきがいそいそと久志に紙袋を差し出して、その場にいた部員全員がどん引きしたりはしたけれど。

「どうした？」

タイミング良く顔を出した萌子に、久志は一瞬怪訝そうな顔をした。

「あの、話が……」

萌子がそう言うと、久志は少しだけ頬を強張らせた。どうしたのだろう。そう訝しく思ってから、彼女はその表情の硬さの意味に気付いた。

月曜日に1日だけ休みを取り、連休を使って東京へ向かった久志は、夕べ尾道に戻って来たはずだった。彼が戻って来てから、二人がまともに顔を合わせるのはこれが初めてである。

別に東京での話なんて聞きたくない。強がり半分に萌子はそう思った。

里心が付いた、というのとはちょっと違うかもしれない。けれども、このところの久志の言動に、萌子は似たような想いを抱いていた。父親が尾道でどんな暮らしをしていたか。その端緒が明らかになった途端、久志の動きが活発になって来たような気がする。

『親でないと判らないことだったんだけどね。母にはもう訊くことは出来ないし、父とはきつともう2度と会うことはないから』

あの日、夕暮れの校舎で久志が言った、

『気になること』

それはきつと、尾道での父親の暮らしだったのだ。それを確かめてしまえば、この街にいる理由など本当はもうないのかもしれない。またぽつんと宇宙に放り出されてしまったような気がした。今度こそ、一人ぼっちで。

「こっちに入りな」

表情を硬くしたまま、久志はそう言って萌子を美術準備室に誘っ

た。

萌子を部屋の中に入れて扉を閉めた久志は何を思ったのか、わずかにためらってから扉に鍵を掛けた。

慎重で臆病者の久志にしては珍しい行動だ。萌子は一瞬ビクリしたが、ふと思い直して、

（でも、他のみんなには知られたくないし、かえって好都合かも）
男の人と密室に籠るという発想は、彼女の頭には全く浮かばなかった。

全てを閉ざしてしまうと、準備室の中は不思議なくらい静かになった。隣の部屋ではしゃいでいるはずの、仲間たちの声も聞こえて来ない。

その静けさが、耳に痛かった。自分の心臓の音がはっきりと聞こえて来るような気がする。

「週末、東京に行つて来た」

二人してしばらく黙り込んだ後、ぶっきらぼうな口調で久志はポツリとそう言葉を漏らした。

「ん……」

萌子是不機嫌そうにそう小さく頷く。

本当は、何かを問い尋ねて欲しかったのかもしれない。けれども萌子は小さな唸り声を上げたきり、何も言えずに黙り込んでしまった。彼女は問い尋ねる気もなかったし、そもそも何を尋ねてよいのかも判つていなかった。

まるでなさぬ仲のように、萌子と久志はしばらくのあいだ互いに口をつぐんだまま視線を逸らしていた。

「和雄おじさんに訊いて来たよ。父さんが尾道で暮らしていたことや、他にもいろいろと……」

「そう……」

会話が続かない。互いに思うことが、全く噛み合っていなかった。久志は二人の父のことを、萌子はこれからの二人のことを考えている。

「そうだ」

わざとらしい、と自分でも思いながら、萌子は話題を切り替えるようにその手を叩いた。

「先生、今日何個もらった？」

「え？」

「もう、とぼけちゃって。さっき1個もらってたじゃない」

その一言で、はづきに言い寄られたシーンを久志はようやく思い出したらしい。彼は苦虫を潰したような表情になって、

「ああ。5、6個もらったかな」

「へえ、そんなに？」

「全部、義理だよ」

「秋月さんのは、義理じゃないんじゃないですか？」

萌子がそう冷やかすと、久志はますます苦い表情になって、

「……手渡されたのなんか、あれだけだよ。後は職員室の机の上にポンポン放り出されていたし」

久志の困惑した表情に萌子はわずかな笑みを浮かべた後、すっと表情を硬くして、

「……先生からも、もらったの？」

「1個だけ、な」

「……黒沢先生から？」

（何で泣きそうな声になるんだろ）

自分の声がかすれたことに、萌子は自分で驚いていた。

そんなこと、気にしている場合じゃない。もう済んだ話じゃないか。そう言い聞かせてみても、不意を突かれた萌子の心の揺れは、簡単には収まらなかった。久志の隣に誰かが立つ未来。そこに誰が立つてもおかしくないのだ。あたし以外、なら。

萌子の不安を、久志はすぐに察したらしい。少し可笑しそうに微笑むと、

「それも義理、だよ。男の先生全員に配ってたから」

「そう、なんだ……」

萌子は小さく安堵の息を吐くと、照れ臭そうな顔をして、

「そんなにもらってちゃ、インパクト薄いかしら」

「？」

久志がゆつくりと首を傾げる。萌子は、制服のポケットからきら

びやかな包みの箱を取り出して、

「はい」

「……チヨコ？」

半信半疑な久志に、萌子はちよつとだけ微笑んで、

「ごめんね。手作りじゃないんだ」

「そんなこと」

久志は手渡された包みをしげしげと眺めると、

「ありがとう。すんげー嬉しい」

久志の反応は、ちよつとびつくりするくらいだった。心底喜びを噛み締めるように、満面の笑みを萌子に向けて来る。その笑顔が思いがけなく、萌子は戸惑った。

「……えっと、そんなに驚いた？」

「うん。大収穫だよ」

「でも、去年まではもつとたんまり稼いでいたんじゃないの？」

無理に戯けた仕草で萌子が横目で睨むように見つめると、久志は少し笑って、

「まさか。去年なんて0勝投手だよ」

と肩を竦めてみせてから、

「量も凄いけどね。質も最高」

「……え？」

久志は、はにかむように視線を俯かせて、

「君から、もらえたし」

その瞬間、萌子は胸を刺す痛みに思わず目を瞑った。

こんなに苦しいのは、あの時と一緒だ。久志に贈り物をする時は、いつも苦しい想いをしているような気がする。でもあのイブの夕べより、萌子の心は比較的落ち着いていた。落ち着いていて、そして

あの時よりも絶望感に満ち溢れていた。

これが最後。今日で最後。

昨日、天満屋の1階で2個目の包みを手にした瞬間、萌子はそう決意したのだ。

（それなのに……）

久志の邪気のない笑みを見つめながら、萌子は思っていた。もしかしたら、あたしたちは本当に心が通い合っていたのかもしれない。言葉になんてしなくても、あの手の温もりは確かに本当だった。言葉などなくても確かに感じられた、久志からのいたわりや慈しみ。その一つ一つが胸の中を駆け巡る。

今日で終わるのなら。明日から失くさねばならない記憶ならば。せめて、言葉の欠片でも掴みたい。

「意外だった？」

萌子がそう問うと、久志は小さく首を傾げて、

「え？」

「わたしからは、もらえないと思ってた？」

「いや……」

萌子から視線を逸らして、久志は手短にあった消しゴムを指先で弄びながら、

「……少しは期待していた、かな」

その瞬間、萌子の中で何かが音を立てて崩れた。刹那の喜びに浸りながら、萌子は自分の中で張り詰めていたものが崩れ去るのを感じていた。

その一言で十分だ。やっぱりあたしは幸せだったんだ。

「妹からチョコを贈るなんて、やっぱりヘンなのかな」

「……え？」

久志は、聞き慣れない言葉を耳にして少し目を見開いた。

「来年からは、ちゃんと妹として贈るからね」

いつしか萌子は涙声になっていた。伏せ目がちに俯いた、彼女の口から漏れるかすれ声を聞いて、久志は慌てたように歩み寄る。

「せんせい、ごめんね」

萌子はすつと視線を上げて、久志の顔を見つめた。その頬に、音もなく一筋の涙が流れる。

「……何が？」

「わたしね、ずっと先生が好きだった」

「……」

「いけないって、判ってるの。でもね……」

気付かぬ内に萌子は久志の胸に縋りついていて、腕の中でむせび泣く少女に困惑した表情を浮かべながら、久志は遠慮がちに彼女の背中に腕を回した。

「ごめんね。明日からは、ちゃんと妹になるから」

涙があふれて、止まらなかった。溜めていた感情を押し出すように、萌子は泣きながら喋り続けた。

「ごめん。だから今日までは、先生のこと好きでいさせて」

第九章 2つのベクトル(1)

窓の外で、微かに風が囁いた。

喫茶店『ノエル』の店内には、いつもと変わらぬ落ち着いた雰囲気漂っている。あの日と同じ窓辺の席に座り、萌子は少し見上げるような形で街の風景を眺めていた。

風のない、穏やかな冬晴れの日だった。このところ、またこんな瀬戸内らしい冬の日が続いている。

あの日、絨毯のように艶やかな色をつけていた木々は、もうすっかり葉を落とし裸木となっていた。けれどもそこに寂しさはなく、冬の青空を背に立つ姿は凛々しくさえある。

冬には冬の、美しい光景がある。その場にいなければ、感じることの出来ない美しさが。

「ごめん、待った？」

そう声を掛けられるまで、萌子は久志が店に入って来たことにちっとも気付かなかった。ビクツとして顔を上げると、弱々しい久志の笑い顔がそこにあった。

「ううん。そうでもない……」

一瞬視線を合わせた後で、萌子は思わず目を逸らす。

(なんで、あんなことしちゃったんだろ)

バレンタインの日、正氣に戻った萌子は突き飛ばすように久志から離れた。何も言えずに、頬を紅潮させて、発作的に美術準備室を飛び出した。

二人きりで逢うのは、それ以来だった。

この4日間、萌子は久志の顔をまともに見られなかった。授業中でも部活動中でも、出来る限り久志の目を見ないようにしていた。『ちゃんと妹になる』と言っておきながら、やっぱり萌子は意気地なしかった。

『明日の午後、逢えないか?』

久志がそんなメールを送って来たのは、金曜の夜のことである。兄妹だと知ってから、久志からのメールは減っていた。それは彼からの、1週間ぶりのメールだった。

萌子と対面の席に腰を下ろしながら、久志はきよろきよろと店内を見回した。

この店には、福女の生徒もよく訪れる。確かに『密会』には少し相応しくない場所だ。

この店を指定したのは、萌子の方だった。人に見られる危険性を知った上で、彼女はあえてここを選んだ。

彼女は少し意地になっていたのだ。本当の兄妹なら、別に逢っていても不思議じゃないじゃないか、と。

二人が兄妹であることを知られる方がよっぽどマズイことは、もちろん良く判っているつもりだった。

店内に福女の制服姿は見当たらない。少し安堵した様子でメニュー表を手にした久志は、

「おすすめは、何？」

「え？」

ずいぶんと軽やかな口調だった。重苦しい気分にとっぴりと浸かっていた萌子は、戸惑ったように久志を見やる。

何故だろう。今日の久志は、何だかやけに清々しく見えた。何かを吹っ切ったような、さっぱりとした表情をしている。

（何を、吹っ切ったんだろ）

兄と妹である、ということだろうか。

久志が彼らしい表情を取り戻すごとに、萌子は久志との距離がどんどん離れていくような気がしていた。

「萌ちゃんはさ」

お腹が空いたと言う久志に萌子が付き合う形で、二人は萌子お勧めのベーグルサンドセットを注文した。ベーグルを頬張りながら萌子が久志を見ると、

「父さんの顔、覚えてる？」

萌子は思わず、頬張ったベーグルをそのまま飲み込みそうになった。何も言えないまま、びっくりした目でしばらく久志の顔を見つめていた彼女は、やがて口の中のを咀嚼しながら力なく首を横に振った。

「……小さい頃だったから、あんまりよく覚えていないの」

「そっか……」

そう小さく頷いた久志は、しばらくじっと考え込む仕草を見せてから、

「父さんの写真、見てみたい？」

「え？」

食べかけのベーグルを口に運ぶのも忘れて、萌子は目を見開いたまま久志を見つめた。

一瞬、何を言っているのか判らなかった。久志が自分の父親の写真を持っていたても何の不思議もないことに、しばらくのあいだ気付かなかった。

「家から持って来たんだ。一番最近の、といっても僕が中学の時のだから、もう10年位前の写真だけど」

父の行方。何度知りたいと願っただろう。幸せな日々の暮らしの中で、それでも萌子の胸の中で消えることのなかった小さなしこり。ずっと知りたいと思っていたはずなのだ。逢えないのなら、せめてその顔だけでも見てみたい、と。それなのに、萌子は首を縦に振ることがどうしても出来なかった。

イエスともノーとも言えず、ただ自分を凝視する少女を、久志は少し辛そうな目で見つめていた。そしてその視線を逸らさぬまま、もう一度こう尋ねた。

「父さんに、逢ってみたい？」

衝撃は、しばらく間を置いてからやって来た。

（え？）

何を言ってるんだろう。戸惑いは、やがて驚愕に変わる。

（何か知ってるの？ お父さんのことを……）

戸惑いと驚きと、疑念をない交ぜにした瞳で見つめる萌子に向かって、久志はしっかりと頷いた。

「父さんのこと、一緒に探しに行かないか？」

その瞬間、萌子は踏切の向こうに見た、寂しげでまっすぐな父の瞳を思い出した。

新幹線の車窓からの風景は、あっという間に通り過ぎていく。しかもトンネルが多いから、どこまでいっても細切れの風景でしかない。

放送時間を終えた深夜のテレビ画面のように真っ暗になった車窓から、目を離して姿勢を戻すと久志が可笑しそうに見ている。

「なに？」

「いや、初めて新幹線に乗った子供みたいだなんて」

「……もうっ」

久志の的を射た指摘に、萌子は顔を赤らめながら頬を膨らませてみせた。

新幹線に乗るのはいつ以来だろう。久志が赴任して来る直前に行った修学旅行は、広島空港までバスで行って、それから九州まで飛行機で往復した。中学生の時は広島まで新幹線に乗ったけど、それは下り列車である。

上りの新幹線に乗るのは、結局小学生の頃に行った京都旅行以来だということに、萌子は気付いた。

母子家庭のせいか、萌子はあまり家族旅行をした覚えがなかった。その時は、祖母と三人で京都巡りをした。他に母や祖母と旅行をした記憶は1度か2度しかない。

彼女が大阪を訪れるのは、無論初めてのことだった。

『大阪に、父さんのことを知っている人がいるんだ』

『ノエル』の店内で、久志はそう言っただけしばらく黙り込んでしまった。彼が何を逡巡しているのか判らなくて、萌子も合わせる

ように黙り込んだ。

どれくらい沈黙が続いただろう。久志は漏らすようにポツリとこ
う呟いた。

『父さんには、浮気相手がいたんだ』

久志の台詞は萌子を混乱させ、彼女はつい勘違いを引き起こした。
(母さんは浮気相手なんかじゃない)

確かに母は妻のいる人を愛したのかもしれない。けれどもそれは
戸籍上の話だけで、父も母もただ純粹に互いを愛していたはずじゃ
ないのか。勘違いしたまま、萌子は久志の台詞に反発した。

『……あたし、不倫の子なんかじゃないもん』

萌子の突っ張った口調に、久志はしばらく不可思議な顔をしてか
ら突然吹き出して、

『君のお母さんのことじゃないよ』

『……え?』

萌子たちが今から会いに行くのは、その浮気相手だった。

久志が和雄に訊いて来た話によると、彼が芳久を見つけたのは知
り合いの女性の家の玄関先のことだったらしい。その女性は芳久
や和雄が通ったアトリエの生徒の一人だった。大阪に引っ越した彼
女を出張ついでに訪ねようとした和雄は、彼女の家から出て来た芳
久と偶然に出くわした。

『その女性と父さんは、昔付き合っていたんだ』

そう告げる久志の口調は、苦々しかった。

彼女と芳久は、芳久が結婚する前に交際していたのだという。ア
トリエ仲間には秘密にしたまま。

彼女は既婚者だった。やがて道ならぬ恋に終止符を打ち芳久が結
婚した後で、彼女は離婚して郷里の大阪に戻っていた。

以前の二人の関係を秘密裏に聞かされていた和雄は、失踪したは
ずの芳久が彼女の家から出て来たのを見て激しく詰め寄った。失踪
騒ぎまで起こして昔の交際相手とよりを戻した。当然そう考えたの
だ。

事故に遭って記憶を失い、恩人に助けられて尾道に住んでいる。

芳久の言い訳はどうやら本当らしいと納得した和雄だったが、彼女とのことは疑いを解くことが出来なかった。記憶を取り戻しても東京に帰れないのは、彼女のせいではないかと。

『そこで、僕の存在を話したらいいんだ』

芳久にとつて、息子のこととは青天の霹靂だったらしい。言葉を失う彼に向かって和雄はこう言ったのだという。

今戻って来れば、大阪でのことは誰にも話しません、と。

『和雄おじさんは帰京を強要しなかった。そして1週間もしない内に、父さんは東京に戻って来た』

芳久が再び失踪した時、和雄は思い余って芳久の妻の詩織に告げようとしたのだという。

『私には心当たりがありますって。でも、母さんはその話を聞くとしなかったんだって』

もう十分です。詩織はそう言ったのだという。そう言われてしまえばそれ以上詮索する訳にもいかず、結局和雄は大阪へ探りを入れるのをやめてしまった。

『父さんがそこにいるかどうかは判らない。けどその女性に会えば、きっと判ることがあると思うんだ』

久志は何故、その女性に会いたいのだろう。

萌子には、父に逢える確率はそう高くないように思えた。確かに手がかりの1つかもしれないが、そこに父の行方の全てが詰まっているかのような期待感を、萌子は抱くことが出来なかった。

それに、父に逢って確かめられることなどもう何もないような気もしていた。

萌子が人知れず胸に抱えていた想い。その情熱は、哀しい事実を前にしてもう何の意味もなさなくなっている。

新幹線が再びトンネルの中に入る。萌子は視線を上げて久志を見た。その視線に気付いた久志が、弱く萌子を見返す。

それでも、二人は緊張していた。確かに低い確率だけれども、も

しかしたら父に逢えるのかもしれないのだ。

久志にとっては7年ぶりの、萌子にとっては記憶の欠片との再会。二人に、確信と哀しみを分け与える父に。

福山 新大阪間、1時間16分。その行程は、長いようで短かった。

第九章 2つのベクトル(2)

行き交う人波に、萌子はしばらく圧倒されていた。

大阪随一の繁華街は、息苦しいほどの人混みだった。それが休日
のせいなのか、それとも普段と変わらぬ賑わいなのか萌子には判ら
なかったけれど、とにかく尾道に生まれ育った人間にはあまり見慣
れぬ光景である。

大都会の雑踏など慣れっこのはずの久志も、しばし啞然としなが
ら立ち尽くして、

「人混みの中で聴く関西弁は、結構きついね」
と苦笑した。

「ご飯、食べてから行こっか」

新大阪から在来線に乗り換え、梅田に着いたのはもうお昼近かつ
た。土地勘のない二人は、デパートのレストラン街にあるお好み焼
き屋に入った。

早くも混雑し始めた店内でカウンターの隅に追いやられた二人は、
交わす言葉もなく鉄板の上の鮮やかな手つきをぼんやりと見ていた。
これから目指す場所は、南海電鉄で何駅か行った先にある。番地
が判っているだけだから、目的の家を探すのに手間取る可能性もあ
る。ここであらかじめ腹ごしらえをしていくのは、決して間違いで
はない。

それでも萌子には、久志が二の足を踏んでいるように見えて仕方
がなかった。

ためらっているのは久志だけではない。萌子もまた、同じだった。
心の片隅で大きくなることもなくまた消え去ってしまうこともな
く、当たり前のような感情としていつも居座り続けていた思い。母
の気持ちを憚って決して口にすることはなかったけれど、萌子はず
っと父に逢いたいと思っていた。たとえ逢えなくても、せめて父が
家を出て行った理由だけは知りたいと、切に願っていた。

皮肉なことに、久志と出逢い彼が兄だと判ったことで、萌子はその願いを叶えてしまった。

父は、自分に息子が生まれたことを知らなかった。記憶を取り戻しても帰るつもりがなかった東京に、父はその事実を知って戻った。

父は、久志のことを選んだのだ。萌子や母を捨てて。

久志のことを恨もうなんて思わない。ただ、そこにある事実が哀しかった。

父と再会しても、そこに喜びがあるようには思えない。ただ、哀しい事実をなぞるだけだ。

（それでも、お父さんに逢いたい？）

そう自問しながら、萌子は久志の横顔をそつと盗み見た。

久志は何をためらっているのだろう。どこか思い詰めたようなその横顔を見て、萌子は不思議な気分になった。

久しぶりに父親と逢うことに緊張しているのだろうか。それとも、少しは萌子の憂いに気付いているのだろうか。……

二人が阿倍野駅に辿り着いたのは、午後の2時を少し回った頃だった。

大阪もこの辺りまで来ると、都会の喧騒はすっかり無縁のものになる。雑居ビルとアパートが立ち並ぶ街は、奇妙に静かだった。

そんな無機質な街角で、萌子はとても落ち着かない気分を味わっていた。

乗り継いで来た南海電鉄の車内で、二人はずつと押し黙ったままだった。高層建築から軒の低い街並みへと変わりゆく車窓の景色を眺めながら、それぞれの思考に入り込んでいた。

何故、今父に逢わなければいけないのだろうか。

萌子はずつとそのことを考えていた。これが運命なのだろうか。このタイミングで、父の行方と久志の存在を知ることが。

だとしたら、なんて虚しい。

もう少し早く、もう少し違った順序で。それだけで、二人はもっと幸福に出逢うことが出来たかもしれないのに。

重苦しい気持ちまま阿倍野駅に降り立った萌子の心に、俄かに別の重苦しさが襲い掛かって来たのは、鄙びた改札口を通り抜けた後だった。

駅前に建つ住居表示板と手元のメモをしばらく見比べてから、久志は小さな声で、

「こつちだ」

と言って歩き出した。

「判りそう？」

「まあ、大体は。おじさんも、駅からはそんなに離れていないって言つてたし」

無機質な街並みは、どこも同じように見えた。ただでさえ方向に疎い萌子は、2、3度路地を曲がっただけで呆気なく帰る方角を見失った。

どこも似たように寂れた街を、二人は黙々と歩いた。見知らぬ土地への不安、行く先の見えない不安、辿り着いたその先にある不安鉛が乗ったように、萌子の心はずんずんと重たくなっていく。

「……つかしいなあ」

電柱に貼られた番地の表示を見て、久志が小首を傾げた。

「……先生、もしかして本当に迷つてます？」

「番地は合つてるはずなのに、肝心のアパートが建ってないんだよ」

二人が尋ねようとしている女性はここ阿倍野が出身地で、離婚して郷里に戻った後は実家へは戻らずに近くのアパートを借りて住んでいるという話だった。二人はそのアパートを探しているのだ。

萌子でも判るくらい、久志は何度も同じ街区を行き来した。徒労が不安に拍車を掛ける。いい加減焦りが見えて来たところで、とうとう久志は近くにあった不動産屋に飛び込んだ。

ずり落ちそうに眼鏡を掛けた初老の男性にその住所とアパート名を告げると、彼はしばらく物珍しそうに久志と萌子の顔を交互に見やった。

「ずいぶんと奇遇やな」

「え？」

久志が不思議そうな顔を見ると、初老の男性はにやりと笑って、

「そのアパート、ウチが仲介していた物件なんや」

「え……」

「もつとも、今はもうないけどな」

「……もう、ない？」

「ああ」

男性は久志の肩越しに、店の斜向かいにある空き地を指して、

「あそこに建ってたんだ。もう2、3年前に取り壊されたけどな」

その店に場所を尋ねに行ったのは、実に僥倖だった。

店員の男性のつてで、当時のアパートの大家のことが判った。夕方その大家を尋ねると、応対した女性は当時の店子のことをよく覚えていた。大家が店子の顔を見知るくらい、小さなアパートだったらしい。

「摩耶さんのご両親のことは、元から良く知ってたのよ」

当時の店子の一人を訪ねて来たことを正直に話すと、大家の妻だというふくよかで大らかそうなその中年の女性は、わざわざ二人を茶の間に上げて応対してくれた。

「摩耶さんの家はね、近くで雑貨屋を営んでいたんやわ。摩耶さんが大きくなる頃には、もう店はたたんでたんやけどね」

お喋り好きそうなその女性は、小一時間近く二人に話し続けた。摩耶が美大に進むために東京へ行ったこと。彼女がそのまま東京で結婚し、両親は二人ぼっちで雑貨屋だった家に住み続けていたこと。役に立ちそうな話もあったけれど、大半は萌子たちにとってどうでも良い話だった。

「離婚して大阪に戻って来て、親御さんと一緒に住むのは、やっぱり気が引けたんかね。摩耶さん、アパートで一人暮らしを始めたん

よ。ウチとは顔見知りやったから、あのアパートを借りてもらってね」

「で、今はどこに？」

気負った口調の久志をいなすように、彼女は静かに首を振って、

「判らないわ。ご両親から継いだ土地を処分して、そのお金でどこかに引越したんやと思うんやけど」

「え？」

「亡くなったのよ、彼女のご両親。5年くらい前に。だから、きつと大阪にいるのが辛かったんじゃないかしら」

その家を去るほんの間際に、久志は父親の写真を見せた。

「……見たことない顔やわ」

何故か悲しげな顔をして、彼女は首を横に振った。

「基本的にあのアパートは单身向けで、原則として同居は認めてなかったからねえ」

大家の家を発つ頃には、辺りはもうすっかり暮れていた。ネオンが煌びやかさを増す、木枯らしが吹き抜ける道を、二人は肩をすばめて駅へと急いだ。

時折街灯に浮かび上がる久志の横顔には、苦渋の色が滲んでいた。半日歩き回り、やっと辿り着いた答えに、すっかり疲れ切っている様子だった。

萌子も疲れ切っていた。でも、久志と違って心の奥底でホッとしていたのも事実だった。

ずつと透明なガラスに封印して来た思い。父と会えれば、自分の中でどこか欠けている部分が埋まるなんて、何で考えたのだろう。

今はもう、そんな願いは過去のものだった。どんな事実も、萌子の胸に開いた穴を埋めることなど出来はしない。

無知で無邪気だったあの頃が、ふと愛おしく思えた。

第九章 2つのベクトル(3)

「ただいま」

萌子は、誰もいるはずがない家の奥へそう声を掛けた。

学校から帰ると、玄関に鍵がかかっていた。今日は母の外出予定など聞いていない。萌子は首を傾げながら家に入ると、リビングのテーブルの上に置手紙を見つけた。

『高嶺さんのところに打ち合わせに行って来ます。夜ご飯、よろしく』

高峰とは、尾道在住の女性画家のことだ。彼女を含めた数人と、来週玲子は研修を兼ねた海外旅行に行く予定になっていた。

大方、その打ち合わせにでも出掛けたのだろう。萌子は冷蔵庫の中身を思い浮かべ、今晚の献立を頭の中で組み立てながら2階へ上るうとして、ふとテーブルの上にある茶封筒に気付いた。

(なんだろう?)

表に『尾道市役所』の名前が見える、口の開いた封筒だった。何の気なしに萌子は中身を引っ張り出した。

「戸籍謄本?……」

それは玲子の戸籍謄本と住民票だった。萌子はすぐにピンと来た。「ママったら、また間違えてる……」

おそらく、期限の切れたパスポートを再取得するために取って来たのだろう。パスポートには住民票だけでいいみたいだと、6年前も同じ指摘をした覚えがある。

『こんなこと、小学生に教わっちゃねえ』

その時、玲子はそう言って大笑いしたものだ。そんなおっちょこちよいなところは、ちつとも変わってない。

(そうだ、あの時初めて……)

萌子はその時に、初めて『戸籍』というものを見たのだった。ふと思いついて、萌子はその戸籍謄本を持って自分の部屋へと上

がった。

いつものように鞆をベッドの上に放り出すと、南向きの窓を開ける。

今日は幾分春めいた陽気の1日だった。風もなく、穏やかな午後
の陽射しに包まれた尾道の街並みは、心なしか霞んで見えた。

季節は確かに移ろい始めている。変わらぬものなど何もないのだ。
時の流れも、人の心も。

しばらく故郷の街並みを眺めてから、萌子はベッドに放り投げて
いた先刻の茶封筒を手に取った。

玲子の生年月日や本籍といった情報の下に、萌子の名前がある。

『私生児』

自分の名前の欄の脇に書かれたその三文字を、萌子はじっと見つ
めた。

自分の戸籍に父親の名前がないことを知ったのは、小学校5年生
の時だった。やはりパスポートをとるために母がもらって来た戸籍
謄本を見た時だった。

無論その時は、『私生児』の意味など全く判らなかった。ただ、
その言い知れぬ秘密めいた言葉の響きが、母へ問い尋ねることをた
めらわせた。

必死に辞書をひっくり返しても、小学5年生にその言葉の意味は
容易には理解出来なかった。その言葉がどついう意味を持つのかを
はつきりと理解したのは、高校生になった頃ぐらいかもしれない。

未婚の母。萌子はそのことをずっと疑問に思っていた。でも、今
ならそれも何となく理解出来るような気がする。

（私はお父さんと血が繋がっていないんだ、戸籍上は……）

ならば、久志とも赤の他人なのだ。戸籍上は。結婚だって、出来
る。

「ぶっ」

そこまで考えてから、萌子は思わず吹き出した。

そんな風に強い信念を持って生きられたら、どんなに楽だっただ

ろ。全てを肯定的に捕らえ、やみくもに突き進むことが出来たなら。

あるいは、もっと強く自分を断じ、全てを受け入れる心を持てたなら。

受け容れるでもなく、跳ねつけるでもなく。つくづく自分は中途半端な人間だと思う。

たとえば二人が、幼い頃から兄妹として育てられていたらどうだっただろう。たとえば二人が、初めから兄妹として引き合わされていたら。真実をありのままに受け容れられただろうか。

萌子は今でも、久志が『兄』だという事実を実感することが出来ないでいた。ほんの少し、時の流れが悪戯に違えた運命に翻弄されて、事実を事実として受け容れることが出来なくなっていた。

消すことの出来ない想いと、本当を知った刹那自らの心に抱いてしまった禁忌。進むことも引くことも出来ずに、萌子はずっと濁流の中に取り残されたような気持ちになっていた。

それでも、少しずつ心は変わり始めている。

この1週間、萌子は放課後美術部に寄らずにまっすぐ帰宅していた。そしてスケッチブックを手にすると、いくつかあるお気に入りのおポットを毎日スケッチして歩いていた。

3学期の初めに久志に紹介された、『全国街並み絵画コンペ』に出展する絵のテーマ探しのためだった。久志にも、しばらく部活動には顔を出せないことを伝えてある。

大阪を訪れて以降、萌子は猛烈に尾道の街を描きたい欲望に駆られていた。

この街で久志と過ごす日々に、決して後悔しないように。それを、幸せだと思えるように。大好きな街角を描写しながら、萌子はそんな祈るような気持ちを筆先に込めていた。

諦め、と言ってしまうばそれまでだ。でも、だとしたら私はいたい何を諦めたというのだろう。

萌子の心の中は、もっと穏やかな気持ちでいっぱいだった。この

街に生き、この街で共に過ごせる幸せを感じ、もつとたくさんこの街を描きたい。

それは、片恋が琥珀色の想い出に変わるより、もつと柔らかな想いだった。

早くそんな時が来れば、と思う。別の想いでまた好きになれたら、と思う。

そう。嫌いになど、なれるはずもないのだから。

「ちよつと、萌子。あんた聞いた？」

朝、教室に入る直前の廊下で、萌子はそう声を掛けられた。

晴美の口調は相変わらずだった。いったい彼女は、どこからこんなに情報を仕入れて来るのだろうか。萌子は振り向く前から苦笑いを浮かべていた。

「なによ。今度は何を仕込んで……」

戯けた調子で晴美を振り返った萌子は、つい口をつぐんだ。友人の顔は、いつになく真剣だった。

「あんた、ホントに聞いてないの？」

不意に、心がさんざめいた。

ホームルーム前の廊下に広がる喧騒は、極限まで大きくなっている。その中で萌子と晴美の間だけが、オブラートに包まれたように静かだった。見たことのない、晴美の真面目くさった目を見つめながら、萌子は機械的に口を動かした。

「なにを？」

萌子の言葉を聞いた途端、晴美は酷く哀しげな表情を浮かべた。ほんの少し顔をしかめて、一時萌子の顔を凝視する。

そして次の瞬間、彼女の声は異邦人のテレパシーのように、萌子の心に直接響いた。

「立花ちゃん、4月になったら東京に帰っちゃうんだって」

結局あたしは、いつたい彼の何なのだろう。

キャンバスに向かう久志の姿をぼんやりと見つめながら、萌子はそんなことを思っていた。

放課後、部活に顔を出した久志の様子は、いつもとまるで変わりがなかった。この頃の彼はまるで生徒の一人のように部員のあいだに溶け込み、すっかり部室をアトリ工代わりにして創作に励んでいる。その口からは、教師を辞める話などとても聞けそうになかった。『なんかね、立花ちゃんの絵の先生が、東京に戻って来いって言うてるんだって。こんな田舎にいたら、腕が錆びるって』

晴美が教師たちの会話を立ち聞きして来たという話をどこまで信じて良いのか、萌子には判らなかった。

ここにずっと留まっていたはいけない人。そんなことは判っているつもりだった。この街にすることが心のリハビリなのだとしたら、その目的は十分に果たしていることも。ここに留まれば、確実に腕が錆びることも。

（実の兄妹なら）

萌子は思った。兄妹なら、遠く離れて暮らすことを真つ先に相談されても良いのではないだろうか。もし萌子のことを大切に愛おしく想うなら、そんな大事なことは一番に伝えなければならぬのではないだろうか。

彼が尾道に現われてから5ヶ月。萌子は久志と少なからず関わり合いを持って来たと、そう自負していた。互に通ずる想いがあったと、そう感じていた。

所詮先生にとってわたしは、少し仲の良い生徒にしか過ぎなかったのだるか。

千光寺山から見た景色。イブの教室。展望台から見た来島海峡。幾つもの夕暮れに感じた久志の気持ち、霞を掴んだように掌で幻となってゆく。

美術部の常連たちと笑顔を交わすその横顔が、不意に見知らぬ他

人に見えた。

時計の針が5時を回る直前に、萌子は美術室を後にした。部屋の中にはもう久志を含めた数人が残っているだけだった。

昇降口を出た萌子は、その足を教職員用昇降口へと向ける。そしてドアの向こうに人影がないことを確かめると、入り口から身を隠すように外壁に寄りかかった。

日が落ちてから、急に北風が強くなった。萌子はコートの襟を寄せながら、足早に消え去ろうとする夕景をぼんやりと見ていた。

待ち伏せなんて、らしくない。萌子自身、そう思っていた。自分ほもつと思慮深くて、臆病なウサギみたいな性格だと思っていたのだ。

萌子が教室を後にした時、久志はもうキャンバスの片付けに入っていた。だからそろそろここに現われるはずだが、その前に他の教師が通らないという保障はどこにもない。どんな関係にしろ、生徒が教師を待ち伏せするような関係はあまり知られてはならないはずだった。

久志が目の前から去っていく。それは片思いよりも、禁じられた想いを諦めるよりも、辛く苦しいことだった。諦めようとする想いも悟ろうとする気持ちも、これでは中途半端なまま宙に浮いてしまう。そんな焦燥感が萌子を悪戯に急き立て、見境を失くさせていた。こんなことをして。彼は何かを答えてくれるだろうか。

その答えを、あたしはどう受け止めるのだろうか。

久志は案外早く姿を現した。周囲に気遣うことなく歩み去ろうとするその背中に、萌子はそつと声を掛けた。

「せんせい」

振り返った久志は本当に驚いた様子で、

「……どうした？ 先に帰ったんじゃない」

「せんせいを、待っていたの」

「え？」

萌子が何を考えているのか、彼には全く読めなかったらしい。久

志はしばらくのあいだ戸惑ったように萌子を見つめていた。

「……とりあえず、行こうか」

ここじゃ何だから。誰かに言い聞かせるようにそう呟くと、久志は萌子を促すように歩き始めた。

西の彼方に白っぽい夕焼けを残して、空は露草色から藍色そして紺と色を変え、だんだんと漆黒の闇に飲み込まれようとしている。

二人の周囲はそれより早く、深い闇に包み込まれていた。時折街灯の下を通る際にその横顔が浮かび上がるだけで、もうお互いの表情はほとんど読み取れない。

それが、幸いした。

ほとんど交わす言葉もなく、二人はふくやま美術館と広島県立博物館の間に広がる緑の敷地を通り抜けた。目を合わせることが出来ない気まずさも、暗闇のせいにしてしまえばそれで済んだ。

どうして問い掛けることが出来ないのだろう。あんなに思い詰めて、待ち伏せしたのに。萌子は、いざとなると何を尋ねれば良いのか判らなくなってしまった。何か言わなくちゃ。その言葉だけが思考回路をぐるぐると回り、気持ちばかりが空回りして焦燥感が体を縛り付ける。

でも、一体何を訊けば良いのだろう？

石垣の脇を通り抜け駅前の交差点に差し掛かると、周囲の明かりが増えた。赤信号で立ち止まると、萌子は久志と顔を見合わせた。

何か言いたげな顔をしている、と萌子は思った。訊くのなら、今かもしれない。

「……せんせい」

「あのさ」

萌子の精一杯の決意は、久志の台詞に呆気なく吹き飛ばされた。

「僕、明日東京に行くんだ」

「え？」

「ちよっと、人と会わなければならなくてね」

だから、明日は逢えない。そんなニュアンスを含んだ台詞だった。

明日、逢えない。萌子はそんなことを訊きたい訳じゃなかった。けれども彼女はそれ以上台詞を重ねることが出来なかった。

こんなの初めてだ。

駅の改札をくぐり、ホームへ向かうエスカレーターに縦に並んで乗りながら、萌子はそう思った。

久志とのあいだに、こんなに距離を感じるのは初めてだ、と。

第九章 2つのベクトル（4）

その夜、夜半過ぎから降り出した雨は、翌日の昼過ぎまで絶え間なく降り続けた。

久しぶりの本格的な雨だった。春の優しさを思わせる柔らかな雨足を、南向きの窓から萌子はぼんやりと眺めていた。

この雨の中を、久志は東京へ旅立ったのだろうか。

東京へ何をしに行ったのか、結局最後まで訊けずじまいだった。福山駅のホームや電車の中で、久志とのあいだに会話が全くなかった訳ではない。他愛もないお喋りの合間に、さり気なく尋ねることも出来たはずだった。けれども萌子は久志の態度に勝手によそよそしさを感じ、尋ねることをあつさり諦めてしまった。

（先生は、何を思っているんだろう）

自分が実の妹だと告げた瞬間から、萌子は久志の心が全く読めなくなってしまった。確かに感じていたぬくもりも、夢でも見ていたかのように消えてしまった。

（いつそのこと、本当に夢だったなら）

でも、確かにそれに触れた記憶はこの胸の中にある。

萌子は思わず顔を覆った。

（先生のこともお父さんのことも、みんな夢だったら良かったのに……）

薫が澤崎家を訪ねて来たのは、正午を少しだけ回った頃だった。

「あれ？ 萌子一人？」

勝手知ったる、とばかりに家の中に上がり込んだ薫は、家の中の雰囲気を感じ取って萌子の方を振り返った。

「うん。旅行の準備で出掛けてる……」

「そっか。玲子ちゃん、明日から上海か」

薫はそんな、いかにも羨ましの声を上げて部屋の中を見回す。

「薫……」

「ん？」

萌子のしょぼくれた声に振り返った薫は、萌子の様子を見てびつくりしたように、

「あんた、どうしたん？」

いつの間にか、涙があふれて止まらなくなっていた。薫の顔を見ることが出来ずに、萌子は俯き加減のまましゃっくりをして、

「先生が、立花先生がいなくなっちゃう……」

泣きじゃくる親友の姿を、薫はしばらくのあいだ黙ったまま見つめていた。それから、何も訊かずにそつと頭を撫でた。

薫の顔を見た瞬間、萌子の中で張り詰めていた気持ちが一気に緩んだ。苦しさ、哀しみ、不安。さまざまな思いが一拳に吹き出して来て、堪えていたものが堰を切ったようにあふれ出す。

無理強いすることなく、薫は萌子が泣き止むのをじっと待った。

そして萌子の嗚咽がだんだん収まり始めた頃、彼女はそつと、

「お昼、もう食べた？」

なおもしゃくり上げながら、萌子は小さく首を横に振った。

「じゃあ、ラーメンでも食べに行こうか」

そうして薫は、萌子を雨上がりの街へと連れ出した。

表に出ると、しつとりと冷たい雨上がりの空気が頬を包んだ。二人は坂道を下り、商店街へと足を運んだ。

薫は久志のことにほとんど触れようとしなかった。ただ、『つたふじ』の入り口に並んでいるあいだに、たった一言、

「立花ちゃん、いついなくなっちゃうの？」

そう尋ねただけだった。

「4月になったら。晴美が教えてくれたの。立花先生、東京に呼び戻されているんだって」

視線を逸らし、遠い目をしながら萌子は力なくこう呟く。

「先生、今日東京に行ってるの」

「……そっか」

スープを口にすると、不思議なくらい気持ちが落ち着いていた。急に

空腹感を思い出したように萌子は無心でラーメンを啜った。そんな彼女の隣で薫は、これまた何もなかったように黙ってラーメンを啜った。

「海、見に行こっか」

ラーメンを片付けると、薫はそう言っただけで萌子を港に誘った。

埠頭の上の古びた長椅子に腰掛けて、二人はボーッと海を眺める。尾道水道は今日も穏やかだった。わずかに差し込み始めた陽光が、水面にキラキラと反射している。萌子は一瞬、春の匂いを嗅いだような気がした。

「遠距離は、無理？」

水面を見つめたまま、唐突に薫がそう切り出した。

「え？」

「東京と尾道じゃ、続かなさそう？」

（そっか）

薫は本当のことを知らない。それを知らなければ、萌子の痛みも判るはずがない。

萌子は黙って薫を見つめた。

苦しい、と思った。一人で抱え続けることがこんなに苦しいなんて。一人で抱えることには、慣れていたはずなのに。

「薫」

「ん？」

「あたしたちね、そんな仲じゃないの」

「え？」

萌子は小さく微笑んだ。疲れ切った、諦めの笑顔で。

「遠距離恋愛とか、そんなこと言える立場じゃないの。だってあたしたち、実の兄妹だから」

「なにそれ」

たつぷりと30秒以上黙った後で薫が発した言葉は、どこか嫌悪

感に満ちたものだった。萌子は一瞬、自分が毛嫌いされたのかと勘違いしたけれど、それは違った。

「意味判んないよ、それ」

そりゃそうよね、と萌子は思った。思ったけれど、だからと言って気の利いた説明が浮かぶ訳でもない。答えあぐねた末に、萌子はこの言葉を選んだ。

「あたしのいなくなったお父さんはね、本当は先生のお父さんだったの」

「……どういう意味？」

珍しく顔を強張らせながら、薫がそう問い返した。

時につつかえ、時に言葉に詰まりながら、萌子は懸命に説明した。久志が生まれた時、彼の父はいなかったこと。萌子が4歳の時に、彼の父が帰って来たこと。二人の父が、一時記憶喪失だったこと。

萌子のたどたどしい説明を、薫は小難しい顔をして聞き入っていた。萌子が話し終わっても、まるで見えない通訳の声に耳を傾けているかのように、しばらくのあいだ黙って目を閉じたままいた。

「……しかしまあ」

「え？」

「あんたはホントに、漫画みたいな人生を歩んでいるわねえ」

あの、天使のような微笑みだった。やがて、たつぷりと笑顔を浮かべた薫を見て、萌子は少し安心したように照れた笑みを浮かべた。

「じゃあ、結局お父さんの行方は今も判らないんだ」

薫の問いに、萌子はコクリと頷く。

「お父さんから直接聞かなきゃ、信じられない？」

「そんなことは……」

萌子は足元のコンクリートに目を落として、

「お父さんが描いた絵が、一番の証拠だし」

「……そっか」

長いあいだ、薫は黙って考え込んだ。その隣で萌子は、思ったより穏やかな気持ちで彼女の言葉を待った。

やがて、潮の香りを吸い込むように薫は大きく伸びをした。

「好きになっちゃいけないと判っていても……ね」

「え？」

穏やかなまなざしで、薫が萌子を見やる。

「好きって思ったら、そんな花火みたいにパツとは消えてくれな
いわよね」

「……うん。そうだね」

萌子はそう深く頷いた。

「でもね」

「ん？」

「萌子の気持ちはともかく」

薫は憂鬱そうなため息を吐きながら、

「誰から見てもね、やっぱり二人は兄妹でいなきゃいけないと思
うよ」

「……うん」

「こんな常識ぶったこと、言いたくないけどさ。きっと立花ちゃ
んも同じことを考えているんじゃないかな」

「……」

「萌子のこと、大切に思うなら、さ」

「そう、かもしれない」

薫の言うことは、全てが至極まともなことだった。当たり前のこと
とが、薫の声を通すと砂に染み込む水のように萌子の心に溶け込ん
で来る。なぜだろう。彼女の前では、萌子は不思議と素直になれる
ような気がしていた。

萌子だって、そんなことはとっくに判っているのだ。運命には誰
も逆らえないということ。

久志の優しい人柄も、きっと変わりはないのだろう。ただ、運命
に逆らえないだけなのだ。

「立花ちゃんの未来を、祈る気持ちにはなれない？」

「え？」

薫の諭すような口調に、萌子は顔を上げて彼女を見やった。

「彼が東京に帰るのは、その腕に見込みがあるからなんでしょ？」

「……うん」

「立花ちゃんが萌子のそばでずっと暮らして、彼がそうやって尾道で埋もれていても、萌子は幸せになれるの？」

「それは……」

本当なら出逢っているはずのない人。こんなところで燻っていてはいけない人。萌子はそれも、よく判っているつもりだった。彼の夢を、邪魔してはいけない。

「あたしなら、龍太の夢を応援するよ」

「え？」

薫は優しく微笑んでいる。柔らかく美しいその笑みを見て、萌子はしかしその瞬間彼女のことを、『強い』と感じた。

強がりなのかもしれない。それでも萌子は、そんな風に強がれる薫のことが正直羨ましかった。

「……壊したくない」

「え？」

「先生の夢は、叶って欲しいと思うの」

泣きそうな声で、俯いてコンクリートを見つめたまま萌子はそう呟くように言った。

息を呑むほどの指使い。確かな技量に裏打ちされた、アイデア豊かなその作風。愛しい人の夢というだけでなく、純粹に一人の美術部員として、萌子は久志の絵がどんな評価を受けるのか、見てみたいと思っていた。その絵で世界へ羽ばたいて欲しいと、思っていた。

「でも、まだダメなの」

「どうして……」

「今はダメなの。このままじゃあたし、先生の妹にもなれない」
我がままなのかもしれない。それでも萌子は、このまま久志が東京に帰ってしまうことが堪らなく恐かった。

このまま、久志の心に何も残せないことが。

ベッドの上に放り出しておいた携帯が、突然震えだした。

少しずつ長くなり始めた日の入りの時刻も過ぎ、部屋の中は物の輪郭さえ掴めぬほどの薄闇が広がっている。机に向かい、明かりも点けずにぼんやりと佇んでいた萌子は、呆けたようにメールの着信を知らせる明かりの点滅を見やった。

「誰だろ……」

そう呟いて萌子は携帯を手取る。

『久志携帯』

受信メール一覧の一番先頭に浮かんだ名前を見て、萌子は小さく目を見開いた。慌てて、メールボックスを開く。

『今、東京駅を出るところ。』

お土産、何がいい？』

今時の23歳のメールにしてはやけに簡素なその文章を、萌子はしばらくのあいだじっと見つめていた。その内に携帯の画面が省エネモードになり、その文章は闇に沈んだ。

メールでその瞬間の思いを伝えるのは、案外難しいものなのかもしれない。ましてや久志は、その歳に似合わずメールの出し方が下手くそだった。

浮かれてる。メールボックスを開いた瞬間、萌子はそう思った。

素っ気ないそのメールから、彼の偽らざる気持ちの一端が見え隠れしているように思えた。

（こんなに、苦しいのに）

萌子とはつさにメールの送信元の電話番号を呼び出し、発信ボタンを押す。

『……もしもし？』

駅特有のざわめきを縫って、久志の戸惑ったような声が聞えて来た。

「萌子です」

『うん。メール、見た？』

「……」

萌子は思わず黙り込んだ。携帯の電波を通して、東京のざわめきと尾道の静寂がしばらく行き交う。

「先生？」

『ん？』

「今日、どうして東京に行ったの？」

『え……』

久志が戸惑った声を上げる。そしてまた、携帯の向こうに喧しい沈黙が広がった。

「どうして、何も教えてくれないの」

『……』

「あたしはもう、先生のそばにいちゃいけないの？」

『そんなことは……』

やがて萌子は静かに泣き始めた。心も仕草も表情も、何も伝えてくれない携帯の電波に、萌子の涙声だけが伝わっていく。

『……ごめん』

萌子がひとしきり泣き止むのを待っていたように、久志は短くそう謝った。

『僕も、君のそばにいたい』

「……え？」

思いがけぬ台詞に虚を突かれて、萌子はい瞬間の抜けた声を出した。

『実はね、今度公募展に絵を出品することになったんだ』

「え？」

『詳しい話は帰ってからするけど……』

久志は一瞬ためらい、簡潔に伝える言葉を選び抜いて、

『僕の絵の先生は、もう帰って来いって言っている。公募展に出す絵を制作するならば、それなりの環境に身を置かなければ駄目だ。って。それとね』

彼の声の背後にアナウンスが流れ、慌しい気配が携帯に伝わった。久志の口調が俄かに忙しなくなる。

『もう一つ、絵の制作を依頼されてるんだ。かなり、大きな仕事だ』

一瞬垣間見えた望みが、塵気楼のように崩れていく。

やっぱり彼は、ここにはいけない人なんだ。

『でも僕は、まだ東京には戻れない』

「……え？」

携帯が途切れる寸前、その言葉は幻聴のように萌子の耳に届いた。

『まだ、君を残しては行けないんだ』

第十章 真実（１）

3月の始まりは、真冬を思わせる氷雨が降る１日だった。夕暮れ、尾道駅に降り立った萌子は、思わず傘を持つ手をさすった。

朝から気温はほとんど上がらなかった。雪になるのでは、と思わせるほど冷たい雨が、時に強く、時に北風に煽られて１日中降り続けていた。日が落ちて、更に気温が下がったような気がする。

駅前にも商店街にも、人影は極端に少なかった。雨を避けて歩いたアーケード下には、おもちゃ屋の店先で踊るチンパンジーのぬいぐるみのシンバルの音だけが虚しく響いていた。

（あの時も……）

萌子はふと、久志と初めて逢った日を思い出した。あの時二人で歩いた商店街も、こんな風に閑散としていた。……

アーケード街の途中から道を折れて、狭い路地に入る。突風に煽られながら傘を斜め前に突き出すようにして、萌子は路地の奥へと進んだ。

昨日から玲子は旅行に出掛けていた。3泊4日の予定で、絵心を持つ仲間たちとの海外旅行だ。その間一人分の食事を作るのが億劫で、萌子は『ひこうき雲』でただ飯にありつくことを企てていた。

（勉強もはかどって、眠気覚ましの紅茶も付いて来るし）

本音を言えば、一人きりになるのが恐かったただけなのかもしれないけれど。

尾道水道は今日も、雨を吸い込んで鈍色に低いうねりを繰り返している。こんな雨の日は、全ての事象にあの秋雨の夕暮れを重ね合わせてしまいそうで、萌子は無性に切なさを覚えた。

『ひこうき雲』のドアに手を掛けて、萌子は一息吐いた。手がかじかむほどの寒さが思考能力を低下させ、焦りを増長させる。制服に付いた滴を払う余裕もなく、彼女は山小屋のような分厚いきつね

色のドアを押した。

「千絵ちゃん、こんばん……」

千絵はカウンター席の客と話し込んでいた。気さくな性格の彼女が客と話し込んでいるのはよくある光景だったけれど、萌子は何故か一瞬声を掛けるのをためらった。

「あら」

客の肩越しに萌子に気付いた千絵は、小さく声を上げた。それから、一瞬底意地の悪そうな表情を浮かべて、

「待ってたわよ」

と言うと、目の前の客の肩を突いた。千絵に促されるように、カウンター席の客が萌子を振り返る。

小柄な、初老の男性だった。萌子の姿を認めると、まるで久しぶりに孫と再会したみたいに目を細めた。無論、萌子には見覚えのない男性だ。

「あの……」

「萌ちゃん、こちら小田さん」

「え……」

千絵の紹介を受けて、その男性はすつと席を立った。

「初めまして。小田です」

「さ、澤崎萌子です」

急にどきまぎして、萌子は思わず台詞を噛みながら慌てて頭を下げた。

びつくりするぐらい、穏やかそうな男性だった。『不動産屋の社長』と聞いていたから、もっとエネルギッシュな中年男かと思っていたのだ。あるいは、いかにも千絵が惚れ込みそうなロマンスグレイの紳士かと。

小柄で痩せぎすなその姿には、決してパワフルさもフェロモンも感じられなかった。ただ、相手の心にすつと染み込むような、その優しげで頼りがいのありそうな笑顔だけがやけに印象に残った。

（千絵ちゃん、この人のどこに……）

「やっと逢えた」

「え？」

「君に逢えるのを、楽しみにしていたんです」

「？」

意外な台詞に萌子が目を丸くしていると、小田は可笑しそうに小さく笑って、

「ここで、いいですか？」

と自分の隣の席を勧めた。

ぴよこんと頭を下げて萌子が席に着くと、カウンターの向こうから千絵が、

「何飲むの？」

「んとね。じゃ、アップル・テイ」

「相変わらず、代わり映えしないわねえ」

千絵はそう笑うと、急に思いついたように、

「そういえばね、忠亮さんがあなたに絵のことを訊きたいんだって」

そう告げて、カウンター奥のキッチンに向かった。

「千絵にね、あなたの絵を見せてもらったことがあるんですよ」

『千絵』という聞き慣れない呼び方と、自分の絵を見られたという事实に、萌子は一瞬うろたえた。

「……あたしの絵、ですか？」

「うん」

何て、吸い込まれそうな笑顔を浮かべるのだろう。

萌子はたおやかな小田の笑顔を、しばし呆然と眺めた。それから自然と笑みが浮かべた。

見る人をいつの間にか笑顔にさせる笑顔。小田の柔らかな表情を見て、不意に千絵が彼に惹かれる意味が判ったような気がした。

「ひまわりを描いた絵が、あつたでしょう？」

「……ええ。中学生の頃に、描きました」

小田は親子ほど歳の離れた、下手すると孫でもおかしくない年端

の行かぬ少女に、それでも敬語を使つて来る。それは決して不快な響きではなかった。

ひまわりの絵とは、彼女が中学3年の夏に向島のひまわり畑で描き上げたものだ。千絵と玲子のいる前でそれを披露すると、二人とも、

『元氣が出る絵ね』

と褒めてくれた。そして、

『店に飾りたい』

と言い出した千絵に、『お店に飾ったら、2度と口聞かないからね』と念を押して、萌子はその絵を譲ったのだった。

「あの絵、今うちにあるんですよ」

「ええ?!」

萌子はそう目を丸くしてから、カウンターの向こうを睨んだ。千絵がこちらを見やって、ペロツと舌を出す。

「千絵にどうしても欲しいってお願いしてね。僕の子供たちも、普段は僕のやることをけなしてばかりなのに、あの絵のことだけは褒めてくれます」

そんなことを言う小田の口調は、実に屈託がない。それでも萌子は、彼と千絵の歳の差や彼の死に別れた奥さんのことなどをつい意識してしまった。

「他でも、あなたの絵を見たことがあるんですよ」

「え?」

「前に、県のコンクールで優秀賞が何かに選ばれたことがあったでしょう?」

「……ええ」

「その時の展示会に行つたんです。千絵と二人で再び、千絵の方を見やる。彼女は微笑んで小さく頷いた。

「凄く、上達してた。僕は全くの門外漢だけど、そんな僕でも『上手くなつたな』と思うくらい」

「そんな……」

萌子は照れたように俯いた。えらい惚れ込まれようだ。慣れない褒め言葉がこそばゆいような気がして、でも萌子はやっぱり嬉しかった。どんなに著名なプロでもどんなに無名な素人でも、原点は一緒なのだ。評される、ということが物を作る原動力になるのは。

「今度、私のために描いて下さい」

「え？ でも……」

「私のオフィスを明るくするような、心暖まる絵を」

「そんな……」

萌子は困ったような顔で、助けを求めるようにカウンターの奥を見やった。千絵は俯いたまま何か作業をしている。

「あたしの絵なんか……」

そう遠慮しかかった萌子の言葉を遮るように、小田は萌子の方に掌を向けて、

「ストップ」

と声を掛けた。それから何だか嬉しそうに微笑んで、

「過信するのは良くないけれど、自信を持たないのはもっと罪なことですよ」

「……」

「僕が君を褒めても何の得もない。そんな僕が言うのだから、少しは信じてもいいんじゃないですか」

「……はい」

不思議だった。薫や千絵とはまた違った透明さで、彼の言葉は萌子の心の中にずっと染み渡った。薫の聡明さや千絵の優しさから来るものとは違う。人としての大きさが、萌子をそっと包み込み、素直にさせる。

（そっか。千絵ちゃんはきつと……）

「萌ちゃんは、もっと自信過剰でもいいのよね。賞も取ったし、今度は萌ちゃんの絵がポスターになるんだから、ね」

カウンターの奥から、そんな茶化するような千絵の声が飛んで来た。
「千絵ちゃん、それは！……」

萌子が慌てたように腰を浮かす。その隣で小田が『ほお』という顔つきになった。

「おともだちをモデルにした絵が、弓道の全国大会のポスターになるんですって」

「千絵ちゃん、まだそれ決まった訳じゃ……」

『おともだち』とは、薫のことだ。昨日二人で『ひこうき雲』に来て、千絵の前でそんな話をした。

それは、月曜日に久志から聞かされた話だった。

「それに、あたしの実力じゃないもん。薫がポスターになるくらい可愛いつてだけでしょ」

元はといえば、薫が受けた雑誌の取材が原因だった。『日本の伝統を受け継ぐ美少女アスリート』という特集記事で、薫のことが記事になったのだ。他に剣道や柔道の選手なども載っており、特集の内の一入という設定だったけれど、その中でも薫をカラーページのトップに持つて来るなど、明らかに彼女を『主役』扱いした記事だった。

雑誌が発行されてから、しばらくは校内でもかなり話題になった。千絵も雑誌を買い込んで来て、常連客に見せびらかしたりしていた。県の高校弓道連盟からポスターの話が来たのは、そんな騒動が治まりかけた頃だった。

最初の話は、今度広島で開かれる全国大会のポスターのモデルを薫に勤めて欲しい、というものだった。もちろん、あの雑誌を見て依頼して来たのだ。

雑誌の内容にすっかり困惑していた学校側は、薫がこれ以上『客寄せパンダ』扱いを受けることに拒絶反応を示した。彼女の両親も、娘が見世物になることに過敏になった。

その内誰かが言い出したのだ。『澤崎さんが賞を取った、水谷さんを描いた絵。あれをポスターにすれば良いじゃないか』と。

秋から冬にかけて描いていた薫の肖像画を、萌子は久志に言われた通りに絵画展に出展してみた。それが優秀賞を受賞した、と連絡

が入ったのはつい先週のことだ。

「賞を取った絵をポスターに活用出来るか、まだ判らないみたいよ」

「あら、そうなの？」

千絵は目論見が外れたように少し残念そうな顔した。でもそれは瞬きほどの出来事で、彼女はすぐにおっとりとした顔つきになって、
「でも、弓道連盟の人たちはOKを出したんでしょ？」

「……うん」

「ならば、萌ちゃんの実力も認められたってことよ」

「そっかなあ……」

小首を傾げ苦笑いを浮かべながら、萌子は小田の方を見やる。

彼は穏やかな顔で軽く頷いた。慈愛に満ちた笑顔に触れて、萌子は慌てたように視線を逸らした。

「さて、と」

萌子の前にアップル・ティを差し出しカウンターを出た千絵は、
エプロンを外しながら、

「ちよつと店番していてくれる？」

「どこ行くの？ 外、凄い雨だよ」

「砂糖、切らしちゃったの。『健康のためにそのまま飲み下さい』って訳にもいかないし、ねえ」

「心配しなくても、もう客は来ないんじゃない？」

萌子がそう皮肉ると、千絵は彼女を睨みつけるふりをして、

「あんたの晩飯も、作れなくなるかもよ」

「行つてらっしゃいませっ！ お姉さま」

急にかしこまった萌子のその横で、小田がいかにも可笑しそうに微笑み続けていた。

「……じゃ、忠亮さんのこと、よろしくね」

千絵はそう言い残して、氷雨の中を出て行った。

当たり前のように、ずっと会話が途切れた。普通なら居心地の悪くなりそうなその間も、小田は意に介することなく飲みかけのコー

ヒ―を口に運ぶ。

不思議な空間だった。普段の人見知りの激しい萌子なら、緊張して紅茶のカップを忙しく口に運んでいるところだ。でも、今の萌子は実にゆったりとした気分で、アップル・ティの甘い香りを鼻腔で味わう余裕さえ持ち合わせていた。

萌子は、小田の柔らかな面差しをそつと盗み見た。

（なんで、逢いたくないなんて思ったりしたんだろ）

確かに、萌子は小田と遭遇することを避けていた。それは中学2年の多感な少女の心に、千絵と小田の関係が決して純愛とは映らなかったからだ。死に別れたとはいえ妻を持ち子を持つ小田と、親子ほど歳の離れた千絵の間柄に、彼女は自分と母を捨て去った父を無意識の内に連想していたのかもしれない。

でも、本当は逢ってみたかったのだ。

敬愛する千絵が愛した男性。奔放だけれど、千絵は決して秩序を乱してまで己の本能を満たそうとする人ではない。だからこそ萌子は、そんな彼女が愛した男性に本当は凄く興味があったのだ。

萌子の視線に気付いた小田が、面映そうにはにかむ。

「何か？」

「あ、いえ……」

萌子は何となくもじもじとして視線を逸らしながら、

「小田さんは、千絵ちゃんと離れていて寂しくはないんですか？」

そんな不躰な質問にも、小田は笑みを絶やすことがなかった。しばらくにはこやかな顔で萌子を見つめた後で、

「寂しいですよ」

と、ちつとも寂しくなさそうな口調でそう言った。それから、

「立花先生、どこかに行ってしまうんですか？」

「えっ……」

「いや、すまない」

小田は申し訳なさそうに視線を落として、

「千絵から話を聞いているんです。君と、立花先生のことを」

「……私たちが、兄妹だつていうことも？」

「……ええ」

少し驚いたけれど、萌子はそれほど不快な気持ちにはならなかった。説明が省けて、むしろ好都合に思えたくらいだ。

「……先生、東京に帰るんです。春になったら」

こんなこと、今日逢ったばかりの人に話して何になるんだろ。萌子はそう自分に疑問を投げ掛けながら、気が付くとそんな台詞を口にしていた。

確かに、親友は萌子の気持ちを悟ってくれた。心優しき叔母の忠告も、とても良く理解出来た。みんな優しいし、彼女の周りを囲む人々はいつだって彼女の気持ちを気遣ってくれる。

本当は意固地になつているだけなのかもしれない。そう思うこともある。本当は自分の進まなければいけない道を、頭のどこかで理解しているのかもしれない、と。

それでも、萌子は自分の想いにどうしても逆らうことが出来ずにいた。

久志がいなくなると知った瞬間、萌子ははつきりと悟った。捨て切れない愛執の念を。どんなに綺麗ごとを並べてみても、その刹那に胸を貫いた衝撃には敵わなかった。

「本当は、こんなところにいてはいけない人なんです、先生は。こんなところで立ち止まつていては。あたしは」

あたしは。そう言いさして、萌子は一瞬言葉に詰まる。

「あたしは、先生にくじけて欲しくない。この街で、先生の才能が朽ち果てていくのを目の前で見たら、絶対に後悔するって判つてるんです。でも……」

萌子のぶつけるような激しい口調にも、小田は動じることがなかった。そんなこと判っていたよ、とでもいうように、黙ったまま目で萌子を促す。

「……我がままなのかもしれない。こんな欲張りなの、自分でも嫌なんです。でも、今先生と離れたら、何も残らなくなる。何も、

なかったことになってしまふ」

「どうして、そう思うのですか？」

穏やかな問い掛けだった。優しく包み込むような口調で、小田はそう尋ねる。萌子は反射的に顔を上げて、小田の目を見つめた。

「どうして、何も残らないと」

「……」

「遠く離れてしまったら、立花先生は2度と君のことを想い出さない？」

「それは……」

小田はフツと弛緩したため息を漏らした。それから何かに思いを馳せるように表情を緩ませて、

「どうして、僕たちが広島と尾道に離れて暮らしていると思います？」

「え？」

小田は悪戯っぽい顔で萌子を見つめていた。喉元まで出かった台詞を躊躇すると、そんな萌子の心を見透かしたように彼は、

「僕の子供たちはね、僕が千絵と離れて暮らしていることに反対しているんです」

「……え？」

「もちろん、積極的に一緒に住もうとは言いませんけどね。私が広島で家を借りて、そこに二人で住めば良い、と。千絵と交際していることは、誰も反対していません」

「そう、なんですか……」

「千絵につき合おうと言った後で、僕は子供たちを説得しました。『再婚したい人がいる』と」

笑っているけれど、小田の目つきは真剣だった。真剣で、真摯だった。

「最初はみんな怪訝な顔をしました。真っ向から反対された訳ではないけれど、やはり二人の歳の差や死んだ妻のことをとやかく言われたりしました。しばらく時間がかかって、それでも子供たちは

言ってくれたんです。『じゃあ、1度会ってみよう』って」

「……」

「子供たちを説得していることを、千絵には話ませんでした。全てが上手くいってから、彼女を喜ばせよう、と。子供たちが会いたいと言ってくれたところで、僕はようやく千絵に切り出したのです」

小田の笑みの中には、幾分苦いものが混じっているように見えた。

「彼女の答えはこうでした。『仕事を辞めて、尾道に帰る』と」

小田が突然身の上話を始めたその真意を掴めぬまま、萌子は先を促すために小さく頷いてみせた。

「つき合い始めた当時、彼女はうちの会社で経理として働いていました。途中入社だけど、非常に有能で僕自身も会社としてもとても頼りにしていたんです。彼女が会社を辞めると言い出した時、僕はすぐに考えました。こんな関係になって、社長である僕に鼻厘にされているように見られるのが、きつと嫌なのだろう、と」

冷めたコーヒーを口に運ぶその横顔は、やはり少しだけ苦笑いを浮かべている。

「そうじゃなかった。僕が何も言わないでいるあいだ、彼女は彼女なりに考え、彼女なりの答えを導き出していたのです」

「？」

「彼女には、この街で店を構える夢があった。そして、このまま広島に居座っていてはその内に僕の迷惑になる。ならば、尾道へ帰ろう、と」

「……」

「僕はしまった、と思いました。もう少しちゃんと僕の意志を彼女に伝えていれば、彼女の考えは変わっていたかもしれない。何も伝えなかったばかりに彼女に辛い思いをさせ、辛い決断をさせてしまった……」

「……」

「彼女に想いを告げようと思った時もそうでした。彼女が僕の前

に現われてから2年間、僕は何も言うことが出来なかった。出逢った時から彼女に惹かれていたのに、僕との歳の差や僕と彼女を取り囲む環境に気を取られていたんです。僕は僕なりに一所懸命考えたつもりだけど、結局僕のやっていたことは、彼女を苛立たせ、彼女に諦めの気持ちを抱かせただけでした」

過ぎた過ちを笑い話に変える。そんな口調の後で、小田は不意に真面目な顔つきになって、

「君は、立花先生の声を聞いてますか？」

「え？」

「人はね、言葉を交わせるから、他の生き物とは違うんですよ」
小田はそう言うと、ゆっくりと優しく頷いた。

「男はね、案外口下手なんです。ちゃんとはつきりとしないと、なかなか口に出せない。でも、ちゃんと考えているものなんです」

「……はい」

「大切な人のことならば、必ずね」

確かに、私はまだ何も聞かされていないかもしれない。萌子はそう思った。兄妹だという事実を告げてから、まだ1度も久志の本音を聞いていない。それを悪い方向に捕らえたり投げやりになったりしたのは、全て自分が勝手にしたことだ。

（先生は、本当にあたしのことを……）

「立花先生は、いつこの街を離れるのですか？」

「……たぶん、4月には」

萌子の呻くような返事に小田は軽く頷いて、

「ならば、もうすぐだ。きっと彼はちゃんと答えを出してくれると思いますよ。そう遠くない未来に」

「……そうでしょうか」

「君の好きになった人は、そんなにいい加減な人なんですか？」

「え？」

萌子の戸惑った顔を諭すように、小田は静かに微笑む。

「君の精一杯の気持ちを思いやってやれない。もし彼がそんな男

なら、こつちからぶちかましてやればいいんです。『東京でもどこでも、とつとつ行つちまいな』ってね」

突然女声を上げて小田が茶化したように叫ぶのを、萌子はしばらく呆氣に取られて見ていた。

「あれ？ 滑った？」

小田がそう真顔に返った瞬間、萌子は思わず吹き出した。

「……君も」

萌子につられるように相好を崩しながら、小田は言葉を重ねる。

「え？」

「君も、自分の気持ちをはっきりと伝えなければいけないですよ」

「……」

「半分兄妹であるという事実、君たちがどんな結論を下すのか。それは君たち以外、誰にも判りません。どれが二人にとつて一番幸せを感じ続けることが出来る道なのか、二人でよく考えて、二人でよく話し合わなければならない」

千絵は。そういさして、小田はしばらく黙り込んだ。選りすぐりの言葉を探すように、思案げな顔をした後で、

「千絵が尾道に戻ると言い出した時、僕は彼女に思い留まってもらおうと必死に謝りました。でも、違つたんです。彼女は言いしました。『私はあなたの、公平なパートナーでいたい』と」

「……」

「それは彼女の決意でした。無骨な結論かもしれないけれど、精一杯考え抜いて自分なりの生き方を見つけられる。そんな千絵のことを、私は今も誇りに思っています」

だから。そういさして、小田は萌子に向かって力強く微笑んだ。「君も彼の決断に頼ることなく、君なりの答えを探さなければ。」

私が誇りに思った、千絵のようにね」

小田がそう言った刹那、山小屋のような分厚いきつね色のドアが開いて、千絵ご自慢のスイス製のカウ・ベルがカランカランと小気味良い音を立てた。

第十章 真実(2)

「あら、萌ちゃん学校は？」

澤崎家の裏から千光寺山へ続く細い路地の途中で、萌子は近所のおばさんからそう声を掛けられた。

「今日は卒業式があつたから、午前中に終わつたんです」

「あら、もうそんな時期なんねえ」

その女性がそうほんのちよっぴり感慨深げな顔をした後で、

「精が出るわね」

と優しく微笑みかけたのは、萌子が小さい体に不釣り合いなイーゼルを抱えていたせいだろう。

自分を幼い頃から知るその女性と、萌子は照れたように小さく会釈して別れた。

福山女子高校の卒業式は、毎年3月の第1週の日曜日に行われる。今年は3月3日がその日だった。午前中の式典に出席すれば、その日の在校生に用はない。

萌子は帰宅すると、昼食もそこそこにイーゼルを抱えて再び家を出た。

風が冷たい。真冬に戻つたような1日だった。それでも、陽だまりには微かな春の匂いを感じられる。

まるでわたしの気持ちみたいだ。萌子はそう思った。暖かい、と思つた時は全て幻で、すぐに薄暗い冷凍庫の中のような冷たさに晒される。

でも、季節ならいつか春を迎えるのだ。なのに、わたしには……。千光寺山中腹の展望台の周辺に、人影はほとんどなかった。こんなに寒い平日の昼間に散策したり絵を描いたりする人間は、よつぽど奇特かよつぽど暇なのだろう。

イーゼルを据える場所はそこら中にあつたけれど、萌子はあえて展望台のそばを離れて、公園の奥まったところにある庭園風の芝地

に踏み込んだ。

その先に、いつか二人で見た景色がある。

あの日、金色に染まっていた光景は、澄んだ午後の光に包まれて透明に輝いていた。

萌子は足場を選んでイーゼルを据えると、その上に大きなキャンバスを置いた。

そしてそのまま、しばらくのあいだ黙って景色を眺めていた。

（あの日……）

あの日、自分がこの世で一人ぼっちじゃないと知った。その瞬間、それまで感じていた久志への仄かな憧れは、確かな愛おしさへと変わった。

あれから、何度坂道を転げただろう。何度崖から落ちただろう。ぼろぼろになって、砕け散って、こんなに削れて。

それでも、この胸に小さな欠片が残っている。使い古した石鹸のような欠片が。

気付かぬ内に、涙が頬を伝っていた。

「なんか、おかしいの……」

一人苦笑いを浮かべながら、萌子は涙を拭った。けれどもそれは後から後からあふれ出して来て、萌子はその内に泣き笑いみたいな表情になった。

（わたし、今でも好きなんだ）

やっと素直な気持ちになれた。萌子はそう思った。4ヶ月前、この景色を見ながら抱いた気持ち。あんなにいろんなことがあって、それでもまだ同じ気持ちがこの胸の中に、ある。

下唇を噛み締めて、それでも堪えきれずに萌子は短い嗚咽を漏らした。

何だか無性に悔しかった。自分に与えられた運命も、振り切れぬ未練も。今、彼女を取り巻く全てのことが堪らなく悔しかった。

でも、もう終わらせなければいけない。

『君なりの答えを探さなければ』

一昨日小田にそう忠告された瞬間、萌子は皮肉にも自分の我がまを捨てて決意をした。

『まだ、君を残しては行けないんだ』

携帯越しに聴いた、久志の苦しそうな声が脳裏に蘇る。

大好きだから。だから、もう苦しめたくない。

それが、萌子の答えだった。

好きな人の胸に残ることが叶わないのならば、せめてこの胸に残る好きな人の面影が優しいものであつて欲しいと思った。今でも好きだから、きつといつまでも好きだから、この胸の痛みが消えるまでは、大好きな人の笑顔を覚えていたかった。

涙を拭くと、萌子は視線を上げて遠い景色を見やった。

(いくつも……)

久志と、この街の美しい光景をいくつも見た。

雨上がりの街。ベッチャー祭り。千光寺山の夕暮れ。あのアパートから見下ろせる、尾道の風景。御袖天満宮の階段。ゆつたりと揺れる、尾道水道。

久志は、この街の風景を好きだと言ってくれた。大好きな人が自分の故郷を愛してくれることは、自分を愛されるのと同じくらい嬉しいことだった。

この街の景色を、いつまでも美しい思い出にして欲しいと思った。いつまでも、覚えていて欲しいと思った。

たとえ、自分のことを想い出さなくなっても。

また、涙があふれて来た。萌子はもう、自分でも何に対して泣いているのか、判らなくなっていた。

終わりを告げる。それが、自分に出来る精一杯のこと。

あふれる涙を必死に拭くと、萌子はキャンバスに向かった。真ん中に1本の線を引き、それから眼下に見下ろせる雑多な街並みを丁寧にスケッチし始めた。

苦しくて、でもときめいていた二人の想い出を、その筆先で封じ込めるために。

「萌子」

聴き慣れた声で発する、聴き慣れた呼び名。でも、それはこの場には相応しくない呼び方だった。

廊下の片隅で久志にそう呼び止められて、萌子は驚いたように振り返った。

土曜日の午後の校舎には、確かに人影は少ない。それでも生徒が全くいなくなつた訳ではなく、たとえ小声でも誰かに聞き咎められる可能性は否定出来ない。

「先生……」

歩み寄つて来た久志を咎めるように、萌子は小さく睨む。けれども、彼の顔色を読み取るとすぐに彼女は表情を改めた。

（どうしたんだろ）

久志は硬い表情を浮かべていた。日当たりの悪い廊下にいるせいか、その顔が土気色をしているように見える。

そう。まるで彼は、何かに怯える子供みたいな顔をしていた。

「萌ちゃん」

萌子のそばまで歩み寄つた久志は、微かに耳に届くほどの囁き声で彼女の名を呼んだ。

「明日、時間あるかな」

「え？」

「一緒に、行つて欲しいところがあるんだ」

その刹那、理由のない不安が不意に萌子の胸を襲った。

久志の暗く沈んだまなざしの奥に、萌子はまた一つ絶望を見たような気がした。これ以上悪いことなんて、起こるはずがない。そう思う傍らから、急に駆け出してしまうような焦燥感が迫り上がって来る。

「どこに？」

尋ね返す、声が震えた。

逃げ出してしまいたかった。これ以上、何を失えばよいのだろうか。やっぱり、久志を想う気持ちは根こそぎ奪われてしまうのだろうか。

「……父さんのところに」

「……え？」

父さん。忘れかけていたその単語を耳にして、萌子は不意に胸を突かれた。びっくり目のまま、呆然と久志を見やる。

「父さんの居所が、判ったんだ。一緒に、会いに行つて欲しい」

久志もまた、声を震わせていた。

穏やかな昼下がりの静寂な校舎の中で、二人はまるで濁流に飲まれ中州に残されたように、なす術もなくなつただち立ち尽くしていた。

第十章 眞実（3）

欠伸を見られているのに気付いて、萌子は慌てて手を口にやる。それから彼女は、睨むように久志を見つめた。

「眠そうだね」

変わらない穏やかな顔つきで、久志がそう笑う。

「そりゃ、早起きしましたから」

萌子の台詞に久志は、今度は可笑しそうに笑い声を上げた。

「早起きつて、駅に着いたのは9時半を過ぎてたじゃないか」

「……休みの日は、午前中に起きることが早起きなんです」

昨夜はなかなか寝つけなかった。まどろみの中で夜が明けたことを知った。そうして萌子は結局寝過ごしして、9時前に慌てて飛び起きたのだ。

何度も、踏切の向こうに去った父の顔を思い出そうとした。明日父に逢った時に、その顔を見分けられるように、と。けれどもそう思えばそう思うほど、記憶は彼方へと遠ざかり、父の姿はどんどん小さくなった。

目覚めてから、ずっと心臓が高鳴っている。尾道から三原に出て新幹線に乗り、広島で在来線に乗り換えても、その胸の震えは治まらなかった。

父と逢う。それは、13年間ずっと想像し続けていた瞬間だった。（それを、こんな気持ちで迎えるなんて）

ずっと描き続けて来た至福の瞬間。それが今、絶望の瞬間へとすり替わろうとしている。

『今度こそ、間違いなく見つけた』

仄暗い校舎の片隅で、久志は確かにそう言った。たったそれだけだったけれど、萌子はその一言で今度こそ父に逢えることを確信していた。

もう、逃げられない。自分と久志のあいだにある全てが、白日の

下に晒されるのだ。もつと曖昧に、いつものようにごまかしてしまおうと思えば、出来ないこともなかったはずなのに。

（後悔してばかり）

自分の人生は、いつだってそうだ。萌子はそう思った。おろおろと戸惑ってばかりで、何かを思いついた時にはもうその場所から流されている。何をしても、その繰り返しだった。

二人を乗せた徳山行きの快速『シティライナー』は、１１時ジャストに広島駅を発った。今は五日市の駅を後にしたところである。ここからちょうど１時間かかる。昨夜『柳井』という街の名を地図で調べた時には、こんなに遠いとは思わなかった。尾道から見てその街は、安芸灘を挟んだ向こう岸にあるように思えたからかもしれない。

父が、同じ瀬戸内海沿いに住んでいる。それを知った時に萌子は、（お父さんはまだ、尾道を忘れられないのかもしれない）

そんなことを思ったりもした。けれども、こうして電車を乗り継いでみると、やはり遠く感じられる。その距離は、そのまま父と萌子たち親子との距離のようにも思えた。

宮島口駅を過ぎる辺りから、列車の左手に大きな島影が見え隠れし始めた。

「厳島だ」

久志がそう小さく呟く。

「……ここ、遠足の時に来た」

「へえ」

萌子の台詞に、久志はさも羨ましそうに反応して、

「尾道の子供は、遠足で厳島神社に行けるのか。いいなあ」

「東京の子供は、遠足でデイズニールランドに行けるんでしょ？」

「……んな訳ないだろ」

久志は思わずそう吹き出してから、

「結局、厳島神社も原爆ドームも見に行けなかったなあ」

ポロリとこぼれたその終止形の台詞に、萌子の胸は痛んだ。

この柳井への旅で、彼は何かを決着をつけようとしている。そんな理由のない予感が、萌子の胸に訪れ、そつと心を苦しめた。

岩国駅を過ぎると、やがて列車の左手に瀬戸内海が見え始めた。

内海らしい穏やかさを携えたその景色は、けれども間違いない。『海の景色』だった。うらかな春の陽射しにさんざめく波の向こうに、四国の島影が見える。

たおやかなさざ波が立つ尾道水道を見慣れた萌子にとって、それは久々に見る海岸線の風景だった。

その風景を見た刹那、萌子は何の脈略もなく父の存在を遠く感じた。

尾道から2時間半。東京や大阪より遥かに近いはずなのに、その距離はどこか彼女を拒絶しているような気がする。

久志と自分のあいだに流れるもの。今日判るのはそれだけじゃない、と萌子は思った。あの4歳の時の踏切の光景。あの瞬間、萌子たち母子は捨てられたのだということもまた、白日の下に晒されるのだ。

自分との再会を、きつと父さんは望んでいない。萌子はそう思った。

(どうして……)

どうして、ここまでついて来てしまったのだろう。

「……せんせい」

「ん？」

目に鮮やかな瀬戸内の海を眺めながら、萌子は久志に質した。

「どうして、お父さんが柳井に住んでいるって判ったの？」

答えは返って来なかった。萌子が不審げに顔を戻すと、久志はその鳶色の瞳で、じつと萌子を見つめていた。

「……」

やがて久志は黙ったまま、ポケットから紙を取り出して萌子に差し出した。

「？」

B5サイズのコピー用紙の真ん中に、それは写っていた。ハガキ大サイズの いや、それこそハガキそのものをカラーコピーしたものだ。どうやら年賀ハガキの裏面をコピーしたものらしく、自分たちで取り込んだ写真が上半分に、その下にありきたりな賀正の挨拶が印字されている。

そしてその最後に、二人の名前があった。

葛生 芳久

摩耶

「父さんだよ」

「え？」

そう顔を上げた萌子に、久志は写真の中の男性を指し示した。久志の指につられるように、萌子は再び紙に視線を落とす。

40代後半と思われる1組のカップルが、陽だまりで微笑んでいた。どこかの観光地で撮影したものなのだろう。石碑の前にちよこんと座るその姿は、何故かとても小さく見える。

知らない顔だった。自分の父だと示されたその男性の顔に、萌子はどうしてもその面影を見出すことが出来なかった。あんなに焦がれていたはずなのに、その顔すら思い出せない自分が無性に苛立たしかった。

「葛生って、父さんがうちの婿養子になる前の旧姓なんだ」

じつと写真を見つめる萌子に、久志は柔らかな声でそう告げる。

「え？」

「うつかりしていたよ」

久志は薄笑いを浮かべて、

「本当なら、うちのじいさんの戸籍に父さんの名前も残っていないければおかしいんだ。でも調べてみたら、父さんが失踪する直前に母さんと離婚したことになっていた」

「……」

「父さんがやったのかそれとも他の誰かがやったのか、判らないけど。これなら父さんは失踪したのではなく、普通に母さんと別れて家を出て行ったことになる。どこで、誰と暮らそうと、何の問題もない」

「この摩耶さんって……」

「そう。僕たちがこないだ大阪で捜した、父さんが昔つき合っていた女性だよ」

久志は穏やかに、本当に穏やかに言葉を紡いだ。

「この年賀状は、摩耶さんとアトリエにいた頃につき合いのあつた人にコピーさせてもらったんだ」

「……？」

「摩耶さんの行方なら、昔の知人をくまなく当たれば見つかるんじゃないかと思ったんだ。彼女は別に、大阪から身を隠した訳じゃないし」

「なんで……」

「ん？」

「なんで、お父さんがこの女性と一緒にいると思ったの？」

「今度も返事はなかった。哀しいような、切ないような、憂うような。ほんの少し唇を歪ませて、久志は何か物言いたげな顔で黙ったまま萌子を見つめていた。」

「……父さんを、見つけようと思った訳じゃないんだ」

「え？」

やっと吐き出された久志の台詞に、萌子は戸惑った。

「父さんのことをこの人に訊きたいと思って、この人を捜してたんだ。父さんが見つかったのは、ホントに偶然。もちろん、父さんに直接尋ねた方が良くいことなんだけどね」

（先生は、何でお父さんに逢いたいんだろう）

以前、大阪に父を訪ねようとした時にちらりと脳裏をかすめた疑問が、今度こそはつきりと萌子の胸の中に頭をもたげて来た。

萌子だつて、もちろん父に逢いたかった。こんな風にそれが哀しい事実となつてしまつた今でも、それでもやっぱり父に逢いたいという気持ちは残っている。久志は萌子と違つて、物心ついた後にもう一度父と別れているのだ。逢いたいという気持ちは余計に強くても何の不思議もない。

でも、それだけじゃないような気がした。

久志はただ父の行方に執着している訳じゃない。はっきりと目的を持つて、その背中を追いかけているような気がする。

知りたいのは、父の居場所ではない。それが判るのなら、相手は別に父じゃなくても良いのだ。

『親でないと判らないことだつただけだね。母にはもう訊くことは出来ないし、父とはきつともう2度と会うことはないから』
久志が確かめたかったこと。それは、父親の行方や足跡ではなかったのだろうか……。

萌子は、自分が何かとてつもない勘違いをしているような気がして来た。

（何を……）

柳井という街に、彼が確かめたいというどんな事実があるのだろう。1駅1駅近付いて来るその目的の地に、萌子は言い知れぬ不安を覚えていた。

第十章 眞実（4）

柳井駅は、何の変哲もないよくある地方都市の駅だった。角張った味気ない駅舎も、タクシーが数台眠そうに佇むロータリーも、日本のどこかに似たような光景がありそうな気がする。駅名を隠されてこの景色を写真で見せられたら、きつとどこの駅前か答えることは出来ないだろう。

「ちっちゃい駅だな」

駅舎を出て振り返った久志がそう呟くのを聴いて、萌子は思わず笑ってしまった。

「それでも、尾道駅よりは大きいよ」

「うーん、確かに」

久志は腕組みしながら唸るように頷いて、

「尾道駅は、とても観光地の表玄関には見えないからな」

柳井は白壁の通りが有名なのだと、萌子は列車の中で久志にそう教えられた。言われてみれば、そこここにそれらしき案内が確かにある。それと、名物なのかやたらと目立つ金魚の作り物。

けれども、駅前の雰囲気は観光地とは思えぬほど静かだった。件の白壁通りも駅から少し離れているらしく、そこから見える景色は日本中にある中小都市の風景と、何ら変わりがない。

駅前にある住宅地図を少しだけ眺めた久志は、迷うことなくタクシー乗り場へ向かった。

「この辺りに行きたいんですけど」

久志がそうはがきのコピーにある住所を見せると、運転手は少し顔をしかめて、

「……小学校の辺りかな」

「いや、ちょっと初めて来た街なんで、良く判らないんですけど……」

「川向こうは古い街だから、ごちゃごちゃしていて現地まで辿り

着けんかもしれんよ」

運転手はそう言つと、その番地に程近い小学校の名を挙げた。

「その辺りで降りて、探した方が早いかもしれん」

「じゃ、そこまででいいです」

久志はそう了承すると、萌子に向かって、

「また無くなってなきや、良いけどね」

と下手なウインクをしてみせる。

無くなつてしまつていても良い。久志の台詞にぎこちない笑顔を浮かべながら、萌子の胸の中を一瞬そんな罪深き気持ち横切つた。タクシーに乗つた瞬間、萌子は狭い箱の中に押し込まれた子犬のような気分になつた。このまま父の前に差し出されそんな気がして、反対側のドアから逃げ出したくなつた。

久志と出逢う前なら。久志を半分兄と知る前なら。タクシー乗っている時間さえ、長く感じられたのだろうか。

「お客さんたちは、白壁通りには行かんのかい？」

少し方言交じりに、運転手はそんな問いを投げ掛けて来る。

「ええ。知り合いを訪ねて来たんで」

「そうかい。帰りに時間さあつたら、見て行かれるとええ。案外ええとこだから」

見知らぬ他人に、私たちはどう映っているのだろう。そんなことを思いながら、運転手の気さくな台詞に萌子は愛想笑いで答えた。

決して歴史的価値はなさそうな、でも古びた街並みをタクシーは進む。陽射しがあふれる眩いフロントガラス越しの風景を、萌子はその行く先を見極めようとするかのようにじつと凝視していた。

タクシーに乗車していたのは10分ほどだっただろうか。住宅街に埋もれるようにして建つ小学校脇の歩道に運転手は車を横付けた。

「その向こうが、その番地の辺りだから」

観光地のせいか、その運転手は最後まで親切だった。彼が指し示すほうを一瞬見やつてから、二人は神妙な顔で小さくお辞儀をした。日曜の午後にしては、やけに静かだった。フェンス越しの校庭に

も、無論人影はない。今の二人にはひどく場違いな、優しく暖かい春光が辺りを包んでいた。

「こつち、かな」

電柱の住宅表示を見比べて、久志が頼りなげに歩き出した。

決して豪勢ではないが、落ち着いた雰囲気のある街並みである。『二人が大阪から逃げ込んだ』 萌子の中にそんな意識があつたせいかもしれないが、その光景は彼女の目に意外なほど美しい佇まいに映つた。

（こんなところに……）

父はいるのだ。13年間、萌子が捜し求めていたはずの父が。

「結構番地が飛んでるな……」

久志はそう呟くように言うと、近くを歩いていた初老の夫婦連れに近寄つた。道を尋ねるつもりらしい。

その刹那、萌子の脳裏にあの夕暮れ的情景が唐突に蘇つた。

踏切の向こうへと渡る大きな背中が。

「あの、この辺に葛生さんっていう家はありますか？」

久志の声に振り返つた男性は、何故かびつくりしたような目をしていて。声を掛けて来た久志の顔を見、その背後にいる萌子の顔を見やる。そしてまた久志の顔に見入つた。連れの女性も、怪訝そうな顔で萌子たちを交互に見やつた。

久志の顔をしばらく凝視していた男性の表情が、やがて全ての感情を消し去るように無表情に凍りついた。

「……父さん」

萌子に背を向けたまま、久志がそうぽつりと寂しげに呟いた。

長いあいだ、何度心の中にその瞬間を描いただろう。

喜び、哀しみ、怒り、戸惑い……。その刹那、どんな想いが胸に迫るのだろうか、この13年間彼女は何度も夢想した。

父と再会した瞬間、萌子の胸にはその描いて来たどの感情も湧い

て来なかった。

ただ呆気なく、

（これが、父さんなんだ）

そう思ったただけだった。

しばらくのあいだ目を見開いたまま、父は何の感情も表に出そうとはしなかった。兄の背中も頑なに凍りつく。萌子の視界の中で、一瞬時が止まった。

やがてゆつくりと芳久の表情が崩れた。その刹那、不思議なことに彼は面映そうな顔つきになった。

「驚いたよ、久志」

「お久しぶりです」

生き別れた父子の再会、と言うよりそれは、長いこと無沙汰だった師弟の再会のようなだった。敬意を示すように、久志は父に向かって大げさなほど深くお辞儀をしてみせる。

「……母さんは？」

「去年の始めに……」

「そうか……」

二人にしか判らない会話を交わして、二人は同時に沈黙した。

「そうか、それでここに……」

芳久の呟きに、久志は小さく頷く。

二人の背景を知らなければ、何のことだか全く判らない。いや、背景を知っていても、芳久が何故そんな風に納得したのか、萌子には全く理解不能だった。

「お伺いしたいことが、あります」

穏やかさの中に決意を滲ませて、久志はそう告げた。その語気の硬さに、萌子と父に寄り添う女性 摩耶は、一瞬表情を強張らせた。けれども、芳久はその台詞を予想していたらしく、静かな笑みを浮かべて、

「ここじゃなんだから」

そう言つて自宅へ誘つような態度を示した。

久志はそう告げる父に向かつて小さく頷くと、機嫌を伺うように萌子の方を見やる。それにつられるように、芳久の視線が久志の背後を窺うように動いた。

「……そちらの娘さんは？」

それまで落ち着いていた芳久の口調が、不意に華やいだ。戯けたような、少し照れ臭そうな言い草。それはまるで、息子がガールフレンドでも連れて来たみたいない口調だった。いや、実際彼はそんな気分だったのかもしれない。

父にそう問われて、久志はしばらくのあいだ逡巡してみせた。

どう告げたら、一番衝撃的なのか。彼の顔に一瞬よぎった愉快そうな笑みを、萌子は見逃さなかった。

（……先生は、お父さんを恨んでるの？）

「澤崎 萌子さんです」

「さわぎき？……」

久志の言い含めるようなゆっくりとした口調をなぞるように、芳久はそう呟く。その台詞の余韻の中で、彼の表情はゆっくりと、しかし確実に激変した。

驚愕。疑念。そして、ほんの少しのおののき。

「もえこ、なのか？」

宵闇に亡霊を見たように、父はか細げな声でそう呟いた。

芳久は今度こそはつきりと、自分の感情を露わにしてみせた。ありえないものを見た人間が、きつと浮かべるであろう表情。

ありえないもの。そうなのかもしれない、と萌子はぼんやりと思つた。

久志と出逢わなければ、ここまで辿り着くことはなかっただろう。玲子だって、自分の夫が同じ瀬戸内に住んでいるなんて、きつと想

像することさえ出来ないに違いない。

あの踏切で、わたしとお母さんを捨てた人。

久志の前に一歩出るような形で、萌子は父と対峙した。

やっぱり、その顔を思い出すことが出来なかった。哀切や憤り、そういった感情が浮んで来てもいいはずなのに、萌子はまるで見知らぬ人と出会ったように、ただ緊張して立ち尽くした。

（あたしと先生を、散々振り回した人）

どうして、何にも感じないんだろう。萌子は、自分が酷く冷たい人間に思えて焦りを覚えた。

「ママは……」

芳久が、呟くようにそう訊ねる。

「え？」

「ママは、元気か？」

不思議な響きだった。自分の母を『ママ』と呼ぶのは、自分と祖母と叔母だけだ。それは萌子にとって、大切な肉親の証でもあった。

「……はい、元気です」

「そっか」

「……元気で、絵を描いています」

「そうだったね」

「え？」

萌子は不思議そうに芳久を見上げた。幼子の疑問に答えるように、芳久は少し前かがみになって萌子に近付いた。

「尾道で、タウン誌の挿絵を描いているんだろ？ 毎月、尾道の発行元から取り寄せているんだ、その雑誌を」

どうやって驚いたらいいのか判らなくて、萌子は押し黙ったまま父を見つめた。そんな娘を、芳久は少し辛そうに見やって、

「すまなかった……」

不意に、視界の中の父がぼやけた。何の感情も思い起こすことが出来ないまま、萌子はいつの間にか涙で頬を濡らしていた。

「……どうして……」

嗚咽で言葉が途切れた。涙が丸い粒となつて萌子の頬を次々と滑り落ちていく。あふれ出す感情が、彼女の体の芯を熱くした。込み上げて来る13年分の想い。それが透明な雫となつて流れ出す。哀しかった。13年間、母子二人の暮らし。苦労はそう多くはなかったけれど、父がいらないという事実は、萌子の胸に常に影を落とし続けていた。

悔しかった。あの踏切で、萌子は母と一緒に捨てられたのだ。本当は違うのかもしれない。けど、どうしても萌子はそんな印象をずっと拭い去ることが出来ずにいた。

そして、寂しかった。

『君もずっと、寂しかったんだよ。きっと』

そう、ずっと私は寂しかったのだ。その寂しさを、透明なガラスに封印するようにずっと心の中に、閉じ込めていた。

その寂しさを、誰かに悟られないように。

（あたしは……）

パパに逢いたかったんだ。萌子はそう思った。その刹那、あの踏切で途切れた彼女の気持ちは一つに繋がった。

逢えて嬉しい。こんな、とても哀しい再会でも。

嗚咽を繰り返して俯いてしまった少女を、三人の大人たちはしばらく黙ったまま困惑したように困んでいた。やがて父と目を合わせた久志が、萌子を慰めるようにそっと肩を抱いた。

「さ、中に入れてもらおう」

第十章 眞実（5）

なぜ、泣いたりしたんだろう。

部屋の周囲に雑多に積み上げられた荷物をぼんやりと見つめながら、萌子はそんなことを思っていた。

葛生家に案内された二人は、六畳ほどの和室に通された。しばらく玄関で待たされてから通されたその部屋は、『客間』と呼ぶには少し雑然としていた。

散らかった荷物を端に寄せ、どこからかテーブルを運んで来たのが一目見て判った。普段はきつと物置代わりになっている部屋なのだろう。二人の来訪がいかに急なものか、普段この家を訪れる客がいかに少ないかを、それらは如実に物語っていた。

建てられてからそれなりの年月を過ごしているらしい家の佇まいと、そこに息づく生活の匂いを感じ取って、萌子は先刻の自分の言動が酷い醜態だったように思えて来た。

父を見つけたからといって、4歳の時に戻れる訳ではないのだ。

13年の時を越えて、親子三人の暮らしが再開する訳でもない。

ここには確かに、父のもう一つの暮らしがある。萌子にも久志にも、立ち入れない暮らしが。

刹那の喜びが過ぎ去った後で、萌子の胸に去来したものはもっと深い虚しさだった。

沈黙を持て余して、萌子は何の気なしに久志の横顔を見やった。

彼は、酷く緊張した面持ちをしていた。喻えて言うなら、家族の緊急手術を廊下で待たされているような顔。落ち着かない雰囲気、時折忙しなく視線を動かしている。まるで借りて来た猫のようだった。

そういえば大阪に摩耶のことを訪ねた時も、彼はこんな風に強張った顔つきをしていた。

何にそんなに怯えているのだろう、と萌子は少し可笑しくなった。

彼女の方がよっぽど落ち着いている。

二人を5分ほど待たせた後、芳久は一人で和室に現われた。

「すまん、何の構いも出来なくて」

そう言いながら彼は、運んで来た丸い盆から烏龍茶の入ったコップと煎餅の乗った皿を机に置いた。

「いえ」

久志は俯くように小さくそう答えると、

「突然尋ねて来たのは、こちらの方ですから」

相変わらずの他人行儀な言い草に、萌子は久志の頑なさを垣間見たような気がした。

「ホント、ビックリしたよ」

並んで座る萌子たちと対面するように、芳久は庭を背にして腰を下ろした。

「さて」

何から訊いたら良いのか、一瞬そう思案するふりをしてから芳久は、

「二人はどこで知り合ったんだい？」

父にしてみれば、それはとてつもなく不思議なことだったのだろう。何かの拍子に久志があるいは、限りなく可能性は低いかもしれないけれど、萌子が自分を訪ねて来ることは、予想していたかもしれない。けど、まさか二人が連れ立って訪ねて来るなんて、それこそ青天の霹靂だったに違いない。

「尾道で、です」

久志の短い答えに、芳久は穏やかな顔で小さく首を傾げてみせる。

「彼女は、僕の教え子なんです」

「ほう」

芳久は、少し意外そうに眉間にしわを寄せた。絵を志していたはずの息子が、いつの間にか教壇に立っているなんて。そんな、ちょっと不快な感じの顔つきだった。

父のそんな懸念を、久志は素早く察したらしい。相手を納得させ

るような笑顔で、

「臨時講師で、尾道に来ているんです。松崎先生の勧めで、少し気分転換をして来い、と」

そしてそのままその笑顔を崩さずに、彼はこう続けた。

「春には、東京に帰るつもりです」

胸が、堪らなく痛かった。

こんなところで聴きたくなかった。訪れる結果がたとえ同じでも、せめてその言葉は自分に向けて発して欲しかった。

『まだ、君を残しては行けないんだ』

父と逢えたことで、久志を引き止める足枷は全て取り払われてしまったのだろうか。萌子はそう考えた。そしてその刹那、

（やつぱり、ついて来なければよかった）

更に深く、彼女の心は沈んだ。

「もし、今日ここで父さんに話を訊いたら、松崎先生に連絡を取るつもりです」

曖昧で、焦点をぼかした久志の言い草に、芳久は一瞬怪訝そうな顔をした。

小さな沈黙が生まれた。コップを手にした久志につられるように、萌子も目の前の茶色い液体で喉を潤した。

口の中が渴き切っている。緊張のせい、だろうか。

「どうして……」

「え？」

「どうして判ったんだい？ その……」

芳久は少し言い辛そうに躊躇した後、

「二人に、そういう繋がりがあるってことを……」

「父さんの、絵です」

「俺の、絵？」

理解出来ない。そんな表情で芳久は戸惑い顔を浮かべた。

「父さんが、向島のクレーンを描いた絵があったでしょう？」

記憶の彼方を手繰り寄せるように、芳久は視線を宙に浮かせるよ

うにして、

「……ああ、あの絵か」

「あの絵を、尾道に持って行っただんです」

「それをね、千絵ちゃんに見せたの」

「その口を挟んだ萌子の顔を、芳久はじつと見つめたまま、

「……ママの、妹の千絵ちゃん、かい？」

「そう」

「……そっか」

みなまで聞かなくても、芳久はその意味を理解したらしい。力なく頷いた後で、

「千絵ちゃん、あの絵を描いているところによく遊びに来ていたからな」

「それと、サインが一致しました」

久志のその台詞に芳久は小さく目を丸くした。

「あの絵のサインと、千絵さんが持っていた絵のサインが」

「……」

「彼女の肖像画、です。尾道にいた時、描きませんでしたか？」

「……ああ」

芳久は懐かしむような顔つきで呟いた。

「あの絵、まだ持っていてくれたんだ」

この人は、私のお父さんなんだ。

不意に、萌子の胸にそんな滾るような感情が押寄せて来た。

その姿を見て記憶が蘇らなくても、彼の発する言葉の端々には彼が自分のそばにいた匂いがしていた。

（確かにこの人は、一緒に暮らしていたんだ）

千絵や玲子が、そして萌子がいた空間で。

「……どうして」

「え？」

「どうしてあたしを、置いていったの？」

「……」

「あの日、踏切で」

ずっと、尋ねたかったこと。

13年間告げることの出来なかった台詞を、萌子は父にぶつけた。穏やかなこの空間の均衡を壊しかねない台詞。父や兄を、不快にさせかねない言葉。それでも、萌子はそれを口にせずにはいられなかった。

悲痛な声で告げる萌子の顔を、芳久はじっと見つめていた。あの踏切の向こうに見た瞳と同じような、まっすぐなそのまなざしで。

「……本当に、すまなかった」

「ううん」

申し訳なさそうに頭を下げる芳久に向かって、萌子は許しを与えるように微笑みさえ浮かべて首を横に振る。

「もう、いいの」

判っていたことだった。いまさら父と逢えても、何も変わる事などないと。

「あたしも、多分ママも、今は幸せなの。だから、恨んだりなんかしてない。でも、どうしても知りたいの。お父さんがいなくなつた訳を」

「……」

「それが判らないとあたし、前に進めないの」

小さく、悲しげに呟いた萌子のその台詞に、芳久は何かに衝かれたように顔を上げた。

「……仕方がなかったんだ、あの時は」

「え？」

絞り出すような声だった。苦しそうな芳久の口調に、萌子は自分の愚直な気持ちがあまた何かを傷つけてしまったのかと思った。

「仕方がなかったんだ、あの時は。それ以外に、君たちを守る方法が判らなかった」

第十章 真実（6）

「何から、話したらいいんだろうな」

泣いたような、笑ったような。不思議な顔つきを芳久はしていた。線の細い、脆弱なその表情に、萌子は彼の中に自分と同じ気質を感じた。

小さくて脆い、ウサギみたいな性格。

「俺は君のお母さんと出逢った時、記憶を失くしてたんだ」

「……うん」

「知ってるのか？」

「千絵ちゃんから訊いた」

「そうか」

千絵のやんちゃな人柄でも思い浮かべたのだろうか。芳久はふつと失笑を漏らして、

「じゃあ、俺がどうして尾道に来たのかは判っているんだね？」

「うん。だいたい」

「そっか」

そう言って芳久はしばらくのあいだ、腕組みをしながら思案した。それから、微かに憂いの表情を浮かべて、

「……ここへ来たということは、当然摩耶のことも」

「知ってます」

萌子に代わって、今度は久志が硬い表情でそう答える。

「ここは、和雄おじさんに協力してもらって捜し当てたんです」

「そうか。和雄に訊いたのか」

その一言で、どこまで知られているかを悟ったのだろう。芳久は急に表情を緩めて、

「……ここは、元々彼女の親戚が住んでいた家なんだ」

「……」

「俺が立花の家を出て お前が中学を卒業した時だ 結局彼女の

ところに身を寄せることになった時、ちょうどこの持ち主が家を離れることになってね。大阪にいたんじやいつ見つかるか判らないから、ここに移り住むことになったんだ」

芳久は、全く気配を感じさせない家の奥を気にするような素振りを見せて、

「あれには、悪いことをした」

この二人のあいだに、どんな時間が流れたのだろう。萌子はふとそんなことを思った。好きとか嫌いとか、そんな単純な感情では表しきれない何かが、そこにはあるような気がした。

「いや、悪いことをしたのは、彼女だけじゃないよな」

芳久は、口にした端から自分の台詞を否定するように薄笑いを浮かべて、

「二人にも、二人のお母さんにも、悪いことをした」

寂しげな声だった。その声を聞いた瞬間、萌子は唐突に父との確かな血の繋がりを感じた。

この人は、望んでこんな場所にたどり着いた訳ではないのだ。弱い心が、臆病な性格が、彼をいつの間にか抜き差しならない所へと追い詰めてしまった。

あの日踏切の向こうに見た、どこか寂しげで真っ直ぐな瞳。あの時と同じ目をしている、と萌子は思った。その刹那、彼女の心に宿ったものは赦罪の気持ちだった。

「父さんは」

久志が顔を上げて芳久に問い掛けた。

「母さんのことを、どう思っていたんですか？」

彼にはまだ父を許す気持ちはないらしい。久志の鋭いその口調に、芳久は彼の批判めいた気持ちを悟って苦笑いを浮かべる。

「……父さんが立花の家の婿になったのは、お前のおじいさんに俺が気に入られたからなんだ」

そうして芳久は久志が知らなかった、萌子が知るはずのなかった事実を、ゆっくりと話し始めた。

「お前のおじいさんは、俺が通っていたアトリエに出入りしていてね。将来芽の出そうな生徒の絵を買うのが趣味だったんだ」

俺は。そう言いさして、芳久は自分が呼んだその相手を嘲るような笑みを浮かべた。

「……あの人が気に入ったのは、俺の腕でなく人柄だった。だから、絵を買うのではなく就職先を与えてくれたんだ」

そう言ってから彼は、2度ほど首を横に振って、

「俺は、感謝しているんだ。あのまま絵を志しても、結局路頭に迷うことになっていただろうからね。あの頃の俺は、いろんなことに迷って何も見えなくなっていたから」

そう述べる感謝の気持ちとは裏腹に、芳久の眉間には苦渋が滲んでいた。

「……あの人のつてで社会人になって、俺はあのアトリエを離れた」

そう言葉を切り、芳久はしっかりと久志の瞳を見つめた。

「摩耶とは、その時1度別れたんだ。お前の母さんを紹介された時には、何もやましい気持ちはなかった」

「じゃあ」

頑なな表情のまま、久志はさらに父を追及する。

「なぜ、大阪に行ったんですか？」

父の目は、哀しそうだっただ。哀しみと憐憫を瞳に滲ませて、芳久は久志を見やった。

「……俺は、詩織を尊敬していた。お義父さんを介しての出逢いだったけれど、そんなことは関係なく、俺は逢った瞬間から彼女の強さに惹かれていた。上手くやっていきたいと、本当に思ってたんだ」

「じゃあ、なぜ……」

「……俺が」

自嘲に頬を歪ませて、芳久はそつと俯いた。

「詩織の思うような男じゃなかったから」

そんな父の哀しみも、萌子は理解出来てしまうような気がした。思うようにならない運命。自分の弱さゆえに、逆らうことの出来ない運命。ここまで、流されるつもりもなく彼は流されて来てしまったのだ。そのあいだに久志や萌子を、二人に繋がるさまざまな人々を傷つけてしまったことも、彼は判っているのだ。

「お前の母さんはとでもリ-alistだった。現実的で、その現実を受け容れられる強い女性だった。それは、とても憧れだったけれど、少し重荷だったんだ」

「……」

「俺は、失格の烙印を押されたはずの夢に、救われた」

「？」

抑揚のない父の台詞に、二人は顔を見合わせる。

「ずっと、そう思ってたんだ。それが自分で許せなかった。お義父さんは、俺と一緒に絵を描くことをいつも楽しみにしていた。俺が絵を描く人間じゃなければ、きっと立花の家に迎え入れたりしなかったと思う。絵を描くことは、1度破れた夢だった。それに自分の人生が救われているようで、俺はずっと堪らなかったんだ」

芳久の台詞は、まだ夢に破れたことのない二人の絵描きにとって、理解出来るようで理解出来ない言葉だった。

「詩織との仲は、最初からぎこちなかった。こんな後ろ向きな男は、やっぱり合わなかったんだ。夫婦、なんて呼べる仲だったのは、せいぜい最初の1ヶ月くらいだった」

萌子の心の琴線に、小さな違和感が引つかる。その違和感の根源を確かめる間もあたえずに、芳久は言葉を繋いだ。

「そうしている内に、風の頼りに聴いたんだ。摩耶が、離婚して大阪に戻っているって」

芳久はふっと自虐的な笑みを浮かべて、

「1度きりのつもりだった、なんて言っても信じてもらえないよな」

「……」

「結婚してから2年、大阪に通うようになってから1年。ちょうど今頃だった。俺が事故に遭ったのは」

「その時……」

「そう」

漏らすように呟いた萌子に芳久は目をやって、

「君のママと出逢ったんだ」

そして彼は一瞬遠い目をしてから、

「記憶が戻ってしまつと、記憶がなかった頃の気持ちを上手く思い出せなくなつてしまつてね」

と寂しげに笑った。

「でも……」

「……でも？」

「でも、あの頃感じた想いは、今でもはっきりと覚えている」

芳久は深く目を閉じて、

「あの街で、俺はやつと安らかな気持ちになれた。何のしがらみもなく、自分の気持ちに素直になれた」

それから彼は、裏山でカブトムシを見つけた子供みたいに、嬉しさを伝えるように萌子の目を覗き込んで、

「君や、君のママと過ごした時間は、本当に楽しかったんだ」

「じゃあ……」

静かな口調で、萌子は父を問い詰めた。

「なんで出て行つちやつたの？」

「……夢から、覚めたから」

「え？」

「1度夢から覚めたら、もう2度とその続きを見ることは出来ない」

芳久はそう小さく笑って、

「萌子は、ママと俺と三人で大阪に行ったこと、覚えてるかい？」

「あたしが？」

萌子は慌てて頭を振った。そんな記憶、もちろんない。このあい

だ久志と訪ねたのが生まれて初めての大阪だと、信じて疑う余地もなかった。

「まだ、小さかったからな。萌子は」

そう目を細めて、父は成長した娘を見やった。

「君が三つになった頃、家族で大阪に遊びに行ったんだ」

「……」

「観光目的が半分。そして、もしかしたら俺の記憶が蘇るかもしれない。そんな目的も、半分はあった」

芳久がふつとため息を吐く。その吐息の合間に、微かな後悔が見え隠れした。

「……俺は事故現場に立つても何も思い出すことはなかったけど、その近くで摩耶を見かけたんだ」

「……」

「その場で、すぐに何もかも思い出した訳じゃない。でも、摩耶を見た瞬間の『どこかで見たことがある』という気持ちは、尾道に帰っても拭い去ることが出来なかった」

思い出さなければ。そう言いさして、芳久は次の台詞をためらう。

「……しばらく経って、俺は摩耶のことを思い出した。そして、東京でのことも」

芳久は、娘の瞳を見つめた。壊れてしまった宝物を見つめるように、とても哀しげに、とても愛おしそうに。

「東京に帰ろうとは、思わなかった。その時はむしろ、立花の家に知られるのが恐かった」

芳久はそう言って久志の方を見やった。

「こんなことを言って、気を悪くするかもしれないが」
「いいえ」

久志はあくまでも穏やかな顔つきで、首を横に振った。

（先生は、私とは違うんだ）

萌子はそう思った。父の複雑で深い想いを見せられて、混乱している自分とは違う。彼はそれを一つ一つ柔らかく受け止めて、とて

も冷静だった。

萌子が近しさを覚えた、彼女と似た少し気弱な横顔は、そこにはなかった。

「あなたが戻って来てから、ずっと尾道に帰りたがっていたのは、判っていましたから」

「そうか」

芳久は俯いたまま小さく笑って、

「やっぱり、少し他人行儀だったかな。一所懸命馴染もうとは思ったんだが」

「それなのに、どうして……」

「ん？」

「どうして、うちに戻って来たのですか？ 僕のため、なんですか？」

久志は力強く芳久を見返した。そのまなざしの強さに折れたように、芳久は横を向いて、

「知っているんだな」

「……ええ」

久志は確信を持った表情で頷くと、

「血液型が……」

「え？」

「あなたがいなくなった後で、あなたが書きかけた書類を見つけたんです」

「……」

「会社の健保に出す書類で。そこに、血液型を書く欄があったんです……」

血液型、と聴いた瞬間、芳久の肩が見た目には判らないくらい小さく震えた。

「母さんの血液型はA型。僕はB型」

久志がほんの少し笑った。ように見えた。

「芳久さん。あなたの血液型はA型、と書いてありました」

しばらくためらった芳久が、やがて短く頷く。

一人会話から取り残された萌子は、交わされるその言葉の意味も判らずに黙り込んでいた。ただ何故かは判らないけれど、言い知れぬ不安が彼女の胸を捕らえて離さなかった。

4歳の夕暮れに感じたのと同じ、競り上がって来るような焦燥感。

「萌子」

急に父に呼び掛けられて、萌子は思わず心を震わせた。

「はい？」

「君は俺の、たった一人の子供だ」

「……え？」

告げる芳久の瞳は、何故かとてもすまなそうだった。

「君と久志には、何の繋がりもないんだ」

第十章 真実（7）

ストンと、萌子の中で何かが落ちた。

（繋がりが、ない？……）

「……記憶を取り戻してしばらくしてから、俺はもう1度大阪を訪ねた。尾道を離れるつもりはなかったけれど、麻耶にだけは謝っておきたいと思ったんだ」

そう言ってから芳久は、嘲笑を浮かべて、

「卑怯なんだよな、俺は」

「？」

「麻耶に話しても、それが東京に伝わることはない和高を括っていたんだ。自分が立っている場所の周囲が崩れないことを確認してから、自分の中の罪悪感を薄めるために行ったんだ」

「……」

「そして、和雄に会ってしまった」

あいつは。そう言いさして、芳久は久志の顔を見て目を細める。

「お前に少し似たところがあつてな。実直で、前のめりでおつちよこちよいで。俺が行方を眩ませて麻耶のところに行ったのだとすっかり勘違いして、俺を責め立てた」

「でも……」

「もちろん、自分が記憶喪失だったことはすぐに話したさ。君たちのことは隠したまま、尾道で暮らしていることも話した。あいつも、俺が嘘をついていないことは判ったみたいだったけど……」

それまで微笑んでいた芳久のまなざしに、一瞬真摯な影が射した。「『それなら、すぐに東京に戻りましょう』そう言われて、俺はすぐに返事をする事が出来なかった」

「……」

「和雄はまた俺の気持ちを疑いだした。そしてこう言ったんだ。『早く東京へ戻って下さい。あなたは、お父さんになったんですか

「ら」ってね」

久志を見る芳久の目は、堪らなく哀しげだった。それを見返す久志の瞳は、それとは対照的に不思議なくらい静かに澄み渡っていた。
「……悩んでいる時間は、あまりなかった。俺の返事が遅れれば、せつかちなあいつのことだから、すぐにお養父さんや詩織に話してしまうだろうと思った」

「……」

「尾道を離れたくない。ホントにそう思った。けど麻耶のことがばれてしまえば、すぐに尾道のことも知れてしまう」

芳久は耐えかねるように、視線を下に逸らす。

「それでも東京には戻らない、そういう手もあった。詩織と別れて、玲子や萌子と暮らすことも考えた。でもそのためには……」

そう言いさして、芳久は継ぐべき台詞をしばらくためらい、

「久志。お前が俺と母さんのあいだの子ではないと、言わなければならなかったんだ」

うなだれたまま、声を絞り出した。

「すまない。あの時はどうしようもなかったんだ。萌子たちの暮らしを守り、久志を傷つけないために、俺が出来ることはそれしか思いつかなかったんだ」

誰も人を傷つけようなど思わないのに、なんでみんなこうやって傷ついてしまうのだろう。

「母さんは」

一番傷つけられたはずなのに、久志はまるで傷つくことを予期していたみたいに、落ち着いた声でそう尋ねた。

「知っていたんですか？ そのことを」

芳久は顔を上げた。そして、かつては息子と呼んだ彼の気丈な様子を、少し驚いたように見つめていた。

「強くなつたな」

「え？」

「……俺は立花の家に帰って、尾道にいた経緯を話した。もちろ

ん、摩耶や萌子たちのことは省いて。一雄も口裏を合わせてくれて、何とかみんな納得したんだ」

「……」

「でも、詩織だけは見抜いていた」

芳久は微かに口元を緩めて、

「その晩、彼女に訊かれたんだ。『どうして帰って来たの？』って」

「……」

「俺は尾道に別の暮らしがあつたことを話した。詩織も、名前こそ明かさなかつたけれど、お前が他の男との子だと認めた」

長いあいだ心の奥底に溜め込んでいたものを吐き出すように、芳久は大きく息を吐いた。

「いろんな歪みを支えるために、俺と詩織は共犯者になつたんだ。お前が中学を卒業するまであいだ、期間限定の。その夜から、お前のことと萌子たちのことは二人だけの秘密になった」

肩の力が抜けたように、父の背が少し丸くなった。その時萌子の目に映つた芳久の姿は、ただの一人の初老の男性でしかなかった。

「人が思いつくことなんて、ホントちっぽけなものだよな。あの時は、それが最善の道だと二人とも信じていた」

そう言つて父は、微かに笑つた。

「萌子と久志が出逢うなんて、神様でなきゃ判らんもんなあ」

柳井駅を出るとすぐに、あたりは黄昏に染まつた。

17時34分発岡山行きシティライナーは、僅かな乗客と夕暮れの気怠さに乗せて走り始めた。席に着いてからしばらくのあいだ、萌子は車窓に広がるセピア色の光景を見つめていた。

古いアルバムのように色褪せるその景色の中に溶け込むように、ついさっきの出来事も過去へと流れていく。

（あたしは、この街に何しに来たんだろう）

父と巡り逢えたこと。

久志が兄でないと判ったこと。

彼女にとってこの上ない結果のはずなのに、萌子はとてもそうとは思えない重苦しさに胸を締めつけられていた。

知らなければ良かった。

この数カ月のおいだ彼女の胸に何度も訪ねた思いが、今までで一番大きな感情となって、萌子の心に押し寄せていた。

確かに、長いあいだの胸の支えが取れてすっきりしたのも事実だ。父はあたしたちを捨てた訳ではなかった。瀬戸際で投げ出すような決断をした父を、萌子は責める気になれなかった。出逢いも別れも、あえて言うならば運命だったのだ。

（運命……）

だとしたら、出逢いも別れも、全てが定めなのだろうか。

車窓から視線を外し、萌子は久志を見やった。中吊り広告に目を奪われていた久志の視線が、ゆっくりと戻って来る。

「？」

小首を傾げた久志に向かって、萌子は黙って首を横に振った。

彼を傷つけてしまった。そんな自責の念が、萌子の心を深く捉えていた。

彼が尾道に来なければ、あたしと出逢わなければ、真実に触れることはなかったはずなのだ。

（わたしが、父と逢いたいなどと思わなければ）

この世で一番愛しい人を傷つけてまで得る真実に、どれほどの価値があるのだろうか。

「僕がね」

「……え？」

唐突に話し掛けられて、萌子はペットボトルを取りかけた指先を震わせた。

「父さんの書きかけた書類を見つけたのは、大学2年生の時だね」

「……うん」

「すぐにおかしいって気付いたけれど、確信は持てなかったんだ。確かめたくても父さんはいないし、その頃から体が弱って入退院を繰り返していた母さんには、どうしても訊けなかった」

その内。そう言いさして、久志は視線を宙に浮かせる。

「……母さんが死んで、確かめる術はなくなった」

優しい目をしてる、と思った。久志は、今まで萌子が見たどんな瞳よりも優しく目を和ませて、

「この街に来るまで、自分が本当に真実を知りたかったのかどうか、よく判らなかったんだ。このままうやむやになってしまっても構わない。そんな投げやりな気持ちも、なかった訳じゃない」

その瞳は、本当に満足しているように見えた。

「君が父さんの子だと知って、どうしても真実を確かめなきゃならなくなっただけ」

その台詞は、萌子の自責の念に拍車をかけた。

（わたしのため、なんだ）

久志の、どこまでも深い優しさが、萌子の心を深く切り裂いた。

「尾道を離れる前に、きちんとしておきたかったから」

萌子は弾かれたように顔を上げた。鳶色の瞳が、彼女をじっと見つめている。

ずっと大好きだった、柔和なまなざし。

「4月になったら、東京に行くよ」

その優しい瞳を前にして、萌子はただ頷くことしか出来なかった。久志が別れの準備を始めていることを、萌子のはつきりと悟っていた。今日柳井を訪ねたのも、そのためなのだろう、と。

芳久が実の父でなかった。それが久志にどれほどの痛みを与えたのか、萌子には想像がつかなかった。父と思っていた人からの裏切り。本当の父を知らない辛さ。そして、久志は母も失っている。

天涯孤独。

母がいて、もう逢うことはないかもしれないけれども父がいる萌子には、到底計り知れない哀しみだった。

それなのに、久志は萌子のためにあえてその痛みにも身を晒してくれたのだ。

萌子の心の苦しみを解き、全てを明らかにして彼は出て行くようにしている。最後まで真摯で誠実なその心遣いが、萌子の胸を切なくさせた。

「だから、その前にはつきりさせるのが君のためにもなる。そう思っ

て父さんの行方を捜したけれど……」

「僕も、すつきりした」

「え？」

「こんなもやもやした気持ちのまま絵に取り組んでも、また同じことの繰り返しになる。せつかく……」

そう言いさして久志は、茶目つ気のある顔になって、

「君と遇って治りかけた病気が、またぶり返しちゃうよ」

「……あたし、抗生物質が何かですか？」

久志の軽口に気付いて萌子がそうチラリと睨むと、彼は笑いながら、

「いや、どっちかっていうと癒し系の愛玩動物？」

「……もうっ」

どうせあたしは小動物系ですよ、と萌子がむくれて見せると、久志はなおも微笑みを浮かべたまま、

「でも、本当に助かった」

冗談混じりの口調の、片端にこぼれた本音に気付いて、萌子はハッとする。

「尾道に来て、本当に良かった。あとは……」

久志のまなざしが、不意に真剣身を帯びた。

「え？」

「いや、何でもない」

急に照れたように、久志は視線を外して車窓を見やった。

つられたように、萌子も窓の外に目をやった。いつの間にか、車

外には漆黒の闇が広がっている。通り過ぎる人里の明かりが、旅愁を募らせた。

これが、久志との最後の旅だ。萌子は何の脈絡もなくそう思った。この列車が尾道に着けば、別れのカウントダウンが刻まれ始める。そんな予感が、旅の終わりの哀愁と相まって、萌子の胸を切なく締めつけた。

第十一章 告白（１）

柳井から帰った翌日の放課後、久志の口から今学期限りの退任が美術部員たちに伝えられた。

反応は様々だった。中には、噂を伝え聞いていたものもいたらしい。そんな中で、秋月はづきがあまりに判りやすく顔を青ざめさせていたのが、妙に印象的だった。

「ま、当然といや当然……」

飄々とした顔で同級生がそう囁くのを、萌子は隣で何の感情も表さずに聞いていた。

その週、久志は何かと忙しそうだった。美術部の時間にもろくに顔を合わせられずに、二人はすれ違っただけだった。

久志がいなくなつて、ほんの少し寂しさが増した気がする部室で、ゆつくりと尾道の街角を仕上げながら、萌子は惜別とは別の感情に捕われていた。

それは柳井からの帰り道、久志と踏切のところであつた瞬間から、突如として胸に湧き上がつて来た想いだった。

（おかしいのかなあ、あたし）

いまさら遅過ぎる気もする。始めは、ちょっとした気まぐれなのだろうが、とも思つた。けれどもその想いは、日が経つに連れて彼女の中でどんどん大きくなっていく。

キャンバスに向けていた筆を休めて、萌子は春の陽射しがあふれる教室の窓の外を見やった。いつかここから二人で見た福山城の天守が、春霞む空をバックにぼんやりと佇んでいる。

（あの頃から……）

何も変わらない、と萌子は思った。教え子から共鳴する間柄に、そして半分繋がった兄妹から赤の他人に。立場を違えても、萌子の気持ちが変わることは、結局１度もなかった。

それなのに、あんなに心が揺れ動いてしまったのは自分の弱さの

せいだ。萌子は、心からそう悔やんでいた。

自分の意志の弱さが、時の流れに簡単に晒されてしまう心の弱さが、悪戯に哀しみを生んでしまうのだ、と。

こんな時、薫のような強さが欲しい、と心底思う。愛する人の幸せのために、潔く生きることが出来る強さ。それとは違うけれど、同じくらいの強さが、今欲しい。

あたしに出来るだろうか。自分の気持ちに潔くなれる、強い生き方が。

「どうしたの？ 萌子」

あんまりにも長くぼんやりと呆けている萌子に、隣にいた部員が心配そうに声を掛けた。

「……あつ、うつん。何でもないの」

萌子はそう振り返って、

「見慣れた景色も、明日また見れるかどうか判らないんだなあ、って思ったの」

と可笑しそうに笑った。

・午前十時 浄土寺境内に集合

・ハイキング出来るくらいの軽装で来ること

最後のデートには、奇妙な条件が付いていた。

「ハイキング?!」

土曜日の夜、久志からのメールを受け取った萌子は、誰もいない部屋の中で思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

「……オリエンテーリングでもやるつもりかしら」

尾道の街の中で、まだ二人で訪れたことのない場所がいくつかある。けれどもそのどれもが、野山を駆け回るような服装とは縁遠い場所だった。

3月12日、日曜日。萌子は首を傾げながら、それでもジーパン

にスニーカーという出で立ちで、家を後にした。

萌子はわざと、祖母の家の前を通って浄土寺を目指した。その道は、元日の午後に辿ったものと同じだった。

大好きな人に逢いに行く道。そう思い感じた、あの日の緊張感とは違うプレッシャーに、萌子の胸は押し潰されそうになっていた。

ベツチャー祭の朝、都わすれに向かった道。

クリスマスイブに、久志を待ち続けた教室。

バレンタインデーに、久志の姿を追いかけた廊下。

ときめきや苦しさ、切ない想いを、久志を見つめるたびに萌子は感じて来た。でもそれは、全て受け身の感情だった気がするのだ。

時の流れが与える結果をただ傍観して、一喜一憂するだけの、人任せの恋。

与えられるだけの喜びや哀しみに身を委ね、満足する。今までの恋なら、きつとそれで十分だっただろう。

（でも……）

こんな想いを、生まれて初めて感じた。遅過ぎるのかもしれないでも、体の中に湧き上がる今まで触れたことのないほどの熱情を、萌子は大切にしたいと思った。1度でいいから、自分から恋にぶつかってみたい、と思った。

（もう、待つのは十分）

麗らかな春の陽が、細い路地にあふれんばかりに降り注いでいる。見慣れた光景。通い慣れた路。住み慣れた、坂のある街。

この街に、たくさんさんの宝物がある。家や友や、慣れ親しんだ暮らしが。そんな故郷の風景一つ一つが、今日は何故か目に鮮やかに感じられた。

赤く彩られた山門を潜ると、久志の姿は探すまでもなく簡単に見つかった。さほど広くない境内の中ほどで、まるで鳩を従えるように立ち尽くしている。

萌子が近付くと、彼の周囲にいた鳩が一斉に舞い上がった。

「お、来だな」

「おはようございます」

萌子は、わざとしおらしくそう頭を下げる。

「先生、なんか……」

「ん？」

「なんか、マジシャンみたいだった」

「えっ？」

「だって、鳩を家来にしているみたいだったんだもん」

魔術師、というより異邦人だ。と萌子は思った。

結局、ただの臨時講師。ただの教え子と教師の間柄。

このまま過ぎ去ってしまえば、この半年の出来事もアルバム1ページほどの思い出として、記憶の隅に埋もれてしまうかもしれない。

萌子はふと、父のことを思った。

『風のように去ってしまった』父も、母から見ればやっぱり異邦人だったのだろうか。

「……どこに、行くの？」

「え？」

「これから、どこに……」

今日、今からどこに。もちろん萌子はそう問い訊ねたつもりだった。けれどもその口調は、久志のこれからの行く末を訊き糾しているようにも聞こえた。

「ああ」

久志は何の疑いも見せずに、やんわりとした笑みを浮かべて、

「ハイキング」

「……はい？」

あのメールは本気だったのかと、萌子は啞然とした顔で久志を見つめた。

「……ってどこに？」

「まあ、ついて来れば判るさ」

久志はいつになく自信ありげにニヤツとして、

「とっておきの景色を、見せてあげるよ」

とりあえず本堂でお参りを済ませると、久志は萌子を誘って多宝塔の裏手へと回り込んだ。

その勝手知ったる足取りを、萌子は不思議に思つて、
「先生、ここに来たことあるの？」

萌子がこの寺を訪ねたのは、小学生の時以来のことだった。母や祖父母に引かれてやつて来たその日のことを、萌子はあまりよく覚えていない。ただ、今日境内に足を踏み入れた瞬間に、鳩と戯れた記憶だけは鮮明に蘇った。

「うん、何度かね」

久志はさらりとそう答える。

「静かで、落ち着くしね。境内から見える街並みも、とても良いんだ」

そう言つてから久志は、意地悪そうな顔つきになつて、

「君に振られた時は、鳩に慰めてもらつたりね」

「！ あたし、先生のこと振つた覚えなんかありませんっ！」

何を言い出すのかと、萌子は思わず顔を真っ赤にして抗議した。

「1度諦めさせさせたのは、あたしの方なんだから。先生だつて黒沢先生とすっかり仲良くなつて……」

「それは！……」

思わぬ反撃に久志は目を白黒させて、

「だって、それは誤解だつて判つたじゃないか」

「わたしだつて誤解された。龍太君のことは、先生のはやとちりじゃない」

「萌ちゃんだつてはやとちりしてたじゃないか……」

微かに息を荒くしながら、二人は黙り込んだ。ぽつぽつ、と足元に纏わりつく鳩の和やかな鳴き声が聞こえて来る。

「ぷっ」

二人は一斉に吹き出した。

「結局二人とも……」

「あわてんぼう？」

穏やかで賑やかな笑い声の中で、萌子はしんみりと思っていた。少なくとも、愛しく想われたことだけは間違いないのだ、と。

久志に連れられて、木々が生い茂る道をしばらく行くと、イラスト入りの案内板があった。

「瑠璃山？」

その案内板は、登山道を示す絵地図だった。『観音の小道』と書かれた左側の経路と『修験道』と書かれたやや直線的な経路。修験道、と書かれたルートには、一番鎖・二番鎖・三番鎖の文字が見える。

「浄土寺山だよ」

久志に背後からそう声を掛けられて、萌子は飛び上がらんばかりに驚いた。

「浄土寺山?!」

千光寺山・鳴滝山と並んで尾道三大展望台と称されているのが、浄土寺山山頂の展望台だった。山頂の展望台やそのすぐ下にある浄土寺奥の院辺りからの眺めは、尾道で一番だと聞いたことがある。

その割にあまり著名な観光スポットでないのは、急な登りで千光寺山のようなロープウェイもないからだ、とも。何しろ、元は山伏の修練の場だったというのだ。もちろん、萌子は1度も訪れたことはない。

「まさか、あの鎖場を登って行くの？」

萌子が恐る恐るそう訊くと、久志は大げさに笑い出して、

「冗談言つなよ。それじゃハイキングじゃなくて、修業になっちゃう」

二人は案内板の先の道を左に曲がり、小さな池に架かる橋を渡った。

しばらく行くと、道は山あいへと入り込んだ。むき出しになった岩肌。ごつごつとした巨石。うつそうと生い茂る木立の合間に、たおやかな陽が差し込む。木々の枝先に、春の息吹が感じられた。

「せんせい……」

「ん？」

「この道も、ハイキングとは呼べないですよ」

坂道に慣れた萌子の足でも、結構きつめの道だった。こりゃ誰も来ようとしなはずだ、と萌子は心の中でぼやく。

「なんだ、坂道っ子の癖にだらしないなあ」

（都会のもやしっ子の癖に）

見た目に寄らず健脚な久志の、爽やかな笑顔を萌子は恨めしげに見上げた。

「楽しんで手に入ったら、つまらないだろ？」

「え？」

「人生も、絶景も」

もっともらしい顔をする久志を、萌子は小馬鹿にしたように笑った。

どんなに苦労したって、叶わないものもある。苦労をした方が素晴らしいなんて、願いが叶ってから思うことだ。

山道を歩いて30分あまり。途中観音様を幾つも数え、見上げるほどでかい不動岩に描かれた観音様の脇を通り過ぎて、二人は奥の院に辿り着いた。

寺院の白壁が春光に映え、一層白く見える。無住なのか、明るい印象を与える院の周囲は、奇妙な静けさが漂っていた。

ここまで登るとさすがに眺望が良くなる。若葉が芽吹く木々の合間に、エメラルドグリーンの尾道水道が覗いた。

「きれいなえ」

そう感嘆の声を上げた萌子を、いつかの彼女と同じように久志は満足げな顔で見つめた。

「ついておいで」

「え？」

「もつととっておきの景色、見せてやるよ」

そう言って久志は萌子の右手を取る。ドキンと、萌子の左胸が自己主張をするように跳ね上がった。

心臓が、ドキドキしていた。指先からつま先まで、体中がドクドクいつている。どうにもならない胸の高鳴りが、掌を通して久志にバレてしまうような気がした。

3度目に触れた彼の手の温もりも、やっぱりいくらか高めだった。強過ぎず、弱過ぎず。柔らかなその温もりは、掌を通じて萌子の心を優しく包み込む。

萌子は久志を見上げた。久志も真摯な目つきで萌子を見返す。

優しい鴛色の瞳。

あの日、『ひこうき雲』の店内で、

(綺麗……)

と感じた、少し頼りなげな、端正な顔立ち。

何も変わっていない、と思った。あたしの気持ちは何一つ変わっていない、と。

(あたし、先生が好きなんだ)

少し興奮気味に、萌子はそう思った。

この恋のためならば、全てを捨てられる

萌子の手を取って、久志は奥の院の裏手にある展望台へと彼女を誘った。久志に左手を曳かれながら、萌子はときめきと緊張が交互に奏でる早鐘に、ただ身を委ねていた。されるままに連れられながら、この階段が永遠に続けば良いのに、と思っていた。

浄土寺山展望台は、手狭な印象を与えるこぢんまりとした空間だった。人の背丈よりも高い石がごろごろしている。そんな巨石群に囲まれた敷地の中ほどに、柱が臙脂に塗られた鉄製の井楼みたいな建物が建っていた。

久志はその展望塔には目もくれずに、敷地の片隅にある一際大きな岩の前に向かう。

「ここに、昇るんだ」

「え？」

萌子が少し驚いたように見やると、久志は戯れるような笑顔を見せて、

「大丈夫。僕が手を貸すから」

意外な身のこなしで岩をよじ登ると、久志は萌子に向かって手を差し延べた。

「さあ、おいでよ」

久志の手を借りて何とか岩の上に上がると、萌子は一つ大きなため息を吐いた。

「……先生、これ全然ハイキングじゃないよ」

石の上に両手をつけて息を荒げている教え子を、『しょうがないなあ』といった風に笑った久志は、

「顔を上げてごらん」

「え？」

萌子は、子供のように微笑む鳶色の瞳を見つめ、それから顔を上げて周囲を見渡した。

「……凄い」

唐突に思い出した。『浄土寺山からの眺めが尾道で一番』そう聞いた相手を。

それは薫だった。去年、自慢げに話していたのだ。龍太に連れていってもらった、ロマンティックな景色のことを。

彼女のその言葉の意味が、目の前に広がっていた。

（確かに、尾道一だ）

そこからは、尾道の全てが見渡せた。尾道水道に寄り添うように続く雑多な旧市街も、千光寺の玉の岩も。反対側に目をやると、重なり合う新旧2つの尾道大橋が見下ろせる。

尾道だけじゃない。その光景は、遥か彼方まで続いていた。濃く淡く、幾重にも重なる瀬戸内の島々。そして遠く四国山脈のその上に、地上の何倍もあるパステルブルーの空が広がった。

「千光寺山より、こっちの方が少し高いんだ」

言葉を失って尾道の街を見下ろす萌子の横顔に、久志はちょっとだけ自慢げにそう語り掛けた。

「だから、こんなに良く見えるんだろうね」

久志の言葉に小さく頷きながら、萌子は彼が与えてくれた景色に見惚れていた。

離れていく彼の、それは置き土産なのかもしれない。

去り行く人の、最後の優しさ。

長いあいだ、萌子はいつまでも浄土寺山からの絶景を見下ろしていた。

パステルブルー、エメラルドグリーン、浅黄色。春の陽に霞立つ、尾道の街。

「春だね……」

ポツリと、萌子はそう呟いた。

「……うん」

「先生、覚えてる？」

「ん？」

「ベツチャー祭の日に、西国寺に行ったこと」

「……ああ」

「あの時ね、先生言ったんだよ。春には、ここにいないかもしれないって」

「……」

「あの時からね」

泣くまい、と思った。萌子は胸に込み上げて来る熱い思いを堪えるように、小さく一つ息を吐いて、

「ずっと不安だったの。先生が、いつか目の前から消えてしまうって」

「……」

「先生がね、ホントは半分お兄ちゃんかもしれないって知った時よりも、先生が東京に帰るって知った時の方が、もっとショックだったの」

遙か上空からヒバリの鳴き声が聞こえて来る。それ以外は、音もなく静かな世界だった。

「先生、行っちゃうのね？」

萌子は子犬のように震える瞳を、それでもしつかりと久志の方へ向けた。

「……うん」

すまなそうに、久志は視線を逸らす。

「あたしね、ずっと一人ぼっちだったの」

萌子のその声に、久志は弾かれたように顔を上げた。

「先生に逢うまで、わたし一人ぼっちだったの。友だちも、お母さんもいたけど、でも一人ぼっちだったの。でも、それが寂しいことだなんて、気付かなかった。先生に逢って、初めて気付いたの。今まであたしは寂しかったんだって」

わずかに瞳を潤ませて、萌子は切なげな声を上げる。

「気付いてしまったの、一人ぼっちだって」

もうその寂しさに、耐えることは出来ないと思った。一人きりでは。

「先生のことが、好き。先生と、離れたくないの」

黒目勝ちの小さな瞳をめいっばい見開いて、萌子は久志を見つめた。

「あたしを、一緒に東京に連れて行って」

鳶色の瞳が、頼りなく揺らめいた。惑い、逡巡するその心を映し出すように。しばらくのあいだ、久志はためらうように黙り込む。

「……ダメだよ、それは」

「何で！」

判り切っていた答えのはずだった。それでも、未練がましいと思しながらも萌子は、つい感情を露わにして声を荒げた。

「先生がいなくなったらわたし、ここにいない意味がなくなる。高校だって、卒業してもしょうがないの」

涙と、たぎる想いに顔を歪ませて、想いのたけを叩きつけるように、萌子は久志に言い寄る。

「家も友だちも、先生の代わりにはなれないの」

「……」

「先生は、あたしが嫌い？」

「……好きだよ」

「……え？」

泣き腫らした目で、萌子はキョトンとしたように久志を見つめた。

「好きだよ。ずっと、大好きだった」

溜め込んだ想いを瞳に込めるように、切なげな表情で告げる久志の台詞が、春風に乗って萌子の耳に届いた。

「今でも、萌子のことがとても好きだ」

第十一章 告白（2）

頬が熱い。

一拍の間をおいて、その言葉の意味を突然理解したように、心臓が激しく鼓動を打ち始める。

久志の言葉が萌子の胸の奥に届いて、マグマのように溶け出した。心の芯が、火傷しそうに熱い。安らぎと高揚に指先が震える気がして、萌子は思わず掌を握り締めた。

初めて、愛する人の気持ちを感じた。

（今でも……）

今でも好きだ。そう言ってくれた。それだけで、萌子の心は春空に溶けてしまいそうになった。

壊れた玩具みたいに高鳴り続ける心臓に、久志の言葉が拍車を掛ける。

「僕だって、出来ることなら、このまま君のそばにいたい」

「じゃあー！」

一瞬目を輝かせた萌子に、久志は重々しく諭すような口調で、

「君を、東京へは連れていけない」

「……」

「僕の話を、聴いてくれるかい？」

「……うん」

萌子は小さく頷いた。それから、体を丸めるように膝を抱えた。

風の囁き。鳥の囀り。

静かだ、と思った。他には何も聞こえない。その静けさの中で、自分の胸の鼓動がやけに大きく感じられた。

久志は、その静寂を味わうようにしばらく黙り込んだ。それからすつと息を吸って、

「君には、話したよね？」

「？」

「とりあえず、春まではこの街で暮らしてみようと思って、臨時講師を引き受けたって」

「……うん」

「最初は、本当にそのつもりだったんだ。僕の先生も、戻れるなら半年で戻って来いって言っていたし」

久志は懐かしむようにゆっくりと辺りの景色を見回した。

「……君と、初めて会った日のこと、覚えてる？」

「うん」

もちろん覚えてる。今も彼女の胸の中に鮮明に残るその記憶。

「君は、俺のバッグをしきりに気にしててさ」

「やだ」

萌子は思わず口を手を充てて、

「そんなとこ、見てたの？」

恥じらう少女を見て、久志は可笑しそうに笑った。

「画材を気にするなんて、絵をやる娘なのかなって思ったんだ。

そしたら急に親しみが湧いて来て……」

甘酸っぱい感傷に少し照れたような顔をして、そして久志は、

「……でもその前から、きつと出逢った瞬間から、君のことが好きになってたんだ」

ずっと憧れていたはずの言葉だった。嬉しいはずなのに、萌子は何だかこそばゆくて、首まで真っ赤になりながら俯いて掌で岩を撫で回した。

心臓はとづくに壊れてしまったみたいだった。明らかに普段より速い脈拍が、全く元に戻らなくなっている。体がふわふわと頼りなく浮き上がるようで、萌子は不安定な岩の上がさらに覚束なく感じられた。

信じられなかった。あんなに近付いたり離れたりした2つの想いが、本当は始めから互いを向き合っていたなんて。

「このまま、この街で美術教師として暮らしていくのも悪くないかなって、本気で思ったこともあった」

「でもそれは……」

「うん」

判っているよ、という風に久志は軽く頷いて、

「僕はね、父さんの絵にとっても懂れていたんだ」

「え？」

唐突な台詞。もう二人のあいだでは触れずに済むようになったはずの、『父さん』という言葉を目にして、萌子は思わずビクツとした。

「小さい頃 まだ父さんが尾道から帰って来る前に、父さんの絵を見たことがあったんだ。それを見てからずっと懂れていて、本当はとても懂れていて、でも帰って来た父さんに僕は上手く接することが出来なかった。そして父さんはいなくなつて……」

そうして久志は、抱えている心の内側の闇を初めて萌子に見せた。「大学2年の時に父さんの書きかけの書類を見つけて、僕はそこで描けなくなつた。それまで、描く才能だけは父さんと繋がっていたと思っていたから……」

「……」

「それから、何も考えることが出来なくなつた。何かに触れることが怖くて、身も心も動かなくなつた」

鈍痛に似た重苦しさが、萌子の胸にじつとりとのしかかる。

「君が父さんの本当の子供だつて知つた時、不思議と驚かなかつたんだ」

（あの時……）

萌子が久志と半分兄妹だと告げた、あの時。そう、確かに彼は笑っていた。

「何故だか判らないけれど、君と僕に血の繋がりがあんなんで、信じられなかつたんだ。ううん。信じたくなかつた。その瞬間、『ああ、やっぱり父さんは僕の父親じゃないんだ』って、確信したんだ」

どれだけ傷つけたのだろう。

浅はかな自分が疎ましくて、萌子の心は澱んだ。

好きな人を愛せなくなる。好きな人と離れてしまうこと。

自分の心に訪れる苦痛だけを案じて、本当は知らず知らずの内に久志を傷つけていたのかもしれない。萌子はそう考えて、自らを恥じた。

「……ごめんなさい」

「え？」

「先生のこと、たくさん傷つけてた」

「……」

「だってあたしのために、先生は知らなくてもよかったことを……」

みなまで言葉を継ぐことが出来ずに、萌子は涙を溜めて俯く。

先生は、あたしと出逢って幸せだったのだろうか。

あたしは幸せだった。たくさんの想い出や慈しみをもらった。けど、先生はただ苦しみを覚えただけなのではないだろうか。

ぽんぽん、といったわるような手つきで、久志の掌が萌子の黒髪を撫でた。

「君のため、じゃないんだ」

「え？」

顔を上げたその先には、思ったよりも間近にいつもの穏やかな表情があつた。

「……父さんの血液型が書かれた用紙は、手書きだった。自分の血液型を書き間違える人なんて滅多にいないとは思ってたけど、絶対とは言い切れなかった。世の中には、自分の血液型を勘違いしている人もいるって聞いたこともあるし」

「……」

「僕と君のあいだに何のやましさもないことを、僕は僕のために証明しなければならなかったんだ」

鳶色の瞳が、強欲なほど力強く萌子を見つめた。

「君を、永遠に僕のものにしたかったから」

「……え？」

ずっと視線を逸らして、いつものように気後れしたような照れ笑いを浮かべた久志は、

「こんなの、僕のわがままかもしれないけど……」

「……なに？」

「この街で、僕を待っていてくれないか？」

「え？」

ドキン、とした。今までで一番大きく、萌子の心臓が跳ね上がる。どうしても今、僕は東京に戻らなきゃならない。でも、もしそれで独り立ち出来たら、いやたとえ失敗したとしても」

強い意志を秘めた、鋭い口調。

「僕は必ずこの街に戻って来るから」

濡れた頬を拭いもせずに、萌子は久志の優しげな顔をじっと見つめた。

「まあ、ダメだったらこの街に戻って、また美術教師をやってもいいし」

「……そんなこと、言っちゃダメ」

真剣な顔をしてしまった、その照れを隠すように、久志は茶化した感じを装った。そんな彼を萌子は諷めるように睨んだ。

「先生の夢は、あたしの夢でもあるんだから」

「……ごめん」

うつたえて反省するように俯いた久志は、

「必ず、成功して帰って来るから。だから、僕を待っていて欲しい」

「……どうして」

「え？」

「どうして、もっと早く話してくれなかったの？」

瞳を濡らしたまま萌子は下唇を噛むと、ちよつとだけ頬を膨らませて上目使いに久志を睨んだ。

「……それは、君に確かなことを言えなかったから」

「不安だったんだから」

呪縛が解けたように、萌子は次第に泣きじやくりながら、苦しかった心情を吐露し始めた。

「先生の気持ち判らなくて、不安だったんだから。兄妹だと知っても、先生は全然平気な顔してて」

涙に声を詰まらせながら萌子は、

「あたしは、妹みたいなものかと思ってた」

「……好きだったよ、ずっと」

「……」

「ホントは、何度も奪い去ろうと思った。万が一本当の兄妹でも、それでも構わないとさえ思った」

不意に、久志の右手が萌子の肩を掴んだ。

（……え？）

驚く間もなく、萌子はその腕の温もりに包まれていた。

（うそ……）

心臓が、今にも爆発しそうなほど激しく鼓動している。全身で脈打つように、体中がドクドクいつている感じがした。

思った通り、久志の腕の中は暖かった。久志の優しさを思わせる、穏やかな暖かさ。圧倒的な感情の高ぶりに震える萌子の体を、安らかな温もりがそっと包み込んだ。

「僕にはもう、他に帰る場所はないんだ」

萌子を腕の中にかき抱きながら、久志はそう呟いた。

（二人ぼっち）

揺らめく萌子の心の片隅に、そんな言葉が静かに灯る。それは、この上もなく幸せな響きだった。萌子は、久志の匂いの中でゆっくりと目を閉じた。

柔らかな春風が、二人を包んでいた。あの日、秋風に吹かれながら感じた、共鳴する想い。あの時と寸分変わらぬ想いが、今ここにある。

「……絶対に、帰って来てね」

腕の中にその台詞を聴いた久志は、少しびつくりしたように萌子の身体を離すと、その小さな顔を覗き込むように見つめる。萌子も、少し見上げるように久志を見やった。

「もう、一人ぼっちのままにいるのはイヤなの」

「当たり前じゃないか」

いつもの清廉な笑顔を見せて、久志は小さく頷いた。

「必ず、帰って来るよ。君のところに」

久志の肩越しに、パステルブルーの空が見える。どこからかひばりの鳴く声。二人を包む風の柔らかな感触。

他にはもう何も感じなかった。安らかな気持ちで、萌子はもう一度目を閉じた。

第十一章 告白（3）

「ママ？」

萌子がアトリエの入口から顔を出すと、玲子は意外そうな顔をしないで、

「あら、どうしたの？」

と首を傾げてみせた。

澤崎家のリビングに続く一室を、玲子は長いあいだアトリエ代わりに使っていた。萌子がパステルの使い方の教わったのも、この部屋だ。子供の頃はよく部屋に出入りして、玲子の絵を眺めたり絵の手ほどきを受けたりしていたけれど、萌子も最近は自室で創作をするようになって、滅多にこの部屋に足を踏み入れることはなくなっていた。

「うん、ちよつとね」

気後れした様子で、萌子は後ろ手でドアを閉めると、

「あのね、報告したいことがあるの」

娘のやけに改まった様子が可笑しかったのか、玲子はニヤニヤしながらちよつと戯けた感じで、

「どうぞ」

と空いている椅子に座るよう萌子に促した。

「……あのね、あたし好きな人が出来たの」

どう切り出してよいか判らなくて、しばらく逡巡した後で萌子がそう漏らすように呟くと、玲子はちよつと目を丸くして、

「それは、おつき合いするっていう意味？」

「……うん」

「まあ、おめでとう」

やっぱり普通の母親と違うよなあ、と玲子の反応を見ながら萌子は思った。

普通一人娘の親だったら、眉をひそめるとか顔をしかめるとか『

どこの男？ 変な奴に騙されてるんじゃないでしょうね？！」とま
くし立てるとかするものではないだろうか。

「あんたみたいな色気のない娘、どこの近眼がもらってくれたの
？」

それなのに玲子は、今にも『赤飯炊かなきゃ』とでも言い出しか
ねない口調で、興味深げにそう茶化した。

「学校の、先生なの」

「おや、まあ」

萌子のさらなる告白にも、玲子は動じることなく、

「最近は先生も色々と大変だからねえ。萌子も立場を考えてあげ
て、慎重におつき合いするのよ」

母は大らかなのだ、と萌子は思った。その大らかさで、父を受け
入れたのだ、と。

「……前に、話したことがあったでしょ？ 千絵ちゃんの店から、
三田村のおじさんの店まで案内した先生のこと」

「……うん、あったね」

「あの時の、先生なの」

「……そっか」

物思いに耽るように視線を彷徨わせた後で玲子は、

「一目惚れ、しちゃったのね」

全とお見通しよ、と言わんばかりに萌子に向かってウインクをし
てみせる。

「どうりで、最近あなたの絵に艶が出て来たはずだわ」

「……彼ね、美術の先生でね、立花久志っていう名前なの」

気のせいだろうか。玲子の顔に、一瞬憂いの影が過ぎったように
見えた。

彼氏が出来た、なんて野暮な話をするために、玲子のアトリエを
訪れた訳ではない。もっと伝えたい大切なことがあるのに、それを
上手く言葉に出来なくて萌子はいっ試すようなことを口にしてしま
った。

立花、という姓を玲子が知っているはずがないのだ。母が知っている父の名は、

『澤崎 芳久』

なのだから。

「ママは、パパがここに来るまで、何ていう名前だったか知っている?」

何故それを……。玲子の戸惑い顔が無言でそう問い掛ける。

「……千絵ちゃんに聞いたの。ママと、パパの話を」

「……そう」

ため息混じりに小さくそう漏らすと、玲子はそつと萌子を見つめた。

「……どこまで」

「え?」

「ううん」

何でもない、という風に玲子は力なく首を2度3度振って、

「お父さんの本当の名前は、立花っていうのよ」

「……ママ、知ってるの?!」

驚きに、萌子は弾んだ声を上げる。そんな娘を見つめる、玲子の默然とした微笑みが、肯定を表していた。

(どうして……)

「立花さん、ってことは、お父さんの……」

「子供なの」

そう告げてから萌子は、誤解を恐れてまごついたように言葉を継ぐ。

「でもね、パパとはホントは血が繋がってないの」

「知ってるわよ」

悠然と玲子は微笑んだ。

「久志君、だっけ? 彼のお母さんがね、うちを訪ねて来たことがあるの」

玲子の落ち着いた話ぶりと裏腹に、彼女の口を突いたその内容は

衝撃的なものだった。予想もしないその台詞に、萌子は思わず言葉を失う。

「あれは、お父さんがいなくなってから5、6年経った頃だったかな。詩織さん 久志君のお母さんがね、一人で訪ねて来たの。『以前お世話になった、芳久の妻です』って」

それがどんな思いをする出来事だったのか、玲子は笑顔の下に本音を隠し通したまま話を続けた。

「それでやっと、お父さんが黙って出て行った訳が判って。ちょっと安心したの」

「……」

「詩織さんはね、いなくなったお父さんのことを探しに来たの。でも、ホントはお父さんがこの街にいないことは、最初から判ってたみたいだった」

「……お父さんに、逢ったよ」

「……えっ？」

さすがに玲子もこの台詞は予期していなかったらしい。彼女は、ぽかんとした顔で驚きを表現してみせた。

「今、柳井っていうところに住んでいるの」

「柳井……」

「……あたしたちの知らない人と一緒に」

「……そう」

安堵なのか落胆なのか、玲子は小さな吐息を吐いた。

「元気だった？」

「……うん」

「不思議なものね」

玲子はそう曖昧な笑みを浮かべて、

「どんな別れ方をしても、結局気になるのはそんなことなのね」

「恨んでる？」

「え？」

「……パパのこと」

「まさか」

玲子は面白そうにそう笑って、

「感謝してるわ」

母の言葉は、心の底からのものらしかった。けれども萌子にはその心境が、どうしても理解出来なかった。

「……ママはパパのこと、どう思っていたの？」

（そして今はどう思って……）

「……夢、かな」

「……え？」

母は微笑んでいた。きつと父のことを口にしたら哀しそうな顔をすると思っていたのに、なのに母は微笑んでいた。

「お父さんはね、ママの前に突然現れて、あっという間に去ってしまった。ホント、そんな感じだったの。確かに記憶を失っているあいだは、あたしたち家族のことだけを愛してくれてた。でもね、時々感じていたの。お父さんが記憶を失す前に過ごして来た、暮らしの匂いを」

「……」

「今でもね、夢だったんじゃないかって思うこともあるの。でもね、夢じゃない証拠に、あなたがいるのよ」

「？」

「萌子」

萌子の頬に伸びた繊細な指先が、愛おしむように撫でる。

「あなたはね、あたしとお父さんの子なの。お父さんがこの街にいた、大切な証なの」

「……」

「夢を見た記憶と、あなたの存在だけが、ママがパパを好きだった証拠なの」

いっそう優しく、玲子は微笑んだ。

「きつとね、パパも同じだと思う」

離れていても。一瞬しか逢えなくても。届かなくても。そして二

度とと逢うことがないとしても。愛する人を想う気持ちに、変わりはないのかもしれない。

少女らしいセンチメンタルな気持ちで、萌子はそんなことを思った。

「１度連れて来なさいね。久志君を」

「……うん」

涙を浮かべながら、萌子は小さく頷いた。

終章 坂のある街で

「せんせー！　こんなのも、持ってくるのー？！」

台所から、薫の怒鳴り声が聞こえて来る。

「やべっ。また何か捨てられちまう」

萌子の傍らでダンボールに衣類を詰め込んでいた久志は、慌てて立ち上がると台所にすっ飛んで行った。

『男一人で、荷物は少ないから』

そんな言葉を信じたのが間違いだった。

久志が尾道を発つ朝、彼のアパートに引越しの手伝いのために顔を出した萌子と薫は、玄関先で目が点になった。

「何にも用意出来てないじゃないの！」

薫がそう叫ぶのも無理はなかった。それほど久志の荷造りは進んでいなかったのである。進んでない、と言うより全くやっていない、と言った方が正しいかもしれない。

「だって、引越し屋が来るのは午後じゃないか」

そう言い訳をする久志を尻目に、二人は慌てて台所と居間に別れて荷造りに取り掛かったのだが。……

「ダメだよ、それは。尾道で見つけた良い茶碗なんだから」

「そんなこと言つて、さっきも欠けたコップしまつてたじゃないっ」

意外なほど取つとき性な久志と短気な薫は、ことあるごとにそうやって衝突して、結局荷造りがさらに遅れる原因を作っていた。

隣室から聞こえて来る、聴き慣れた二人の掛け合い漫才に耳を傾けながら、萌子はしばし手を休めて窓の方に目をやった。

暖かな春の陽が窓辺から差し込んでいる。開け放たれたその窓から南風が流れ込んで来て、萌子の短い髪がサワサワとそよいだ。

もうすっかり春だ。

畳に広がる日だまりを見つめながら、萌子はぼつんとそう思った。

柔らかく優しい季節の訪れの中に、確かに漂う寂寥感。半年前、あの秋雨の日に出逢ってから、萌子はずっとこの日が来ることを予感していた気がした。

（その時までには私は何を望むのだろう……）

心の片隅にいつも住み着いていた、漠然としたその思い。ずっと考えていたその答えが、今彼女の胸の中にあつた。

寂しくない訳じゃない。

久志と出逢つて半年。萌子はほとんど毎日のように彼の顔を見て来た。片想いでも、愛されていて。幸せでも、辛くても。彼の存在は常に萌子の傍らにあつた。

明日から、この街に彼の姿はない。その空虚な気持ちを想像すればするほど、絶望的な寂しさが胸に募る。

それなのに、萌子の心の中にはそれと相反する思いが、湖底に湧く清水のようにトクトクと湧き上がって来るのだ。

それはまるで昔読んだ冒険譚の、旅立ちを前にした少年のような気持ちだった。

久志のことを想いながら、久志の届ける便りを楽しみに待つ日々。それを思うと胸がドキドキして来る。彼が世界のどこまで辿り着くのか、萌子は知りたいと思った。どんな世界に、彼が誘ってくれるのか。この街で彼の活躍を聴きながら、萌子は彼と見知らぬ世界を共に歩んで行けるような気がしていた。

そして、そんな久志には遠く及ばないとしても、萌子も自分の目の前に広がる可能性を確かめてみたいと思っていた。

久志と出逢うまで、萌子はそんな大それたことを考えたことがなかった。

偉大な母への畏怖。父がいないことへの劣等感。さまざまなコンプレックスが見えない鎖となって、萌子の心を強く縛りつけていたのだ。

久志は、そんな萌子の心を解き放ってくれた。萌子の目の前に、明日に繋がる扉があることを教えてくれた。

だから、愛しい想いと同じくらいに、萌子は久志に感謝の念を抱いていた。

いつの日か、この街から世界に『尾道』を伝えたい。

（その時、そばに先生がいればもつと……）

「さて、と。とにかく、とつと送り出さなきゃ」

全てはそれからだ。

萌子は自分にそう言い聞かせて、タンスの一番下の引き出しを開けた。……

「……せんせい」

萌子の情けない声に、久志と薫は言い争いを止めて振り返った。

「……これ、洗ってあるの？」

萌子は眉間に皺を寄せて、くしゃくしゃに丸まったパンツを、まるで汚物でも扱っているように指で掴んだまま久志の前に差し出した。

「あ、洗ってあるよ！」

久志は慌てたように萌子の手から下着を奪い取る。

「……だってそれ、タンスの中に丸めて突っ込んであったよ」

萌子が疑わしげに久志を横目で睨む。

「畳むのが面倒だから、そのまま突っ込んだだけだよ。そこ、俺が後でやるから」

「あんたたち……」

慌てふためく恩師と顔を真っ赤にした親友を見て、薫はさも可笑しそうに、

「何をいまさら照れてるのよ。どうせ、何もかも許し合った仲間ندしょ？」

「薫……!!」

薫の明け透けな台詞に、萌子は完熟したトマトみたいな顔になつて、

「あたしたち、まだ何もしてないわよっ！」

（１回、キスしただけ……）

浄土寺山の空の下で、1度だけ交わされた接吻を思い出す。それだけで萌子は、頬が上気して頭がクラクラしそうになった。

「な〜んだ」

薫はとてもつまらなさそうに唇を尖らせて、

「立花ちゃんはお賞を取るまで、キスから先はお預けなんだ」

「……薫っ！」

萌子がそう怒鳴りつけた時には、薫はもう隣の部屋へと逃げ失せていた。

「……何とか、なつたわね」

奇跡、と言うしかなかった。

半年に及ぶ久志の尾道暮らしは、ずいぶんと質素なものだったらしい。普通ならありえないスピードで、引越しの荷造りは業者の到着時刻に何とか滑り込んだ。

引越し屋の手によってダンボールの山が運ばれていくと、久志の尾道での記憶が徐々に薄れ、萌子と薫がここで過ごした懐かしい記憶が蘇って来る。三人は押し黙ったまま、それぞれの感傷に捕われながらだんだんと広くなる部屋の風景を見つめていた。

「忘れ物、ないわよね」

やがて部屋の中は、ボストンバック1つを残してあとはがらんとうになった。造り付けの棚の中などをチェックして回っていた薫は、リビングの隣の部屋に続く扉に手を掛けた。

「……せんせー、忘れ物見つけた」

扉の手前から部屋の中を覗き込んだ薫は、そう言っただけで久志の方を振り返る。

「あ、いいんだそれは。今から持つて行くやつだから」

薫の言わんとすることをすぐに理解して、久志はそう首を横に振った。

「ふ〜ん」

薫は小さく口を尖らせてそう頷いてから、萌子を呼び寄せるように手招いた。

「……なあに？」

「いいからいいから」

萌子は首を傾げながら、薫の横から隣の部屋を覗き込む。

「……！」

窓辺に立て掛けられた、一幅の風景画。

その窓から望める、尾道の風景がそこにあった。

それは、元日にこの部屋で見たデッサンが完成したものだった。素描の段階では植え付けられていなかった季節が、鮮やかな春として描かれている。

「千絵さんが、どうしても欲しいっていうんだ」

息を呑み立ち尽くす萌子の傍らに寄って、久志はそう声を掛けた。

「……尾道の風景画を？」

「うーん。と言うより、僕の描いた絵を」

「？」

同時に首を傾げた教え子たちに向かって、久志はちょっと照れたように笑いかけて、

「僕の絵を、青田買いしておくんだって」

「……はあ？」

「もし、僕が画家として成功したら、この絵を大々的に宣伝して、店の名物にするんだって」

「……いかにも千絵ちゃんを考えそうなことだわ」

薫が呆れたようにぼそつと呟く。

「賞を取ったら、最初の個展を『ひこうき曇』で開いて欲しいって言われたよ」

久志はそう苦笑して、

「今日、その絵を置きに行かなきゃいけないんだ。腹減っただろ？　なんか奢るから、一緒に行こうよ」

そうして、三人はもぬけの殻になったアパートの部屋をあとにし

た。

最後に部屋を出た久志が、鍵を掛ける。カチャリ、と微かに響いたその音が、この半年の出来事にも鍵を掛けた。萌子はふとそんな気がした。

まずはその鍵を返すために、久志たちは三田村不動産を目指した。光のどけき春の陽射しが降り注いで、桜の花が今にもこぼれそうに揺れている。満開まで、あと少しだ。

「みんなでお花見、したかったね」

淋しげな口調で薫がそう呟くのとほぼ同時に、

「あつ！」

と久志が大きな声を上げた。

「どうしたの！？」

「忘れてた……」

「……何を？」

「西国寺の桜……」

「へ？」

何も知らぬ薫がきょとんと目を丸くする。

久志の思いも寄らぬ台詞に、萌子は思わず口に手を当てた。不意に胸が熱くなる。

あの日、西国寺の境内で見上げた、桜色のアーチの幻。

たとえ今日、二人が奏でた物語が終わるのだとしても。あたしと先生の胸の中に刻まれた記憶は、きつと永遠に消えることはない。

とめどなく押し寄せる感傷の波の中で、萌子はそんなことを考えていた。

「せんせい」

「ん？」

「約束しよ」

「？」

「いつか、あたしと西国寺の桜のアーチの下を歩こうよ」

「……うん」

晴れやかな顔で、久志が頷く。微笑みを湛えた瞳で、二人は見つめ合った。

「あの、さ」

えへん、とわざとらしい咳払いをして薫は、

「あたしの存在、そこまで無視しなくても、いいんじゃない？」

迷路のように入り組んだ細い路地を抜けて、三人は三田村不動産に辿り着いた。萌子たちの到着を待ち侘びた様子で、三田村はいつかと同じ人の良さそうな笑顔を見せた。

「お世話になりました」

大げさなほど律義に、久志は三田村に向かってそう頭を下げた。

「いやいや、こっちこそあんな辺鄙な部屋を使ってもらって、助かりました」

三田村はそう笑って、

「この娘たちに貸しておくより、よっぽど儲かりましたからな」

「何よ」

そんな軽口を叩く三田村に向かって、薫は不服そうに口を尖らせる。

「こっちが管理代行費を貰いたいくらいだわ」

「……もしも、の話なんですが」

三田村に鍵を渡しながら、久志は遠慮がちな声を出した。

「？」

「またこの街に戻って来た時に、もし空いていたらあの部屋を貸して下さい」

「……判りました」

目をしばたきながら三田村は小さく頷いて、

「ま、そんな心配はないでしょうけど」

と言いながら、萌子たちの方へ鍵を差し出した。

「それじゃそれまで、君たちが責任を持って預かっていなさい」

「……でも」

「そういうことなら、萌子に任せた」

薫がはしゃいだ声を上げて、萌子を押し出すように背中 hands を充てる。

戸惑いがちに三田村から鍵を受け取った萌子は、三田村と薫の顔を交互に見やった。そうして二人が頷くのを確認してから、今度は久志の顔を見上げた。

「綺麗に、しといてくれよな」

「……任しといてよ」

そんな茶化したつもりの台詞が、涙で詰まった。

山小屋のような分厚いきつね色のドアを押すと、千絵ご自慢のスイス製のカウ・ベルがカラncカラncと小気味良い音を立てた。

「遅かったじゃない」

カウンター向こうで、千絵が拗ねたように口を尖らせる。

店の中には、また客が一人もいなかった。千絵はきつと暇を持て余していたのだろう。

「千絵ちゃん、この店大丈夫？」

薫が、半ば本気の口調でそう尋ねた。

「あたし、この店で客の姿をあんまりみたことないよ」

「そんなことないわよ」

心配そうな薫の顔を、千絵はカラカラと笑い飛ばして、

「みんなビックリしてるんだから。この店、ちゃんと黒字なのよ」

「……ま、とにかくこの絵の作者がとんでもなく売れてくれれば、もつと客も寄りつくかもね」

薫がそう毒を吐きながら、抱えて来た包みを紐解く。

「……」

初めて目の当たりにした千絵も、1度目にしていたはずの二人も共に息を飲み、一瞬緊迫した静寂が店内に流れた。

「……素敵ね」

千絵はそつと吐き出すようにそう呟く。

「私、絵のことなんか全然素人だけど……」

そう言いながら、千絵は壁に掛けられたパステル画を見上げて、

「あの絵も、この絵も、とても好きだわ」

それから三人はカウンターに仲良く並んで、千絵のランチが出て来るのを待った。

「そっさいやさ」

薫が何かを思いついて、小悪魔のような含み笑いを見せた。

「先生、家庭訪問に千絵ちゃんを同伴したって、ホント？」

途端に、久志は思いつきりコーヒを吹き出した。

「なんでそんなこと……」

疑惑のまなざしが千絵の姿を窺ってから、萌子の方を向いた。久志と目が合った瞬間、萌子は上目使いに彼を見つめて、ちらつと舌を出してみせた。

久志が澤崎家を訪ねて来たのは、彼岸の中日のことだった。

チャイムの音を聞きつけて、待ちかねたように玄関に駆けつけた

萌子と玲子は、上がり框で目をきよとんとさせた。

「初めまして」

顔を強張らせてそう頭を下げる久志の傍らで、千絵が可笑しそうに微笑んでいる。

「うちの店に来て、今にも倒れそうな青ざめた顔してたから、付き添って来ちゃった」

そう言っただけ千絵は舌を出した。

リビングを通してソファに座らせても、久志の緊張は一向に解けなかった。

彼が来るまでは萌子もかなり緊張していたのに、その姿のあまりの可笑しさに彼女はすっかりリラックスした気分になった。

「……あの、萌子さんの美術部の顧問をしています、立花と申します」

「いつも娘がお世話になっております」

まるで家庭訪問のように儀礼的に言葉を交わして、それからぶつ
つりと会話が途切れた。

（ちよつと！ それだけ?!）

久志の横に座っていた萌子が、肘で彼の脇腹を突く。

「あ、あの、それで千絵さんの店で偶然に萌子さんと出逢いまし
て……」

これぞまさしくしどろもどろ、と言った口調で、久志は急かされ
たように言葉を紡いだ。

「それから、親しくさせていただいております。あ、いや、あの、
決してやましいことは何もなく……」

ダメだこりゃ、と萌子は天井を仰ぐ。玲子の隣で口を歪めて笑い
を堪えていた千絵が、とうとう吹き出した。

「こんな色気のない娘のどこが良いのか判りませんが」

久志の尋常じゃない態度にも動ずることなく、穏やかな笑顔にと
ても相応しくない辛辣な台詞を1つ吐いてから、

「これからも、出来れば未永く、よろしく願いますね」

玲子はそう深く頭を下げた。

「……姉さん。そんな結婚の挨拶じゃないんだから」

急に湿った部屋の空気を吹き飛ばすように、千絵がそう茶化した。

「……それにしても、似てるわね」

「え？」

「芳久さんに」

「……」

「判ってるわよ」

複雑な表情を浮かべた千絵と萌子に笑いかけるように、玲子は戯
けた笑みを浮かべて、

「不思議ね。血は繋がっていないのに、あの人によく似ているわ」
不思議なくらい穏やかな顔で、玲子は何の憂いも見せずにそっと
呟く。

「親子で、好きになる人は似てるものなのね」

照れたように、そして少し感慨深げに、久志は視線を反らして曖昧な笑みを浮かべた。

「……いつ、尾道を発つんです？」

「明後日の日曜に……」

「そうですか」

娘が愛した人を、玲子はじっと見つめて、

「必ず、帰って来て下さいね」

「……え？」

「この街に帰って来れなかった、芳久さんのためにも、必ず」

じっと見つめる玲子に向かって、久志は神妙な面持ちで小さく頷いた。

千絵のランチを平らげると、薫は自分のコーヒークップとマンガを手に取って、カウンター席を立った。

久志の乗る列車の発車時刻までまだ少し時間がある。どうやら二人に気を利かせたつもりらしい。千絵もシンクに向かって洗い物を始めて、カウンターに形ばかりの二人の空間が出来上がった。

「そうだ、先生」

「ん？」

「あたしね、美大に行くことに決めた」

「そっか」

萌子の意外な台詞に久志は一瞬驚きの表情を浮かべてから、本当に嬉しそうに相好を崩した。

「どこの大学を受けるんだい？」

「うん……」

あの日久志が帰った後に、萌子は母に美大進学の気持ちを初めて伝えた。

『そうなんだ……』

娘の決意を感じ取った玲子は、何だか面映ゆそうな顔つきになつて、

『あんたもやつぱり、ママとパパの子なんだね』
と小さく笑つてから、

『で、どの大学？ 広島？ 大坂？』

性急にそう問い掛ける母に、萌子は鳩が豆鉄砲を喰つたような表情になつた。

『え、でも尾道大にも芸術学部があるし……』

『何だ、ちっちゃいわねえ』

娘が当たり前だと思つていた感覚を、玲子はあつさりときき下ろす。

『あたしがあの時代に大阪まで出たのよ。いまどきなら東京でもニューヨークでも十分行けるわよ』

久志にこの話をする、彼は喉を鳴らすようにクツと笑つた。

『結局、君のお母さんも千絵さんと同じ血を引いてるんだね』

『……でもさあ、そもそも自分の娘の実力がどれほどのものか、判つてゐるのかなあ』

萌子のぼやきに軽く苦笑いを浮かべて、黙つてコーヒーを啜る。そしてそのまま、久志は真剣な顔をして黙り込んだ。

『……萌ちゃん』

『ん？』

『君に、話しておきたいことがあるんだ』

『……なに？』

久志の意外なほど真面目な口調に、萌子は一瞬ドキツとして、ゴクリと唾を飲み込んだ。

『実はね、君の絵を僕の先生に見てもらつたんだ』

『……えっ？』

『その、美術室に置いてあつた君の絵を何点か……』

『もうっ。先生、人に無断で何やってんのよ！』

萌子は急に顔を真っ赤にして、久志に向かってぶつマネをした。

「ゴメンゴメン」

久志は可笑しそうに萌子の手を避けるふりをしてから、

「先生の評価は高かったよ」

「え……」

「丁寧で、しっかりした基礎を持っているって。もつと経験を積んで独創性を身につけたら、大化けするかもしれないって」

少し遅れてから、久志の台詞の意味に気付いた萌子の心臓が唐突に乱打し始めた。

「そんな、いくらなんでも……」

恥らう萌子の様子を、恋人として、教え子として、久志は目を細めて愛おしげに見つめる。

「……君と、東京で過ごせたらいいのにな」

「……えっ」

「あ、いや」

要らぬことを言った、といった風に久志は慌てて作り笑いを浮かべた。

（東京で先生と共に過ごす……）

いつか夢想した、あまりに荒唐無稽な思いつき。不思議なことにそれは、決して不可能ではない夢として今この掌の中にある。

「先生」

「ん？」

「あたし、やってみる」

「……」

「出来るかどうか、自信なんてちっともないけど、でも頑張ってみる」

そこにはもう、始める前から諦め続けていた、子犬のような目をした臆病な少女の姿はなかった。

「……ハイハイ。まだしんみりする時間じゃありませんよ」

黙り込んだ二人の背後から、囁し立てるような口調で薫がそう出立を促した。

「個展を開く日を、待ってますよ」

千絵らしい見送りの言葉だった。レジでその声を掛けられて、久志ははにかむように笑顔を浮かべた。

「そういえば……」

「？」

「初めてお話したのも、この場所でしたね」

久志の台詞に、千絵は感慨深げに小さく頷く。

「せっかくだから、忘れないで下さいね。この店のことを」

「もちろんです」

心外だ、といった風に久志は軽く戯けた仕草をしてみせた。

「また、来ます。ごちそうさまでした」

分厚いきつね色のドアを開けると、萌子の頬に柔らかな風が纏わりついて来た。西に傾むきかけた陽を浴びて、尾道水道がキラキラと輝いている。

その刹那、胸に苦しいほどの感傷が押し寄せて来て、萌子は思わず棒立ちになった。

「どうしたの？ 行くよ」

立ち尽くす萌子の背後から、薫が不審げにその声を掛ける。

「うん……」

立ち去り難い素振りを見せて、萌子はもう一度きつね色のドアを振り返る。

（……ここから、始まったんだ）

そして、促されるようにゆっくりと歩き始めた。

狭い路地を抜け商店街へと、時を遡るようにあの日と逆の道筋を辿る。休日の午後の繁華街は、気だるい明るさに包まれていた。名残惜むような賑わいを縫うように、三人はただ黙々とアーケード街を通り過ぎた。

辺りが刻々と暮れゆくことに、別れの気配が忍び寄って来る。久

志と次にこのアーケードの下を歩くのは、いつになるのだろう。そんなことを思ってしまった。萌子はまた悪戯に胸を切なくさせた。

「そっぴゃさ」

喫茶店のショーケースをちらりと見やりながら、久志はボソリと呟いた。

「『からさわ』のアイス」

「……え？」

「食べ損ねちゃったよ」

屈託のない笑顔だった。久志は『しまったなあ』といった風に苦笑いを浮かべて、

「『ナチュール』のシュークリームも。とっとと賞を取って、ここに戻って来なきゃ」

泣いてしまいそうだった。

そう、終わりではないのだ。二人には、確かに明日がある。思わずこぼれそうになった涙を押し止めて、萌子は必死に笑顔を作った。歩みを緩めた萌子を誘うように、久志は右手を差し出した。萌子は1つ小さく頷いて、その柔らかく暖かな掌を握り締めた。

小さなロータリーを渡り、古ぼけた駅舎に歩み寄る。通学時とは違うざわめきの向こうに、鈍く銀色に光る改札口が見えた。

（あの向こうに行ける……）

幼かったあの日、恐ろしげに見えた銀色のゲート。

もう立ち尽くすことはない。やっと、あのゲートを通ることが出来る。

「早くしないと、電車来ちゃうよ」

せっかちな薫が、改札の向こうから二人を手で招いている。久志と目を合わせ、笑いあった萌子は、銚子の夕日に輝く銀色のゲートに向かって歩き出した。

終

終章 坂のある街で（後書き）

みなさん、最後まで目を通していただきありがとうございます。

初めて、人に見てもらったために書きました。

恋愛小説を書いたのも初めてです。

尾道という街の優しい風景に似合う話を書きたいと、ずっと思っていました。波乱も悲劇もない平淡な話ですが、少しでも切なさ・優しさを感じて貰えれば幸いです。

自分で読み返してみても拙いところばかりですが、最後まで読んでいただいた方のご意見もぜひ伺いたいです。

感想・評価をぜひお寄せ下さい。よろしくお願い致します。

平成20年5月14日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3364d/>

ふたりぼっち～尾道、夕暮れの坂道で

2010年10月9日01時36分発行